

博士論文

論文題目

『源氏物語』における教育

—父と子の関係を中心に—

Education in *The Tale of Genji* : focusing on the father-child relationship

氏名

李 芙鏞

『源氏物語』における教育―父と子の関係を中心に―

目次
凡例

序章 先行研究の検討および本論文の目的

第一節 紫のゆかりの物語	1
第二節 婦人の美徳の学べる物語	6
第三節 父の役割	9

第一編 息子を教育する父―漢籍を通じた教育

第一章 桐壺帝の光源氏への教育

はじめに	12
第一節 読書始の儀式	12
第二節 敦康親王の例	16
第三節 高麗相人の予言	21
おわりに	25

第二章 源氏の夕霧教育―「少女」巻を中心に

はじめに	27
第一節 夕霧の大学入学	28
第二節 寮試の場面を中心に	35
第三節 省試の場面を中心に	39
おわりに	42

第三章 冷泉帝における学問

はじめに	44
第一節 古注釈の検討	45
第二節 冷泉帝の勉学の姿	48
第三節 夜居の僧都との対面	53
おわりに	56

第二編 娘を教育する父

第四章 源氏の明石の姫君への物語教育

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

第一節「蛭」巻の物語論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58

第二節 源氏の教育態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

第三節 「点付かる」に対する教育観・・・・・・・・・・・・・・・・65

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

第五章 須磨・明石の絵日記の考察

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

第一節 源氏の絵日記という用語・・・・・・・・・・・・・・・・70

第二節 絵日記の性格―『土佐日記』との関わり・・・・・・・・72

第三節 『蜻蛉日記』における絵の意識・・・・・・・・・・・・・78

第四節 『狭衣物語』における絵日記・・・・・・・・・・・・・・81

第五節 『浅茅が露』における絵日記・・・・・・・・・・・・・・83

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

第六章 源氏の明石の姫君への書道教育

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87

第一節 「若紫」巻における手習・・・・・・・・・・・・・・・・88

第二節 「初音」・「野分」巻における書道教育・・・・・・・・91

第三節 「梅枝」巻における書道教育・・・・・・・・・・・・・・93

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100

第七章 女三宮における朱雀院―父親の過度な愛情

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

第一節 女三宮の降嫁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

第二節 朱雀院の五十の賀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105

第三節 薫の誕生と出家・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114

第三編 二人の父を持つ主人公たち

第八章 玉鬘における二人の父

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115

第一節 光源氏の後見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115

第二節 源氏の養女の玉鬘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119

第三節 左大臣家の娘の玉鬘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123

第四節 「竹河」巻の玉鬘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128

第九章 薫の実父柏木への思い

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130

第一節 「宿木」巻における薫の和歌・・・・・・・・・・・・・・131

第二節 歌における「このもと」の表現・・・・・・・・・・・・・・134

第三節 「総角」巻における「このもと」の表現・・・・・・・・・・138

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144

補論 第十章 『源氏物語』を読んだ比較文学者

―六堂崔南善の京城府立図書館講演

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・145

第一節 崔南善の学問―先行研究の指摘から・・・・・・・・・・・・145

第二節 六堂の府立図書館における講演・・・・・・・・・・・・・・147

第三節 府立図書館の大山先生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149

第四節 京城府立図書館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151

第五節 六堂の読んだ『源氏物語』・・・・・・・・・・・・・・・・・・152

第六節 図書館講演はいつ行われたか・・・・・・・・・・・・・・・・・・153

第七節 朝鮮を訪れた歴史家、萩野由之・・・・・・・・・・・・・・157

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160

【付録】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162

終章 『源氏物語』の提示する教育・・・・・・・・・・・・・・170

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181

初出一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・223

【凡例】

- 一、『源氏物語』の本文引用は「阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注・訳）『源氏物語』（二）」（六）（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）（一九八八年）」による。また、「新編日本古典文学全集」『源氏物語』と略する場合がある。
- 一、『源氏物語』引用は括弧の中に（物語の巻名・巻数・頁）の順に表記する。傍線は引用者による。
- 一、『源氏物語』の古注釈の引用において、濁点と句読点を補う。
- 一、歌の引用において、歌番号は「新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観』（第一巻）第十巻、角川書店、一九八三～一九九二年）」により、引用者にて漢字を付けた部分がある。
- 一、引用テキストの書誌情報は初出の際に注で示し、初回以降の重出については、著者名と頁数だけを表す。
- 一、資料の引用の際、数字は漢数字に改めた所がある。
- 一、資料の引用の際、旧漢字は常用漢字に改めた所がある。
- 一、引用された文献が日本語でない場合のみ、書誌情報に「出版地域、出版社、出版年度」の順に表記した。（例）（ソウル、玄岩社、一九七四年）

序章

先行研究の検討および本論文の目的

序章 先行研究の検討および本論文の目的

第一節 紫のゆかりの物語

この論文は、『源氏物語』における教育を「父と子の関係を中心に」考察するものである。知られる通り、『源氏物語』は男女間の恋を描いた物語であり、そのように説明される場合が多い。光源氏は数多くの女性と恋愛を経験するが、その中でも、藤壺、紫の上、女三宮は源氏の恋の物語を織り成す中心人物である。藤壺への恋慕は母桐壺更衣を偲ぶことから始まる。また、系図上、藤壺の姪になる若紫に魅力を感じ、男女の関係を結び、一生の伴侶とするという流れが描かれている。さらに、源氏の女三宮の後見は彼女が藤壺と血筋が通じているということにも関連がある。このような血縁に基づいた源氏の恋を示す代表的な言葉として「紫のゆかり」の物語という表現を取り上げることができる。この言葉は『古今和歌集』『雑歌上』の歌（八六七番）に発想のもとを得ていることは先行研究で指摘されてきた。

紫のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る

例えば、高田祐彦氏は『源氏物語』で、光源氏が藤壺の宮と血のつながる紫の上を愛するのは、この「紫のゆかり」という思想の代表的な結実。」と注釈を付けている。『源氏物語』の中でこの用例が見える場面を見てみよう。

《例一》かの紫のゆかり尋ねとりたまひては、そのうつくしみに心入りたまひて、六条わたりにだに離れまさりたまふめれば（末摘花①二八九）

「かの紫のゆかり」とは若紫を指す表現で、この文脈においては、紫の上の魅力に惹かれて六条御息所に足が遠のくという文脈である。

《例二》かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、かれはされて言ふかひありしを、これは、いとはいはけなくのみ見えたまへば、よかめり、憎げにおし立ちたることなどはあるまじかめりと思すものから、いとあまりものはえなき御さ

まかなと見たてまつりたまふ。(若菜上④六三)

「若菜上」巻の表現は、前掲の「末摘花」巻の視点の回想から語り出されるが、ここでは若紫と女三宮が対比的に叙述されていることが目に付く。「かれは」とは若紫、「これは」とは女三宮で、女三宮の弱々しい幼い姿に源氏は多少の失望を感じている場面である。紫のゆかりでありながら、紫の上と女三宮が対照的に語られている。

さらに、「竹河」巻では次のような叙述が見える。

《例三》これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。(竹河⑤五九)

『源氏物語』の中でも「竹河」巻が異色を放っていることについては、すでに指摘されているが、『源氏物語』の中で、「幻」巻までを正編、「匂兵部卿」、「紅梅」、「竹河」巻を挟む宇治十帖を続編と捉える際、「竹河」巻は正編の物語を「紫のゆかり」の物語として規定していることになる^二。

享受の歴史の中で、最も早く紫のゆかりの物語に言及したのは、『更級日記』である^三。

かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと、心苦しがりて、母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる^四。

菅原孝標女が「紫のゆかりの物語」を読み、その続きの物語を読みたいと思いながらも、『源氏物語』を手に入れない状況の中で感じるもどかしさが表現されている。「新編日本

二 この冒頭の意味について、星山健氏も「紫のゆかり」については、研究者により微妙な解釈の相違はあるものの、本巻以前の『源氏物語』の内容にあたる語りを指すと見て、およそ問題なからう。」と述べている。星山健「竹河」巻論―「信用できない語り手」「悪御達」による「紫のゆかり」引用と作者の意図―『王朝物語史論―引用の『源氏物語』(笠間書院、二〇〇八年)一五三―一五四頁

三 吉海直人「むらさきのゆかり」「林田孝和・原岡文子(他編)『源氏物語事典』(大和書房、二〇〇二年)三八六頁

四 藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫(校注・訳)『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』(新編日本古典文学全集 小学館、一九九四年)二九七頁

古典文学全集」の頭注には『源氏物語』中、紫の上に係のある巻々をさすものでもあらうか、一説に若紫巻をさすともいう。「ゆかり」は縁故。^五と指摘されている。『更級日記』の指し示す紫のゆかりの物語の範囲は解釈によって微妙な差はありうるが、おおそ若紫との出会いをはじめ、源氏の恋の物語を意味すると解釈される。

また、『源氏物語』を恋の物語として読む立場に、源氏と藤壺の恋は「もののあはれ」を感じさせるものであるという本居宣長のような見方もある。次は『玉の小櫛』の「二の巻」である。

源氏ノ君のうへにて、空蟬ノ君の事、朧月夜ノ君の事、藤壺ノ中宮の事などのごとし、恋の中にも、さやうのわりなくあながちなるすぢには、今一きはもののあはれのふかきことある故に、ことさらに、道ならぬ恋をも書き出で、そのあひだの、ふかきあはれを見せたるもの也。榊ノ巻に、此源氏ノ君と中宮との御あひだのことを、なのめなる事だに、かやうなるなからひは、あはれなることもそふなるを、ましてたぐひなげ也、といへるにてしるべし、たゞよのつねの、さしも心ふかゝらぬ人の、なほざりなるあひだにてだに、かやうにわりなき事は、殊にあはれのまさるならひなるに、ましてこれは、いとも／＼心深きどちの御なからひにて、男君の、いみしうおぼししみたる事なれば、たぐひもなきあはれさ也といへる也^六。

宣長の提示する「もののあはれ」について鈴木日出男氏は「源氏と藤壺の物語に即していえば、二人ともそれを罪深い不義悪行と知りつつも、たがいに惹きつけあう魂をかかえこんでは心動かされずにはいられない。それこそが、人間の魂の内にひそむ非合理の力としての（もののあはれ）だということになる。」^七と述べる。傾聴すべき指摘で、すなわち、宣長は物語の中で恋する男女の魂の触れ合いを「もののあはれ」という言葉で指摘していることである。

ところで、このように『源氏物語』を恋の物語として捉える宣長の論理は、『源氏物語』における教育を父と子の関係によって捉え直そうとする本論とはどのように関わるのか。思想史の研究から友常勉氏は『玉勝間』第四卷「やしなひ子」に注目する。宣長の「やしなひ子」は宣長が生きていた近世の養子制度に対する意見ではあるが、養子に家を継がせ、先祖の祭を任せることの妥当性が述べられている。

やむことえずは、たとひそのすぢにはあらぬにても、つがしめて、氏門をたゞず、祖の^{オヤ}

五 上掲書、二九七頁

六 大野晋・大久保正（編）「玉の小櫛」『本居宣長全集』第四卷（筑摩書房、一九六九年）二二七頁。句点を補い、常用漢字に改めた。

七 鈴木日出男「宣長の（もののあはれ）論」『源氏物語虚構論』（東京大学出版会、二〇〇三年）八〇四頁

はかどころをあらさず、祭もたえざらんと、ひたぶるにたえはてむよりは、はるかにまさりてはあるべき、古へは世ノ中にさるならひのなかりつればこそあれ、今の世のごとくなりせば、周公孔子も、それあしとはいひたらじをや、然るを又あるじゆしやのいひけらくは、異姓の養子は、祖を祭れども、そのまつりうくることなし。うみの子のまつりを、祖のうくることは、そのすぢなればこそあれ、すぢならぬもののまつらんには、そのみたまの、うけに來ますべきよしなしともいふは、いと心得ぬこと也、世には人に深きうらみなどをのこして、なくなりたるものたましひは、其人に來よりつきて、たゞりをもなすにあらずや、さるは其人には、なにのすぢもあらざれど、たゞ一ふし思ひしめたるゆかりにだに、しかよりくる物を、ましてひたぶるに子とたのみて、よをつがせたるものの祭を、うけにはこざるべきものかは^八。

これは宣長の生きていた当時の社会に対する意見であり、『源氏物語』そのものに関する論ではないが、養子に家を継がせることの正当性、養子が祖先の祭を行うことに対する理解を述べている点で、父と子の関係を考察する本論と関わる。友常氏の次のような分析は宣長の立場を明確に捉えている。

宣長の理解する『源氏物語』とは、あくまで「もののあはれ」を徹底して遂行することである。古代社会と王権の盛衰も、不義密通や血縁・擬似血縁関係が招く追慕や無念も、その悲劇のすべては等価に「もののあはれ」の位相に結集されるのである。これは連続・非連続の系譜を再―結集するやり方である。あらゆる意味での系譜的なものの断絶とそれら個々の断絶の特殊性を消し去って再―結集するための「もののあはれ」という情動の集積。そしてここからまたあらゆる系譜をつなぐ「縁〱ゆかり」という情動が励起されるのである^九。

右は『源氏物語』の研究ではなく、『古事記伝』を中心とする本居宣長研究の脈絡における分析であるが、その指摘は本論の問題意識にも通じる面があると思われる。例えば、光源氏の場合を例にしてみよう。皇室に生まれながら、臣籍降下により臣下になった源氏は、藤壺との間で「もののあはれ」を感じ合う間柄になり、密通するようになる。しかし、源氏と藤壺が激情に満ちた男女の魂の触れ合いである「もののあはれ」を追求した結果、冷泉帝の誕生となる。その後、冷泉帝の存在によって源氏に准太上天皇という地位が与えられる展開になる。表面的には系譜を乱したかのように見える「もののあはれ」が作用した

^八 大野晋・大久保正（編）『玉勝間』『本居宣長全集』第一卷（筑摩書房、一九六八年）一四五―一四六頁

^九 友常勉「始原の言葉」『始原と反復 本居宣長における言葉という問題』（三元社、二〇〇七年）九七頁。傍点はすべて原著のままである。

結果は、光源氏の皇権の回復に繋がり、源氏の皇統の系譜を連続させる役割を果たすことになる。その「もののあはれ」を感じることでできる相手は「ゆかり」の人と表現され、「もののあはれ」を感じる心が働いた結果も「ゆかり」を繋げることであった。

以上で検討してきたように、宣長の研究は『源氏物語』を恋の物語として読み説く立場であった。源氏と藤壺の恋の設定は、冷泉帝の即位による皇権の回復という展開のために、必然的であったことになり、倫理の観点から非難されるものではない。密通は二人の登場人物の抑制することのできない心の交し合いによつて起きたもので、二人の恋は純粋で美しいものになる。

一方、『源氏物語』の享受の歴史においては、本居宣長と正反對の理解もあった。中世には『源氏物語』に男女の恋が描かれていることを批判的に捉え、「源氏供養」が行われることもあった。次は、安居院澄憲（一一二六～一二〇三）の説法唱導「源氏一品経」の一部分である。

此の如き物語は、故人の美惡を傳ふるに非ず、先代の舊事を注するに非ず。事に依り人に依りて、皆虚誕を以て宗と為す。時を立て代を立てて、併せて虚無を課して事と為す。其の趣、且に千と雖も、皆唯男女交會の道を語る。其中にも光源氏の物語は、紫式部の所制なり。卷軸六十卷と為し、篇目卅九篇を立つる。言は内外の典籍に涉り、宗は男女の芳談を巧む。古来の物語の中、之を以て秀逸と為す。艶詞甚だ佳美にして心情多く揚蕩たり。男女の色を重んずる家・貴賤の艶を事とする人、之を以て口實に備へ之を以て心機に蓄ふ。故に深窓の未だ嫁がざる女、之を見れば偷かに懷春の思ひを動かし、冷たき席に獨り臥す男、之を披けば徒に思秋の心を勞す。故に彼の制作の亡靈と謂ひ、此の披閱の諸人と謂ひ、定めて輪廻の罪根を結び、悉く奈落の劔林に墮つべし。

一〇 袴田光康「源氏一品経」「日向一雅（編）『源氏物語と仏教―仏典・故事・儀礼』（青簡舎、二〇〇九年）」「二二二～二二三頁の書き下し。これは、阿部秋生（他編）『源氏物語』上巻（国語国文学研究史大成（三）、三省堂、一九六〇年）所収本をもとに修正した本文である。袴田氏の校訂本文は次の通りである。「如此物語者、非傳故人之美惡、非注先代之舊事、依事依人、皆以虚誕為宗、立時立代、併課虚無為事、其趣雖且千、皆唯語男女交會之道、其中光源氏之物語者、紫式部之所制也、為卷軸六十卷、立篇目卅九篇、言涉内外之典籍、宗巧男女之芳談、古来物語之中以之為秀逸、艶詞甚佳美心情多揚蕩、男女重色之家貴賤事艶之人、以之備口實以之蓄心機、故深窓未嫁之女、見之偷動懷春之思、冷席獨臥之男、披之徒勞思秋之心、故謂彼制作之亡靈、謂此披閱之諸人、定結輪廻之罪根、悉墮奈落之劔林」。

『源氏物語』は男女の交わりの道を教えているのであり、結婚していない娘や独身の男性によくない影響を与えると説かれている。伊井春樹氏の解説によると、「これでは、好色の道を進める手引き書と言うほかない」^二という事態になるわけで、このような物語を書いたせいで、作者は輪廻の罪を得ることになったとされる。「源氏一品経」はこのように物語の内容と作者の非を取り上げた後、その救済を願うことによって締め括られる。

また「源氏供養」と同様の認識が見えるものとして、『宝物集』『持戒』の「不妄言」の提示する理解も有名である。

ちかくは、紫式部が虚言をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患くげんしのびがたきよし、人の夢にみえたりけりとて、歌よみどものよりあひて、一日経かきて、供養しけるは、おぼえ給ふらんものを^二。

右は仏教の「不妄言」の項目で取り上げられているので、「虚言」に焦点があるが、『源氏物語』を罪の書物と見做し、紫式部の供養を行う点から、『源氏物語』に対する中世の認識を垣間見せるものである。

今まで見てきたように、本居宣長の読みは源氏と藤壺の恋に「もののあはれ」を求め、「源氏供養」では男女の恋が仏道の教えに背くこととして取り上げられる。この二つの読みはそれぞれ対立するかのように見えるが、『源氏物語』を恋の物語として読んでいる点では共通しているように思われる。

第二節 婦人の美德の学べる物語

一方、『源氏物語』は教育の物語として読まれる場合もあった。中世から近世にかけての女訓書において、『源氏物語』は婦人の美德を養うための必須の書として読まれ、登場人物の行動や身の嗜みを学ぶべき規範の書物として読まれてきた側面である。

例えば、「貴族的教養を持たせること」^一三を姫君の教育の理想とし、平安時代の女性教育を模範にしている『乳母の草紙』においても、『源氏物語』は姫君の教育に必須の書として取り上げられている。

^一 伊井春樹『源氏物語の伝説』（昭和出版、一九七六年）一五五頁

^二 小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一（校注）『宝物集・閑居友・比良山古人霊託』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年）二二九頁

^三 河辺式絵『乳母の草紙』における女性の教養をめぐる諸問題について『金城日本語日本文化』第八四号（金城学院大学日本語日本文化学会、二〇〇八年三月）七〇頁

又、「源氏」「世継」「伊勢物語」「狭衣」などやうの、さるべからん物をば、一渡りは必ず御覧じ候へ。さやうの事は極めてあわれと思ひしみて、幼くて持て馴れたりしことは忘れぬ物にて候。人に向ひて知らぬいたづら事など仰れ候まじく候^{一四}。

『乳母の草紙』は伝阿仏尼作の『庭のをしへ』略本系に類似する部分が多いことが知られるが、その中でも、姫君の教養教育が重視される妹の姫君の乳母の育て方が述べられる部分が『庭のをしへ』と重なっている。貴族の姫君教育の姿を窺わせる妹の乳母の教育方針が綴られる右の引用文からは、数多くの物語の中でも『源氏物語』は姫君の教養のために読むべき代表的な作品であったことが窺える。

近世になると、『源氏物語』に儒学の徳目を読み取る熊沢蕃山（二六一九～一六九一）のような読みもある。蕃山の注釈書『源氏外伝』の序文に当たる冒頭部を引用する。

或婦人云、古より男方の教を書る様々の書の中には女方のまねぶべき事も有べけれど、文学なき者は読解がたく侍れば、昔より書をける仮名の物語をのみ見侍りて、聊心得んより外の事侍らず。其中にもはか／＼しき教となるべき物も見え侍らず。源氏物語は色好の事のみを作て書侍る物なれ共、さしも賢き女の書置る物なれば、書ざまのやさしき故やらん。又は同じ女さまの心のかよふにや、万の事見るに心得よく侍る事多く侍りて、左様ならん物にても自然愚なる女の教とは成べき事にや侍らん。云源氏物語は表には好色のことを書けども実は好色の事に非ず。其故に源氏物語を好み見る人にも正しきに過たる人有。此物語を書たる意趣は万の事、世の末に成行は、上代の美風衰へて俗に流ん事を嘆き思ふといへども、其あらはに正しき書は人忌て近づけず、見る人すくなければ、世にあまねからず数を書たる事は多けれ共、詞すくみて人厭ふ心あれば、書置ども其詮なき事を思はかりて、強て教がましき筆法をあらはさず^{一五}。

ここで蕃山は『源氏物語』に色好のことが書かれていることを認めているが、作者の意趣は好色ではなく、上代の美風の衰えることを嘆いて、それを世の人々に分りやすい形で伝えていると読み解く。このように『源氏外伝』は『源氏物語』に書き込まれている美風を読み取る姿勢を顕にする。これに関連して、本論では、二重傍線部で窺えるように、『源氏外伝』の序文には『源氏物語』から「教え」を導き出す視点が明確に現れていることを指摘したい。

『源氏外伝』では序文に続き、「春之巻」、「夏之巻」、「秋之巻」、「冬之巻」において、詳

^{一四} 秋谷治（校注）「乳母の草紙」「市古貞次（外校注）『室町物語集』下（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九二年）」三五一～三五二頁

^{一五} 私に句読点を加え、濁点を付けた。旧字は常用漢字に改めた。『源氏外伝』（国文注釈全書、すみや書房、一九六九年）一六七頁

細な注釈が施されていて、女性の徳目に言及される。例えば、「冬之巻」所収の「明石」巻には、次の本文に対する注釈がある。

親たちのかく思ひあつかふを聞くにも、似げなきことかなと思ふに、ただなるよりはものあはれなり。(明石②二三九)

「おやたちのかく思あつかふを聞くにもにげなき事かな」の項目に、「人情誠に然りしかれども、礼儀をまちてみづからけす人のいざなひにもなびかざりし賢女の道なり。」とあり、明石の君に対して、「礼儀」という観点から、「賢女」という評価がなされる。本文のこの部分は、両親が源氏に縁付けることを考えていることに關して、明石の君が田舎育ちである自分と源氏の身分の差に気付き、もののあはれを感じる文脈であるが、儒教の礼儀の観点から明石の君の品性を捉えているのが『源氏外伝』の特徴であると言える。

また、近世の国学者の安藤為章(一六五九～一七一六)も『紫家七論』で『源氏物語』の教訓的側面を読み取る。第五論「作者本意」では「此物がたり、専ら人情世態を述て、上中下の風儀用意をしめし、事を好色によせて、美刺を詞にあらはさず、見る人をして善惡を定めしむ。大旨は、婦人のために風論すといへども、おのづからをのこのいましめとなる事おほし。」^{一六}と述べ、『源氏物語』が女性だけでなく、男性にも戒めになると指摘する。第一論「才徳兼備」には、『源氏物語』の女性のために教育的な側面が次のように指摘されている。

先物語のうへにて、ひとつふたつをいはゞ、紫上の、らう／＼くおほどかなる物から、おもりかにして用意ふかく、明石のうへの、心たかきものからへりくだり、はなちる里の、ものねたみせず、藤壺のきさきさの、あやまちをくいて、はやく入道し給ふる、朝顔の院の、ふかく名ををしみ給へる、玉かづらのうへの、言よく人々のけさうをのがれ、総角の君の、父宮の遺戒を守たるなど、様々の婦徳を記し、殊に品定に、あだなるをしりぞけて、実なるをすゝめ、しば／＼警戒をしめしたるは(中略)されば徳も才もうちあひたる、賢婦人の書たる物語なれば、容易に看過すべからず^{一七}。

安藤為章は、紫の上、明石の君、藤壺、朝顔、玉鬘、大君の態度を「婦徳」の例として挙げ、『源氏物語』を通じて様々な徳目を学ぶことができるという視点を提示する。また、「源氏供養」の理解とは逆に、『紫家七論』では作者が「賢婦人」であり、そのような作者の記したものであるからこそ『源氏物語』を読むべきだという主張が展開されている。

このような理解は、明治時代にも受け継がれ、藤岡作太郎(一八七〇～一九一〇)は『国

^{一六} 「紫家七論」(藤原為章(撰))「平重道・阿部秋生(校注)『近世神道論・前期国学』(日本思想大系、岩波書店、一九七二年)四三二～四三三頁

^{一七} 上掲書、「紫家七論」四二四～四二八頁

文学全史』平安朝篇の中で次のような意見を述べる。

源氏物語の本意は実に婦人の評論にあり。(中略)その批評において、著者が教うところは、妻たるべき心得あり、継母についての訓誡あり、人は心を長くもたざるべからずとし、女は容貌よりも心ばせによりて軽重せらるゝものというなど、一々列举するの煩に堪えず^{一八}。

すなわち、妻、継母、女で表象される女性の読者の教化という側面が強調され、『源氏物語』は様々な女性の登場人物の評論を通じて、女性の読者の人格形成によい影響を与える書物として評価されているわけである。

これらの極端に相反する享受の歴史が示す、恋の物語、教育の物語という二つの読み方は、『源氏物語』における女性をどのように評価するか、という点で共通の関心に基づいているように思われる。物語の女性たちは、恋の姿勢によって、批判されることもあれば、また、同じ理由によって賞賛されることもあったわけである。

本論文では『源氏物語』における教育を取り上げるが、源氏の女性との恋について現代の倫理・道徳の観点から読むことや、各女性が持つていられるいわゆる美徳を取り上げる意図はない。その代わりに、父と子の教育という別の側面から、『源氏物語』の主題を取り出すことを目標とする。また、人物を取り上げる際には、個々の人物の特徴を捉えるのではなく、教える側と教えられる側という相互関係の中で描かれうる、物語の教育する、教育される場面に注目する。血縁ではなく、教育という行為を経て、両側が、父と子として結ばれていく過程を追跡することを試みる。

以上の考察を踏まえ、血縁だけでなく、教育や養育の過程が人物の関係をどのように結んでいくかという点に着目し、『源氏物語』には父と子の教育という大きなテーマが隠されていることを確認したいと思う。物語は「紫のゆかり」のような血の流れだけではなく、教育によって結ばれた関係、言い換えれば、生まれた後の養育や教育の大切さを強調していることを指摘し、教育によって築かれていく関係が『源氏物語』の理想に置かれているという結論を導き出すために第一編、第二編、第三編に渡って考察を行う。

第三節 父の役割

『源氏物語』にはまず、光源氏から始まり、その息子夕霧、夕霧の妻雲居雁、そして朱雀院の娘女三宮、八の宮家の大君・中君の姉妹などに到るまで、幼い頃に母を失い、父の教育によって成長していく人物たちが描かれる。また、近江の君、玉鬘にしても、母の元

^{一八} 藤岡作太郎『国文学全史』平安朝篇2(東洋文庫、平凡社、一九七四年)一五四―一五五頁

で育てられた時期については詳しい描写がなく、母を失った後、父との再会を遂げた後の物語が中心に叙述されるのが特徴的である。例えば、近江の君の物語は父内大臣と再会した瞬間から紡ぎ出され、玉鬘の場合も「帚木」巻にその存在が「かの撫子」（帚木①八三）と表現されることはあるが、玉鬘本人に関する描写は無きに等しく、源氏に引き取られる「玉鬘」巻から彼女に関する本格的な物語が展開されていく。また、浮舟のように実母が生きていた場合であっても、浮舟の物語はほとんど父の地、宇治を中心に展開されるように、父との関係が物語の展開において中心になる場合もある。

このように、『源氏物語』の中で父によって教育される子供たちの姿が多く描かれることは、母を早く亡くして、漢学者であった父藤原為時によって育てられた紫式部の実体験とも無関係ではないと思われるが、作者についてはさておき、まず、物語の中で父と子の教育がどのように描かれているかを探ることにする。

先行研究において、平安時代の女性の教育と言うと、乳母の役割が強調される。『源氏物語』をはじめ、文学作品の中でも乳母が女性の教育を担当する姿で登場することについては、すでに吉海直人氏の著書『平安朝の乳母達』（世界思想社、一九九五年）の中で指摘されている通りである。吉海氏は具体的な例を挙げて乳母の役割を論じていて、姫君を育てるために乳母が大きな役割を果たすことを論証している。学ぶ所が多く、乳母の役割については敷衍する処がない。しかし、先行研究の指摘の通り、平安時代の貴族社会においては、乳母が養育を育てることになるにも関わらず^{一九}、『源氏物語』の中では、父源氏が明石の姫君のための乳母の選定に尋常ではない努力を重ねていることが注目されるなど、『源氏物語』における子供教育については、まだ考える余地が残っているように思われる。

本論では乳母の養育ではなく、子に学問や教養を授ける父の姿に焦点を合わせ、父と子の教育が物語の展開にいかなる役割を果たしているかを考察していくことにする。まず、第一編では桐壺帝、光源氏、夕霧、冷泉帝に至る父と子の教育に注目した。第一章では桐壺帝の主催で読書始^{ふみはじめ}の儀式が行われ、本格的に学問を習い始める源氏について光を当てる。桐壺帝の教育ぶりは源氏にも伝えられ、源氏は自分の子夕霧に厳しい教育を行っていくことになるが、夕霧の大学入学や寮試、省試の場面を第二章で考察する。第三章では公に桐壺院の子であり、内実は源氏と藤壺の息子である冷泉帝の学問を取り上げた。いずれの場合も男性の学問においては、漢籍の勉強が中心をなしていたことが予想され、第一章では『御注孝経』、第二章では『史記』、第三章では『群書治要』や『帝範』、『貞観政要』などを取り上げ、漢籍との関わりに注意しながら、論を展開していく。

第二編では『源氏物語』に描かれた娘の教育に注目する。その代表的な例として源氏と明石の君の間に生まれた明石の姫君の教育について詳細な分析を行う。明石の姫君は、明

^{一九} 「上流貴族の場合、父親は元服以前の子供の養育にほとんど関与しないのだし（通い婚）、肝心の母親にしても授乳を含めて子供の養育には一切かわらず、全てを乳母達に任せるのが一般的であった。」吉海直人『源氏物語の乳母学』（世界思想社、二〇〇八年）一七一頁。

石の君が腹に宿した時からその存在が語られはじめ、宇治十帖に至るまで長く登場する人物である。正編と続編に渡ってその生涯の軌跡が確認される人物であり、源氏に与えられた予言とその実現という物語の流れの中で后にまで昇るなど、物語の展開において明石の姫君が占める比重は大きい。従って、本論では第四章で、明石の姫君のために行われる文学教育、第五章では「梅枝」巻で明石の姫君に絵日記が渡されることが暗示される理由について、第六章では源氏の姫君に対する書道教育について取り上げることにする。特に、その具体的な描写において、源氏の明石の姫君教育が、玉鬘や紫の上の場合とはどのように異なるかに注意しながら、考察していきたい。

特に、第四章から第六章まで取り上げる源氏の明石の姫君教育と対照的な例として、第七章では朱雀院と女三宮の関係について分析する。女三宮の場合、父による教育が十分に行われたとは言えず、出家する朱雀院は娘を育てる役割を源氏に任せるが、その結果、予期せぬ柏木との密通が起こるようになる。本論では普通ではない結婚生活を送るようになり、柏木と密通に落ちる女三宮の不幸は、父と娘の関係が、夫婦であるべき源氏との関係にスライドされたことに原因があることを指摘する。

第三編においては、血縁で繋がっていないけれども、源氏との関わりを結んで生きていく人物たちを取り上げる。その代表的な例として、第八章で藤原氏であるが、源氏側と緊密な関係を維持していく玉鬘の場合を、第九章で源氏の息子として生きていく中、実父柏木への思いから無常観に浸る薫の姿に寄り添った分析を行う。補論の第十章では、大きな視点から、『源氏物語』の受容に関して考察し、『源氏物語』の発信する教育や知識による知の交流について考える。

つまり、本論文では第一編と第二編で血の繋がっている父と子、第三編で二人の父を持つ例を取り上げることになるが、どちらの場合においても、血筋よりは、生まれてからの教育が父と子の関係を緊密なものにしているように考えられる。息子には漢籍の教育を、娘には和歌や物語、書道の教育場面が中心に見える差はあるが、その教育が子の母ではなく、父によって主導的に行われていることが特徴である。

『源氏物語』は父と子の教育を通じて、狭い意味の血縁関係に囚われず、より広い知の繋がりの世界の可能性を、ほのかではあるが、確かに提示している。漢学に教養の深かった作者のことであれば、血の流れより知の流れによって、築かれていく社会を夢見たかもしれない。『源氏物語』が書かれた時代は、血の論理が先走り、政治は外戚に影響され、官職は父と子の間で受け継がれていた。しかし、源氏が夕霧の蔭位制によって官職に就くことを頑固に許さなかったように、物語は血の流れは、知の支えがあつてこそ受け継がれることが可能であると提示したのではないか。以上の考えのもとで、『源氏物語』を読み解くことを試みる。

第一編

息子を教育する父―漢籍を通じた教育

第一編 息子を教育する父―漢籍を通じた教育

第一章 桐壺帝の光源氏への教育

はじめに

「桐壺」巻は大きく分けて、帝と更衣の物語が描かれる前半部と、更衣の死後、その子光源氏の成長をめぐる一連の物語が叙述される後半部に区別される。鈴木日出男氏の表現を借りると、桐壺更衣の死を哀悼する桐壺帝は「いちずに恋に生きる一個の人間」^一の姿をしているようである。しかし、後半部に入ると、坂本昇氏が「第二皇子の母更衣も祖母も亡くなった今、帝は自らの責任において、手ずから育てることを決意したと見られる」^二と指摘しているように、桐壺帝には息子の将来のため、冷静な判断をしていく父の姿が強く表れるようになるのである。

後半部において、桐壺帝は高麗相人の予言や倭相の結果を参考に、源氏^三の臣籍降下を決意する。桐壺帝は臣籍降下の儀式を通じて、公の場で源氏が自分の子であることを披露している。臣籍降下はしっかりした後見がないという状況を打開し、源氏を保護するために行われたが、本論では、桐壺帝の決断による臣籍降下が行われるまでの過程に注目し、桐壺帝は具体的にどのような教育を授けたのかに焦点を合わせ考察していくことにする。

第一節 読書始の儀式

古代中世文学における孝思想を分析する中、田中徳定氏は、「桐壺」巻の場面について言及し、「読書始において『孝経』を学んでいたことから窺われるように、天皇の治世のあ

一 鈴木日出男「光源氏前史」『日本文学』第二二巻第一〇号（日本文学協会、一九七三年一〇月）六九頁

二 坂本昇「父桐壺帝」『源氏物語構想論』（明治書院、一九八一年）二八頁

三 光源氏とは、臣籍降下によって、源の姓を授けられた以後の名称であるが、本論では便宜の上、臣籍降下がまだ行われていない時点においても源氏と称することにする。

り方の基盤には、儒教の学問があつた」^四と指摘し、朱雀帝や冷泉帝の例を挙げ、「天皇は、『孝経』に基づく天子の孝を実践する倫理的人間である、という前提のもとに人物造型がなされている」^五と指摘する。田中氏の論文に学んだことが多くあるが、本論では読書始だけでなく、相人による予言、臣籍降下に続く場面を追つて分析し、その中で父によって授けられる教育に重点を当てて考察していきたい。まず、読書始の場面を引用する。

今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば読書始などせさせたまひて、世に知らず聴うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覽ず。(帝)「今は、誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。(桐壺①三八)

本文で読書始の儀式の場面が詳しく描き出されることはないが、読書始が行われた事実が宣言されることは看過できない。この部分には、七歳という年齢が提示されている。これは歴代の帝や親王の読書始が最も多く行われた年齢帯であり、『河海抄』^六は「皇子七歳御書始例」として「村上天皇親王時 承平二年二月廿二日」と「一条院 寛和二年十二月八日」を挙げている。

読書始とは、文章博士の侍読が『御注孝経』などの書物を読み上げ、尚復がそれを復唱する儀式のことである。『江家次第』には一条院の読書始の例が詳しく取り上げられているが、読書始に侍読と尚復が二人制で勤仕することなど、寛和二年(九八六年)の式次第は「後世の規準」^七になった。『江家次第』には「置御注孝経一巻紙也」(御注孝経を置く、巻紙なり)と記され、「博士開^レ文讀曰御注孝経序」(博士文を開き、讀みて曰く、御注孝経序と)とあり、儀式の際には、『御注孝経』の序文が朗読されたことが窺える。『御注孝経』には開元十年始注本と天宝二年重注本の二種類が存在するが、林秀一氏は、重注本には元行冲の序が「孝経序」に代えられていることから、「御読書始に御使用の御注は、巻頭に元行冲奉勅撰の「御注孝経序」を有する、開元始注であつたことが明瞭」^八であると指摘する。「御注孝経序」には「孝者徳之本。教之所由生」^九(孝は徳の本なり。教の由つて生ずる所なり。)とあり、孝は徳の基であることが示されている。また、「朕以孝経。徳教之本也」^{一〇}。

四 田中徳定『源氏物語』における天皇の孝心―光源氏召還と「太上天皇になずらふ御位―」『孝思想の受容と古代中世文学』(新典社、二〇〇七年)一九七頁

五 田中徳定、前掲論文、二一七頁

六 玉上琢彌(編)『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八年)二〇四頁

七 尾形裕康「就学始の史的研究」『日本学士院紀要』第八巻第一号(日本学士院、一九五〇年三月)三九頁

八 林秀一「御読書始の御儀に就いて」『孝経学論集』(明治書院、一九七六年)三七一頁

九 星野恒(校訂)『御注孝経』(十三経注疏)漢文大系(富山房、一九七三年)一頁

一〇 上掲書、『御注孝経』二頁

（朕、孝経を以って徳教の本たり。）とあり、孝経に流れている精神を本とする、政治の理想が示されている。読書始は当代の学者を集め、学問の重要性を確認する場であり、『御注孝経』に流れている父子の孝に基づいた君臣の礼を確認する契機を提供したのであろう。

尾形氏の「宮廷読書始一覽表」^二を参考に『三代実録』や『日本紀略』を調べてみると、比較的早い時期の読書始に用いられた漢籍は、『孝経』、『千字文』、『御注孝経』、『蒙求』、『文選』、『周易』、『群書治要』など一定ではなかったことが窺える。

『三代実録』貞観十七年四月廿三日乙亥。皇太子始読『千字文』^{一三}。

（貞観十七年四月二十三日、乙亥。皇太子（貞明）、始めて千字文を読む）

『三代実録』元慶二年八月廿五日戊子。（前略）皇弟貞保親王於『披香舍』始読『蒙求』^{一四}。

（元慶二年八月二十五日、戊子。（前略）皇弟貞保親王、披香舍に於いて始めて蒙求を読む。）

『三代実録』元慶八年四月四日甲午。（前略）天皇始読『文選』^{一五}。

（元慶八年四月四日、甲午。（前略）（光孝）天皇始めて文選を読む。）

『日本紀略』仁和四年十月九日癸酉。天皇始読『周易』於大学博士善淵朝臣愛成^{一六}。

（仁和四年十月九日、癸酉。（宇多）天皇始めて大学博士善淵朝臣・愛成に於いて周易を読む。）

『日本紀略』昌泰元年二月廿八日戊辰。式部大輔紀長谷雄朝臣侍『清涼殿』。以『群書治

要』奉^レ授^二天皇^一。^{一六}

（昌泰元年二月二十八日、戊辰。式部大輔紀長谷雄朝臣、清涼殿に侍ふ。

群書治要を以って（醍醐）天皇に授け奉る。）

しかし、寛和二年（九八六年）一条天皇の読書始を起点に、天皇、皇子、親王の読書始には『御注孝経』の使用が規範化していく。例えば、三条天皇、敦明親王、敦康親王、後一条天皇、後朱雀天皇などの読書始の記録を挙げると次のようなことが確認される。

『日本紀略』永観元年八月十六日己亥。太上皇（冷泉）第二（三条天皇）居貞^{一七}。第三（為

尊）親王始読『御注孝経』。左大弁菅資忠為『博士』。上皇御『南亭』。親王等

進出^二庭中^一拜舞^{一七}。

（永観元年八月十六日、己亥。太上皇（冷泉）第二（三条天皇）居貞^{一七}。第三

^{一三} 尾形裕康、前掲論文、二八～三八頁

^{一四} 国史大系編修会（編）『日本三代実録』第四卷（吉川弘文館、一九六六年）三六〇頁

^{一五} 上掲書、『日本三代実録』四三七頁

^{一六} 上掲書、『日本三代実録』五五六頁

^{一七} 国史大系編修会（編）『日本紀略』第一〇卷（吉川弘文館、一九六五年）五三二頁

^{一八} 国史大系編修会（編）『日本紀略』第一卷（吉川弘文館、一九六五年）二頁

^{一九} 上掲書、『日本紀略』第一卷、一四八頁

（為尊）親王始めて御注孝経を読む。左大弁菅資忠博士なり。上皇南亭に御す。親王等庭中に進出、拜舞。）

『日本紀略』長保二年十二月二日乙己。東宮第一孫敦明読書始。参議式部大輔菅原朝臣輔正奉^レ授^二御注孝経^一。一八。

（長保二年十二月二日、乙己。東宮第一孫敦明読書始。参議式部大輔菅原朝臣輔正、御注孝経を授け奉る。）

『日本紀略』寛弘二年十一月十三日丁己。第一敦康親王於^二飛香舎^一初読^二御注孝経^一。一九。
（寛弘二年十一月十三日、丁己。第一敦康親王、飛香舎に於いて初めて御注孝経を読む。）

『日本紀略』長和三年十一月廿八日康戊。初読^二御注孝経於^二学士大江與周^一。尚復藏人玄蕃助源為善^{二〇}。

（長和三年十一月廿八日、康戊。初めて学士大江與周に於いて御注孝経を読む。尚復藏人玄蕃助源為善。）

『日本紀略』長和四年十二月四日康辰。先皇（一條）第三親王（後朱雀）始読^二御注孝経^一於^二式部大輔藤原廣業朝臣^一。二一。

（長和四年十二月四日、康辰。先皇（一條）第三親王（後朱雀）始めて式部大輔藤原廣業朝臣に於いて御注孝経を読む。）

以上の事例から見ると、『江家次第』の指摘通り、寛和の例が規範になり、それ以来、読書始の儀式には『御注孝経』が常に用いられていたことが考えられる。その理由について、林秀一氏は、『孝経』の性格に言及し、「其の字数は僅か二千字以内で、別に難解の字句も見当らず、初学幼童の入門書としては、最適であるからである」^{二三}と指摘する。光源氏の読書始に使われた漢籍について、物語には書かれていないが、歴史的流れを考えてみると、物語には書き込まれてはいないものの、読書始という時には『御注孝経』が考えられていたであろう。

物語には読書始の儀式が言われた後、以下のような叙述が続く。

わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、すべて言ひつづけば、ことごとしうたてぞなりぬべき人の御さまなりける。（桐壺①三九）

引用部からは、読書始以後、漢籍の読書や漢詩の作文などが正式的に行われ始めたことが窺える。光源氏は七歳から勉強を始めたのである。源氏に学問が授けられたことは、高

一八 上掲書、『日本紀略』第二卷、一九六頁

一九 上掲書、『日本紀略』第二卷、二一〇頁

二〇 上掲書、『日本紀略』第一卷、二三九頁、「後一条院紀」に記される。

二二 前掲書、『日本紀略』第一〇卷、二三六頁

二三 林秀一、前掲書、三五八頁

麗人との対面について語られる部分でも確認することができる。都を訪れた高麗人は鴻臚館に滞在したが、源氏や右大弁と対面する部分に注目してみよう。

弁も、いと才かしこき博士にて、言ひかはしたることどもなむいと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよるこび、かへりては悲しかるべき心ばへをおもしろく作りたるに、皇子もいとあはれる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈物どもを捧げたまつる。(桐壺①四〇)

高麗相人に対応したのは、博士の右大弁で、二人は律詩を詠み交わす。相人には、源氏を弁の子のように思わせて観相をしてもらっているが、源氏の作った絶句に相人が感嘆するという場面が叙述され、源氏の実力が見事に発揮されていることが表される。読書始の儀式と合わせて考えてみると、物語は皇子(源氏)が絶句を作ることができる前に、読書始に言及することによって、源氏が学問を始め、その後、見事な句を作るほどの能力に達したことを自然な形で描き出していると言える。

尾形裕康氏は、歴史上の読書始や元服の年齢を調べ、「元服以前に就学始を行い、爾後修学を続け、身心共に発達せる年齢に至つて元服礼を挙行するのが常例」二三であるという結論を導いているが、このような歴史の例は、源氏の七歳読書始、十二歳元服とも噛み合う。物語は源氏が学問を始めたことに触れ、漢詩を作る場面に言及し、元服を描く。これによって、源氏は確実に学問を身に付けていったことが知られる。

第二節 敦康親王の例

ここで読書始が語られる文脈に再び目を止めてみよう。

今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば読書始などせさせたまひて、世に知らず聴うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。(帝)「今は、誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、あとかたき仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女御子たち二ところ、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちと

けぬ遊びぐさに誰も誰も思ひきこえたまへり。(桐壺①三八〜三九)

桐壺帝は源氏を近くに侍らせ、またお供させ、弘徽殿に渡る際にも御簾の中に入ること
を許している。そして桐壺帝は、誰であつても源氏を憎むことはあるまいと発言する。帝
のそのような言葉には弱い立場の源氏への配慮がある。かつて、源氏の誕生に際し、次の
ような帝の心情が語られていた。

前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。
いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなる児の御
容貌なり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、
世にもてかしづききこゆれど、この御にはひには並びたまふべくもあらざりければ、
おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと
限りなし。(桐壺①一八〜一九)

美しく高貴な姿の源氏を鍾愛する帝であるが、第一皇子（朱雀）は、弘徽殿女御を母と
し、後ろ盾となる人の勢力が厚い。後見を含む様々な状況を考慮した上、桐壺帝は結局、
朱雀を東宮に立てようと決める。

紫式部が生きていた時代に、このような東宮の位における二人の候補をめぐる出来事は、
一条朝の敦康親王（九九九〜一〇一八）の例を通じて観察することができる。藤原道隆の
娘で、一条天皇の中宮（皇后）になった定子は、一条天皇との間に、脩子内親王、敦康親
王を生み、姝子内親王の出産の時に崩御した。母を亡くした敦康親王は、生涯において三
度即位の機会があつたが、それが叶えられることはなかった。『大鏡』「後一条院」伝には、
右のような叙述が見える。

昔、一条院の御悩の折、仰せられけるは、「一の親王をなむ春宮とすべけれども、後見
申すべき人のなきにより、思ひかけず。されば二宮をばたてたてまつるなり」と仰せ
られけるぞ、この当代の御ことよ。げにさることぞかし^{二四}。

敦康親王の即位が難しかったことには、後見のないことが大きな理由に挙げられている。
また、『栄花物語』「初花」巻には、中宮彰子の敦成親王の出生を契機に一条天皇の行幸の
場面が描かれるが、敦康親王について次のように叙述されている。

殿、若宮（敦成）抱きたてまつらせたまひて、御前に率てたてまつらせたまふ。御声

いと若し。弁の宰相の君、御剣とりてまゐりたまふ。母屋の中の戸の西に、殿の上のおはします方にぞ、若宮はおはしまさせたまふ。上の見たてまつらせたまふ御心地、思ひやりきこえさすべし。これにつけても、一の御子の生れたまへりしをり、とみにも見ず聞かざりしはや、なほずちなし、かかる筋にはただ頼もしう思ふ人のあらんこそ、かひがひしうあるべかめれ、いみじき国王の位なりとも、後見もてはやす人ならんは、わりなかるべきわざかなと、思さるるよりも、行く末までの御有様どもの思しつづけられて、まづ人知れずあはれに思しめされけり^{二五}。

引用文には、第一皇子敦康の誕生の際、すぐに対面に至らなかったことを惜しむ一条帝の心情が綴られている。山中裕氏は、親王の不幸の原因を後見が弱いためでであると捉える『栄花物語』の叙述は、「摂関政治の本質を誠によくいいあてている」^{二六}と評している。敦成親王に後見のないことが言及されるのは、祖父の中関白藤原道隆が没し、母定子が産後に逝去したことに起因する。定子の兄弟伊周、隆家なども権勢を失い、外戚の後見を得る状況ではなかった。『枕草子』（三巻本）第六段「大進生昌が家に」には、敦康親王を身籠った定子とその一行が出産のために、平生昌邸に行啓した様子が象られている。清少納言は明るい筆致で生昌との対話を描いているが、里邸を焼失し、中宮職の三等官生昌の邸を借りるしかなかった定子の苦境が裏に透けてみえる。

その後、道隆四女御匣殿が親王を世話してきたが、彼女ともまた死別している。結局、敦成親王の養育を担当するようになったのは、藤原道長女の中宮彰子である。彰子は心を配り、愛情を持って敦康親王を見守った。彰子の愛情が窺える記事の一つが『小右記』寛弘二年（一〇〇五年）十一月十三日に記される彰子の邸で行われた敦康親王の読書始である。

十三日、丁巳、今日遠忌、修^レ諷誦^二道澄寺^一、以阿闍梨濟仲令齊、余又齊、今日今上一親王（敦康親王）書始、〔飛香舎云々〕、依^レ當^二遠忌^一不^レ能^二參入^一、深更資平自^レ内退出、略談^二御書始事^一。早朝権中納言（隆家）被^レ枉駕、為^レ問^二今日御書始事^一^{二七}。

（十三日、丁巳、今日、遠忌なり。道澄寺に諷誦（文）を修し、阿闍梨濟仲を以って齊せしむ。余、又、齊す。今日、今上一親王敦康親王の書始（ふみはじめ）〔飛香舎と云々〕。遠忌に当たるに依りて、参入するあたはず。深更、資平、内より退出し、御書始の事を略談す。早朝、権中納言隆家、枉駕せらる。今日、御書始の事を問ふ為なり。）十四日 戊午、昨御書始、於^二飛香舎^一被^レ行、密々主上渡^二御件舎^一、是后宮御在所也^{二八}。

^{二五} 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進（校注・訳）『栄花物語』一（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇二年）四一四～四一五頁

^{二六} 山中裕「敦康親王」『平安人物志』（東京大学出版会、一九七四年）一九二頁

^{二七} 東京大学史料編纂所（編纂）『小右記』第二卷（大日本古記録、岩波書店、一九六一年）一三四頁。本文の傍注は括弧の中に入れて記す。割注は「」で囲む。

^{二八} 上掲書、『小右記』一三四頁

(後略)。

(戊午、昨日の御書始、飛香舎に於いて行はる。密々に主上件の舎に渡御せらる。是れ後の宮の御在所なり(後略)。)

実資は、当日が母藤原尹文女の遠忌に当たり、斎戒中だったので、読書始の儀式には参加することができなかった。この儀式には密々に「主上」の渡御のほか、多くの学者と公家などが集まり、十四日条の最後には「未^レ有^二前例^一事者」^{二九}(未だ前例有らざることなり)と記されて、儀式が盛大に行われていることが窺える。

彰子が敦康親王を養子として受け入れ、面倒を見ていたことは『栄花物語』「初花」巻の次のような叙述からも知られる。

内裏には宮々のあまたおはしますを、帝なん、一の宮をば中宮の御子に聞こえつけさせたまうて、この御方がちにもてなしきこえさせたまひ、女一の宮、二の宮などのいとうつくしうおはしますを、おろかならず見たてまつらせたまひつつ、昔をあはれに思ひ出できこえさせたまはぬときなし^{三〇}。

一条天皇が敦康親王を彰子に頼んでいた様子が読み取れる。『栄花物語全注釈』は「御方がちに」の部分の解釈について、与謝野晶子の『栄華物語詳解』を紹介している^{三一}。晶子は右の引用部の意味について、「一の宮を中宮の御方がちに御門のもてなし給ふなり、その御方にのみ帝の渡り給ふにあらず」^{三二}と読み取っている。つまり、帝は中宮を訪れる際には敦康親王をよくお供に連れていたという事情が窺えるのである。

政治的には拮抗している道隆側の定子の子であるが、彰子は愛情を注いで、三条天皇の譲位の際、再び敦康親王の立太子を願ったという状況が『大鏡』「師尹」伝に示されている。

さて、殿、内にまゐりたまひて、大宮にも申させたまひければ、いかかは聞かせたまひけむな。此度の東宮には式部卿の宮をとこそは思し召すべけれど、一条院の、「はかばかしき御後見なければ、東宮に当代をたてたてまつるなり」と仰せられしかば、これも同事なりと思しきだめて、寛仁元年八月五日こそは、九にて、三宮、東宮にたたせたまひて^{三三}

^{二九} 上掲書、『小右記』一三五頁

^{三〇} 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進(校注・訳)『栄花物語』一(新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇二年) 三六五頁

^{三一} 松村博司『栄花物語全注釈』第二卷(角川書店、一九七一年) 三二六頁

^{三二} 与謝野晶子『栄華物語詳解』『明星』(一九〇六年五月) 一〇五頁

^{三三} 前掲書、『大鏡』一二五頁

引用部には、この機会に敦康親王の即位を願う彰子と、我が孫敦良親王を東宮にさせようとする父道長の対立が窺える。道長が敦康親王を輔弼し、「通過儀礼や多様な宗教的行事にも主導的にかかわっていた」^{三四}ということは確かである。しかし、そこにはある程度の限界があったことは『御堂関白記』の記述から読み取れる。光島民子氏は、道長が敦康親王の読書始に参加し、詩を献じたにも関わらず、「その日の前後においても敦康親王御書始に関しては一行も記されていない」^{三五}と指摘し、後の第三皇子敦良親王の御書始が大きく取り上げられていることや『小右記』^{三六}がその詳細を伝えていることは対照的であると述べる。

一条天皇が彰子に敦康親王の養育を任せるようになるまでの背景は藤原行成の『権記』から窺うことができる。藤原行成の『権記』長保三年（一〇〇一年）八月三日条を引用する。

三日 壬寅 舉直朝臣昨夕來示^一左府之氣色^一、今日已剋、一御子始渡給^二中宮上御蘆^一、先是^三余伺松容、上下奏漢明帝令^三馬皇后愛養^二肅宗^一之故事^上、上然御氣色、至于^二今日^一遂^二此事^一 ^{三六}

（三日、壬寅、挙直朝臣、昨夕、來たりて左府の氣色を示す。今日、已剋、一御子（敦康親王）始めて、中宮（彰子）上の御蘆に渡り給ふ。是より先、余、松容を伺ひ、漢明帝、馬皇后をして肅宗を愛養せしむる故事を上奏す。上、然かる御氣色あり、今日に至りてこの事を遂ぐ。）

行成は先に一条天皇に伺候する機会（松容に会する）を得て、漢の馬皇后の例を申し上げた。帝も了解された（然りとの御氣色）ので、敦康親王は彰子によって養育されるようになる。

行成が言及した馬皇后の故事は『後漢書』「本紀二・皇后第十上」から参照することができる。

顯宗即位、以后為貴人。時后前母姉女賈氏亦以選入、生肅宗。帝以后無子、命令養之。

謂曰…「人未必當自生子、但患愛養不至耳。」后於是盡心撫育、勞悴過於所生 ^{三七}

（顯宗即位するや、后を以て貴人と為す。時に後の前母の姉の女の賈氏も亦た選を以

^{三四} 倉田実「敦康親王と彰子―『後漢書』の馬皇后の故事から―」『王朝撰関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇四年）二九〇頁

^{三五} 光島民子「御堂関白記の一考察―文人道長を中心として―」『女子大國文』第四六号（京都女子大学国文学会、一九六七年七月）十四頁

^{三六} 続群書類従完成会（編）『権記』二（資料纂集、一九八七年）一二〇頁、欠字を□の中に補

う。増補「史料大成」刊行会（編）『権記』一・二（臨川書店、一九六五年）二一八頁も参照。

^{三七} 范曄撰・李賢等注『後漢書』第二卷（中華書局、一九六五年）

て入り、肅宗を生む。帝、后には子無きを以て、命じて之を養わしむ。謂いて曰わく、「人未だ必ずしも当に自ら子を生むべきにはあらず、但だ愛養の至らざることを思うのみ。」后是に於いて心を尽くして撫育し、勞悴すること所生に過ぐ三八。）

引用文のように、馬皇后は賈氏婦人の産んだ肅宗を愛育した状況が読み取られ、行成がこの故事に基づいて一条天皇を説得しているように、当時の貴族たちにこの故事は理想的な養母のモデルを提供していたとも考えられる。

『源氏物語』に戻って考えてみると、源氏には確かな後見がなく、弘徽殿女御を入内させた右大臣側が源氏に愛情を持つて世話することも期待できない状況である。本文の表現を借りると、場合によっては、「仇敵」あたかたき（桐壺①三九）と表象される政治勢力によって困難に陥る可能性までが内在していたと言えよう。まだ読書始を終えたばかりの段階においては、源氏の素晴らしい姿が浮き彫りにされているが三九、それだけでは源氏の長い人生における安定した地位を確保することは難しい。帝がどのような決断を下すのかについて、続いて考察する。

第三節 高麗相人の予言

読書始のことが言われてから、次には、源氏が高麗相人に覬相してもらおう話題が続く。

そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さむことは宇多帝の御誠あれば、いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきて、あまたたび傾きあやしぶ。（相人）「国の親となりて帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ

（桐壺①三九～四〇）

その文面から予言の内容は、帝のような高い位階に昇る相として見れば、世の中が乱れることがあるようで、朝廷を輔弼する官職の相として見れば、また別の相が見られる、という謎めいた内容になっている。『源氏物語』が謎かけの形式を取り、「桐壺」巻の予言が

三八 吉川忠夫『後漢書』（岩波書店、二〇〇二年）二五〇頁

三九 本文の次の所に源氏の素晴らしい「さま」に関する言及が見える。「いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず」（桐壺①三九）

「藤裏葉」巻において准太上天皇になる源氏の宿世が述べられるまで^{四〇}、読者の興味を惹きつけるという物語の方法は広く知られている^{四一}。また、予言が示す内容の幅広さについて、「物語は複数の答え（読み）を許容しているのである」^{四二}という指摘も肯定できる。しかし、本論では、先行論文を踏まえながら、この予言が据えられている文脈に注意したい。まず、『源氏物語』の先蹤となる物語において、高麗人が登場する場面は『うつほ物語』『俊蔭』巻に見出せる。

七歳になる年、父が高麗人に会ふに、この七歳なる子、父をもどきて、高麗人と書^{ふみ}を作り交はしければ、朝廷、聞こし召して、「あやしうめづらしきことなり。いかで試みむ」と思すほどに、十二歳にて冠^{かうぶり}しつ^{四三}。

引用文で、書（ふみ）を交わした時点が七歳として提示されることや、十二歳の元服が示されることは、「桐壺」巻と同様である。しかし、『源氏物語』は七歳の読書始のことを先に語ることによって、源氏がすでに学問を習い始めていたことを強調していると思われる。

高麗人の観相について、従来、『聖徳太子伝暦』の百済僧日羅が太子の相を見る場面との関連性を取り上げられていた。松本三枝子氏は観相の場面を取り上げ、「聖徳太子こそ光源氏像の原型である」と説いた^{四四}。

『聖徳太子伝暦』から日羅の言葉が記された部分を取り出すと次のようである。

太子辞讓^{シテ}、直^チチ^ニ入^下ヌ日羅之房^ニ。日羅跪^テ地^ニ而居^テ合掌白^{シテ}曰。敬礼救世観世音大

菩薩 伝燈東方粟散王云々^{四五}。

（太子辞讓して、直ちに日羅の房に入りぬ。日羅地に跪いて白して合掌して曰わく、

^{四〇} 該当部分は以下のように叙述されている。「明けむ年四十になりたまふ、御賀のことを、朝廷よりはじめてまつりて、大きな世のいそぎなり。その秋、太上天皇になずらふ御位得たまうて、御封加はり、年官、年齢などみな添ひたまふ。（藤裏葉③四五四）

^{四一} 藤井貞和「高麗の相人の予言」『古典講読シリーズ 源氏物語』（岩波セミナーブックス、一九九三年）、日向一雅「光源氏の王権と「家」」『源氏物語の準拠と話型』（至文堂、一九九九年）、高橋享「謎かけの文芸としての源氏物語」『源氏物語の詩学』（名古屋大学出版会、二一〇七年）など。

^{四二} 吉海直人『源氏物語の視角』（翰林書房、一九九二年）一〇九頁

^{四三} 室城秀之（校注）『うつほ物語 全』（改訂版、おうふう、二〇〇一年）九頁

^{四四} 松本三枝子「光源氏と聖徳太子」『へいあんぶんがく』第一号（東京大学平安文学研究会、一九六七年七月）

^{四五} 国文学研究資料館（編）『真福寺善本叢刊 第五卷 聖徳太子伝暦』（臨川書店、二〇〇六年）二〇九頁

敬礼救世観世音大菩薩 伝燈東方粟散王と云々。）

また、これにもとづく『三宝絵』中巻第一話にも、次のような叙述が見える。

百済国ヨリ日羅ト云人來レリ。身ニ光明アリ。太子窃ニ弊タル衣ヲキテ、諸ノ童ニマジリテ、難波ノタチニイタリテミル。日羅太子ヲサシテアヤシブ。太子オドロキテ去ル。日羅ヒザマヅキテタナ心ヲ合テ云ク、

敬礼救世観世音、伝燈東方粟散王。

ト申スホドニ、日羅大ニ身ノ光ヲハナツ。太子又眉間ヨリ光ヲ放給はなちたまふ 四六。

このような内容から、確かに、聖徳太子が外国の使節によって相を見てもらうこれらの場面は、『源氏物語』の場面と類似していて、聖徳太子説話が素材の面において参照され、強い影響力を及ぼしていることが看取される。しかし、その類似性が多くあるにも関わらず、異なる設定も注意される。今井源衛氏が「両者の符合度は高くはないが、多少とも物語の素材となった可能性は不定できない」^{四七}と慎重な発言をしているのも、両方の異なる点が『源氏物語』の主題の形成において、重要であると判断したからではないか。

聖徳太子の場合は、百済僧の日羅が「敬礼救世観世音、伝燈東方粟散王」と発言して太子を観世音菩薩に見立てたことと、聖徳太子が仏教の普及に尽力したことが照らし合わされる。

一方、『源氏物語』の場合、高麗相人の予言は、「国の親となりて帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」（桐壺①三九く四〇）というもので、かなり具体的に「国の親」になる場合と「天の下を輔くる」場合の二つの相が提示されている。また、その内容においても、聖徳太子説話に見えるほどの、仏教的な意味合いは見えない。

ここで参考までに、『御注孝経』「紀孝行章」の一部を引いてみる。

事^レ親^ニ者、居^レ上^ニ不^レ驕、為^レ下^ト不^レ亂、在^レ醜^ニ不^レ争。居^レ上^ニ而驕則亡。為^レ下^ト而争則刑。在^レ醜^ニ而争則兵。三者不^レ除、雖^三日^ニ用^三三^ニ性之養^一、猶為^三不^レ孝^一也 ^{四八}。（親に事うる者、上に居りて驕らず、下と為りて乱らず、醜に在りて争わず。上に居りて驕

四六 馬淵和夫・小泉弘・今野達（校注）『三宝絵・注好選』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年）七八く七九頁

四七 今井源衛「漢籍・史書・仏典引用一覽」〔阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注・訳）『源氏物語』一（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）〕四三六頁。

四八 星野恒（校訂）『御注孝経』（十三経注疏）漢文大系（富山房、一九七三年）一一頁。

れば則ち亡ぶ。下と為りて乱れば則ち刑せらる。醜しゅうに在りて争えば則ち兵せらる。三者除かざれば、日に日に三牲の養を用うと雖も、猶不孝四九為らん。

引用部には、上の位に就いて傲慢であれば滅びる、また下の位に居て世を乱すことがあれば刑を受けるという内容が見え、指導者の位置と臣下の位置を分けて想定している。このような言い方は「桐壺」巻の相人の予言とも似通う。玉上琢彌氏は相人の予言を解説し、『源氏物語』の登場人物の詞としては異例である。高麗人が中国語でしゃべったことを、日本語に翻訳して読者に伝えた感じがある」^{五〇}と解説している。つまり、予言には『御注孝経』のような漢文訓読的な語感が残されているのである。

一方、湯浅幸代氏は、『聖徳太子伝暦』の「天皇不^レ許。太子密^ニ諮^{シテ}皇子^ニ、御^{シテ}之微^一服^{イヤシキ、ヌ}ヲ、從^テ諸ノ童子^ニ。入^テ館^ニ而見^{五二}。」(天皇許さず。太子密かに皇子に諮して御しての微服を諸の童子に従ひて館に入りて見ゆ。)を引用し、太子の観相が「帝の命に背いたところで行われている点は、光源氏の観相と決定的に異なっている」^{五二}と述べる。すなわち、桐壺帝が源氏の観相をさせたこと自体、桐壺帝が皇位継承の問題を念頭に置き^{五三}、源氏の将来について配慮していたことを表わす。

その後、帝は倭相、高麗の相人、宿曜の予言を参考に息子の臣籍降下を決断する。

帝、かしこき御心に、倭相を仰せて思しよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと思して、無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめることと思し定めて、いよいよ道々の才を習はせたまふ。際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勘へさせたまふにも同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しておきてたり。

(桐壺①四〇～四一)

桐壺帝の判断には、「無品親王の外戚の寄せなき」とあるように、源氏に確かな後見がないという理由が大きく働いている。源氏を親王にさせなかったさらなる理由は、「世の疑ひ

四九 加地伸行(全注釈)『孝経』(講談社、二〇〇七年)七四頁

五〇 玉上琢彌(評釈)『源氏物語評釈』第一巻(角川書店、一九六四年)一一六頁

五一 前掲書、『真福寺善本叢刊 第五巻 聖徳太子伝暦』二〇八頁

五二 湯浅幸代「光源氏の観相と漢籍に見る観相説話―継嗣に関わる観相を中心に―」『中古文学』

第七〇号(中古文学会、二〇〇二年一月)一七頁

五三 物語の本文には高麗相人に源氏を合わせたという噂を聞いた右大臣側の不安を次のように叙述している。「おのづから事ひろごりて、漏らさせたまはねど、東宮の祖父大臣など、いかなることにかと思し疑ひてなんありける。」(桐壺①四〇)

負ひたまひぬべくものしたまへば」とあるように、東宮の位をめぐる争いに巻き込まれるおそれがあるということでもあった。桐壺帝は息子の将来のために、源（みなもと）の姓を授け、朝廷の後見という役割を与える。それは様々な状況を考慮してから到達した最終判断であり、「わが御世もいと定めなきを」とあるように、自らが亡くなった場合までを考えた末の決定である。臣籍降下は息子の将来を導くために父が下した決断であった。

後の「少女」巻には、源氏の言葉を通じて、桐壺帝が書道や音楽の嗜みを源氏に授けていたことが窺える。

みづからは、九重の中に生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはず、夜昼御前にさぶらひて、わづかになむ、はかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず及ばぬところの多くなむはべりける。（少女③二一）

源氏自らの発言としては、及ばないところが多かったと謙遜めいた言い方になっているが、引用部には源氏が父の桐壺帝に直接指導され、教育を受けていたことが述べられる。大学に入学して徹底的に学問を習う源氏の息子夕霧の場合に比べて、源氏には学問ばかりではなく、広い分野の教養が授けられたのである。しかし、「かしこき御手」とあるように、桐壺帝が手ずから緻密な教育を通じて、息子の将来を備えていったことは確かである。

おわりに

「桐壺」巻の前半では帝と桐壺更衣との恋の物語が語られ、後半では息子源氏の読書始から高麗相人の予言、臣籍降下、その後の元服までが述べられる。そこでは、息子に学問を身につけて実力を備えさせていく父の物語が窺える。その中、読書始のことが言われるのは、桐壺帝が源氏に文の力を授けようとしたことを顕わにする。源氏には、『御注孝経』などに記される儒教の考え方、つまり、父性の権威に象られる君主や社会の秩序への尊重の心が教えられていたのであろう。読書始は一回で終わる儀式ではあるが、それはこれからの学問への入門を意味する。帝の意図通り、読書始を契機に勉学を始めた源氏は、高麗相人に出会い、句を作ることができるまで成長しているのである。相人によつて語られる「国の親」や「天の下を輔くる方」という謎めいた漢文訓読体の文面は、儒教的秩序の枠組みに寄せて語り出される。

確かな後見がない状況を打開し、源氏の将来を切り開くために、帝は臣籍降下という決断を下して、息子に源の姓を授け、朝廷を輔弼する役割を与えた。このように「桐壺」巻には父桐壺帝の子への心深さや、子の将来のための導きが表れ、読者は源氏が十分に学問

を身に付けたと思ひ描くことができる。「桐壺」巻以降には、多方面に渡った、光源氏の能力の素晴らしさが語られていくが、その能力の基には幼い時から授けられた桐壺帝の指導が根付いていたのである。

第二章 光源氏の夕霧教育―「少女」巻を中心に―

はじめに

『源氏物語』「少女」巻には、幼馴染の夕霧と雲居雁の恋物語が展開されながら、並行して光源氏の夕霧教育が語られている。合わせて先行研究の関心も恋か教育に置かれてきた傾向がある。先行研究の中、夕霧教育に現れた源氏の政治的意図を考察する立場には高橋和夫^一、松岡智之^二、塚原明弘^三、森野正弘^四の諸氏の研究があり、文章経国思想^五に基づいた政治の理想の提示という観点には鈴木一雄氏^六、藤原克己氏^七、李宇玲氏^八の研究がある。また「夕霧」巻の冒頭にみえる表現「まめ人」と関連した「少女」巻の雲居雁、五節の舞姫への恋については塚原明弘氏^九、永井崇大氏^{一〇}の論が詳細である。先行研究は政治

一 高橋和夫「少女―その構造的把握―」山岸徳平・岡一男（監修）『源氏物語講座』第三巻「各巻と人物（一）」（有精堂、一九七一年）

二 松岡智之「冷泉朝の光源氏―秋好立后と夕霧大学寮入学―」紫式部学会（編）『むらさき』第三四輯（武蔵野書院、一九九七年十二月）

三 塚原明弘「光源氏の摂政辞退と夕霧の大学入学―「潞標」巻と「少女」巻の政治的背景―」『針本正行（編）『少女』（源氏物語の鑑賞と基礎知識二七、至文堂、二〇〇三年）』

四 森野正弘「組織化される夕霧の浮遊性」『針本正行（編）『少女』（源氏物語の鑑賞と基礎知識二七、至文堂、二〇〇三年）』

五 『日本後紀』弘仁三年五月二十一日の勅には「経^レ国治^レ家。莫^レ善^二於文^一。立^レ身揚^レ名。莫^レ尚^二於学^一。」（国を^{おさ}め家を治むるに文より善きは莫^なく、身を立て名を揚ぐるに学より尚^{たふと}きは莫^なし。）とあり、文章経国思想が窺え、嵯峨朝の『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』や勅撰漢詩集の編纂に代表される。引用は、国史大系編修会（編）『日本後紀』新訂増補国史大系、第三巻（吉川弘文館、一九六六年）一一四頁による。

六 鈴木一雄『源氏物語』に描かれた大学寮『平安貴族の環境』（国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九一年）

七 藤原克己「幼な恋と学問―少女巻―」『源氏物語講座』第三巻（勉誠社、一九九二年）

八 李宇玲「夕霧の学問―字の儀式から放島試へ―」『古代宮廷文学論―中日文化交流史の視点から―』（勉誠出版、二〇一一年）

九 塚原明弘「少女」巻の五節『源氏物語ことばの連環』（おうふう、二〇〇四年）

一〇 永井崇大「夕霧造型論―『平中物語』からの水脈―」『語文』第一二〇輯（日本大学国文学会、二〇〇四年十二月）

や思想、恋などの側面からの夕霧の教育を的確に分析しているが、本論文では、これらの先行研究に導かれながら、少し異なる立場で、夕霧の物語を父という鍵語キーワードをもって読み解いていきたい。

物語内で夕霧のもつ源氏の息子としての立場は、物語が血縁関係を設定している以上、当然のようである。しかし、夕霧の物語が本格的に繰り広げられるのは、源氏の教育を受ける「少女」巻が起点になっている。夕霧は源氏の教育を受ける過程を経て、父と緊密な関係を結ぶようになる。言い換えると、源氏の夕霧教育は父子関係を構築していく道筋であるように考えられる。以下、夕霧の大学入学、寮試、省試の場面を取り上げながら、それらの描写が持つ物語内の意味について考察していく。

第一節 夕霧の大学入学

「少女」巻の前半には源氏の息子夕霧の元服が記され、源氏の太政大臣への昇進が語られる。巻の後半には四季の町の六条院の完成が描かれる。「少女」巻は玉鬘十帖の始まる直前の巻であるが、「源氏のがわから六条院物語として玉鬘十帖をながめるならば」、源氏に残された課題のひとつは「子女を育てあげて結婚を見とどけること」である^二。玉鬘十帖の前置きとして「少女」巻の時点においても、子女の教育は重要なテーマを成しているといえよう。「少女」巻には夕霧の大学寮への入学の重要性を披瀝するなど、息子を教育する意志が強い父としての源氏の姿が描かれているからである。源氏の夕霧教育に関連する本文を追って夕霧の教育に臨む源氏の態度を考察していくことにする。

源氏は夕霧の養育を大宮に任せていたが、大学入学の一連の過程を通して、夕霧の教育において指揮を執り始める。大宮に向けて大学の重要性を説いている源氏の言説は、源氏自らが受けた教育の経験に照らせ合わせ、父と子の教育のあり方を浮き彫りにする。

みづからは、九重の中に生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはず、夜昼御前にさぶらひて、わづかになむ、はかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず及ばぬところの多くなむはべりける。(少女③二一)

源氏はまず自ら受けた教育を振り返り、宮中で育ち世間の有様については触れる機会があまりなかったことや、桐壺院の御手ずから書などを習ったが、及ばないところが多かつ

た点などを述懐する。この部分には息子の教育を論じる前に、自らの幼年時代に受けた教育を顧み、息子をもつ父の立場から学問の重要性について論じる姿勢が窺える。次の引用部からは、源氏が夕霧の教育において親と子の関係はかなり意識していることが読み取れる。

はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いと難きことになむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。高き家の子として、官爵心になかひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえてやむことなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれて、世おとろふる末には、人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになむはべる。(少女③二二～二三)

大学の重要性を論じる源氏の主張は、傍線部に端的に表れているように、親子意識の上で論じられていることに注意したい。不十分な親に育てられた子がその親より勝つて賢くなる例はあまりない。しかも、世代が重なると、その不十分さはますます大きくなる。このような認識の上で、源氏は夕霧に学問を授けようとするのである。また、たとえば、名門家に生まれ、親の七光で思い通りの官職に就き、世間に慣れてしまうと、苦勞をする学問などからは手を放してしまう。すると遊びばかりになるゆえに、素養が足りなくなるが、それでもしっかりとした後見があるうちは、建前上人々が従う。しかし、時勢が変わると、人々に軽蔑され、没落するおそれがあるという言い立てである。

『令義解』(選叙令)に「凡授^ハ位^ヲ者。皆限^レ年廿五以上^ヲ。……唯^シ以^レ蔭^ヲ出身^{セム}ハ。皆限^レ年廿一以上^ヲ。」(凡そ位を授くるは、皆年二十五以上を限れ。唯し蔭を以って出身せむは、皆年二十一以上を限れ。)とあり、また、「三位以上^ハ蔭及^{ホセ}孫^ニ。降^セ子^ニ一等^ヲ。」(謂。嫡孫降^ニ嫡子^一。庶孫降^ニ庶子^一也。……)(三位以上は蔭孫に及ぼせ。子に一等を降せ。〔謂う、嫡孫は嫡子に降し、庶孫は庶子に降すなり。〕)とあるように、三位以上の貴族子弟の場合、二十一歳以上に達すれば父や祖父の位階に準じて位が授けられ、相当する官職に任ずることが可能であった。その結果、貴族子弟は大学寮を卒業して難しい任官試験を受けない傾向があり、夕霧は「父光源氏の権勢から言えば親王の子に準じて四位も可能であった」^{二三}とも解釈され、光源氏が夕霧を六位にとどめさせたのは、当時の常識

二三 国史大系編修会(編)『律・令義解』(新訂増補国史大系、第二三卷、吉川弘文館、一九六六年)一四四頁、一四六頁。割注は「」を使い表記した。また、井上光貞(外・校注)『律・令』(日本思想大系、岩波書店、一九七六年、二六九～二八〇頁)、国史大系編修会(編)『令集解』(新訂増補国史大系、第三三卷、吉川弘文館、一九六六年、四六三～五一八頁)も参考にした。

二三 鈴木一雄、前掲論文、二二八頁

に照らしてかなり異例のことである。実際の貴族社会において六位叙位は通常ではなく、物語の中においても夕霧の六位叙位は特異であることが強調される。それは夕霧が従兄弟の雲居雁の乳母から「六位宿世」という差別的な言葉を浴びせられることから確認できる。

（乳母）「いでや、うかりける世かな。殿の思しのたまふことはさらにも聞こえず、大納言殿にもいかに聞かせたまはん。めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ」とつぶやくもほの聞こゆ。（少女③五七）

六位から位階を始めたことは、夕霧本人にあっても忘れられない思い出として残り、この言葉は「藤裏葉」巻で中納言に昇進した夕霧によって再び想起されていく。

女君の大輔の乳母、「六位宿世」とつぶやきし宵のこと、ものをりをりに思し出でければ、菊のいとおもしろくうつろひたるを賜せて（藤裏葉③四五五）

このように、夕霧にとっては試練となるにも関わらず、源氏があえて夕霧を、六位から出発させた理由は、親の七光りで高い官職につくと、世間の人々が表向きでは追従し付き従うが、時代が変り後見する人がいなくなると、人々から軽蔑されてしまうことになることを心配したためである。そこには桐壺院の崩御、「須磨流寓前後の彼自信の経験と世態觀察にしたたかに裏打ちされた」^{一四}源氏の認識も加えられているのである。人情の移り変わりを誰よりもよく知っている源氏は、夕霧に大学寮で学問を身につけることを勧めるのである。ここには自らの経験に基づいて、子の人生を導く父の姿勢がみえる。

さらに、大学の必要性について、「才」と表現される漢学の必要性が強調される。

「なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。さし当たりては心もとなきやうにはべれども、つひの世の重しとなるべき心おきてをならひなば、はべらずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。ただ今はかばかしからずながらも、かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思つたまふる」など聞こえ知らせたまへば、（少女③二二―二三）

この「なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ」には源氏の主張が端的に表れている。大和魂とは、「融通のきいた、常識的政治的判断」^{一五}と解釈され、「ざえ（才）即ち学識・漢学を基本としてこそ、「大和魂」即ち処世の才覚が生かさ

一四 藤原克己、前掲論文、二〇六頁

一五 玉上琢彌『源氏物語評釈』第四卷（角川書店、一九六五年）三二六頁

れる」^{一六}と解釈される。学問の教養の上でこそ、実務の知識も發揮されるという意味である。そこに見えるのは、国家を支える官人としての心構えを身に付けさせ、夕霧の将来は心配がないようにさせようとする父としての源氏の姿である。

「ただ今ははかばかしからずながらも、かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思つたまふる」という文からは、しかるべき後見がない大学寮の学生はあまり恵まれず、世間の人々から軽視される場合がしばしばあったことが提示される。そして、夕霧は多少の苦勞はするかもしれないが、現在は源氏という有力な父がいることも源氏自らの言葉によって強調されていく。平安貴族社会における若い学生の現実がいかなるものであったかについては、『うつほ物語』「菊の宴」巻の藤英の場合を参照することができる。

藤英の大内記、時なる、二つなし。春宮には学士、内裏の殿上許されて、(…)難き書、面白き書を、片時に作り、朝廷、多う、かしこき者にし給ふ。よき人々婿に取り給ふを、耳に聞き入れず(…)頭の髪に焰のつき、大海に流るるを、助くることもなし。恥を捨て、名を顧みず出で立ちて、時の上達部に見え知られしかばこそ、いささか浮かみ、人ともなれ。ただ、そは、一つは天道、一つは学生の力なり。昔、天下れるか^{一七}と見えし人に肩を並べ、上に見し人を下に見、雲よりも及びがたりし百敷を馴らすこと、仏の御徳なり。我を言ひまさぐる公卿たち、^{あけ}緋の衣、白き笏に娘会はせよかし。我を取りせば、昔ぞせまし」など言ふほどに、左大将のおとど、春宮大夫にものし給ふを辞し給ふ表作らせ給ふとて、召して、南のおとどしつらはせて、候はせ給ふ^{一七}。

大内記の藤英は窮乏していた学生時代を皮肉な言葉を含めて回想している。貧しい学生時代には、たとえ髪^{一七}の毛に炎が付いても、大海に流されても誰も助けてくれなかっただろうという、多少誇張された表現を使つて表現されている。ここからは、学生という立場のもつ貴族社会における現実が読者の前に如実に突きつけられる。大井田晴彦氏の指摘によると、『うつほ物語』の登場人物藤原季英(藤英)は「文章道出身とおぼしい作者の自画像ともされる人物」^{一八}であり、このような藤英の言葉を通じて『うつほ物語』は当時の学生の現実を批判的に描いている。しかし、『うつほ物語』には大学寮への入学を主張する父の

^{一六} 佐伯雅子「『ざえ(才)』と物語―源氏物語 その2―」『源氏物語における「漢学」―紫式部の学問的基盤―』(新典社、二〇一〇年) 七一頁

^{一七} 引用本文は、室城秀之(校注)『うつほ物語 全』(改訂版、おうふう、二〇〇一年、三二五頁)に基づき、中野幸一(校注・訳)『うつほ物語』二(新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年、六四〇六五頁)によつて改めた。

^{一八} 大井田晴彦「物語作者の世界―その文人精神をめぐつて―」『うつほ物語の世界』(風間書房、二〇〇二年) 二九五頁

姿は見えない。「祭の使」巻に「父・母、筋・族、一度に滅びて、はかりなく便りなき学生」^{一九}と自分を紹介する藤英の台詞があるように、夕霧とは立場が異なり、頼りにする人がいない状況で、勉強した後、ようやく左大将源正頼に認められ出世するのである。息子の教育に熱心である父を描くのは、『源氏物語』の独自性を顕わにするもので、栄華の達成のために必要な父と子の緊密な紐帯を、教育の場面を用いて表現していると考えられる。

ほかに、貴族社会のなかで学生が占めていた位相を窺うことのできる資料に、平安時代の文人である大江匡衡に関する説話がある。大江匡房の祖父に当たる匡衡は、『本朝文粹』に最多の文が収録されるなど、漢学に深い教養を持っていた文人である。匡衡は擬文章生、文章生、文章得業生を経て、文章博士、侍読にまで至っている。着実に大学の教育を受けて、学者の道を歩いてきたのは、『源氏物語』の夕霧の教育の姿とも重なる部分が多い。時代は下るが『今昔物語集』第二十四卷第五十一話には、大江匡衡の学生の頃の逸話が載せられていて、学生という地位が貴族社会の中でどのように認識されていたかを理解するために参考になる。

今昔、式部大夫大江匡衡ト云人有キ。

学生ニテ有ケル時、閑院ノオハ有レドモ^{二〇}、長ケ高クテ、指肩ニテ、見苦カリケルヲ云咲ケルニ、匡衡ヲ呼テ、女房共和琴ヲ差出シテ、「万ノ事知リ給ヘルナレバ、此レヲ弾キ給ラム。此レ弾給へ。聞カム」ト云ケレバ、匡衡其ノ答ヘヲバ不云シテ、此ナム読懸ケル、

アフサカノ閑ノアナタモマダミネバアヅマノコトモシラレザリケリ

ト。女房達、此レヲ、其ノ返シヲ否不為マジカリケレバ、否不咲ヲ、搔キ静テ独立チニ皆立テ去ニケリ。(中略)

此ノ匡衡ハ文章ノ道極タリケルニ、亦和歌ヲナム此ク微妙ク読ケル、トナム語り伝ヘタルトヤニ。

一九 室城秀之(校注)『うつほ物語 全』二二六頁

二〇 この文の「閑院」の意味については、まだ定かではないが、「新編日本古典文学全集」の頭注では『類聚名義抄』『法ノ下』巻の「閑(上上上濁平)ミヤヒカナリ」の例を提示し、「みやび」と解釈している。「閑」を「みやび」に取る例には、ほかに『文選』『樂府上』の曹子建作「美女篇」に、「美女妖且閑 采桑岐路間」(美女は 妖かに且つ 閑か、桑を采れり 岐路の間。)がある。李善注には「説文曰閑雅也」(説文に曰く、閑は雅なり。)と施されている。

二一 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一(校注・訳)『今昔物語集』③(新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年)三六九―三七一頁

説話によると、若い匡衡は背丈が高く、張った肩の持ち主で「見苦カリケル」と描写されている。女房たちは容姿がすぐれているわけではない、学生の身分である匡衡に、和琴を差し出して弾いてみるように試したが、匡衡はすぐれた和歌を詠んだので、女房たちは返歌もできず、静かに逃げていったという内容である。女房たちの言葉、「万ノ事知り給ヘルナレバ」というところには、学生である匡衡をからかう文脈が読み取られる。この説話からは、大江匡衡のように、後に「文章ノ道極タリケル」と形容される学者であつても、若い学生の頃には、その身分をあざわられるような辛い経験をする事があつたことが窺える。

源氏が苦勞の多いことを知りながら、夕霧に学生の道を歩ませる理由は、難しい学問に取り組んだ後に真の実力を發揮することを期待していたからである。竹内正彦氏の言葉を借りると、「父が子に対して課した通過儀礼」三に当たるものであり、夕霧はもともと身近な人、父源氏によつて試験を課されているのである。しかし、その苦勞の根底には、息子としてのしつかりした位置が付与されているのであり、源氏が父であることをよく知るようになつて、これからの行動を決めるために「書（ふみ）」を開く、冷泉帝の姿とは対照的であると言える。

上は、王命婦にくはしきことは問はまほしう思しめせど、今さらに、しか忍びたまひけむこと知りにけり、とかの人にも思はれじ、ただ大臣（源氏）にいかでほめかし問ひきこえて、さきざきのかかることの例はありけりやと聞かむ、とぞ思せど、さらについてでもなければ、いよいよ御学問をせさせたまひつさまさまの書どもを御覽ずるに（薄雲②四五五）

冷泉帝の学問は、一人で黙々と書籍を調べることであつたが、夕霧の学問は、人々に囲まれて行われていた。大学入学、寮試、省試の一連の儀式では、夕霧が源氏の息子であることを天下に披露する側面があり、源氏は夕霧の教育を指揮することによって、源氏の息子として堂々とした立場を夕霧に付与していくのである。

さて、源氏の夕霧教育の本格的準備の現れとして注目される字（あざな）をつける儀式について見てみよう。儀式は二条東院において行われた。

字つくることは、東の院にてしたまふ。東の対をしつらはれたり。上達部、殿上人、めづらしくいぶかしきことにして、我も我も集ひ参りたまへり。博士どももなかなか臆しぬべし。（源氏）「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、き

三 竹内正彦「池のほとりの光源氏―「少女」巻の〈放鳥の試み〉を起点として―」『源氏研究』第四号（翰林書房、一九九九年四月）八八〜八九頁

びしう行へ」と仰せたまへば、しひてつれなく思ひなして、家より外にもとめたる装束どもの、うちあはずかたくなしき姿などをも恥なく、面もち、声づかひ、むべむべしくもてなしつつ、座につき並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまどもなり。若き君達は、えたへずほほ笑まれぬ。さるはもの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ、しづまれるかぎりをと選り出だして、瓶子なども取らせたまへるに、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを、あさましく咎め出でつつおろす。(少女③二三〜二四)

ここから窺えるのは、厳しい教育者としての源氏の姿である。『二中歴』第十三卷「名人歴」の「学生字」項に、例えば、「三好清行^{三曜}」、「長谷雄紀^官」^{二三}など、学生の本名の下に字が記されているように、大学寮では本名ではなく、字を使っていた。「学生の字は大学寮入学の際に選定されるもの」^{二四}であり、入学の本格的な手続きを意味する。『源氏物語』の書かれた時代に、儀式はすでに簡略化されていたが^{二五}、『源氏物語』はすでに廃れていた儀式を詳細に描くことによって、夕霧の勉学の環境を用意し、教育に努める源氏の態度を効果的に提示している。

以上のような源氏の姿には、『九条右丞相遺誠』を残した藤原師輔(九〇八〜九六〇年)と相通じる面があることが先行研究に指摘されている^{二六}。正暦元年(九四七)右大臣まで務めた藤原師輔は、長い宮廷生活の中で経験し、体得してきた知恵を、遺誠に書き留めて、子孫に伝えている。

凡そ成長りて頗る物の情を知るの時^{ひとな}は、朝に書伝を読み、次に手跡を学べ。その後^{いひな}に諸の遊戯^{ゆけ}を許す。ただし鷹犬・博奕は、重く禁遏するところなり。元服の後、官途^{わじ}に趨らざるの前、その為すところもまたかくのごとし^{二七}。

右の引用部には、「物の情を知るの時」、つまり、夕霧のように元服を済ました頃から、「書伝を読み」、「手跡を学」ぶなどの努力を通じて、学識を練磨するように戒められている。

同様に、夕霧の教育に熱意を入れる源氏の姿には、自らの経験に顧み、子を薫陶し、導い

二三 『『二中歴』(近藤瓶城編『改定史籍集覧 新加纂録類』第二三冊第二〇巻、近藤活版所、一九〇一年)

二四 後藤昭雄「学生の字について」『平安朝漢文学論考』(補訂版)(勉誠出版、二〇〇五年)

二五 桃裕行『上代学制の研究』(修訂版)(思文閣出版、一九九四年)(初版は、目黒書店、一九四七年)二六二頁

二六 日向一雅氏は『九条右丞相遺誠』と夕霧の人物造型を関連づけ、「権門光源氏はその子息に厳しく権門たるべき教育を課し、子によくそれに答えた」と指摘している。日向一雅「光源氏家の成立について」『源氏物語の王権と流離』(新典社、一九八九年)七三頁

二七 大曾根章介(校注)『九条右丞相遺誠』(「山岸徳平(外・校注)『古代政治社会思想』(日本思想大系、岩波書店、一九七九年)」一一七頁

ていく父親像が鮮明に現れている。

第二節 寮試の場面を中心に

大学入学と字をつける儀式を通して、光源氏は学問を重視する父として描かれていた。それに対して、夕霧は父の教育方針によく従っていく息子である。夕霧は父源氏の厳しい教育方針を辛く感じることはあるが、それを直接父に向かって声に出すことはない。夕霧の内面の声が表現されている部分を見てみよう。

つと籠りゐたまひて、いぶせきままに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しくらでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある、と思ひきこえたまへど、おほかたの人柄まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、いとよく念じて、いかでさるべき書どもとく読み果てて、まじらひもし、世にも出でたらんと思ひて、ただ四五月のうちに、史記などいふ書は読み果てたまひてけり。(少女③二七―二八)

傍線部には、学問の苦勞なしに、蔭位制により昇進して高い官職に就く方法もあるのに、という夕霧の不満が語られている。夕霧は自分より高い位階から出発している同年輩を羨ましく考えているのであろう。

そもそも夕霧の祖母大宮は、夕霧の同年輩との位の格差を心配して源氏の教育方針に憂慮を示していた。

(大宮)「げにかくも思しよるべかりけることを。この大将なども、あまりひき違へたる御事なりとかたぶきはべるめるを、この幼心地にもいと口惜しく、大将、左衛門督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおとしたりしだに、みなおのおの加階しのぼりつつ、おやすけあへるに、浅葱をいとからしと思はれたるが、心苦しうはべるなり」と聞こえたまへば(少女③二三)

「大将、左衛門督の子ども」とは夕霧の従兄弟同士を含む夕霧と同年輩の人々を指す。大宮は夕霧が六位の浅緑色の服を着て、「我より下臈」であるというふうに考えていた人々がそれぞれ活躍するのを見たら、さぞつらい思いをするに違いないと心配している。

夕霧は学問に疲れて落ち込んだ気持ちを父に突きつけることはないが、屈折した心情は祖母大宮に向けて発せられる。

(夕霧)「何かは。六位など人の侮りはべるめれば、しばしのこととは思うたまふれど、

内裏へ参るものうくてなん。故大臣おはしまさしかば、戯れにても人には侮られはべらざらまし。もの隔てぬ親におはすれど、いとけしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたりに、たやすくも参り馴れはべらず。東の院にてのみなん、御前近くはべる。対の御方こそあはれにものしたまへ、親いまところおはしまさしかば、何ごとを思ひはべらまし」とて、涙の落つるを紛らはいたまへる気色いみじうあはれるなるに（少女③六九）

夕霧は涙ぐんで大宮につらさを吐露しているが、傍線部から窺えるように、父という存在が、夕霧にとっては厳しく近づきたいようである。その理由は、今まで祖母の下で苦勞せずに成長してきた息子に、しかるべき教育をさせようとする源氏の強い意志が働いているからである。後藤祥子氏は、「夕霧が挑むのは社会に対してではなく父親に対して、ということになるわけで、ここでは父親が世界そのものである」^{二八}と指摘している。後藤氏の指摘のように、夕霧に課せられた試験は厳しいようではあるが、父によって与えられたものであり、夕霧の試験は限られた範囲のなかのものであると理解される。そこで、「若い夕霧はよくその重荷にたえて一層輝きを増す存在へと成長して行く」^{二九}ことができるのである。

次の引用部には寮試の予備試験の様子が描かれているが、子の成長に嬉し涙を流す父源氏の姿が窺える。

今は寮試受けさせむとて、まづわが御前にて試みさせたまふ。例の大將、左大弁、式部大輔、左中弁などばかりして、御師の大内記を召して、史記の難き卷々、寮試受けんに、博士のかへさふべきふしづしを引き出でて、ひとわり読ませたまつりたまふに、至らぬ限もなくかたがたに通はし読みたまへるさま、爪じるし残らず、あさましきまでありがたければ、さるべきにこそおはしけれど、誰も誰も涙落としたまふ。大將は、まして、「故大臣おはせましかば」と聞こえ出でて泣きたまふ。殿も、え心強うもてなしたまはず、（源氏）「人の上にて、かたくななりと見聞きはべりしを、子のおとなぶるに親の立ちかはり痴れゆくことは、いくばくならぬ齡ながら、かかる世にこそはべりけれ」などのたまひて、おし拭いたまふを見る御師の心地、うれしく面目ありと思へり。（少女③二八～二九）

寮試を備えた予備試験は大内記などを招いて、正式の試験に準じて行われた。夕霧は『史記』などの漢籍を「爪じるし残らず」すらすら訓読できるほど成長している。夕霧の師の

^{二八} 後藤祥子「夕霧」〔鈴木日出男（編）『人物造型からみた『源氏物語』』（国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九八年五月）〕二〇四頁

^{二九} 永井和子「源氏物語の大宮像―作中世界の保証者として」『源氏物語と老い』（笠間書院、一九九五年）二八頁

大内記はもちろん、源氏は夕霧の上達ぶりに感動する。それはそのまま源氏の厳しい教育の成果であろう。

「少女」巻の夕霧教育には漢学重視の理念が窺えるが、平安時代の代表的な漢学者である菅原道真の例は、夕霧の教育に関する考察に参考になる。深澤三千男氏は「澤標」巻の予言に示されていた夕霧の極官「太政大臣」が物語の中で実現しないという問題を取り上げ、「作者は周知のように源氏像の特に失脚から須磨流寓物語の一部分に道真像を映し出しただけでなく、実は夕霧像の一部分にも映し出しているように思われてならない。」^{三〇}と、夕霧に道真の姿を重ねる。一方、源氏に是善の姿があることについてはまだ指摘していない。本稿では『菅家文草』の言葉を根拠に、光源氏と是善の類似を提示し、漢学者に匹敵する教養を持ち、そのような教育を行う源氏像に注目しようとする。『菅家文草』には菅原道真（八四五〜九〇三年）の修業時代の漢詩が収められているが、その最初の漢詩「月夜見梅花」（月の夜に梅花を見る）には

于^レ時年十一。敵君令^二田進士試^一之、予始言^レ詩。故載^二篇首^一。^{三一}
（時に年十一。敵君田進士をして試みしめ、予始めて詩を言へりき。かるがゆゑに篇の首に載するなり^{三二}。）

と記されている。「敵君」は父菅原是善を指し、「田進士」とは文章生島田忠臣を表す。道真の詩には是善がしかるべき師を選び、勉学させていたことが表現されている。

さらに、『菅家文草』第一巻の「賦^二得赤虹篇^一、一首」（赤虹の篇を賦し得たり、一首）には、

七言十韻、自^レ此以下四首、臨^レ応^二進士挙^一、家君毎^レ日試之。雖^レ有^二数十首^一、採^二其頗可^レ觀留之^一。^{三三}

（七言十韻、此れより以下四首は、進士の挙に応ずるに臨みて、家君日毎に試せり。数十首有るといへども、其の頗^{ぐや}觀つべきものを採りて留むるなり^{三四}。）

と示され、「家君」が日ごと模擬試験を出して、漢詩上達の具合をチェックし、それによつて実力を付けさせていたことが読み取れる。このように、道真の父是善が師を邸の書斎

三〇 深澤三千男「夕霧二題」「森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、一九九三年）」三五〇頁

三一 川口久雄（校注）『菅家文草 菅家後集』（日本古典文学大系、岩波書店、一九六六年）一〇五頁

三二 訓読は上掲書の一〇五頁〔頭注〕による。

三三 上掲書、一〇七頁

三四 訓読は上掲書の一〇七頁〔頭注〕による。

に招いて、しかるべき教育をさせていたことや、作詩を試していたことは、夕霧教育にも相通じる事柄である。

また、ほかの例として、『紫式部日記』にみえる、惟規を教える父藤原為時の逸話を引用してみよう。為時は『本朝麗藻』に十二首の漢詩が収められるほど優れた文人である^{三五}。

この式部の丞といふ人の、童にて書よみ侍りし時、聞きならひつつ、かの人は遅うよみとり、わするる所をも、あやしきまでぞさどく侍りしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男児にて持たらぬこそ幸なかりけれ」とぞ、常になげかれ侍りし^{三六}。

有名な話であるが、父為時が「式部の丞」（息子惟規）に漢籍の訓読を直接教えていたことが知られる。紫式部もその場に同席し、そばで漢籍を学んでいたが、惟規より理解が早かったという。特にその父の姿は「書に心入れたる親」として示されている。『菅家文草』や『紫式部日記』の例を参照すると、学者である父が子女の教育に熱意を見せるのは珍しいことではない。しかし、物語の中で、息子に蔭位を授けることが可能な太政大臣源氏が、夕霧を大学の学生として学ばせることは、学者の家に相応するほど熱心な源氏の学問重視の態度を窺わせる。

夕霧は父から与えられた低い位階と勉学という試練を乗り越え、実力を備え、自信を持つようになるが、その様子は次の場面に描かれている。

大学に参りたまふ日は、寮門に上達部の御車ども数知らず集ひたり。おほかた世に残りたるあらじと見えたるに、まもなくもてかしづかれて、つくろはれ入りたまへる冠者の君の御さま、げにかかるまじらひにはたへずあてにうつくしげなり。例の、あやしき者どもの立ちまじりつつ来ゐたる座の末をからしと思すぞいことわりなるや。ここにも、またおろしののしる者どもありてめざましけれど、すこしも臆せず読み果てたまひつ。昔おぼえて大学の榮ゆるころなれば、上中下の人、我も我もこの道に心ざし集まれば、いよいよ世の中に、才ありはかばかしき人多くなんありける。文人・擬生などいふなることもよりうちはじめ、すがすがしう果てたまへれば、ひとへに心に入れて、師も弟子もいとどばみましたまふ。（少女③二九〇三〇）

夕霧は位階が低いので、後ろに座が設けられているが、堂々と提示された文章を読み退ける。「すがすがしう果てたまへれば」とあるように、夕霧は寮試に及第し、師弟はますます学問に努力していく姿勢を見せる。夕霧は勉学の当初には心の中で父の厳しい教育方針

三五 佐伯雅子「藤原為時の詩の世界と紫式部」『源氏物語における「漢学」——紫式部の学問的基盤——』（新典社、二〇一〇年）佐伯氏によると、収められた漢詩の数は四番目に多いとされる。

三六 萩谷朴『紫式部日記全注釈』下（角川書店、一九七三年）二九四～二九五頁

を恨めしく思ったこともあるが、父の計画どおりに順を追って勉学することにより、一人前に成長していく。

以上のように源氏の夕霧教育が詳しく描き出されることは、単に「少女」巻において有効なのではなく、物語の他の部分とも繋がっている点から一層注目される。ここで、「漚標」巻の宿曜の予言を想起しておきたい。須磨から戻り、朝廷に復帰して源氏は明石姫君の誕生の知らせを聞いて予言を思い浮かべる。

宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。(漚標②二八五)

宿曜には源氏の「御子三人」の将来が予言され、冷泉帝、のちの明石中宮、そして「中の劣り」と示される息子夕霧の未来が暗示的に述べられていた。物語のなかには夕霧が「太政大臣」になった姿は描かれず、宇治十帖では場面によって「左大臣」と「右大臣」が混用され、夕霧の官職は定かでない。しかし、物語の一貫性のないことを批判する前に、夕霧が「太政大臣」になるという予言は、夕霧が後々今上を輔弼する官僚として最高位まで昇りつめる役目を担うことになるということを強調するものであったと考えたい。源氏は「もはや、その父の超越的な皇統の貴種性にはあずかり得ない」^{三七}夕霧に、学問と実力を備えさせ優秀な大臣に育てるために努めているのであらう。

第三節 省試の場面を中心に

源氏が夕霧を教育する理由は、夕霧に学問の力を付けさせると同時に、人々に学問による人材育成の重要性を披露することにもあった。「少女」巻の冒頭にはそのような源氏の心情が現れている。

四位になしてんと思し、世人もさぞあらんと思へるを、まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからんもなかなか目馴れたることなりと思しとどめつ。(少女③二〇～二二)

右の引用部には通常のような蔭位による叙位はありふれたことであり、それとは異なるものを夕霧の教育に求めている源氏の考えが読み取れる。この部分はこれから展開されていく寮試、省試の場面においても、夕霧の教育が息子教育だけではなく、社会に源氏の学

問尊重という態度を発信していく場にもなっていることと連動している。

グラフィックス

寮試を受けた後、放島の試の形式で行われる省試は夕霧の教育場面の絶頂を成している。歴史書にみえる放島の試の際には、池の中島に学生を一人ずつ船に乗せて、送り出し、詩作させる。放島の試が通常の省試と異なる点は「試験場が官庁を離れた後院や個人の邸宅であることと、天皇が行幸されること」^{三八}であるが、『源氏物語』に描かれている放島の試の背景が源氏の邸で行われることは、源氏の後見する冷泉帝政権の「文化の力」^{三九}を披露することと関連がある。李宇玲氏の指摘によると、放島の試は、「当代の儒教的政治理念をアピールし、冷泉帝によって領導される文治聖代の到来を高らかに宣伝する文化的威儀」^{四〇}である。以下、その具体的な様子を見てみよう。

二月の二十日あまり、朱雀院に行幸あり。花盛りはまだしきほどなれど、三月は故宮の御忌月なり、とくひらけたる桜の色もおもしろければ、院にも御用意ことに繕ひみがかせたまひ、行幸に仕うまつりたまふ上達部、親王たちよりはじめ心づかひしたまへり。人々みな青色に、桜襲を着たまふ。帝は赤色の御衣奉れり。召しありて太政大臣参りたまふ。同じ赤色を着たまへれば、いよいよ一つものとかかやきて見えまがはせたまふ。人々の装束、用意、常に異なり。院もいときよらにねびまさらせたまひて、御さま、用意、なまめきたる方にすすませたまへり。今日はわざとの文人も召さず、ただその才かしこしと聞こえたる学生十人を召す。式部の省の試みの題をなずらへて、御題賜ふ。大殿の太郎君の試み賜りたまふべきゆゑなめり。臆だかき者どもは、ものもおぼえず、繫がぬ舟に乗りて池に離れ出でて、いと術なげなり。日やうやうくだりて、楽の船ども漕ぎまひて、調子ども奏するほどの、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、冠者の君は、かう苦しき道ならでもまじらひ遊びぬべきものをと世の中恨めしうおぼえたまひけり。(少女③七一〜七二)

引用文には風流を堪能している人々を背景に、試験の難問を突破していく夕霧の姿が提示される。夕霧を含む擬文章生たちは「楽の船」が漕ぎ渡る風流の場の一角で、与えられた詩題に合う漢詩を作らねばならない。

『御堂関白記』寛仁二年(一〇一八)十月廿二日条には土御門邸の行幸の際に行われた省試が記されていて、夕霧が受けた放島の試の様子を理解するためによい資料である。

三八 大曾根章介「「放島試」考―官韻について―」『国語と国文学』第五六卷第一二号(東京大学国語国文学会、一九七九年(二)月) 五頁

三九 松岡智之、前掲論文、二九頁

四〇 李宇玲「夕霧の学問―字の儀式から放島試へ―」『古代宮廷文学論―中日文化交流史の視点から―』(勉強出版、二〇一一年) 一九〇頁

大臣召_二監護者少将師経・定良等_一、題目給_二師経_一、擬文章生給_二衝重_一、文台未_レ立前、中島監護者経_二中島橋等_一着_二座上_一、下_二題目_一、此間率_二舟橋_一、不_レ令通_二三人_一。引
 (大臣、監護者の少将(藤原)師経、(源)定良等を召し、題目を師経に給ふ。擬文章生に衝重を給ふ。文台未だ立てざる前、中島の監護者、中島の橋等を経、座上に着し、題目を下す。此の間、舟橋を引き人を通はしめず_{四二}。)

右の引用部から読み取れるように、当時、放島の試に臨む擬文章生たちは舟橋が引かれて中島から出られない孤立した状況のなかで、与えられた題目に従って漢詩を作っている。音楽の遊びを楽しむ人々とは別に、与えられた韻に合わせて漢詩を作る課題を抱えた夕霧は、学問をしなければならぬ自分の状況を恨めしく思う。しかし、夕霧は勉強した成果を抱えて試験に臨み、省試に見事に合格する。

関連して『江談抄』第四卷第九十六話には、橘倚平の省試に関わる言談が取り上げられているが_{四三}、夕霧の受けた省試の様子を橘倚平の逸話を通じて考察してみよう。

えうちひせ

瑶池偷かに感ず仙遊の趣、また賞す林宗の李膺を伴へるを

橘倚平

この詩は省試の詩なり。題は「飛葉舟と共に軽し」なり。澄・陵・氷・膺を勒す。倚平、_{とらふ}登省の事を祈るために、毎日夜々清水寺に参詣する間、宝前に夢想あり。示して云

はく、「今度の登省は、李膺煩ひなるべし」と云々。その事さらにもつて心を得ざる間、_{ろくめん}勒韻の中に膺の字有り。その時、夢想の心を得たり。作、官韻に叶へり。「李膺」と作

らざる輩は登省せず。よりて倚平は及第すと云々。これすなはち観音の靈験なり_{四四}。_{ともがら}

その内容は橘倚平が省試に合格するために、清水寺の観音に祈願した結果、夢に韻字を告知され、省試に合格したことである。大曾根章介氏の指摘しているように、この詩題には『後漢書』郭太(泰)伝の逸事_{四五}が踏まえられているが、「省試の詩題からこの故事を

_{四二} 東京大学史料編纂所(編纂)『御堂関白記』下(大日本古記録、岩波書店、一九七七年) 一八一〜一八二頁

_{四三} 訓読は山中裕(編)『御堂関白記全註釈 寛仁二年下』(高科書店、一九九一年)三三頁による。引用部の分担注釈者は池田尚隆氏である。

_{四四} 倚平の受けた省試は、康保二年(九六五年)十月に行われた。『西宮記』「臨時一(乙)諸宣旨」の裏書、廿六日から廿九日条に倚平の及第が記されている。

_{四五} 山根對助・後藤昭雄(校注)『江談抄』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年)一五四頁の訓読文。

_{四六} 「郭太字林宗、太原界休人也。家世貧賤。早孤、母欲使給事縣廷。林宗曰、「大丈夫焉能處

想起するのは難事であり」^{四六}、橘倚平の言談からは、省試の時に出題される漢詩の韻字がかなり難解であったことや場合によっては落第する人も少なくなかった状況が読み取れる。『江談抄』の橘倚平の逸話のように、省試の厳しさは『源氏物語』にも反映されている。次に掲げるところの傍線部から確認できるように、夕霧は省試に合格し進士になるが、及第した人はわずか三人であり、勉強した夕霧であつてこそ合格することができたのに違いない。

かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。年積もれるかしこき子どもを選らせたまひしかど及第の人わづかに三人なんありける。秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ。かの人の御事、忘るる世なけれど、大臣の切にまもりきこえたまふもつらければ、わりなくてなども対面したまはず。御消息ばかり、さりぬべき便りに聞こえたまひて、かたみに心苦しき御仲なり。

(少女③七六)

低い位からの出発であつたが、夕霧は比較的短い期間にしかるべき学問の教養を備えたのである。これは源氏の教育の力によるものであり、この夕霧の教育場面を通じて、物語は学問を重視する父源氏の姿とそれに従つて漢学の力を身に付けていく夕霧の姿を浮かび上がらせる。

おわりに

斗筭之役乎？」。遂辭。就成阜屈伯彦學、三年業畢、博通墳籍。善談論、美音制。乃遊於洛陽。始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善。於是名震京師。後歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩。林宗唯與李膺同舟濟。衆賓望之、以為神仙焉。」(范曄撰・李賢等注『後漢書』第五八卷・郭符許列伝(中華書局、一九六五年、二二二五頁))

(郭太、字は林宗、太原界休の人なり。家は世々貧賤にして、早くして孤なれば、母は県廷に給事せしめんと欲す。林宗曰わく、「大丈夫、焉んぞ能く斗筭の役に処らん乎」。遂に辞す。成阜の屈伯彦に就きて学び、三年にして業畢え、博く墳籍に通ず。談論に善く、音制に美し。乃ち洛陽に遊ぶ。始めて河南尹の李膺に見ゆるや、膺は大いに之を奇とし、遂に相い友とし善し。是に於いて名は京師に震う。後に郷里に帰らんとするに、衣冠諸儒の送りて河の上に至るもの、車は数千兩。林宗は唯だ李膺と舟を同じくして済る。衆賓は之を望み、以て神仙と為す。) 吉川忠夫(訓注)『後漢書』第八冊列伝六(岩波書店、二〇〇四年)二二九頁。

以上、本文を追って見てきたように、「少女」巻には元服と叙位、字をつける儀式、大学入学と曹司にての勉強、寮試の準備、放島の試の省試など、一連の教育の過程が詳細に描かれていた。また、夕霧の大学入学に関しては祖母大宮の反対にも関わらず、自己の主張を貫き、子の将来を導いている源氏の姿も浮き彫りにされていた。そこから窺えるのは、子の教育において、すべての過程に細心の注意を注いでいる父親像である。物語がこのように源氏の教育を描いていることは、父と子の関係を結んでいこうとする源氏の努力を垣間見せる。『源氏物語』は血の繋がりで父と子の緊密さを表すのではなく、源氏の夕霧教育の場面のように、徹底した教育の過程を描くことで、父と子の関係に光を当てる。これらは先蹤の『うつほ物語』において学生の典型として提示されている藤英の例とも大きく異なり、『源氏物語』が教育する父親像の造型にかなり意識的であったことを示す。学問を重視する源氏の態度には子女教育に励む平安朝の父親像が重ねられるが、物語は当時の儀式を反映し、歴史性を確保した上、さらに父と子がお互いを父と子として認識していく過程を詳細に書き記す。源氏には菅原道真の父是善の影が響き、夕霧教育は、冷泉朝を支える夕霧の官人、ひいては将来「大臣」になる役割も考慮に入れた物語の構想と密接に関わっていることが明らかである。輔弼のためには学問の素養と実務能力を共に揃える必要があり、徹底された教育には、夕霧の妹に当たる明石の姫君が中宮になる将来までが考慮されているのである。物語は源氏が夕霧の教育に努めることを通じて、子女たちによる将来を準備している父の姿を描写し、予言の実現に向けて語られていく物語の自然な流れを作っている。

第三章 冷泉帝における学問

はじめに

冷泉帝は光源氏と藤壺の間に生まれ、桐壺帝の子として帝位に上り、源氏の栄華のよりどころとなる人物であり、光源氏の栄華を描く物語の展開において、欠かせない中心人物である。それにも関わらず、冷泉帝に当てられた物語の描写は極めて少なく、それは冷泉帝を取り上げる際の難点である^一。このような冷泉帝の人物像を捉える時、従来の研究では、彼の「顔」が注目されてきた。

- ・ 同じ光にてさし出でたまへれば、瑕なき玉と思ほしかしづくに（紅葉賀①三二八）
- ・ いかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれど、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしさのそら恐ろしうおぼえたまふなりけり。（賢木②一一六）

藤井貞和氏は、冷泉帝の顔を修飾する二つの表現、桐壺帝からの「瑕なき玉」と藤壺からの「玉の瑕」が対照的に響き合っていることを指摘し、冷泉帝に付与されている二つの神話性について読み解く^二。それを踏まえた上、河添房江氏は「紅葉賀」巻の「同じ光」という喩えに着目し、その表現は「光源氏の王権譚の成就に緊密に交わる」^三ものである一方、「若宮の顔立ちにまざまざと犯しが刻印されていること」^四を表わすと指摘する。立石和弘氏は「帝王としての理想性を象る相の裏には、常にこの罪と犯しを指し示す相が張り付いているのだと言わねばなるまい」^五と指摘し、冷泉帝の顔から「供儀」としての属性を読み取る。さらに、池田節子氏は「正式に親子・兄弟などの血縁関係にあると認められている人々については、「似ている」とはあまり記さないようだ」^六と指摘し、源氏と似ているこ

一 土方洋一「空虚なる主体・冷泉院」〔森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、一九九三年）〕

二 藤井貞和「神話の論理と物語の論理」『源氏物語の始原と現在』（砂子屋書房、一九九〇年）

一四三～一五五頁

三 河添房江「光の喩」『源氏物語の喩と王権』（有精堂、一九九二年）一六〇頁

四 河添房江、上掲書、一六〇頁

五 立石和弘「冷泉帝の顔―供儀と玉鬘の視線から」『中古文学』第五七号（中古文学会、一九九六年五月）、一二二頁

六 池田節子「似ている」人々」〔河添房江（編）『家と血のイリュージョン』（叢書 想像する平安文学、勉誠出版、二〇〇一年）〕一四七頁

とが繰り返し提示されることによってあえて「血縁の保証」^七を書き込む物語の仕組みについて言及する。同様に「顔」に注目して、後藤祥子氏は「行幸」巻の冷泉帝は、王威盛んなりし時代の、進取性・行動力に富み、剛毅勇壮にして果斷な英雄の像を結ぶ。玉鬘ならずとも魅力的ではなからうか。^八と冷泉帝の横顔から英雄の姿を読み取る。以上の先行研究の指摘のように、冷泉帝の顔が源氏に似ていることは、冷泉帝が源氏の子であることを自然な形で提示するための物語の仕組みであることが理解される。

一方、冷泉帝が夜居の僧都の密奏によって出生の秘密を知る過程が描かれる「薄雲」巻で、冷泉帝はようやく自分の顔が父としての源氏に似ていることに気付くようになるが、実父のことを認識していく過程において、冷泉帝の行動はどのように描かれているのか。物語は冷泉帝が高貴な血を引き継いでいることを、「顔」の表現によって確保した上で、源氏と冷泉帝の関係作りを新たに提示していると思われる。その時、外貌ではなく、冷泉帝の内面を形成していた学問の力について考えてみたい。

第一節 古注釈の検討

「薄雲」巻には秘密を告知され、自ら書物を調べた結果の判断によって実父光源氏と対話する冷泉帝の姿が窺える。その後、冷泉帝は源氏に譲位したいと仄めかし、源氏を父として待遇しようとする。これによって源氏との関係を父と子として結び直し、藤壺の亡き後も源氏の後見を受け、安定した政治を行っていくことが可能になった。冷泉帝が譲位を決心するまでの過程は、どのように描かれているのか。まず、母藤壺の死後、夜居の僧都によって源氏が父であることが知らされ、冷泉帝が典籍を調べ始める場面を見てみよう。

上は、王命婦にくはしきことは問はまほしう思しめせど、今さらに、しか忍びたまひけむこと知りにけり、とかの人にも思はれじ、ただ大臣にいかでほめかし問ひきこえて、さきさきのかかることの例はありけりやと聞かむ、とぞ思せど、さらについでなければ、①いよいよ御学問をせさせたまひつつ②さまざまの書どもを御覧するに、③唐土には、顕れても忍びても乱りがはしきこといと多かりけり。日本には、さらに御覧じうところなし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむことをば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、さらに親王にもなり、位にも即きたまひつるも、あまたの例ありけり。人柄のかしききに事よせて、さもや譲りきこえまし、などよろづにぞ思しける。(薄雲②四五五〜四五六)

^七 池田節子、上掲書、一四七頁

^八 後藤祥子「冷泉帝の横顔」『源氏物語の史的空間』（東京大学出版会、一九八六年）九二頁

後見として頼りにしていた源氏が自分の父であることを知った冷泉帝は、歴史の事例を調べ始める。誰にも聞くことができないということは、事柄自体が嚴重な秘密であり、誰にも腹を割って相談することができないという深刻なことであったからであるが、このような状況で、これから取るべき行動の答えを典籍に求める姿として造型されている点は、どのような意味を持っているのか。まず、③の部分「唐土には、頭れても忍びても乱りはしきこといと多かりけり」について古注釈では次のような説明が施されている。

『河海抄』「もろこしにはあらはれてもしのびてもみだりかはしき事おほかり」秦始皇は莊襄王の子として位に即といへども、実は始皇の母太后嬪毒、呂不韋といふ臣下に密通して所生〔云々見史記伝〕^九

『細流抄』「もろこしにはあらはれてもしのびても」秦始皇の事。河海に見えたり。いとおほかりとかける。此ほかにも例あるべし。私案之、晋元帝は牛金といへる人の子也。さるほどに、秦始皇を只不韋が子たるによりて呂秦といひ、晋元帝は牛金の子たるによりて牛晋といへり^{一〇}。

『弄花抄』「もろこしにはあらはれても忍びても」秦始皇は楚莊襄王の子として即位す。実に臣下〔呂不韋〕に通して所生云々。史記^{一一}。

『孟津抄』「もろこしにはあらはれてもしのびてもみだりかはしきこととおほかり」秦始皇は莊襄王の子として位に即すといへども、実は始皇の母太后嬪毒、呂不韋といふ臣下密通して所生〔云々見史記伝〕。又鶴林玉露云、牛晋—牛金晋武帝司馬氏—あまたあるべきとはこの事也^{一二}。

『河海抄』は『史記』の始皇帝の実父が呂不韋であったという故事を取り上げている。また、『細流抄』は『河海抄』を受け、補足して、晋の元帝が牛金の子であったという指摘も付け加える。『孟津抄』も内容は同じである。ほかに、『萬水一露』は『河海抄』を並べて引用している^{一三}。『岷江入楚』も『河海抄』と『細流抄』の説を補足している^{一四}。『孟津抄』の挙げる『鶴林玉露』は羅大経の著述したもので、南宋の十三世紀に成立したとされるので、いちおう『源氏物語』とは関係ない。『鶴林玉露』に収められる前の段階において、説話の形で元帝の父をめぐる話が広まっていたと考えることもできるが、それ自体が

九 玉上琢彌（編）『河海抄』（角川書店、一九六八年）三五九～三六〇頁。□は割注。

一〇 伊井春樹（編）『細流抄 内閣文庫本』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八〇年）一七〇頁

一一 伊井春樹（編）『弄花抄』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八三年）一〇二～一〇三頁。

一二 野村精一（編）『孟津抄』上（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八〇年）四三二頁

一三 伊井春樹（編）『萬水一露』第二卷（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八九年）二七八頁

一四 中田武司（編）『岷江入楚』第二卷（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八一年）三七〇頁

史実であるかということについては疑う意見もあり^{一五}、真偽は分からない。ただ、右に提示した諸注釈は「唐土には、頭れても忍びても乱りがはしきこといと多かりけり」の「多かりけり」の説明に熱心であったことが窺える。

また、清水好子氏は「源氏物語は一見多くの恋物語の連鎖のものという形をなしているが、それらを括る大きな枠には（中略）古代からの伝承が共通してもつ叙事詩風なスケールの大きさがあある」^{一六}と『史記』の影響を指摘している。その通り、始皇帝の故事は『源氏物語』の主題にまで関わるもので、作者の物語創作の姿勢を浮かび上がらせるものである。さらに、田中隆昭氏は『源氏物語』における『史記』の影響を構造的に分析する中で、源氏と藤壺の密通は始皇帝の故事の影響を受けていることを認めた上、その他、「燕召公世家」、「蘇秦列伝」、「管蔡世家」、「陳杞世家」、「春申君列伝」の記事などにも触れている^{一七}。たいへん緻密な例証であり、『源氏物語』と『史記』の関係を研究するにおいてよい導きである。これらの先行研究の蓄積は、中国の『史書』における皇統の乱れの例を提示し、それが『源氏物語』に与えた影響を明らかにしている点で示唆的である。

一方、漢才の側面から『源氏物語』と『史記』の関係を捉えている研究もある。岡部明日香氏は光源氏が冷泉帝の後見を勤めることに注目し、「須磨」、「明石」、「賢木」巻の表現について古注釈で指摘されてきた『史記』「魯周公世家」との関連を分析した上、令泉帝を輔弼する源氏像に『蒙求』の「周公握髮」の影響を考察する。「光源氏の政治的行為は直接には語られていないが、漢才を重視して人材を登用するという形では、しばしば物語の中で描かれる。しかもこれらは他の氏族、撰家からは異様とさえ見られ、光源氏独自のものとされる点が特徴的である。」^{一八}と述べる。冷泉朝の「漢才の重視」^{一九}という点は本論の立場と重なるが、岡部氏は光源氏の役割に注目している。本論では、冷泉帝に重点を置き、典籍を調べる場面が描かれる理由について探ることにする。

^{一五} 王瑞来（点校）『鶴林玉露』（中華書局、一九八三年、九七頁）には『晋書』第六卷「元帝紀」
「初、玄石圖有「牛繼馬後」、故宣帝深忌牛氏、遂爲二楹、共一口、以貯酒焉、帝先飲佳者、
而以毒酒鳩其將牛金。而恭王妃夏侯氏竟通小吏牛氏而生元帝、亦有符云。」を根拠に「元帝乃
牛金之子 此誤。」と指摘されている。この説によると、牛金は毒殺されたので、元帝の実父
は牛金であるはずがないが、妃の夏侯氏の密通の相手は他の牛氏であったため、元帝の実父が
牛の姓を持っていたことになる。

^{一六} 清水好子『源氏物語論』（塙書房、一九六六年）二六五頁

^{一七} 田中隆昭「源氏物語と史記」『源氏物語 歴史と虚構』（勉誠社、一九九三年）二五九～二六〇頁

^{一八} 岡部明日香「光源氏と周公旦」『和漢比較文学』第一八号（和漢比較文学会、一九九七年二月）五頁

^{一九} 岡部明日香、上掲論文、九頁

第二節 冷泉帝の勉学の姿

古注釈で①の部分「いよいよ御学問をせさせたまひつつ」については、以下のような註釈が施されている。

『細流抄』「いよ／＼御がくもん」博学ならではしりがたき事と也^{二〇}。

『孟津抄』「いよ／＼御がくもんせさせ給つゝ」叡慮也。人不通古今、馬牛而襟裾。韓退之^{二一}。

『岷江入楚』「いよ／＼御がくもん」物をしらざる物の位ある馬牛の錦などをきたるにたとふる也。或御説、人不^レ通^セ古今^二、馬牛ニメ而錦―裾ス聞書同。「秘」博学ならでは知がたき事と也。此段殊勝学者何付心也^{二三}。

「いよいよ御学問をせさせたまひつつ」という言葉について、『細流抄』が「博学ならではしりがたき事と也」と指摘しているように、「ふみども」を調べる冷泉帝の姿には、すでに基本的な知識を身に付けていることが想定されている。冷泉帝は疑問に接した時、新たな判断を下すべき状況に置かれて、すぐ関連した資料を調べる段階の学問の力が備えられていたことが考えられる。同じことを『孟津抄』は「叡慮」、『岷江入楚』秘説は「殊勝学者何付心也」と指摘している。

さらに『孟津抄』、『岷江入楚』は中国の詩人韓退之（七六八～八二四）（韓愈）の古詩「符讀書城南」^{二四}から「人不通古今、馬牛而襟裾」の詩句を引用し、学びの重要性について付け加えている。この古詩は韓愈が七／＼八歳になる息子符に与えた詩であり、人生における勉学の重要性を強調する内容である。その中で、注釈書に引用された部分「人として古今に通ぜざれば、馬牛にして襟裾^{きんきょ}」は、古今に通じていなければ、馬牛が衣服を着ているに等しいという比喻である。この部分は『源氏物語』本文と直接関わらないが、諸注釈は広い意味で勉学の大切さを韓愈の詩を借りて伝えていると判断される。

ここで冷泉帝の「博学」の様子が圧縮的に表現されているが、それは具体的にどのような学問であつたろうか。

冷泉帝の学問における②の部分「さまざまのふみ（書）どもを御覧するに」について古注釈には具体的な指摘が見えないが、本論ではこの表現に、冷泉帝が自力で数多くの文献を調べたことが表現され、冷泉帝が問題に直面した時、膨大な資料の中で適切な典籍を調

二〇 前掲書、伊井春樹（編）『細流抄 内閣文庫本』一七〇頁

二一 前掲書、野村精一（編）『孟津抄』上、四三一頁

二二 前掲書、中田武司（編）『岷江入楚』第二卷、三七〇頁

二三 続国訳漢文大成『韓退之詩集』下卷（文学部第八卷、国民文庫刊行会、一九二九年）一／＼九頁

べる学力があつたことを示すと指摘したい。

「薄雲」巻において冷泉帝は十四歳として設定されているが、若い年齢に即位した帝の例として醍醐天皇の場合を参照することができる。歴史学の立場から河内祥輔氏は『寛平御遺誠』のもつ「父が息子を指導、教育しようとして書いたもの」^{二四}としての性格に注目する。本論では『源氏物語』の読解のために、醍醐天皇に与えられた宇多天皇の『寛平御遺誠』を引用してみよう。

朕聞かく、旦^{あかつき}ならざるに衣を求むるの勤は、日ごとに服を整へ、盥嗽^{くわんぞう}して神を拝す。また近くに公卿を喚びて、議^{あは}し治すことあれば、治術を訪ふ。夕には本の座^{もと}に還りて、侍臣を招き召して、六経の疑はしきことを求む。聖哲の君は、必ずしも補佐によりてもて事を治む。華夷寡小の人、何ぞ賢士なからむ。(中略)事、疑を持つことあれば、必ずしも推し量りてもて決すべしときけり。新君慎め^{二五}。

「聖哲の君」には、六経、つまり、儒学の經典などの学問に励み、經典に書かれている意味を徹底的に追窮することが戒められている。また、『寛平御遺誠』逸文(『明文抄』帝道部上所収)には『群書治要』を誦習することが訓戒されている。

天子雖^レ不^レ窮^二經史百家^一、而有^二何所^レ恨乎。唯群書治要早加^二誦習^一。勿^レ就^二雜文^一以消^中日月^上耳^{二六}。

(天子、經史百家を窮めずと雖も、而も何ぞ恨む所あらんや。唯、群書治要を早く誦習に加ふるべし。雜文に就きて以て日月を消す勿かれ。)

取り立てて『群書治要』という特定の書物を勉強するように、というのが特徴的である。合わせて醍醐天皇の教育がどのように行われたかについて『日本紀略』を紐解いてみよう。宇多院の意思通り、醍醐天皇の読書始^{ふみはじめ}には『群書治要』が使われて、帝王学の基本としての『群書治要』の位置付けが確認される。

^{二四} 河内祥輔「学芸と天皇」(永原慶二(編集代表)『統制的諸機能と天皇観』(講座・前近代の天皇 第四巻、青木書店、一九九五年)一三六頁。他に、天皇の学問については、五味文彦「天皇と学問・芸能」(網野善彦(外編)『表徴と芸能』(岩波講座 天皇と王権を考える・第六巻、岩波書店、二〇〇三年)が大きな参考になる。『寛平御遺誠』の性格に関して、筆者は基本的に河内氏、五味氏と同様な立場にいるが、両論文には中世の事例が考察されている点で、平安時代の文学を考察する本論とは扱う範囲が多少異なる。

^{二五} 大曾根章介(校注)「寛平御遺誠」『古代政治社会思想』(日本思想大系、岩波書店、一九七九年)一〇八頁の訓読文。

^{二六} 上掲書、大曾根章介(校注)「寛平御遺誠」一一一頁、山内洋一郎(編)『本邦類書』玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』(汲古書店、二〇一二年)二〇九頁(104上)。

昌泰元年二月廿八日戊辰。式部大輔紀長谷雄朝臣侍^二清涼殿^一。以^二群書治要^一奉^レ授^二天皇^一。^{二七}

(昌泰元年二月二十八日、戊辰。式部大輔紀長谷雄朝臣、清涼殿に侍ふ。群書治要を以つて(醍醐)天皇に授け奉る。)

『群書治要』五〇卷は、唐の太宗代に編纂されたもので、日本には奈良時代か平安初期頃に伝えられたと推定されている。『群書治要』は「古来の群書から政治の要諦を論じる文章を抄出、輯録したもの」^{二八}であり、その構成は、金沢文庫の目録によれば、一〇卷ごとに一裏に分たれ、首の一裏一〇卷に経書、次の二裏二〇卷に史書、尾の二裏二〇卷に子書が、計六八種収められているとされる^{二九}。多くの類書の場合、文章の核心になる文が集められ、分類されていて勉強に効率的に使えるが、引用された各文脈を捉えにくいという短所がある。一方、『群書治要』は重要な文章を集めた類聚の形を取っていることが特徴で、各書物から特定の部分が文章の形で取られている。関連して、大淵貴之氏は『群書治要』の「検索の効能を念頭にしたものではない、多種多様な文献を体系的、能率的に収録する目的での類聚体」^{三〇}としての側面に注目し、『群書治要』のもつ網羅性を指摘して、本論にも示唆に富む所が多くある。

『群書治要』は、中国では宋代にすでに遺失されたが、日本に写本が残されていたので、それを用いて四部叢刊にも収められるようになった背景があり、日本での享受が窺える書物である。平安時代に『群書治要』が読まれた例としては、『御堂関白記』寛弘元年八月二十日に藤原道長が一条天皇に『群書治要』を献上した記事がある。

廿日、壬申、内奉群書治要十帖五十卷、罷出。

(廿日、壬申、内に群書治要十帖五十卷を奉る。罷り出づ。)

右は『群書治要』が治世の参考資料として活用されていた例であると言える。「薄雲」巻の考察に戻るが、冷泉帝の学問の段階を想像してみると、冷泉帝が出生の秘密を告知され、すぐに典籍を調べる姿として描かれることは、冷泉帝が『群書治要』のような書物はすでに学び、儒学の基本的教養を持っていたことを頭わにすると考えられる。『群書治要』の第二卷第十一、第十二には『史記』が含まれているが、冷泉帝は『群書治要』などの類聚に集成されている知識を得る段階を超えて、もはや「薄雲」巻の視点では原典に触れ、『史記』

^{二七} 国史大系編修会(編)『日本紀略』第一一卷(吉川弘文館、一九六五年)二頁

^{二八} 尾崎康「群書治要とその現存本」『斯道文庫論集』第二五卷(慶応義塾大学付属研究所斯道文庫、一九九一年三月)一二二頁

^{二九} 尾崎康、上掲論文、一二四頁

^{三〇} 大淵貴之「唐創業期の「類書」概念―『芸文類聚』と『群書治要』を手がかりとして」『中国文学論集』第三五号(九州大学中国文学会、二〇〇六年)一一頁

『漢書』『後漢書』『春秋左氏伝』などを調べる能力を身に付けていたことが推定されるように描かれていると思われる。

このような冷泉帝の造型は、『源氏物語』のほかの男性の場合と対照的である。まず、源氏の場合、桐壺帝の指導によって学問を習ったことが、「絵合」巻の会話に表れている。

(例一) (源氏) 「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに、すこしも才などつきぬべくや御覧じけむ、院のたまはせしやう、才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるはいと難きものなん。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちにこの道な深く習ひそと諫めさせたまひて、本才のかたがたのもの教へさせたまひしに、拙きこともなく、またとりたててこのことと心得ることもはべらざりき」

(絵合②三八八〜三八九)

引用部から、桐壺帝の教育方針は、幼い頃から学問を教えるが、無理に学問を押しつけることはしなかったことが窺える。

また、夕霧の場合、その父源氏によって学問の素養が備えられ、大学に入学することになる。その勉学の過程は「少女」巻に書かれている通り、源氏の指揮によって綿密に行われていた。

(例二) つと籠りゐたまひて、いぶせきままに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある、と思ひきこえたまへど、おほかたの人柄まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、いとよく念じて、いかでさるべき書どもとく読み果てて、まじらひもし、世にも出でたらんと思ひて、ただ四五月のうちに、史記などいふ書は読み果てたまひてけり。

(少女③二七〜二八)

夕霧は寮試に臨み、勉学するが、そのような状況を押しつけた父を厳しいと考えることもあった。しかし、夕霧は苦しい思いをしながらも、『史記』を含め、読むべき「ふみ(書)ども」を読み果てた。その結果、夕霧は大学に見事に合格するが、冷泉帝を、夕霧の姿に照らし合わせてみると、冷泉帝はずいぶん大人しく行動していることが取り立てられる。さらに、夕霧の子供たちの場合にも、男の子には「ふみ(文)」を読ませることが語られている。次の場面は、落葉の宮(女二宮)の母一条御息所の手紙を隠した雲居雁が、夕霧の態度からものはや手紙のことは忘れ、子供たちの養育に忙しく動くという場面である。

(例三) 女は、かく求めむとも思ひたまへらぬをぞ、げに懸想なき御文なりけりと心に

も入れねば、君達のあわて遊びあひて、雛つくり拾ひ据ゑて遊びたまふ、文読み手習など、さまざまにいとあわたたし、小さき児這ひかかり引きしろへば、取りし文のことも思ひ出でたまはず。(夕霧④四三〇)

娘には雛遊びをさせ、息子には「ふみ(文)」を読ませ、手習をさせる。また、その隣には幼児が這っているという慌ただしい生活の断面が書き込まれている。ここで読み取れるのは、ある程度成長した男の子に「ふみ(文)」を読ませているという生活の中における教育であり、幼い頃には父母の監督下で、本に触れさせるという教育が行われていたことが考えられる。

以上の三つの例に比べてみると、冷泉帝の場合は、父母ではなく、自らの力で学問に熱中する姿が浮き彫りにされているのである。それはもはや源氏の幼い時代(例一)や大学に入学する前の夕霧(例二)、夕霧の子供たち(例三)で見えたような基本的な段階はすでに済ませたことを意味し、物語は一人で典籍を調べる冷泉帝を描くことによって、判断力を備えている冷泉帝の「博学」を明らかにしているのである。

典籍を調べる冷泉帝の態度は、例えば、唐太宗の『帝範』「序」にも通じる姿勢を示していると思われる。

自軒昊已降、迄至周隋、經天緯地之君、纂業承基之主、懍興亡治亂、其道焉。所以披鏡前蹤、博採史籍、聚其要言、以為近誠云爾。

(軒皇より已降、周隋に至るまで、天を經し地を緯するの君、業を纂ぎ基を承くるの主、興亡治亂その道懍焉たり。所以に前蹤に披き鏡み、博く史籍を採り、その要言を聚め、以て近誠と為すと爾云三二。)

引用文には広く史籍を読書し、学ぶべきであるということが訓戒されている。『帝範』は唐太宗が皇太子晋王に授けたもので、父が子を教育する性格を持っている。日本においては、『将門記』にその引用が見えるなど、早い時期からの受容が考えられる三三。

また、藤原行成の『権記』長保二年(一〇〇〇)六月二十日条に、一条天皇について「好文の賢皇」という賞賛が見える三三。本論では一条天皇が唐太宗の治世を理想と考えていたことが窺える証左としてこの記事に注目する。

三二 麓保孝『帝範・臣軌』(中国古典新書、明德出版社、一九八四年)一九頁

三三 矢作武「漢籍と「軍語り」——軍記ものの形成のプロセス——」『国文学 解釈と鑑賞』第五三巻第一三三号(至文堂、一九八八年二月)。矢作氏は、例えば、『将門記』の末部の将門の死の場面「漢書曰、朱雲者惡人也。昔、朱雲請尚方之劍、殺人之頸也。」(昔、朱雲は尚方の劍を請ひ、人の頸を殺(と)るなり。)の部分は『帝範』「納諫篇」の「折檻壞疎」の注「漢書云、朱雲字子遊、魯人。」の引用であると指摘する。

三三 倉本一宏「はじめに」『一条天皇』(人物叢書、吉川弘文館、二〇〇三年)五頁

主上寛仁之君、天曆以後、好文賢皇也。万機餘閑、只廻 叡慮、所期澄清也。所

庶幾者、漢文帝・唐太宗之舊跡也^{三四}。

(主上、寛仁の君にして、天曆以後、好文の賢皇なり。万機の余閑、只、叡慮を廻らし、期する所は、澄清なり。庶幾する所は、漢文帝・唐太宗の旧跡なり。)

『源氏物語』が書かれた時代、一条天皇は漢文帝や唐太宗を規範としていたことが確認される。物語の冷泉帝は当時の一条天皇のように、「ふみ(書)ども」から得られた幅広い知識を持ち、それに基づいて行動する人物として描かれていると言えるだろう。

以上、考察してきたように、「薄雲」巻の場面は、冷泉帝の理想性を「顔」よりも、学問によって培われた素養に基づいている。言い換えれば、物語は血の論理よりも、文化の力を強調しているように思われてならない。冷泉帝の理想性は、血の繋がりに神聖性を付与していた歴史の流れと必ずしも一致するのではない。服藤早苗氏によると、天皇の即位には伊勢神宮の参拝が伴うもので、幼帝の場合、その正統性を主張するために、山陵参りが行われたという^{三五}。服藤氏は歴史の例を検討しているので、『源氏物語』については言及していないが、歴史の例に照らし合わせてみて、冷泉帝の即位は、幼帝であるにも関わらず、極めて簡単に言及されるのが目に付く。冷泉は十一歳で帝位にのぼるが、関連する叙述は「同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、太后思しあわてたり。」(濡標②二八二)と、突然の出来事として短く語られている。物語は冷泉が帝位を受け継ぐことよりも、帝位についてからの姿に焦点を当てていると考えられる所以である。文化の力を全面に押し出した所に『源氏物語』創作の意識が働いているのであろう。

第三節 夜居の僧都との対面

「薄雲」巻において冷泉帝が「ふみ(書)ども」を読む場面を中心に考察を加えてきた。一方、夜居の僧都に接する帝の姿にも注目してみたい。

静かなる暁に、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬるほどに、古代にうちしはぶきつつ世の中のことども奏したまふついでに、(僧都)「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終はりはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしと思しめさむ」とばかり奏しきして、えうち

^{三四} 続群書類従完成会『権記』一(史料纂集、一九七八年)二二二頁

^{三五} 服藤早苗「山陵祭祀より見た家の成立過程―天皇家の成立をめぐる―」『日本史研究』第三〇二号(日本史研究会、一九八七年一〇月)二六―二八頁

出でぬことあり。上、何ごとならむ、この世に恨み残るべく思ふことやあらむ、法師は聖といへども、あるまじき横さまのそねみ深く、うたてあるものを、と思して、(帝)「いはけなかりし時より隔て思ふことなきを、そこにはかく忍び残されたることありけるをなむ、つらく思ひぬる」とのたまはすれば、(僧都)「あなかしこ。さらに仏のいさめ守りたまふ真言の深き道をだに、隠しとどむることなく弘め仕うまつりはべり。まして心に隔あること、何ごとにかはべらむ。(後略)」(薄雲②四四九〜四五〇)

夜居の僧都が冷泉帝に秘密を奏上する場面は、緊張感のある筆致で描かれている。場面の分析の前に、まず夜居の僧都の立場について考えてみよう。『源氏物語』より後の時代に成立したが、宮中の代々の有識故実が綴られている『禁秘抄』には「護持僧」に関する項目が見える^{三六}。

「御持僧事」於^テ僧侶^ニ無雙ノ精撰也。古ハ不^レ過^ニ三人^ニ。次第^ニ加増^{シテ}及^フ六七人^ニ。^一。(僧侶に於いて無雙の精撰なり。古は三人に過ぎず。次第に加増して六七人に及ぶ。)

『禁秘抄』によると、護持僧は僧の中でも優れていて選ばれた人が勤める職務である。『源氏物語』の夜居の僧都はしかるべき仏教の知識を持ち、その学問の優れさによって選ばれた人で、朝廷を支える力のある人として設定されているのである。

先行研究においては、夜居の僧都の準拠として、藤原道長の姉東三条院詮子の護持僧を勤めた、大僧正観修の例が提示される^{三七}。道長に信頼を受け、宮廷及び藤原氏の法会や修法に携わり、淨妙寺の別当になった観修の例を重ねて『源氏物語』を読むことは、物語の解釈の幅を広げるために有効である。しかし、本論文では僧都その人物より、僧都に接する帝の態度に光を当てたい。

静かな暁に何かを言い出そうとした僧都は、伝えたいことがあると言いながらも、なかなか話の核心には迫ることができず、そのまま退出しようとする。冷泉帝は帰ろうとする僧都を留め、僧都の話を請う。冷泉帝は真言の深い道理について教えをもらう立場であることを強調し、へりくだって教えを求めるのである。

平安時代の歴史的状況を考えてみると、いくら地位の高い僧都であっても仏法と関わらない事柄を帝に奏することは容易なことではなかったはずである。同様に物語においても夜居の僧都が帝に秘密を告げることは普通のことではない。物語は僧都の迷いを描き、話を請う帝の姿を書き留めることによって、違和感を消し、物語に事実性を付与している。

室町時代に成立した『源氏物語』の梗概書『源氏小鏡』は、「薄雲」巻の夜居の僧都につ

^{三六} 飯沼清子「夜居僧都小論―密奏を起点として」『王朝文学史研究会(編)『王朝文学史稿』第九号(一九八一年一〇月)』三〇頁

^{三七} 中哲裕「藤壺の宮夜居の僧都と観修」『富山県立大学紀要』第六号(富山県立大学、一九九六年三月)

いて、次のように説明している。

又このまきに、あめかした、さとししけく、月日のけしき、くものたゝすまるまでも、ふしきなることも、ありしほとに、おほやけも、おほしめしなけかせ給ひて、御いのりともありしに、この女いんの御おちにて、おはしましゝそうつの、おほやけの御ちそうにて、よゐにまいり給ひしか、人きかぬまに 三八

引用文には夜居の僧都が藤壺の「御おち」（御伯父）であると捉えられているが、少なくとも『源氏物語』本文にはそのような手掛かりは見えない。物語中には紫の上の母方の大伯父である北山の僧都や花散里の兄の醍醐の阿闍梨、また、宇治十帖に登場する小野の妹尼の兄である横川の僧都などがある。しかし、藤壺と夜居の僧都に関してはそのような親戚関係は書かれていない。諸本の『源氏小鏡』にこのような読みが成されてきたことは、護持僧が帝に密奏することの不自然さとも関係があるかもしれない。『源氏小鏡』の読みは、帝に秘密を告げる僧という以外さを引き立てる。

夜居の僧都に接する姿勢から、冷泉帝は朝廷に仕える人々の意見を傾聴する君主として描かれていると考えられる。唐太宗の言行をもとに呉兢が記録した『貞観政要』第四卷「求諫」第五章には、臣下に接する時の帝の態度について叙述されている。

貞観八年、上謂侍臣曰、朕毎閑居静坐、則自内省、恒恐上不稱天心、下為百姓所怨、但思人匡諫、欲令耳目外通、下無冤滞。又此見人来奏事者、多有怖懼、言語致失次第。尋常奏事、情猶如此。況欲諫諍、必當畏犯逆鱗。所以每有諫者、縱不合朕心、朕亦不以為忤。若即嗔責、深恐人懷戰懼。豈肯更言耶。

（貞観八年、上、侍臣に謂ひて曰く、朕、閑居静坐する毎に、則ち自ら内に省み、恒に、上、天心に稱はず。下、百姓の怨む所と為らんことを恐れ、但だ人の匡諫せんことを思ひ、耳目をして外通し、下の冤滞無からしめんことを欲す。又、此、人の来りて事を奏する者を見るに、多く怖懼する有りて、言語、次第を失ふを致す。尋常の事を奏するすら、情猶ほ此の如し。況んや諫諍せんと欲するは、必ず當に逆鱗を犯すを畏るるなるべし。所以に諫者有る毎に、縦ひ朕の心に合はざるも、朕亦、以て忤ふと為さず。若し即ち嗔り責めば、深く恐人の戦懼を懷かんことを恐る。豈に肯て更に言はん、や 三九。）

三八 岩坪健（編）『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）三三―三四頁。引用部の底本は、古本系（伝持明院基春筆）京都大学本である。

三九 原文と訓読は、原田種成『貞観政要』上（新釈漢文大系、明治書院、一九七八年）一五二―一五三頁による。

引用文から、太宗が閑居の際に、自らの政治について省みていたことが窺える。臣下や百姓は尋常のことを奏上する時ですら、帝の激怒を恐れて、素直に言えないことがある。諫言する場合はさらにその逆鱗を恐れることになる。臣下や民からの意見を耳に入れる機会を逃さないようにする太宗の心構えが書き込まれている。

静かな暁に、迷いながら密奏する僧都の話に耳を傾ける冷泉帝には、『貞観政要』の提示する理想の君主の姿が重ねられるのではないか。自らの皇位を揺さぶるほどの、大きな波乱として作用するかもしれない秘密が明かされた瞬間にも、冷泉帝は丁寧な僧都の話を聞く。そこには、儒学の学問を身に添えた理想的な帝の姿があるように思われる。

おわりに

登場人物冷泉帝を取り上げる際の難点は、人物に寄り添って語られる物語の叙述の量が少ないという点である。しかし、叙述が少ないだけに、冷泉帝が登場する場面には、読者の関心を十分引くことができるような工夫がされている。そのひとつの例が「薄雲」巻に描かれる学問に浸る冷泉帝の姿である。冷泉帝は源氏と藤壺の秘密の子であるという物語の設定から、従来の研究では、始皇帝の故事がしばしば想起されてきた。『史記』の故事は「唐土には、顕れても忍びても乱りがはしきこといと多かりけり」という物語の叙述に関わるもので、源氏と藤壺の密通と罪の問題について多くの議論が積み重ねられてきた。一方、その続きの文脈である「いよいよ御学問をせさせたまひつつさまざまのふみ（書）どもを御覧するに」についてはあまり注目されてこなかった。本論文では、その部分を精読し、「ふみ（文）ども」が意味する具体的な書物について想像をめぐらしながら、そこに描き込まれている冷泉帝像を捉えようと試みた。

出生の秘密を告知された時、冷泉帝が冷静に典籍を調べることができた背景には、彼が学問の基礎を持っていたことが前提になっていると考えられる。幼い源氏や夕霧、その息子たちの教育には、親の教育ぶりが描かれるが、冷泉帝の場合、相談する相手すらなく、黙々と典籍を紐解く姿に理想性が立ち上がってくる。また、国家の災難や重大な決定において史籍を調べることは、唐太宗の遺誡の性格を持っている『帝範』にも通じるもので、「薄雲」巻の冷泉帝は自力で書物を調べることで、判断力を備えている帝として提示されていることが読み取れる。さらに、冷泉帝が夜居の僧都の密奏に耳を傾けることは、『貞観政要』に提示されている理想的な帝に符合する姿であることが看取される。他の人物に比べ、少ない記述の中でも、物語は冷泉帝の外貌だけでなく、内面が形成されていく過程を充分に描写している。それによって、冷泉帝という人物像を鮮明に彫り込む、極めて象徴的な描き方をしていることが窺える。

第二編 娘を教育する父

第二編 娘を教育する父

第四章 源氏の明石の姫君への物語教育

はじめに

光源氏と明石の君の間に生まれた明石の姫君は、「濡標」巻にその誕生が描かれ、その将来については、宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし」（濡標②二八五）と予言され、「藤裏葉」巻では東宮入内が実現する。光源氏に姫君誕生が知らされると同時に、予言が示されることは、言い換えれば「誕生と同時に将来の后位が約束されたこと」を意味する。予言通り、明石の姫君は今上帝の中宮になり、宇治十帖では匂宮、薫に目をかけ、適切な助言を与えるなど、物語の後半に至るまで、その存在は大きい。「濡標」巻以下、この明石の姫君の幼年時代が描かれていることは、明石の姫君が中宮になる前の過程が描かれている点で重要である。后になるまでには光源氏による明石の姫君の教育の力が大きく作用していると思われる。

従来の研究において、島田とよ子氏は源氏の明石の姫君教育について詳細に分析を行い、明石の姫君教育における理想の後像は藤壺に求められていることを指摘している^二。島田氏の研究は示唆に富む所が多くあり、大きな参考になるが、本章では先行研究を踏まえながら、藤壺との関連ではなく、源氏と明石の姫君に焦点を当てて行きたい。

平安時代の女性教育については、乳母が中心になって執り行われる場合が多く、女性教育における父の役割については十分に論じられているとは言えない。たしかに乳母は貴族の女性教育において中心的な役割を果たしているが、吉海直人氏が明石の姫君の乳母選定をめぐって、「源氏の並み並みならぬ苦勞」^三があったことを指摘しているように、乳母の選定や管理などは父が担当していたことも注目される。

今井上氏は「源氏が、わが子の出世だけを思い、その先に見据えられてくる一家、一族の繁栄をただひたすらに祈る「人の親」とはおよそかけはなれた、独自の像を結んでいる」

一 倉田実「明石姫君の袴着―養女となる次第―」『王朝撰関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇四年）四二四頁

二 島田とよ子『源氏物語』に於ける「后がね」教育『大谷女子大國文』第二一号（大谷女子大学国文学会、一九八一年三月）

三 吉海直人「明石姫君の乳母」『平安朝の乳母達』（世界思想社、一九九五年）二三八頁

四と捉え、世俗的な親らしくない源氏の姿を受け止める。源氏の場合、我が子への思いが世俗的なことを超越したかのように見えるのは、子について何も思いを抱いていないという意味ではなく、むしろ、すでに出来る限りの努力を尽くし、その後の子の世俗的な榮達については執着しない態度にあると理解していききたい。

本章では本文を追いながら、明石の姫君が中宮になるまでの過程における源氏の役割と、それが持つ主題との関連性を探り、子供たちの将来のために教育していく父源氏の姿を辿っていく。

よく知られているように『枕草子』第二十一段「清涼殿の丑寅の隅の」には、女性の教育に関して一条天皇中宮定子が女房たちに伝えた言葉が次のように記されている。

村上の御時に、宣耀殿せんえうでんの女御と聞えけるは小一条の左の大殿の御むすめにおはしけると、誰かは知りたてまつらざらむ。まだ姫君と聞こえけるととき、父おとどの教へきこえたまひけることは、「一つには御手を習ひたまへ。次には琴の御琴を、人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十巻をみな浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ」となむ聞こえたまひけると、聞しめしおきて（後略）^五

要するに、宣耀殿女御芳子がまだ幼かった頃、父小一条の左大臣藤原師尹から「第一に仮名の書道、第二に琴の演奏と音楽のたしなみ、第三に『古今和歌集』の暗記が重要だ」^六という戒めを受けたことがその内容である。この例からは、上流貴族の家庭で、女子教育に父親も深い関心を持ち、適切なアドバイスを与えるなど、関与していたことが窺える。宣耀殿女御の例は平安時代の後教育の典型であるとも言えるが、本章では物語の中で明石の姫君が中宮になるまでの過程を検討し、明石の姫君教育における父の役割について考察していくことにする。

第一節「蛭」巻の物語論

「蛭」巻に言及される物語論はよく知られ、例えば、高橋亨氏が「蛭巻の基底部の表現の構造は、帯木六帖や玉鬘十帖へと通底し、さらには『源氏物語』の全体を支える物語の

四 今井上「闇に惑われぬ光源氏と「不致仕」の思想―物語精神の基底―」『源氏物語 表現の理路』（笠間書院、二〇〇八年）三三〇頁

五 松尾聰・永井和子（校注）『枕草子』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年）五三―五四頁

六 三角洋一「女性の教養と幼学書」三角洋一（他）『日本の散文―古典編』（放送大学教育振興会、二〇〇三年）一八三頁

思想になっている」セと指摘しているように、「蛭」巻は『源氏物語』全体の中でも注目される部分である。本節では物語論の中でも父としての光源氏像に注目し、それが明石の姫君の教育にどのような影響を与えているかを調べていきたい。まず、「蛭」巻の場面を追いつながら、源氏の娘教育について考察することにする。

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々絵、物語などのすさびにて明かし暮らしたまふ。明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなしたまひて、姫君の御方に奉りたまふ。(蛭③二二〇)

長雨が続くなか、六条院の女性たちはそれぞれ絵や物語に浸って時間を過している。六条院の冬の町に娘とは離れて住んでいる明石の御方は、明石の姫君のために物語を準備して送る。「蛭」巻は物語に熱中している女性たちを順に描写しているが、具体的には、まず、玉鬘の姿が見える。

A 西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読み営みおはす。つきなからぬ若人あまたあり、さまざまにめづらかなる人の上などを、まことにやいつはりにや、言ひ集めたる中にも、わがありさまのやうなるはなかりけりと見たまふ。住吉の姫君のさし当たりけむりはさるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ。(蛭③二二〇)

玉鬘は明け暮れ物語を書写し読みながら、様々な若い女性の人生を観察するようになる。数多い物語の中でも特に「住吉の姫君」の物語を読んでいる。玉鬘が読んだと思われる平安時代の『住吉物語』は伝わらず、現在は改作された『住吉物語』しか残っていないが、現存する『住吉物語』から玉鬘が読んだ物語の内容を推定すると、まだ若い姫君が年寄の主計頭に盗み取られようとする場面であったらしい。玉鬘は肥前で求婚された大夫監のことを思い出し、自らの境遇を照らし合わせてみるようになる。

物語に没頭している玉鬘をめぐり、源氏と玉鬘の間で物語論が展開されていく。

B ①殿も、こなたかなたにかかる物どもの散りつつ、御目に離れねば、(源氏)「あなむつかし。女こそものうるさがらず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。こころの中にまことはいと少なからむを、かつ知る知る、かかるすずるごに心を移し、はかられたまひて、暑かはしき五月雨の、髪の乱るるも知らで書きたまふよ」とて、笑ひ

七 高橋亨「物語論の生成としての源氏物語」『源氏物語の詩学』(名古屋大学出版会、二〇〇七年)四九七頁、〈初出〉『名古屋大学教養部紀要』一九七八年三月

たまふものから、②また、(源氏)「かかる世の古事ならでは、げに何をか紛ることなきつれづれを慰めまし。さてもこのいつはりどもの中に、げにさもあらむとあはれを見せ、つぎつぎしくつづけたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君のもの思へる見るにかた心つくかし。(蜚③二一〇〜二一一)

源氏は、①物語が虚構を描いていることを知りながら、女性たちはそこに心を移して、蒸し暑い長雨の季節に髪が乱れることも知らず、物語の書写に熱中しているのだと、玉鬘に批判的な言葉をかける。しかし、物語の長所も捉えている源氏は、また、②物語は虚構ではあるが、そこに含まれている現実を反映した写実性、読者に感動を与える側面などにも理解を示す。

さらに、源氏は物語の魅力を指摘する。「いとあるまじきこと」と思いながらも、もののしく強調されている部分に目を奪われたり、「静かにまた聞く」とつまらなく感じられたりする時もあるが、しかし、物語には「をかしきふし」があり、やはり感心させられるのである。

〔C〕またいとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて、静かにまた聞きたびぞ、憎けれどふとをかしきふしあらはなるなどもあるべし。このごろ幼き人の、女房などに時々読まするを立ち聞けば、ものよく言ふ者の世にあるべきかな。そらごとをよくし馴れたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれどさしもあらじや」とのたまへば(蜚③二一二)

そこで、源氏は傍線部のように女房たちが明石の姫君のために読み挙げる物語の内容を立ち聞いたことに添えて、物語について批評する。「ものよく言ふ」とは「巧みに説明」^ハするという意味として解釈され、源氏は世の中にはすぐれた作者がいることを認める一方、そらごとをよくも馴れた口つきで伝えている作者もいると批評するのである。

しかし、これに対して、玉鬘は、物語から偽りと受け取る人もいるかもしれないが、自分分は「まことのこと」と読み取っていると応酬する。

〔D〕(玉鬘)「げにいつはり馴れたる人や、さまさまにさも酌みはべらむ。たたいとまことのこととこそ思うたまへられけれ」とて、硯を押しやりましたまへば、(源氏)「骨なくも聞こえおとしてけるかな。神代より世にあることを記しおきけるななり。日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ」とて笑ひたまふ。(蜚③二一一〜二一二)

^ハ 工藤重矩「蜚卷の物語論議―「そらごと」を「まこと」と言いなす論理の構造―」〔森一郎(外編)『源氏物語の展望』第五輯(三弥井書店、二〇〇九年)〕四一頁

この玉鬘の反論を受けた源氏は、物語を貶めてしまったことを認め、物語こそ委細を尽くした事柄を伝えていると認める。藤井貞和氏の指摘によると、この部分は「帚木」巻の左馬頭の次の言葉に対応する部分である^九。

三史五経、道々しき方を明らかに悟り明かさむこそ愛敬なからめ、などかは女といはむからに、世にあることの公私につけて、むげに知らずいたらずしもあらむ。

(帚木①八九)

「帚木」では左馬頭の発言を通じて、女性是三史五経の歴史については悉く知るまでの必要はないということが提示される反面、「蛭」巻においては「これら(物語)にこそ道々しくはしきことはあらめ」と物語を通して、世間のことを詳しく学ぶ必要性が語られる。

従来の研究においては、以上のAとDを含む「蛭」巻の場面を中心に、作品の登場人物を通じて語られる物語論と作者の物語観をいかに捉えるかをめぐり、様々な研究が成されてきた。早く『細流抄』の中で「紫式部此物語を作せる大意をあげていへり」^{一〇}と指摘されているように、「蛭」巻の物語論には作者の物語観が投影されていると捉える立場がある。例えば、秋山虔氏は、「蛭」巻の物語論は「作者による自注」^{一一}という観点を提示する。

一方、阿部秋生氏は「源氏物語」の本意は、もつと「源氏物語」に即して検討してみなければならぬのであらう」^{一二}と物語文脈の理解を重視する。また、藤井貞和氏も「われわれはあくまで物語される文脈に沿うて読むべき」^{一三}と、同じく物語の文脈に徹底する読みに重点を置く。さらに、神野藤昭氏は、源氏と玉鬘の会話という物語の場面に注目し「基底にあるくどきの文脈にのせられつつ物語論場面は展開されるのであって、二重機能的にからみあう文脈を見定めながら物語論の条を読み解いてゆくことが基本的に要請される」^{一四}と指摘する。

近年には先行研究の蓄積の成果を踏まえた上、作者や文脈の理解という一方の視点ではなく、「蛭」巻の論をより広く捉える研究がなされている。三角洋一氏は古註釈を検討した上、その限界についても指摘しながら「蛭」巻の物語論を「子女教育論」^{一五}として捉える

九 藤井貞和「雨夜の品定めから「蛭」巻の物語論へ」『共立女子大学紀要』第一八号(一九七四年十二月)

一〇 伊井春樹(編)『細流抄』(源氏物語古注集成、桜楓社、一九八〇年)二二五頁

一一 秋山虔「蛭」巻の物語論『日本文学』第三五巻第二号(日本文学協会、一九八六年二月)四九頁

一二 阿部秋生「蛭の巻の物語論」『人文科学科紀要 国文学・漢文学』第二四輯第七号(東京大学教養学部人文科学科、一九六〇年)四九頁

一三 藤井貞和、前掲論文、三八頁

一四 神野藤昭夫「蛭巻物語論場面の論理構造」『国文学研究』第六七集(早稲田大学国文学会、一九七九年三月)五八頁

一五 三角洋一「蛭巻の物語論」『源氏物語と天台浄土教』(若草書房、一九九六年)〈初出〉『人文科学科紀要』(東京大学教養学部、一九九三年)

読み方を提示する。工藤重矩氏は文脈に即して用例の分析を徹底的に行うと同時に、作者の主張にも目を配り、「紫式部の意図として、物語の教育的効用を主張しているのだ」^{一六}という結論を出す。

本論文では以上の先行研究に導かれながら、この物語論が源氏の娘教育に関わっている側面を検討することとしたい。先ほどの[A]と[D]をまとめてみよう。源氏と玉鬘の議論は「そらごと」と「まこと」をめぐって展開されているが、玉鬘はまず[A]で提示されるように、「まことにやいっはりにや」と考えながら「住吉の姫君」の物語などを読んでいる。^[B]、^[C]の部分においては、源氏によって物語における「いっはり」性が指摘される。しかし、玉鬘はそのような虚構の物語の中でも、いつわりの馴れた人はそのように物語を読むが、自分は分別を持って、ただまことのことと読み取っていると答える。ここの会話から窺えるのは、物語の読みは読者によって理解が異なってくるという点である。^[C]の部分で、源氏は女房たちが明石の姫君のために読み挙げている物語を立ち聞き、どうもその内容はそらごとをよくし馴れた口つきで書いているようであると批評したが、そこには、まだ物語の内容に分別を持っていない明石の姫君への源氏の心配が表れているのであろう。

続いて、紫の上が物語を見ている場面が提示される。

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。くまのの物語の絵にてあるを、(紫の上)「いとよく描きたる絵かな」とて御覽ず。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。(源氏)「かかる童どちに、いかにされたりけり。まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」と聞こえ出でたまへり。げにたぐひ多からぬことどもは、好み集めたまへりけりかし。(蜩③二二四〜二二五)

紫の上は明石の姫君のために物語を注文し、自らもその物語に熱中している。「何心もなく」寝ている姫君の姿が描かれている物語絵を見ながら、紫の上の視線は内面に向かい、物語絵に自らの「昔のありさま」を照らし返してみる。そこには幼い時に源氏に引き取られ、教育を受け、今は源氏の伴侶になっている紫の上の人生が重ねられる。

紫の上が見ている『くまのの物語(狛野の物語)』は散逸し、その具体的内容については確認することができないが、『枕草子』一九九段^{一七}、二七四段^{一八}などに言及され、「幼恋に

一六 工藤重矩、前掲論文、四四頁

一七 「物語は住吉。宇津保。殿うつり。国譲はにくし。埋木。月待つ女。梅壺の大将。道心すむる。松が枝。くまの物語は古蝙蝠(かわほり)さがし出でて持て行きしがをかしきなり。」

松尾聰、永井和子(校注)『枕草子』新編日本古典文学全集(小学館、一九九七年)三三七頁

一八 「くまのの物語は、何ばかりをかしき事もなく、ことばも古めき、見所おほからぬも、月に昔を思ひ出でて、虫ばみたる蝙蝠取り出でて、「もと見しこまに」と言ひてたづねたるが、あはれなるなり。」前掲『枕草子』四二七頁

悩む姫君が登場」一九する内容であるらしい。

しかし、源氏の鑑賞は、紫の上とは異なり、「かかる童どちだに、いかにされたりけり」と幼い子供たちの恋について批判的な態度を示すものである。また、最後の部分「まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」という部分からは、幼い紫の上が成長するまで心長く待ちながら、紫の上を理想的な女性に育てたことに源氏の自負が看取される。

第二節 源氏の教育態度

「蛸」巻の続きの場面を見てみよう。少し長いが、源氏の娘教育のために参照できる重要な部分なので引用しておく。

（源氏）「①姫君の御前にて、この世馴れたる物語などな読み聞かせたまひそ。みそか心つきたるもののむすめなどは、をかしとはあらねど、かかること世にはありけりと見馴れたまはむぞゆゆしきや」とのたまふもこよなしと、対の御方聞きたまはば、心おきたまひつべくなむ、上、「心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。うつほの藤原の君のむすめこそ、いと重りかにはかばかりしき人にて、過ちなかれど、すくよかに言ひ出でたる、しわざも女しきところなかめるぞ、一やうなめる」とのたまへば、（源氏）「現の人もさぞあるべかめる。人々しく立てたるおもむき異にて、よきほどに構へぬや。よしなからぬ親の心とどめて生ほしたてたる人の、児めかしきを生けるしにて、後れたること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるることいとほしけれ。げにさ言へど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、面ただしかし。言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることの中に、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで人ほめさせじ」など、ただこの姫君の点つかれたまふまじくとよろづに思しのたまふ。②継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける。（蛸③二二五～二二六）

源氏は先ほどのように『くまの物語』は幼い男女同士の恋愛を描いていると批評し、傍線部①のように、養母紫の上に注意を与え、明石の姫君が「この世馴れたる物語」などには触れないように指示している。また、傍線部②のように、現在紫の上に育てられてい

る状況を踏まえてか、姫君に継子物語を読ませないように注意を与える。このような源氏の言説には父親として明石の姫君のために養母紫の上と協力して姫君を育てようとする努力が現れている。源氏は「物語の教育効果を認め、その故にこそ教育上適当なものを厳選して姫君に与えるよう」^{二〇}にしていることで、教育的立場から、姫君のための物語の具体的な内容までを指示しているのである。伊井春樹氏の指摘によると、このように姫君の教育に父が携わることが珍しいことではなかったようで、藤原道兼が娘の誕生に備えて栗田山庄に「絵物語」を集め、予め娘教育に配慮していた例が挙げられる^{二一}。

源氏のこのような教育態度について、父によって管理される子供の姿を批判的に捉える研究もあり、原岡文子氏は「色恋の物語」を「読むことで恋への関心の湧くことさえ避けねばならぬとする周到な配慮」を読み取り、父によって管理され、「見えない制度」に従属する子供の姿を指摘する^{二二}。また、井上真弓氏は「女君たちの精神世界を管理」^{二三}する源氏の姿を打ち出す。

しかし、源氏の教育態度は単に読むべき物語の内容を排除し、女性を管理するのではなく、姫君が処している状況を踏まえ為されていることに注目する必要がある。源氏の教育方針が述べられる「蛭」巻の場面が、明石の姫君の八歳の時点であることは看過できない。三角洋一氏は、源氏が現段階において明石の姫君の読書のための物語の内容を厳選している理由は、姫君の「物語の理解する水準」^{二四}を考慮しているからであると指摘する。教相判釈の化儀の四教（頓教、漸教、秘密教、不定教）と化法の四教（三藏教、通教、別教、円教）の八教の説に合わせると、源氏は「姫君をまだ漸教の鹿苑時の段階と見て、個別指導の秘密教を授けることを考えていたから」^{二五}、姫君に読ませる物語とそうではない物語を区別しているのである。鹿苑時の段階とは、『法門百首』の九十二番「遊化鹿苑」の傍注に「所化の機あさくして、大乘の法に耐へざれば、鹿野苑におもむきて、小乗の法を説かせ給ふ」^{二六}と示されるように、教えを受ける心がまだ浅い段階を指し、明石の姫君は物語の内容と現実が区別付かない段階の読者である。対照的に玉鬘は、すでに論じたように源氏の様々な質問に見事に答えることができた。そこから玉鬘は物語を読むことにおいて分別を持つて、その内容を適切に判断できる読者であることが判明する。

源氏が明石の姫君の成長の段階を判断して、これに合わせて教育していることは、物語

二〇 武原弘「蛭巻の物語論について―その機構および位相―」『日本文学研究』第二〇号（梅光女学院大学日本文学会、一九八四年十一月）二六頁

二一 伊井春樹「物語文学の成立」〔鈴木一雄（編）『日本文学新史（古代Ⅱ）』（至文堂、一九九〇年）〕

二二 原岡文子『源氏物語』の子ども・性・文化―紫の上と明石の姫君―『源氏研究』第一号（翰林書房、一九九六年）「」の中は各七四、七四、七三頁からの引用。

二三 井上真弓「書物―行為」と「記憶」のメディア―『狭衣物語の語りと引用』（笠間書院、二〇〇五年）三三二頁

二四 三角洋一「蛭巻の物語論」、八一頁

二五 三角洋一、上掲論文、八一頁

二六 山本章博『寂然法門百首全釈』（風間書房、二〇一〇年）一八三頁

の文脈からも裏付けられる。明石の姫君が入内した後、「女御の君は、今は、公さまに思ひ放ちきこえたまひて、この宮（女三宮）をばいと心苦しく、幼からむ御むすめのやうに、思ひはぐくみたてまつりたまふ」（若菜下④一七九）と語られる。この段階に到ると、源氏は明石の姫君のことは帝に任せて、女三宮を教育することに集中するのである。すなわち源氏は姫君の水準に合わせて教育して行くのであり、専ら姫君を「管理」しているのではないと思われる。

第三節 「点付かる」に対する教育観

前の引用部にもどるが、二重傍線部の「ただこの姫君の点つかれたまふまじくとよろづに思しのたまふ」には、源氏の教育観が示されている部分としてさらに注目される。この部分に関して『河海抄』は、「人にてんつかるべきふるまひは」の項目で「古人詩冊に批点などいふはいさゝか褒貶したる心也。さればてんつかるまじきとは人にほめそしらるまじきといふ歟。」二七と指摘する。古代には詩文や和歌などに師匠や選者が良いと認めた作品の右肩に点を付し、もしくは添削や直しのために点を加えていたようである。本文には特に明石の姫君が人々から批判されることはないようにという意味が強調されていると捉えられる。

『源氏物語』の中で「点付かる」の用例は限られ、三つの場面だけに使われているが、源氏の教育方針が窺える重要な言葉であるので、物語を追いつながらその意味を検討することにする。まず引用部の波線「よしなからぬ親の心とどめて生ほしたてたる人の、児めかしきを生けるしにて、後れたること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるるこそいとほしけれ」の部分で源氏は娘の教育に関して言及し、娘がそれなりに立派に育つことは親にとって甲斐あることであるが、至らぬ所が多くある場合、その原因が親の育て方に求められることは気の毒であると言う。しかしまた、その人の立場に相応しく育てられた人を見ると、育て方に感心され、親の面目が立つと言う。そこで、源氏は姫君が目立つ欠点もなく、あらゆる所に教養が行き届いた女性になるように教育するのである。

『源氏物語』の中で「点付かる」のほかの用例は「若菜下」巻冒頭部から窺える。次の例は柏木の心内語として使われている例であるが、当時の貴族社会における身の処し方という側面から、明石の姫君の場合にも重なる所が多くあるので、関連場面を取り上げることにする。

柏木は六条院の蹴鞠の遊びの際に女三宮の姿を垣間見ってから後、恋心を長く抱いてきた。

次の場面はその時からすでに六年が経っている時点であるが、柏木はまだ女三宮に対面する機会がなかった。しかし、源氏の正妻である女三宮へ憧れを持っている柏木は、六条院の競射に参加した時、源氏の姿に恐れを抱いてしまう。

みづからも、大殿を見たてまつるに氣恐ろしくまばゆく、かかる心はあるべきものか、
なのめならんにてだに、けしからず人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを、
ましておほけなきこと、と思ひわびては、かのありし猫をだに得てしがな、思ふこと
語らふべくはあらねど、かたはらさびしき慰めにもなつけむ、と思ふに、もの狂ほし
く、いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける。(若菜下④一五五)

引用部には人に批判されないように気を付けて生きてきた柏木の今までの生涯の信条が語られている。柏木はこれまで左大臣家の嫡男として貴族社会の中の自分の位置や評判を意識しながらそれに相応しく行動してきた。しかし、柏木は女三宮への自らの恋心を顧み、源氏の妻に恋心を抱く自分が、身のほどを知らない者と、恐れ多く感じられるのである。

後ほど、柏木は女三宮と逢うことになるが、増田繁夫氏は柏木の密通について、柏木は「密通自体については、さほどの「悪」とは考えていなかったけれども、貴族社会の長老であり、柏木も幼くより目標にし尊敬していた源氏からにまれ疎外されては、もはや世の中に交わることもできないと思ひ込んだのである」^{二八}と、柏木の源氏を畏れる心の本質は、現代的な意味の良心の呵責ではなく、世間の噂になり、貴族社会から疎外されることにあったことを指摘する。

明石の姫君の教育に戻るが、源氏が明石の姫君において「点付か」れる所のないように心得ていたことは、柏木の事例から窺えるように、貴族社会の中で特に目立つ咎を犯さず、世間の噂になるような行動をしないことを望んでいたからであろうと解釈できる。

「若菜下」巻にはもう一つの「点付かる」の用例が窺える。朧月夜の出家につけ、源氏が紫の上にさまざまな女性について語る場面である。

女子を生ほしたてむことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿世などいふらんものは
目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし。生ひたたむほどの心づかひは、なほ力
入るべかめり。よくこそあまた方々に、心を乱るまじき契りなりけれ、年深くいらざ
りしほどは、さうざうしのわざや、さまざまに見ましかばとなむ、嘆かしきをりをり
ありし。若宮を心して生ほしたてまつりたまへ。女御は、ものの心を深く知りた
まふほどならで、かく暇なきまじらひをしたまへば、何ごとも心もとなき方にぞもの
したまふらむ。皇女たちなむ、なほ飽くかぎり人に点つかるまじくて、世をのどかに
過ぐしたまはむに、うしろめたかるまじき心ばせ、つけまほしきわざなりける。限り
ありて、とざまかうざまの後見まうくるただ人は、おのづからそれにも助けられぬる

をなど聞こえたまへば（若菜下④二六三〜二六四）

源氏は女の子を育てることはとても難しいことであり、宿世のような目に見えない定めが存在することもあるが、それにしても力を入れて教育をすることが重要であるという主張を展開する。その例として源氏は、明石の姫君が親の「心を乱」させるような行動などで心配を掛けることなく、立派に育ったことを取り上げる。明石の姫君が「濤標」巻に語られる予言通り後にまで昇ったことには、定められた運命だけでなく、予言を信じて力を尽くし、姫君を後にふさわしい女性として育て上げた源氏の努力がある。

明石の姫君は、女御になり、宮中で寵愛を受け暇なく帝に奉仕している。今、十九歳である明石の女御はまだ若く、宮仕えに専念している。源氏はこのような娘を心配し、紫の上に女一宮の養育を頼むのである。明石の姫君が立派に育ったことは、養母である紫の上の育て方がすぐれていたことも意味する。源氏は明石の姫君が女御にふさわしい教養と人品を持って成長したことを認め、紫の上の養育の苦労を褒め、感謝の心を伝える。源氏はそれに加えて、今度はさらに明石の女御の生んだ若宮（女一宮）の養育を願うのである。ここには子供を産んで母になっても未だ若い娘への源氏の絶えない愛情が示されていると言えよう。

源氏の言葉は引き続き、「皇女たち」の育て方に関する意見も提示される。皇女は人々にあれこれ言われることや欠点を指摘されることなく、生涯を安らかに過せる嗜みを持つていることが望ましいという。その「皇女たち」という表現にはまず、これから成長していく明石の女御腹の女一宮のことが暗示され、次に、柏木と関係を持つてしまった妻女三宮の皇女としての思慮の足りなさが対照的に仄めかされる。この皇女の教育における「点つかれるまじく」という源氏の教育哲学は源氏の娘教育から孫教育まで、女子教育観を貫通するものであることが明らかである。このように世間の人々とにかく言われることなく、貴族社会の人間関係の中で中庸を守って生きて行くことが源氏の強調する女性の生き方である。

源氏の姫君教育は功を奏して、他の人々からもそのよさが評価されていく。内大臣（頭中将）は昼寝をしている自分の娘雲居雁の姿を見て、近くに女房たちもあまりいない中、放心状態で居眠りしている姫君らしくない姿に戒めの言葉を伝えるが、そこには源氏の明石の姫君教育を評価する内容が見られる。

（内大臣）「うたた寝は諫めきこゆるものを、などか、いとものはかなきさまにては大殿籠りける。人々も近くさぶらはで、あやしや。女は、身を常に心づかひして守りたらむなんよかるべき。心やすくうち棄てざまにもてなしたる品なきことなり。さりとて、いとさかしく身固めて、不動の陀羅尼誦みて、印つくりてゐたらむも憎し。現の人にもあまりけ遠く、もの隔てがましきなど、気高きやうとても、人憎く心うつくしはあらぬわざなり。太政大臣の后がねの姫君ならはしたまふなる教へは、よろづの

ことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおぼめくこともあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。げにさもあることなれど、人として、心にも、するわざにも、立ててなびく方は方とあるものなれば、生ひ出でたまふさまあらむかし。この君の人となり、宮仕に出だし立てたまはむ世の気色こそ、いとゆかしけれ」などのたまひて（常夏③二三九～二四〇）

傍線部の「后がねの姫君」とは明石の姫君のことであり、内大臣の言葉によると、明石の姫君は様々な分野に幅広く教養を備えるように教育されていることが確認される。ここで窺えるのは明石の姫君の教育において、「中庸」を得ること^{二九}が重視されていることである。このような姿勢は後ほど宇治十帖において匂宮の母親として、中庸の精神を活かしていることとも通じる一面でもある。

明石の姫君は「若菜上」巻では東宮の御子を出産し、やがて中宮になり、宇治十帖に至ると、匂宮の母親として登場するが、そこには息子の宇治通いについて、戒めを与える姿が描かれている。

宮は、その夜、内裏に参りたまひて、えまかでたまふまじげなるを、人知れず御心もそらにて思し嘆きたるに、中宮、「なほかく独りおはしまして、世の中にすいたまへる御名のやうやう聞こゆる、なほいとあしきことなり。何ごとももの好ましく立てたる心なつかひたまひそ。上もうしろめたげに思しのたまふ」と、里住みがちにおはしますを諫めきこえたまへば（総角⑤二七六）

引用部に現れている母明石の中宮の戒めの根底にある中庸の精神は、桐壺帝の時代から受け継がれてきたもので、「桐壺帝の第二皇子である光源氏が身につけた教育であり、紫の上・明石の中宮に対する養育方針でもあった。皇族、摂関家、后がねの姫君に要求される徳目であった」^{三〇}のである。源氏の明石の姫君に対する教育方針は次の代にもしっかりと伝えられ、母となった明石の中宮は中庸の心構えを息子匂宮に十分に伝えている。

おわりに

以上、「蛸」巻を中心に源氏の明石の姫君教育の場面を辿ってみた。源氏は玉鬘と物語の

^{二九} 島田とよ子『源氏物語』に於ける「后がね」教育『大谷女子大國文』第一号（大谷女子大学国文学会、一九八一年三月）三八頁

^{三〇} 三角洋一「明石の中宮を通して宇治十帖を読む（上）」『紫式部学会（編）『むらさき』第四二輯（武蔵野書院、二〇〇五年十二月）』八二頁。後、「三角洋一『宇治十帖と仏教』（若草書房、二〇一一年）』に所収。

鑑賞にかかって、「まこと」と「いつわり」というテーマを以て批評をする。物語の世界は「いつわり」によって創作されたものであり、そこには「そらごと」も含まれる。しかし、たとえ虚構であっても、巧みに作られた物語には読みたくなる魅力があり、そういう世界を創造した作者の能力には感心されるのでもあると述べる。しかし、明石の姫君はまだ幼く、誇張された物語の内容をそのまま「まこと」として信じ込んでしまう恐れがある。そこで、源氏は明石の姫君を育てている紫の上に、明石の姫君にまだ読ませてはいけない物語について注意を与えるのである。源氏の「点つかれたまふまじくとよろづに思しのたまふ」という言葉に代表される考え方の基に、明石の姫君を中庸の徳を備えさせ、性格に片寄る所がなく、貴族社会の中で特に非難されることのない、后にふさわしい女性に育てるために、娘の教育に細心の注意を払っているのである。以上の考察からは、母親や乳母と共に源氏が詳細な部分まで姫君の教育に関与し、娘の成長を見守っていたことが如実に窺える。

第五章 須磨・明石の絵日記の考察

はじめに

物語の登場人物の間で行われる「もの」の授与は、特別な関係の間で為されるのが特徴である。例えば、『落窪物語』には、亡き母の遺品の鏡箱が姫君に残されるが、継母とのやりとりの中で、鏡箱が奪われる事件が描かれるなど、物語は継子虐めの場面を「もの」の授与を通じて象徴的に展開していく。後に取り戻される鏡箱は亡き母との繋がりを確認させるものとして作用する。また、時代は下るが、御伽草子の『鉢かづき』の母は臨終の直前、幼い娘のため、宝物を鉢の中に入れて姫君に残すが、それは姫君が困難に接した時に、それを克服するための力になる。

一方、『源氏物語』は先行研究において、継子譚の話型が変形され受容されたと指摘されている通り、『源氏物語』において「もの」が渡されることは、『落窪物語』などの場合と異なる様相を見せる。継子譚において親から渡される「もの」は多くの場合、義父や義母の与えた試練や課題を解決するための道具としての役割を果たすが、『源氏物語』において親から渡される「もの」は必ずしもそのような性格を持つていたとは限らない。

多くの「もの」の中でも、『源氏物語』には「桐壺」巻や「帚木」巻、「若紫」巻、また「須磨」、「明石」、「絵合」巻、さらに「梅枝」巻や宇治十帖の「浮舟」巻に至るまで、様々な部分に絵についての話題が言及されていることが注目される。従って、本論では、親から授与される「もの」の代表として絵日記に注目し、絵日記の伝達が物語の展開においていかなる役割を果たしているか解明することを目標としたい。特に、源氏の絵日記の物語の中で果たす役割について考察し、「梅枝」巻で須磨の絵日記が思い起こされる意味について分析を試みる。研究方法として、『源氏物語』に先行する『うつほ物語』や後行する『狭衣物語』、『浅茅が露』の事例に照らし合わせ、日記文学との接点に触れながら、『源氏物語』の特質を探ることにする。

第一節 源氏の絵日記という用語

本論では主に「須磨」巻、「明石」巻、「絵合」巻、「梅枝」巻を中心に考察を行いたい。が、考察を展開する前に、物語の本文の様々な部分で登場している源氏の絵を指し示す場合の名称、源氏の絵が示すものの範囲や絵日記という用語について考えてみたい。

本文の叙述を追っていくと、物語はあまり「整合性」を意識していないかのように捉えられ、読者は「疑念」を感じるようになるからである^一。その理由は、まず、「須磨」巻で源氏が絵を描く場面には、屏風に貼るための布が使われている反面、「絵合」巻に出されたのは紙絵であるという素材が異なる点である。また、「明石」巻には紫の上に見せることを前提に絵が描かれていたが、「絵合」巻の視点になると、絵をより早く見せてくれなかった源氏に恨みを言う紫の上の姿が見える点である。このように、物語は源氏の絵を固定されたひとつのものとして扱ってはいないようである。

絵に関する記述が統一性を欠いているように読み取れる理由を解明する余力はないが、物語に書かれている情報をもとに、源氏が須磨で絵を描いたこと、明石で絵を描いたこと、また、須磨の巻が宮中の絵合に提出されたこと、「梅枝」巻に源氏の旅の絵が再び想起されることを考慮して、以下、論じていきたい。

- ・さまざまの絵どもを書きすさびたまへる（須磨②二〇〇）
- ・絵をさまざま描き集めて（明石②二六一）
- ・かの旅の絵日記の箱をも取り出でさせたまひて（絵合②三七七）
- ・かたはなるまじき一帖づつ、さすがに浦々のありさまさやかに見えたるを選りたまふついでに（絵合②三七八）

これらの表現から、源氏の絵は、「さまざま」とあるように複数のものであり、「箱」の中に保管される分量のものであり、多くの中で絵合に出すものが選ばれていることが分かる。絵日記はただひとつの作品ではなく、一回で製作が完了したものではなく、数回に渡って製作されたものに時間を置いて修正が加えられ、後にまとめられた可能性が多いものとして理解される。従って、本論で使う源氏の絵日記という用語は、広い意味で使い、基本的に源氏の須磨・明石滞在の際にそこで描かれ、須磨・明石で感じた源氏の心が投影されていると思われるすべての絵を指すことにする。

次に、絵日記という用語を考えてみるために、まず、「須磨」巻の絵の考察から始めてみよう。右大臣の娘朧月夜との密通が顕になつてから、源氏は須磨への退去を決心し、須磨・明石で二年間を過ごすことになる。寂しい風景を前にして、源氏は海辺の景色を絵に描く。

げにいかに思ふらむ、わが身ひとつにより、親兄弟、片時たち離れがたくほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かくまどひあへると思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむと思せば、昼は何くれと戯れ言ううちのたまひ紛らはし、①つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまざまの絵どもを書きすさびたまへる、屏風の面どもなど、いとめでた

一 伊井春樹「須磨の絵日記から絵合の絵日記へ」『中古文学』第三九号（中古文学会、一九八七年五月）四八頁

く見どころあり。②人々の語りきこえし海山のありさまを、はるかに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり。③（供人）「このごろの上手にすめる千枝、常則などを召して作り絵仕うまつらせばや」と心もとながりあへり。なつかしうめでたき御さまに、世のものの思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつとさぶらひける。（須磨②一九九〜二〇〇）

①の部分にはつれづれを慰めるために、手習から始まって絵を描く経緯が叙述され、②の部分には、今までは伝え聞いていただけの海辺の景色を、直接目にして描くようになった感動が伝えられる。このように「須磨」巻には源氏が須磨の謫居中に絵を描いたことが提示され、「絵合」巻には須磨の絵が宮廷で披露される。また、源氏の絵日記は、「かの」という修飾語と共に示され、物語の様々な所で再び思い起こされていく。

- ・かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて（絵合②三七七）
- ・かの須磨、明石の二巻は、思すところありてとりまぜさせたまへりけり。（絵合②三八三）
- ・かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむと思せど（梅枝③四二二〜四二三）

例のように、源氏の描いたものは、日記に絵が添えられた形式のもののようにであったようである。石原昭平氏は絵日記と日記絵の用語を区別し、「絵日記」は「自身が身の上を私的に、あるいは私的立場で、実生活の事実を描くもの」、「日記絵」は「享受者が共通に理解できる場面や心情、あるいは公的な有識の立場や目的から客観的意識に支えられながら記されたもの」であると述べる^二。本論では、源氏が私的な立場で絵日記を描いた側面や、源氏の須磨の日記に絵が添えられていたということから、源氏が制作したものを「絵日記」という用語を使って示すことにする。

第二節 絵日記の性格―『土佐日記』との関わり

須磨の絵日記は「絵合」巻において冷泉帝の前で行われる絵合に勝敗を決める最後の絶品として出される。権中納言側は当時にあつては現代風な『うつほ物語』の俊蔭の漂流譚の物語絵を出し、源氏側はそれに比べて古風な『竹取物語』の絵で対抗する。なかなか優劣が付かず時間が経って夜になってしまいが、源氏の須磨の絵日記が登場することによって、源氏の左方が勝を得て、絵合は終わることになる。

^二 石原昭平「絵日記と日記絵―日記文学における執筆・享受の一問題」『国文学研究』第三八集（早稲田大学国文学会、一九六八年九月）二二頁

権中納言側が出した『うつほ物語』の絵には、飛鳥部常則の絵に小野道風の書が添えられていたと言う。常則は村上天皇の時代の絵師であるが、一条朝にも高く評価されていて、歴史の記録にその名がしばしば見える。『小右記』長和二年三月三〇日条を引用してみよう。

冷泉院・神泉苑繪圖 故常則所畫、送皇太后宮大夫許、俊賢。(中略)皇太后宮大夫返報云、只今可傳奉、太優美物者^三。

(冷泉院・神泉苑の絵図 故常則の画書、皇太后宮大夫の許(俊賢)に送る。(中略)皇太后宮大夫返報して云はく、只今伝へ奉るべし、太だ優美の物てへり。)

記事によると、実資は故常則が描いた冷泉院・神泉苑の絵図を、道長室明子の兄で皇太后宮大夫を務めていた俊賢の許に送った。その絵は「太優美物者」とあり、素晴らしく美しいものであったと記される。このように、常則の絵は一条朝において高く評価されていたことが窺え、「絵合」巻は平安時代当時の現実を反映している叙述であることが考えられる。

一方、源氏の絵日記については、絵合の終了後、判者である帥宮と議論が交わされる。源氏の絵が評価される理由が次のように提示される。

絵描くことのみなむ、あやしくはかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかり描きてみるべきと思ふをりをりはべりしを、おぼえぬ山がつになりて、四方の海の深き心を見しに、さらに思ひよらぬ限なくいたられにしかど、筆のゆく限りありて、心よりは事ゆかずなむ思うたまへられしを、ついでなくて御覽ぜさすべきならねば、かうすきずきしきやうなる、後の聞こえやあらむと、親王に申したまへば(絵合②三八九)

当時は障子絵や屏風絵、歌枕を通じて、地方の風景を鑑賞する傾向があり、片野達郎氏は紫式部も例外ではなく、須磨や明石を実際には見ることなしに、物語を書いたのではないかと推測するほどである^四。都から離れた所を訪れる機会が限られていた時代に、須磨・明石の絵が現地で描かれたという設定は、物語の中の絵の真实性を高める役割を果たすと言える。前に引用した「須磨」巻の②「人々の語りきこえし海山のありさまを、はるかに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり。」(須磨②二〇〇)においても、須磨を訪れる前に頭の中で考えていた風景と、実際に訪れた時の感想の差異が浮き彫りにされている。

帝の前で行われた絵合で、右方は当時の現代風な『うつほ物語』の絵を出していた。俊蔭の絵については以下のような批評が付けられている。

^三 東京大学史料編纂所(編纂)『小右記』三(大日本古記録、岩波書店、一九六四年)一〇〇頁
^四 片野達郎『源氏物語』の絵画性『日本文芸と絵画の相関性の研究』(笠間書院、一九七五年)五一頁

(右方)「俊蔭は、はげしき浪風におぼれ、知らぬ国に放たれしかど、なほさして行
きける方の心ざしもかなひて、つひに他の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを
弘め、名を残しける古き心をいふに、絵のさまも唐国と日本とをとり並べて、おもし
ろきことどもなほ並びなし」と言ふ。(絵合②三八一)

物語本文に『うつほ物語』の俊蔭が言及されるのは注目に値する。高橋亨氏は、「絵合」
巻に俊蔭の漂流譚が語られることから、須磨の絵日記に俊蔭が残した家の遺文集を喚起す
る^五。早く、中村忠行氏は、遺文集が発見され読まれる筋に、菅原道真の影響を見出し、「こ
れらの集には、必ずや唐土の風物を詠じた詩や、留守を守る肉親の情を述べた詩などが、
含まれてゐたことであらう」^六と『菅家三代集』が『うつほ物語』の俊蔭の遺文集の創作の
素材になっていることを明らかにした。高橋氏は中村氏の研究を踏まえた上、『うつほ物語』
の場合は、道真の史実と比べて「より多様で私的な日記・歌・絵の存在を設定しているこ
とが、あらためて注目されてくる」^七と読み解き、『うつほ物語』の創作性を高く評価する。
俊蔭の遺文集についての記述を『うつほ物語』の本文から取り出してみると次の通りであ
る。

大將は、「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日
記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書きて
侍りけると、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、そ
の中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」など奏し給ふ。

(蔵開上・五二七〜五二八) 八

「蔵開・上」巻の時点では明確にされないが、蔵の中の遺文集に絵が含まれていたこと
が、物語の結末部の「楼の上・下」巻において、改めて提示される。

尚侍、大將に、「いとかたじけなき御幸を、いかが仕うまつるべからむ」。「唐土の集の
中に、小冊子に、所々、絵描き給ひて、歌詠みて、三巻ありしを、一卷を朱雀院に奉
らむ」。(楼の上・下、九四一)

五 高橋亨「宇津保物語の絵画的な世界」『物語と絵の遠近法』(ぺりかん社、一九九一年) 一四六
頁〈初出〉『風俗』(日本風俗学会、一九八三年九月)

六 中村忠行「宇津保物語の背景」『宇津保物語研究会(編)『宇津保物語新論』(古典文庫、一九
五八年)』五二四頁

七 高橋亨「宇津保物語の絵画的な世界」『物語と絵の遠近法』(ぺりかん社、一九九一年)
八 室城秀之(校注)『うつほ物語 全』(改訂版、おうふう、二〇〇一年) 以下、括弧の中に巻
名・頁数だけを表記する。

「楼の上・下」巻を参考にすると、俊蔭の残した書物の中には、絵が描かれた小冊子が含まれていたと明言される。諸研究における指摘の通り、確かに須磨の絵日記には『うつほ物語』の俊蔭の遺文集を受け継ぐ側面がある。

一方、高橋氏は「梅枝」巻については触れられていないが、書物を通じて精神的繋がりを形成するという意識は『源氏物語』『梅枝』巻においても窺うことができる。須磨の絵日記は最終的に明石の姫君を含む子孫に受け継がれることが予想されるのである。

またこのごろは、ただ仮名の定めをしたまひて、世の中に手書くとおぼえたる上中下の人々にも、さるべきものども思しはからひて、尋ねて書かせたまふ。この御箱には、立ち下れるをばまぜたまはず、わざと人のほど、品分かせたまひつつ、草子、巻物みな書かせたまつりたまふ。よろづにめづらかなる御宝物ども、他の朝廷までありがたげなる中に、この本どもなん、ゆかしと心動きたまふ若人世に多かりける。御絵どもととのへさせたまふ中に、かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむと思せど、いますこし世をも思し知りなんに、と思し返して、まだ取り出でたまはず。

（梅枝③四二二～四二三）

さまざまな調度品を備えながら、源氏は須磨の絵日記を、将来、明石の姫君に伝えようとする考えを頭にする。父の記憶や経験が込められたものが、次の世代へ伝えられているという意識は『うつほ物語』と共有されている。

このような源氏の行動は平安時代の貴族の父の役割に照らし合わせてみて、どのように解釈できうるのだろうか。『源氏物語』が書かれた時代、平安貴族の父親は娘の入内に際して、調度品を備える役割を果たしていたようである。『御堂関白記』長保元年十月二十一日条に、道長は娘彰子の入内に際して、常則の描いた大和絵屏風を用いるにとどまらず、高位の者たちに歌を詠ませて、その色紙形を行成に書かせたという。

庚午、土危、四尺屏風和歌〔令〕人々讀^九。

（庚午、土危、四尺屏風の和歌を人々をして読ましむ。）

また、藤原行成の『権記』長保元年十月三十日条に、

卅日 自内参西京、書倭繪四尺屏風色帟形、〔故常則繪、哥者當時左丞相以下讀之。〕

（三十日 内より西の京に参る。倭絵の四尺屏風の色紙形を書く。〔故常則の絵なり。歌は当時の左丞相以下、之を詠む。〕）

とあり、この条は「倭絵（大和絵）」の記録に見える最初の用例としても有名であるが^{一〇}、

^九 東京大学史料編纂所（編）『御堂関白記』上（大日本記録、岩波書店、一九七七年）三五頁

このように『御堂関白記』や『権記』には、藤原道長が彰子に最高の調度品を与える様子が記録されているのに対して、源氏は常則の絵にまさると言われた素晴らしい須磨・明石の絵日記を明石の姫君にすぐには渡さないのである。そこには、権力を得るために絵日記を利用するのではなく、娘の成長に合わせて、与えるべき時期を賢明に調節し、娘を指導していく父像が写し出されていると言える。

以上、考察してきたように、須磨・明石の絵日記に関する叙述が『うつほ物語』の俊蔭のしわざの射程の中で書かれていることは確かであるが、『源氏物語』は単に『うつほ物語』を援用しただけであるとは思われない。「絵合」巻に戻って、絵合に提出された源氏の須磨の絵日記がどのようなものであったか、考察を深めてみよう。

左はなほ数ひとつある果てに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐれたるを選びおきたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描きたまへるは、たとふべき方なし。親王よりはじめてまつりて、涙とどめたはず。その世に、心苦し悲しと思ほししほどよりも、おはしけむありさま、御心に思ししことども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々磯の隠れなく描きあらはしたまへり。草の手に仮名の所どころに書きまぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる、たぐひゆかし。誰も他ごとと思はさず、さまざまの御絵の興これにみな移りはてて、あはれにおもしろし。よろづみなおしゆづりて、左勝つになりぬ。

(絵合②三八七〜三八八)

須磨の絵日記は、草書体の漢字に、仮名で書かれた歌なども添えられた、絵日記の形態であったことが知られる。文脈からは「まほのくはしき日記にはあらず」と、あらたまつた漢文日記ではないことがはっきり示される。また、須磨の絵は「日記」と呼ばれていることが特徴的である。

ところで、絵合に権中納言側の俊蔭の絵に対して、源氏側が出したのは竹取の翁の物語絵であった。その絵物語は巨勢相覧の画、紀貫之の筆跡で書かれていたと叙述される。特に、貫之の名前が出されるのは、単に能書家の名前を挙げた以上の意味があるように考えられる。

右は、かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照

一〇 家永三郎「倭絵の発生」『上代倭絵全史』（名著刊行会、改訂重版、一九九八年）（初版）（高桐書院、一九四六年）七四〜七五頁

らしけめど、もしきのかしき御光には並ばずなりにけり。阿倍のおほしが千々の金を棄てて、火鼠の思ひ片時に消えたるもいとあへなし。車持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に瑕をつけたるをあやまちとなす。絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。(絵合②三八〇～三八一)

「絵合」巻以外にも『源氏物語』は「桐壺」巻、「賢木」巻、「総角」巻に紀貫之に言及している。

・このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。(桐壺①三三三)

・多かめりし言どもも、かうやうなるをりのまほならぬこと数々に書きつくる、心地なきわざとか、貫之が諫めたる方にて二、むつかしければとどめつ。みなこの御事をほめたる筋にのみ、大和のも唐のも作りつづけたり。(賢木②一四二～一四三)

・(薫)「わが涙をば玉にぬかなん」とうち誦じたまへる、伊勢の御もかうこそはありけめとをかしく聞こゆるも、内の人は、聞き知り顔にさし答へたまはむもつつましくて、「ものとはなしに」とか、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけむをなど、げに古言ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出でたまふ。

(総角⑤二二三～二二四)

これほど、紀貫之という固有名詞が言及されることは、『源氏物語』が文人紀貫之について「強い関心」二二を持っていて、貫之の表現の世界に魅力を感じていたことを明らかにする。

十世紀前後に活動した恵慶法師の『恵慶集』一九二番歌の詞書には『土佐日記』に関する言及があり、恵慶が見た『土佐日記』には絵が備えられていたことが知られる^{二三〇}。

二二「新編日本古典文学全集」が底本にしている大島本は「いさめたうるるかたにて」になっているが、意味が不明確であり、「伊井春樹、伊藤鉄也、小林茂美(編)『源氏物語別本集成』第三卷(桜楓社、一九九〇年)四四〇～四四一頁」、「伊井春樹、伊藤鉄也、小林茂美(編)『源氏物語別本集成(続)』第三卷(桜楓社、二〇〇六年)五一二頁」を参考に、陽明文庫本の「いさめたるかたにて」を採って改めた。

二三島田とよ子「明石中宮と藤の花―木高き木より咲きかゝりて―」『源氏物語の探究』第一〇輯(風間書房、一九八五年一〇月)一二五頁。島田氏は『源氏物語』の中に貫之の名前が四回も出されると指摘するが、明石中宮と藤の花に関する論文であり、「絵合」巻については触れられていない。

二三伊井春樹「絵日記の系譜―『蜻蛉日記』から『狭衣物語』へ―」『王朝物語研究会(編)『論集源氏物語とその前後』第一卷(新典社、一九九〇年五月)』一一九頁、菊地靖彦(校注・訳)

つらゆきがとさの日記を、ゑにかけをを、いつとせをすぐしける、家のあれたる心を

くらべこしなみぢもかくはあらざりきよもぎのはらとなれるわがやど^{一四}

現在は当時の本が残っていないので、絵を最初から伴っていたか、後に絵が添えられ作り変えられたのかは確かめる術がないが、貫之の没年から遠くない時代に、絵を伴う『土佐日記』が存在したことが推測される。

本論では、源氏の須磨の絵日記の場合、絵に仮名がまぜられ、和歌が添えられていたという記述から、須磨の絵日記が、俊蔭の遺文集のような性格と共に『土佐日記』のような形式を持つていたと考えたい。『土佐日記』が土佐から京への旅を背景にした紀行文の性格を持つ旅の日記文学であったとすれば、源氏の絵日記は須磨を背景に、仮名文や歌を添えたものである。また、『源氏物語』は須磨の絵日記が当時の屏風絵とは違い、直接その地に足を運んで暮しながら見た風景を歌と絵に仕立てたものであることを強調していた。『源氏物語』が須磨の絵日記に仄めかしたのは紀貫之の『土佐日記』のような世界であったと言えるだろう。

第三節 『蜻蛉日記』における絵の意識

須磨の絵日記を考えるうえにおいて『土佐日記』のような世界を目指したと考えられることについてはすでに論じた通りであるが、『土佐日記』と須磨・明石の絵日記の志向の間にはもう一段階の媒介があったように思われる。『土佐日記』には、例えば、ある日の記事は「六日。昨日のごとし。」^{一五}とだけあるように、具注暦に沿って書かれる漢文日記の影が残されている。一方、須磨・明石の絵日記は、「草の手に仮名の所どころに書きまぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる」という記述から、より仮名文的なものであったと判断されるからである。漢文日記から『土佐日記』への流れを受け継ぎながらも、より仮名文の流麗さを出している作品として思い浮かぶのは、『蜻蛉日記』である。『土佐日記』に比べて、『蜻蛉日記』は「王朝文体史（自立的な仮名散文）」の形成に参与することになる^{一六}と評価されているように、より和文の世界に寄っている。須磨・

「解説」『土佐日記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）五九頁。

一四 川村晃生・松本真奈美『惠慶集注釈』（私家集注釈叢刊、貴重本刊行会、二〇〇六年）二七九頁

一五 菊地靖彦（校注・訳）『土佐日記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）二二頁

一六 渡辺秀夫「漢文日記から日記文学へ」『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）二七六頁

明石の絵日記は『土佐日記』を理想としながらも、その間に『蜻蛉日記』のような仮名散文の性格を取り入れたものとして設定されていると思われる。

『蜻蛉日記』は散文に和歌が織り成されている形式であるが、その散文的世界の中、絵に関する記述が目につくことについては、すでに先行研究で指摘されてきた^{一七}。作者の絵に関する認識が窺える部分を引用してみよう。

下巻「一六五段」

わかき人こそかやうにいふめれ、我ははるのよのつね、秋のつれづれ、いとあはれふかきながめをするよりは、のこらん人の思ひいでも見よとて、絵をぞかく。さるうちにも今やけふやとまたる命、やうやう月たちて日もゆけば、さればよ、よも死なじものを、さいはひある人こそ命はつづむれと思ふに、うべもなく九月もたちぬ^{一八}。

この部分には、絵を描いて後の世に残そうとする意識が窺える。『源氏物語』『梅枝』巻には「かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむと思せど」とあったように、絵日記を後代に伝える意識は『源氏物語』と『蜻蛉日記』の両方に重ねられている。今西祐一郎氏が指摘しているように、『蜻蛉日記』が「兼家の私家集的なるものの編纂という役目を担う」^{一九}性格を持つていることを考慮に入れれば、『蜻蛉日記』の執筆に記録性が伴っていたことは判然としている。また、福家俊幸氏は『蜻蛉日記』が兼家文化圏というべき、周辺の人々を意識して書き始められたことは確実である^{二〇}と指摘している。『蜻蛉日記』には個人の内面が詳細に描写される側面があるが、代々伝えられる「家」の歌集を編む意識が働いていたことも注視される。

さらに、作者の絵の素養に関わって、先行研究では道綱母の鳴滝ごもりの部分が注目されている。

中巻「一一六段」

夕暮になるほどに、念誦声に加持したるを、あないみじと聞きつつ思へば、むかし我身にあらんことは夢に思はで、あはれに心すごき事とては、ただかやうに絵にもかき、心ちのあまりに言ひにも言ひて、あなゆゆしとかつは思ひしさまに、ひとつ違は

^{一七} 石原昭平「絵日記と日記絵―日記文学における執筆・享受の一問題」『国文学研究』第三八集（早稲田大学国文学会、一九六八年九月）二四頁、伊井春樹「絵日記の系譜―『蜻蛉日記』から『狭衣物語』へ」『王朝物語研究会編』『論集源氏物語とその前後』第一卷（新典社、一九九〇年）一一八頁

^{一八} 今西祐一郎（校注）『蜻蛉日記』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年）一九八頁

^{一九} 今西祐一郎『源氏物語覚書』（岩波書店、一九九八年）六九頁

^{二〇} 福家俊幸『紫式部日記』に記された縁談―『源氏物語』への回路―「福家俊幸・久下裕利（編）『王朝女流日記を考える―追憶の風景』（武蔵野書店、二〇一一年）一六二頁

ずおぼゆれば、かからんとて物の思はせ言はせたるなりけりと、思ひ臥したるほどに、
我もとなるはらから一人、又、人もろともに物したり^三。

松原一義氏は、絵に関する右の引用の叙述を手掛かりに緻密な分析を行い、「道綱母であれば、その興味関心から収集管理させていた高光関係資料をもとに、「高光日記絵巻」（扇流）をまとめることは十分可能であつたと見なされる」^三と指摘し、道綱母が「高光日記絵巻」（扇流）の作者である可能性を提示する。確かに『蜻蛉日記』の作者は絵画への関心が強く、その才能も優れていたことが『蜻蛉日記』の文面から確認でき、『蜻蛉日記』と絵との関連について考えさせる。

早く田村悦子氏は古筆手鑑『見ぬ世の友』と『藻塩草』にそれぞれ納められている玉津切の詞書が『蜻蛉日記』の加茂祭の見物段と一致することを明らかにした。田村氏によると、両作品に収められている断簡は「本来一紙」^三を成していたが、後に切断され、それぞれの手鑑に残されているとされる。その断簡は田村氏が『明月記』を読み解き、指摘しているように藤原定家のグループの製作の可能性が強いと思われる。以上のような先行研究は『蜻蛉日記』と絵が緊密な関係にあり、その享受において絵が伴われていた可能性を示唆する。

一方、本論ではこのような『蜻蛉日記』と絵の関係をもとに、源氏の絵日記について考えてみたい。吉野瑞恵氏は『蜻蛉日記』が「日記」と名付けられた理由を探り、「日記という名称は、女性を書くことを容易にする枠組みを与え、歴史に参入する回路を与えた」^四と結論付け、『蜻蛉日記』が持つ社会性を浮き彫りにする。源氏の旅の絵日記は宮廷の絵合で披露されることによって、貴族社会の中でその経験が共有されていく機会を得る。須磨・明石の記録が、絵だけではなく、「日記」という形式のものとして置かれることには、作者が考えていた当時の「日記」なるものの概念が反映されていると思われる。

「梅枝」巻で語られる須磨の絵日記は、都を離れ、見慣れない地域の風景を描くという羈旅的な性格、仮名による叙述と言う設定から『土佐日記』と重なり、また、仮名で書かれた上、書物を後の世に残すという意識から『蜻蛉日記』の影響も見える。つまり、須磨・明石の絵日記は、『土佐日記』から『蜻蛉日記』を経由し、日記文学の流れを汲んで配置されたと思われる。しかも二つの日記文学が絵と非常に深い関係を持っていたことは須磨・明石の絵日記について示唆する場が大きい。『土佐日記』、『蜻蛉日記』を重ねて考えてみる

二 今西祐一郎（校注）『蜻蛉日記』、一四四頁

三 松原一義「高光日記絵巻」（扇流）——「高光日記」が望見できる資料は、『重之子僧集』か——「福家俊幸・久下裕利（編）『王朝女流日記を考える——追憶の風景』（武蔵野書店、二〇一一年）」五三頁

四 田村悦子「蜻蛉日記絵の詞書断簡について」『美術研究』第二四一号（東京国立文化財研究所美術部美術研究所、一九六五年七月）四〇頁

二四 吉野瑞恵「日記と日記文学の間——『蜻蛉日記』の誕生をめぐって——」『王朝文学の生成』（笠間書院、二〇一一年）三三二頁

ことによって、須磨・明石の絵日記の性格がより鮮明に浮かび上がると思われる。

このように『源氏物語』は絵日記が父から娘へと伝来されていく可能性を書き込んでいたのであるが、『源氏物語』以後の作品は、このような『源氏物語』の叙述をどのように受け取っていたのか。以下、伊井春樹氏の先行研究^{二五}に導かれながら、『狭衣物語』と中世王朝物語『浅茅が露』の場合について検討し、そこから逆照射される『源氏物語』の独自性について考えてみたい。

第四節 『狭衣物語』における絵日記

次は、『狭衣物語』の結末部で飛鳥井女君の絵日記が狭衣帝に伝えられる場面である。

ありつる唐櫃を引き寄せさせたまひて、(狭衣)「これや、昔の跡ならん。見れば悲しとや、光源氏のたまはせたるものを」とはのたまはすれど、御覧ずるに、自ら描き集めたまへりける絵どもなりけり。世になべての人のすることとも見えず、ありがたかりける筆の立ち処は、いづれも見所ありてをかしき中にも、我が世にありけることども、月日たしかにしろしつ、さるべき所々は絵に描きたまへり。我が、時々も、御覧じそめしほどよりのことどもは、今少しの目とまらせたまひて、あはれに悲しう思しめさること限りなし。自らのありさま、我が御かたちなども違ふ所なうて、忍びつつ立ち寄りたまひし夜な夜なの月の光、風の音なひ、宵・暁の空のけしきなども、我が心に、をかしうもあはれにも目とまり、心をしめたまひける折々を描きあらはしたまへる、よろづよりも、かの、御心にもあらず、筑紫へ下りたまひけるありさま、目のみ霧りふたがりて、はかばかしうだにもえ御覧じやらず。歌どもは扇に書かれたりしなど、同じことなればとどめつ^{二六}。

日付がされた日記には、女君が狭衣を思いながら、書き込んだ和歌なども加えられていて、所々に絵が添えられていた。しかし、その後、狭衣は絵日記を娘の一品宮から取り上げ、漉かさせて、飛鳥井女君の供養のため、涅槃経の書写に使う。

ありし扇ばかりを残させたまひて、皆細々となして、経紙に加へて漉かせさせたまひて、金泥の涅槃経、御手づから書かせたまひけり^{二七}。

^{二五} 伊井春樹「絵日記の系譜―『蜻蛉日記』から『狭衣物語』へ―」『王朝物語研究会編『論集源氏物語とその前後』第一巻(新典社、一九九〇年五月)」

^{二六} 小町谷照彦・後藤祥子(校注・訳)『狭衣物語』二(新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年)三九七～三九八頁

^{二七} 上掲書、四〇三頁

娘の出生に関する記録が含まれているにも関わらず、絵日記は娘の一品宮には伝わらないのである。『狭衣物語』における絵日記には「見れば悲しとや、光源氏のたまはせたるものを」と『源氏物語』「幻」巻の場面が想起されている。

この世ながら遠からぬ御別れのほどを、いみじと思しけるままに書いたまへる言の葉、
げにそのをりよりもせきあへぬ悲しさやらん方なし。いとうたて、いま一際の御心ま
どひも、女々しく人わるくなりぬべければ、よくも見たまはで、こまやかに書きたま
へるかたはらに、

（源氏）かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ
と書きつけて、みな焼かせたまひつ。（幻④五四七～五四八）

紫の上の一周忌を迎え源氏が手紙を焼いた場面が重ねられることによって、飛鳥井女君の絵日記には、狭衣との間の恋の印としての機能が強調されるようになる。しかし、飛鳥井女君の絵日記には女君本人の生の奇跡や娘の誕生に関わる事柄が含まれていたように、絵日記は母と娘の人生の記録でもあり、特に娘にとっては自分が生まれ育った経緯を知ることができる大事な資料である。

飛鳥井女君の絵日記が娘の出生に関する詳細な記事を書き込んでいるものとして登場することに對して、須磨・明石の絵日記の内容については、物語の本文には直接語られない。推測にわたるが、須磨・明石の絵日記は、明石の姫君の出生の前史としての価値があったかもしれない。かつて王権論の視点では源氏の須磨流離を「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。」（濤標②二八五）という予言の実現のための過程として捉える指摘があった^{二八}。源氏の須磨への流離は、明石の一族に出会う契機であるという先行研究の指摘を踏まえ、源氏の絵日記を眺めてみると、絵日記には明石の姫君の出生と関わる明石の風景などが書かれていた可能性も十分あるように考えられる。森田兼吉氏は「後に明石の姫君に伝え遺しておきたいと思ったのは、その実母とすることが描かれていたから」^{二九}と明石の君との関わりを指摘する。「明石」巻には紫の上を思いながら、絵日記を描く源氏の姿が見えていた。

絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りごと聞くべきさまにしなしたまへり。見む人の心にしみぬべき物のさまなり。いかでか空に通ふ御心ならむ、二

^{二八} 日向一雅「光源氏の王権と「家」『源氏物語の準拠と話型』（至文堂、一九九九年）一〇三～一二二頁

^{二九} 森田兼吉「光源氏はなぜ絵日記を書いたか―須磨・明石から絵合へ―」（佐藤泰正（編）『源氏物語』を読む』（笠間書院、一九八九年）八一頁

条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふをりをり、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがてわが御ありさま、日記のやうに書きたまへり。いかなるべき御さまどもにかあらむ。(明石②二六一)

明石で書かれた絵日記には、紫の上に見せることを前提としていたので、明石の君に関する詳しい描写はまだ為されていなかったと思われる。しかし、この絵日記には、明石の秀麗な景色が刻み込まれていたと考えることはできる。この絵日記に関する叙述の前の部分には、明石の邸宅をめぐる風景が次のように語られていることも念頭に置きたい。

所のさまをばさらにもいはず、作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などのありさま、えもいはぬ入江の水など、絵に描かば、心のいたり少なからん絵師は描き及ぶまじと見ゆ。(明石②二三四～二三五)

描き切れないほどの美しい風情に漂う明石の入道の邸宅を背景に筆を取った源氏の絵日記であれば、そのような明石の風景が描かれていたと想像することも難くない。このような明石の景色を映した絵日記であれば、出生地の秘密を知り、それを受け入れるようになった、「若菜上」巻の時点以降の、中宮になった娘に、絵が伝えられるだろうと、読者は受け取ることができる。

『狭衣物語』の場合、狭衣帝は飛鳥井女君の絵日記を娘の一品宮から取り上げ、『涅槃経』を書写し、供養のために使うのが物語の結末になる。『狭衣物語』の絵日記には娘のことが描かれているにも関わらず、狭衣と女君の恋の跡として扱われ、魂の救済という方向に収斂されていく。一方、『源氏物語』の絵日記には、紫の上への恋を表す側面のあったことが仄めかされながらも、紫の上に絵日記が伝えられる記述はなく、後の世代へ視線が注がれていくことが特徴である。絵日記の受け手として考えられていた紫の上に、明石の姫君の養母という役割が付与されることを考えると、絵日記は時間の経つにつれて、だんだん後代に伝えるものとしての傾向を強く帯びていったと思われる。

第五節 『浅茅が露』における絵日記

中世王朝物語『浅茅が露』に絵日記が登場することは先行研究ですでに指摘され、絵日記は物語の素材として「系譜」を形成していく姿が窺える^{三〇}。「形見の品により父と子で

三〇 伊井春樹「絵日記の系譜——『蜻蛉日記』から『狭衣物語』へ——」『王朝物語研究会(編)『論集源氏物語とその前後』第一巻(新典社、一九九〇年)』

あることが判明する」という話型は、伊東祐子氏が指摘しているように、高藤説話^三までさかのぼることができるが^{三二}、本論文では父の子に対する認知において、母の絵日記がどのような役割を果たしているかについて、一步踏み込んで考えてみたい。というのは、父の形見によって子の存在が知られるのは、よくある話型であるが、それに加えて絵日記を残すことは、血筋の確認だけでなく、子供が育てられてきた過程を父に伝える意味があると思われるからである。

『浅茅が露』は『風葉和歌集』に和歌十首が採録されていて、製作された当時にはそれなりに読まれていた作品のようである。『風葉和歌集』に収められた一首が現在伝える本文には見えず、末尾に散逸部分がある。ここでは現在残されている本文を中心に考察を進めていくことにする。

父の墓参りのための山道で、三位中将は、困難に処した姫君を発見し、その出産を助けるようになり、後にその稚児を引き取る。その際、形見の品々も伝えられるが、そこには、笛と絵日記が残されていた。

衛門につけ奉りて養ひ奉るに、うつくしく見え給ふを、尼上も、「うつくしき者まうけたり」と、よろこび給ふことかぎりなし。中将殿も、こはいかなる人にかとかなしみ給ふに、この形見とて添へたりしものを見給へば、白き色紙十枚ばかりに、絵、葦手などの、いとめでたきを描き集めたるに、あはれなる古言、新しきも、同じ筋にわざとならず書きすさみたり。ありし西の京の家も描きたり。手もいと上手づき、絵の描きざまも、いかばかりなる人ならんと、あはれに、涙とどめがたく見給ふに、奥に巻き込めたるは笛なりけり^{三三}。

引用部によると、白い色紙の十枚ほどに、絵と葦手などが描かれていたという。そこには姫君が過去に身を寄せていた西の京の家も描写されていた。後に三位中将は笛が二位中将の愛用していたものであることを思い出し、稚児の実父である二位中将に、絵日記と笛について語り、稚児の存在を知らせる。

中納言に昇進した二位中将が受け取った絵日記には、稚児を産んだ姫君の生の軌跡が映されていた。姫君の至難な人生が推し量られ、中納言は涙を流す。

三二 『今昔物語集』第二二巻第七話「高藤内大臣語」などに収録される説話。鷹狩に出かけた藤原高藤が雨宿りによつて弥益女と一晚契りを結び、形見に「大刀」を残して去る。生まれた子供は父の形見を根拠として自分の血筋を証明することになる。

三三 伊東祐子『藤の衣物語』と鎌倉時代物語をめぐって「伊東祐子（外編）『平安文学研究 生成』（笠間書院、二〇〇五年）」三四〇頁

三三 福田百合子・鈴木一雄・伊藤博・石埜敬子（校訂・訳）『あきぎり・浅茅が露』（中世王朝物語全集、笠間書院、一九九九年）二五三頁

心もとなく待ち給ふに、やがて奉り給へり。見給へば、まがふべくもなきそれなり。まぎらはしたる色紙の手習ひ、絵なんどの、筆の流れ、墨つきまで、なべてにはありがたきさまなり。あやしき家の軒端に萩あり、夕月夜の空をながむる女房描きたる所に、

(姫君) 訪へとしも思はぬ萩の上風ぞことしもあればまづ答へける

夕暮れは蓬がもとの白露に誰訪ふべしとまつむしぞなく

また、悩ましげにて臥したる所に、笛を手まさぐりにて臥しつつ、涙を払ひたる所に、

(姫君) 笛竹の憂きひとふしを形見にてこの世はながく音ぞ絶えにける

古きも、かやうなる筋のみ、書き消ち書き消ちせられたり。つくづくと見るに、涙は滝の音のやうにこぼれ給ひけり。見はじめたりしに、夜を隔てんも苦しくおぼえしほどの形見にとどめし笛を、今日わが形見に見るべかりける。世にはあるかなきかをたづぬべきたよりもなし。児の生まれける月日も書きつけたり。十月十日とぞある。ありし方違への頃よりまがふべくもなし。

(中納言) 笛竹のひとつよの筋をとどめずはわがこの音ともいかで知らまし

とぞ書き添へ給ふ 三四

絵日記には、二位中将の訪れが途絶えてからの姫君の生活の様子が描かれていて、そこには、まずしい家の軒端に萩を背景に、空を眺める女房の姿が描かれていたという。その女房には姫君本人の心情が投影されているようであり、添えられている和歌には、男の訪れを待っている風景や松虫の音だけが聞こえる寂しい様子が詠まれる。また、男(今の中納言)が残した形見の笛を見ながら、消息も絶えた悲しみを歎く筋の歌などがあり、男を待ちながらその心情を絵と歌に表現することによって、心の慰みとした様子が受け止められる。「書き消ち書き消ちせられたり」という表現からは、書いては消し、消しては書くという繰り返し跡が窺え、悲しい自分の状況を見つめ、心の中の思いを表わす言葉を選ぶのに苦心したことや、戸惑い、複雑な心境の変化などがあつたことが読み取られる。

また、子供が生まれた日が十月十日と具体的に刻まれているが、これは絵日記が姫君本人の感情の表出だけにとどまらず、我が子のための記録としての側面を持っていたことを表す。それによって中納言は自分が方違えによって姫君と出会った時期が十二月の末であつたことを思い出し、その時期に自分の子が宿されたことを分かるようになるのである。

以上、見てきたように『狭衣物語』や『浅茅が露』の場合、絵日記の書き手が男との間に子を設けた母であつたことが特徴であり、男は後に絵日記を手にするによって、会えなかった間、女君がどのように生活したか、子はどのように生まれて育ったかを知るようになる。一方、『源氏物語』の絵日記は書き手が父であることが目に付く。物語の設定上、絵日記が明石の姫君の認知に使われるようなことは起こる必要もないが、一定の期間は姫君の目に触れないようにしたという点を考慮に入れると、絵日記は、子たちの出生に関わ

るものであり、親の生活、心境を書き込んだ絵日記が完成した後には、子と関わっていく様子が窺える。

おわりに

以上、『源氏物語』の「須磨」、「明石」、「絵合」、「梅枝」巻の場面を中心に、源氏の絵日記について考察した。旅の絵日記は、「絵合」巻だけでなく、物語のさまざまな機会に思い起こされている。須磨に退去し、流離を経験した源氏は、絵合を通じて、その経験を人々と分かち合うことになる。物語は須磨・明石の絵日記を配置することによって、父の記憶や経験がやがて娘に伝えられる可能性を示唆する。絵日記は、娘に与えるために製作したものではなかったが、『うつほ物語』の俊蔭の遺文集がそうであったように、先祖の記憶は書物の形態を取ることで、子孫に伝えられる性格を帯びていき、その精神が後代に受け継がれていく媒体となる。

先行研究においては、『うつほ物語』の俊蔭の遺文集が含み持つ菅原家の書物の伝来が指摘されていたが、本研究においては、それを踏まえた上で、仮名で叙述された旅の記録である『土佐日記』との関連を新たに考えてみた。また、『土佐日記』から『源氏物語』の間に『蜻蛉日記』の存在を想定して論じた。『蜻蛉日記』からは「のこらん人の思ひいでも見よとて、絵をぞかく」とあったように、絵や日記を後代に伝える意図が窺えた。源氏が絵日記を明石の姫君に伝えることを思案する「梅枝」巻の叙述には、そのような後代に伝えるものとしての書物に対する意識が介在していたと考えられる。

また、源氏の須磨・明石の絵日記は後代の『狭衣物語』や『浅茅が露』に受け継がれる。この二つの作品に言及される絵日記の書き手は女性で、二人とも男性と別れて子を産んでいる。『狭衣物語』の飛鳥井女君の絵日記は最終的に供養に使われ、『浅茅が露』の姫君の絵日記は子の誕生を示しているなど、『源氏物語』とは多少異なる展開を見せる。これらを逆手に取って『源氏物語』を眺めてみると、源氏の須磨・明石の絵日記は、制作段階では贈与の観念が薄い、段々子孫に伝えるものとしての性質を帯びていくことが看守される。このような源氏の絵日記の性格には「日記」なるものの考え方が投影され、「梅枝」巻では娘に伝えるものとして機能していく。

第六章 源氏の明石の姫君への書道教育

はじめに

『源氏物語』の「帚木」巻、「梅枝」巻などには書道に関する詳細な記述が見える。これに関連して先行研究においては、「帚木」巻に見える書道論から平安時代の書道観を取り出す考察や、物語の中に言及される書体や紙の色の類型が表象する人物の性格との関わりを指摘する研究などが為されてきた。例えば、三条西公正氏は『源氏物語』における書体「草仮名」、「女手」などの用語に注目し、物語は当時の「芸能面の紹介」としての役割を果たしていると指摘する。また、小松茂人氏は芸術論から接近し、「梅枝」の巻の書道論において、女手の理想としたものは、自然の発露としての優雅さであり、見てくれでない、上品な柔和で親しみやすい書風^二であったと指摘し、物語における書道の理想について分析する。ほかに、藤田菖畔氏は作品の中に提示される紙の色に着目し、紙の色は「使われる場面、付ける季節、植物の色、文の内容、送る者と送られる者の立場」^三を表象すると述べる。藤田氏はまた別の論文で、仮名は「単に要件を伝えるだけの文字ではなく、その人の技巧、趣味、教養、人柄を示すしるしのようなもの」^四になったと指摘し、物語における仮名文字の役割について論じている。

それぞれの見解は『源氏物語』に書道がかなり意識されていて、人物造型の一つの方法として使われていることを明らかにし、物語を読み解くための適切な視点を提示している。しかし、『源氏物語』に描かれる書道の場面は、書道論の紹介や各登場人物を特徴付けるだけでなく、二人以上の人物の関係を繋げる役割を果たしているように思われる。特に『源氏物語』においては、父が娘に書道を教える場面が具体的に表現されていることが注目されるが、本論では「若紫」、「初音」、「梅枝」巻を通じて、書道教育の姿を垣間見ようとする。それぞれの場面には、書道という行為を通じて、教える人と習う人が緊密な関係を結んでいく過程が描かれると思うからである。『源氏物語』において、硯と筆が登場し、書

一 三条西公正「源氏物語の書道論」『山岸徳平・岡一男（監修）『源氏物語講座 思想と背景』第五巻（有精堂、一九七一年）』一五七頁

二 小松茂人『源氏物語』の芸道論覚書―書道論について『聖和』第一二号（聖和学園短期大学、一九七三年十二月）八頁

三 藤田菖畔「紫式部の書道観―源氏物語の紙の色について」『語学・文学研究』第九号（金沢大学教育学部国語国文学会、一九七九年一月）六頁

四 藤田菖畔「紫式部書道観―『源氏物語』におけるかな文字」『語学・文学研究』第一五号（金沢大学教育学部国語国文学会、一九八六年一月）四頁

学びが行われる場面は単なる風景ではなく、父と娘が空間を共有する時間を作り出し、物語の人物たちの関係を結んでいく機能を果たしていると思われる。

第一節 「若紫」巻における手習

まず、「若紫」巻において源氏が紫の上に手習を教える場面を考察してみよう。紫の上の歌学びは、諸先行研究によつて検討されてきた。三角洋一氏は「歌まなびと深くかわつて歌物語のあるものが作り出されたのではないか」^五と述べ、歌物語の創作には幼い頃からの歌まなびが連動していることを指摘する。今井久代氏は「歌のやりとりなどできず、自分の夢のままの難遊びに熱中するばかりの若紫から、男君の心を求め歌のやりとりのなかに男君の心をつなぎとめようとする女君へと、ついに紫の上は成長した。」^六と歌学びを通じて紫の上の成長を受け止める。また、鈴木宏子氏は紫の上の詠んだ歌の内容を分析し、その変化を考察している^七。このように先行研究においては、紫の上の歌が注目されてきた傾向があるが、本論では、和歌に伴う書道に焦点を合わせて検討することにする。その際、教育を受ける紫の上だけでなく、教育する源氏についても併せて考えたい。

二条院に引き取られた幼い若紫が、源氏から手解きを受ける場面である。

君は二三日内裏へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本に
と思すにや、手習、絵などさまさまにかきつつ見せたてまつりたまふ。いみじうをか
しげにかき集めたまへり。「武蔵野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いたまへる、墨
つきのいとことなるを取りて見ゐたまへり。すこし小さくて、

（源氏）ねは見ねどあはれと思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを

とあり。（源氏）「いで君も書いたまへ」とあれば、（紫）「まだようは書かず」とて、
見上げたまへるが何心なくうつくしげなれば、うちほほ笑みて、（源氏）「よからねど、
むげに書かぬこそわろけれ。教へきこえむかし」とのたまへば、うちそばみて書いた
まふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおぼゆれば、心ながら
あやしと思す。（紫）「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば、

（紫）かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

と、いと若けれど、生ひ先見えてふくよかに書いたまへり。故尼君のにぞ似たりける。

五 三角洋一「歌まなびと歌物語」『王朝物語の展開』（若草書房、二〇〇〇年）一一〇頁（初出）

六 今井久代「紫の上と和歌―少女が女になるまで」『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐつ

て』（風間書房、二〇〇一年）二〇六頁

七 鈴木宏子「紫の上の和歌―育まれ、そして開かれていく歌」『池田節子・久富木原玲・小嶋菜

温子（編）『源氏物語の歌と人物』（翰林書房、二〇〇九年）

いまめかしき手本習はば、いとう書いたまひてむと見たまふ。雛など、わざと屋ども作りつづけて、もろともに遊びつつ、こよなきもの思ひの紛らはしなり。

(若紫①二五八～二五九)

この場面で源氏は手ずから紫の上に書道を教えている。源氏はお手本にする手習や絵などを直接書き、または集めて紫の上に見せている。当時、字を上手に書くためには、名筆に触れ、目の嗜みも必要とされていたからである。

ここに描写された場面は、源氏と紫の上の日常の一齣を描く以上に、入木道の修練の手順がしっかり反映され書かれていることが考えられる。時代は下るが、尊円親王の『入木抄』『筆仕肝要たる事』には「其筆つかひのやうは、古筆をよく／＼上覧候て御心えあるべく候。」とあり、上手に書くためには、名筆によく触れることが必要であると指摘されている。また、同じく『源氏物語』より後の時代に成立したが、書道の秘伝『麒麟抄』『百日手習用心事』において、「一日見。二日習へ。三日問。(中略)十日不見し本書神妙得自在。如レ此次第シテ百日習ハ當二千日云々。」^八とあることは注目される。つまり、初心者が書を学ぶことにおいて、亀鑑とすべき筆跡を「見る」ことが第一に要求されているのである。『麒麟抄』は南北朝頃の成立であるが、その中には現存しない「筆注法」や「大師の筆注法」などが引用されていて、その以前に存在していた書道論を取り入れて執筆されたと考えられる。中田勇次郎氏が「麒麟抄の中に記されているような複雑な内容の書道がすでにあったと考えなければならぬ。今の内容の麒麟抄が南北朝のころに突如として成立したとは考えにくい」^九と指摘するように、『麒麟抄』は古い伝授書を受け継いでいることが考えられる。従って、『源氏物語』の手習の場面を『麒麟抄』などの書論に照らし合わせてみることは無駄ではなく、物語の理解を深めると思われる。源氏はまさに能書家に準ずるほど、丁寧な手続きを取って紫の上を指導している。

まだ幼い紫の上に丁寧な指導を行っている源氏は、よく書けないと言う紫の上に微笑みを見せ、なだめながら書道を教える。紫の上の書いた手跡には幼さが滲み出るが、発展の可能性が見え、愛嬌も感じられると言う。故尼君の筆跡に似ているということは、当時の人が近親者の手を見ながら、書の練習をしていたことを考えさせる。手習の教えを通じて、紫の上は源氏に少しずつ馴染んでいく。尼君のいない今、紫の上は源氏の筆跡を手本として書を学ぶようになる。この場面では、丁寧に書道を教える源氏の教育者ぶりが描かれていると言えるだろう。

一方、先の引用部は、源氏が北山を訪れ、若紫の祖母に後見を申し入れた場面とも繋がっている。源氏の求婚に対して、祖母の尼君は次のように、書道を話題に持ち出して紫の上の幼さを強調していた。

^八 塙保己一(編)『麒麟抄』(群書類従第九一三巻、続群書類聚完成会、一九二一年)一四三頁

^九 中田勇次郎「麒麟抄考」『心花室集 日本書道史論考(下)』(中田勇次郎著作集、第六巻、二玄社、一九八五年)九三～九四頁

(尼君) ゆくての御事は、なほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむ方なくなむ。まだ難波津をだにはかばかしうつづけはべらざめれば、かひなくなむ。さても、

(尼君) 嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

いとどうしろめたう。(中略)御文にも、いとねむごろに書いたまひて、例の、中に「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへまほしき」とて、

(源氏) あさか山あさくも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ

御返し、

(尼君) 汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき

(若紫①二二八〜二三〇)

「難波津」や「あさか山(安積山)」の歌は当時を代表する手習の歌であることが『古今集』の仮名序から窺える。

なにはづのうたは、みかどのおほむはじめなり。

おほさゞきのみかどの、なにはづにてみこときこえける時、東宮をたがひにゆづりて、くらゐにつきたまはで、三とせになりになれば、王仁といふ人のいぶかり思て、よみてたてまつりけるうた也。この花は梅のはなをいふなるべし。

あさか山のことば、うねめのたはぶれよりよみて、

かづら木のおほきみを、みちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女の、かはらけとりてよめるなり。これにぞおほきみの心とけにける。

あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは

このふたうたはうたのちゝはゝのやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける^{一〇}。

二つの歌は和歌の父と母であると言い伝えられているように、手習の代表的な歌であり、手習をする人はこの歌から習い始めるといふ。尼君は源氏の若紫への求婚について、手習の歌すら書けないと幼さを言い立てて、心配を表している。それに対して源氏は素晴らしい連綿体でなくても、せめて単字で書かれた筆跡でも見たいと願っているのである^{一一}。

以後、源氏は紫の上を二条院に迎え入れ、自ら手習を教える。祖母の言葉と源氏が手習を授ける場面は、女性の教育には書道が欠かせなかったことや和歌を筆で書けるようになる

一〇 竹岡正夫『古今和歌集全評釈(上)』(右文書院、一九七六年) 七四〜八五頁

一一 吉澤義則氏によると、習字には二つの種類があり、「仮名の字形と運筆とを一事々に習得すること」と「歌を写し文を草するための文字のつゞけざまを習得すること」があったと説明される(一三頁)。また、「若紫」巻の源氏と尼君のやりとりは、その二つの習字をめぐる会話であることが指摘される(五九頁)。吉澤義則『日本書道随攷』(白水社、一九四三年)

るということが成長の指標であつたことを明らかにする。

このように、源氏から手習の指導を受けた紫の上であるが、物語の後の展開においては、自分の心を手習に託して表現する姿が見える。針本正行氏によると、女三宮の降嫁の後に詠まれる紫の上の手習歌は、六条院の中で自分の存在を見つめる手段であり、手習歌は「自己と対峙するため」^{二三}に書かれ、「自分を問い直す契機」^{二三}として作用すると説明される。習字から始まった書道は、いつのまにか身について、心情を自由に表現することができるよう発展している。

第二節 「初音」・「野分」巻における書道教育

源氏は須磨退去の際に、明石の君との間に、姫君を得た。しばらくの間、姫君は明石で成長したが、予言を授けられた源氏は、姫君が后になる未来に備え、皇后になるに相応しい教養を授けていく。次は、六条院の春の殿に住んでいる明石の姫君に、北の冬の町に住んでいる実母明石の君から新年のお祝いの品々や手紙が送られてきた時、それに返事を書かせる場面である。

姫君の御方に渡りたまへれば、童、下仕など御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。北の殿よりわざとがましくし集めたる鬚籠ども、破子など奉れたまへり。えならぬ五葉の枝にうつる鶯も思ふ心あらんかし。

（明石）「年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音きかせよ 音せぬ里の」と聞こえたまへるを、げにあはれと思し知る。事忌もえしたまはぬ気色なり。（源氏）「この御返りは、みづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべき方にもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ、書かせたてまつらせたまふ。いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦しと思す。

（姫君）ひきわかれ年は経れども鶯の巣だちし松の根をわすれめや
幼き御心にまかせてくださしくぞある。（初音③一四五～一四六）

明石の君から贈られた歌に、源氏は、明石の姫君が手ずから返事を書くように勧め、硯を準備して書かせている。姫君はこの時、八歳で幼く、歌を書く練習がまだ十分ではない

二三 針本正行「紫の上の手習歌」「中田武司（編）『若菜下（後半）』（源氏物語の鑑賞と基礎知識、

一四、至文堂、二〇〇〇年）」二三二頁

二三 針本正行、前掲論文、二四二頁

状態である。ところで、この文脈には父から書を学ぶ娘の日常が窺えることが注目される。源氏は姫君がすぐ筆を取ることができるように、硯を取りまかなって用意していたのである。

このように源氏はこまめに手習の指導を行っていたが、また「野分」巻には、明石の姫君の硯に関する叙述が見えて興味深い。姫君が日常的に硯を近くにおいて、手習をしていたことを推測させるような描写である。

むつかしき方々めぐりたまふ御供に歩いて、中將はなま心やましう、書かまほしき文など、日たけぬるを思ひつつ、姫君の御方に参りたまへり。(乳母)「まだあなたになむおはします。風に怖ちさせたまひて、今朝はえ起き上がりたまはざりつる」と、御乳母ぞ聞こゆる。(夕霧)「もの騒がしげなりしかば、宿直も仕うまつらむと思ひたまへしを、宮のいとも心苦しう思いたりしかばなむ。雛の殿はいかがおはすらむ」と問ひたまへば、人々笑ひて、「扇の風だにまゐれば、いみじきことに思いたるを、ほとほとしくこそ吹き乱りはべりしか。この御殿あつかひにわびにてはべり」など語る。(夕霧)「ことごとしからぬ紙やはべる。御局の硯と」と請ひたまへば、御厨子に寄りて、紙一卷、御硯の蓋に取りおろして奉れば、(夕霧)「いな、これはかたはらいたし」のとたまへど、北の殿のおぼえを思ふに、すこしなめなる心地して、文書きたまふ。紫の薄様なりけり。墨、心とどめて押し磨り、筆のさきうち見つ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。(野分③二八二〜二八三)

異腹の兄の夕霧が雲居雁に文を送るために、硯と紙を借りる場面である。最初、夕霧は女房の硯を借りるつもりであったが、出されたのは明石の姫君の硯であった。夕霧の突然の訪れに、すぐ取り出す用意のできた硯が明石の姫君のものであったということは、日頃、姫君が文房具を身近にし、手習に励む姿を思わせる。硯と紙をもらった夕霧は「いな、これはかたはらいたし」と一瞬姫君の文房具を手にすることに迷い、恐れる姿を見せる。借りた文房具が姫君用の素晴らしいものであったためである。一方、「北の殿のおぼえを思ふに」とあるように、夕霧は姫君の実母明石の君の身分を思い起こし、姫君の硯と紙を使うことにする。

ここで、姫君の使う紙は紫色の薄い紙であったことが注目される。かつて紫の上の手習の場面にも「紫の紙に書いたまへる」(若紫①二五八)という描写があった。引用部の明石の姫君の文房具にも「紫の薄様」の色紙が見える。藤田菖畔氏は登場人物と紙の色に関する論文の中、「紫色は、皇室、および皇室と同等と思われる身分の高い人の使用する色である」^{一四}と指摘する。先行研究では言及されていないが、源氏によって書道を習った二人に

一四 藤田菖畔「紫式部の書道観―源氏物語の紙の色について」『語学・文学研究』第九号(金沢

同じ紫の色が付与されていることは、二人を養母と養女として繋げていると言える。明石の姫君の文房具が描写されるこの場面は、実母の明石の君より、養母紫の上との繋がりが強調される例として読み取ることができる。

引用文には硯、硯箱の蓋、紙、墨など書の道具が具体的に書き込まれていた。平安時代の硯については、春名好重氏が挙げているように、「重硯筥（かさねのすずりのはこ）」^{一五}を一つの例として考えてみるができる。『類聚雜要抄』「重硯筥」の項目には「承平四年中宮御賀御調度これに用いらるる」^{一六}とあり、その作り方や中身の道具についての詳細な記述が書き込まれている。春名氏は書道史の観点から主に歴史の記録を引き合いに出しているので、『源氏物語』については言及していないが、姫君の硯箱の読解に「重硯筥」を想像してみるのには、『源氏物語』の理解に役立つと思われる。筆や墨、紙などが揃えられている明石の姫君の硯箱は、おそらく「重硯筥」のような精巧なもので、様々な文房具が入っていたものであつたろうと想像される。「承平四年中宮御賀」とは、『扶桑略記』「承平四年三月廿六日。於^ニ常寧殿^一有^ニ太后五十御賀^一」。^{一七}（承平四年三月二十六日。常寧殿に於いて太后の五十の御賀有り。）の記事から、醍醐天皇の女御、朱雀天皇・村上天皇の母、穩子の五十の賀であつたと知られる。

この時点の明石の姫君は八〜十歳頃であると推定され、野分の強い風に「雛の殿」は無事であつたかと聞く夕霧の言葉遣いからも窺えるように、まだ雛遊びに浸っている幼い年齢であることが描き出されている。源氏が備えた明石の姫君の硯箱は宮廷の后のお祝いの席の飾りに準ずるほどの立派なものであつたかもしれない。明石の姫君は後に中宮になるが、何か后にあやかるところがあつたとすれば、いっそう興味深いと思われる。以上の考察を通じて、源氏が予言を信じて、明石の姫君を后に相応しい女性に育てるため、丁寧な書道の教育を行っていたことが窺える。

第三節 「梅枝」巻における書道教育

源氏の明石の姫君に対する書道教育は、「梅枝」巻からも確認することができる。「梅枝」巻には明石の姫君の裳着が描かれているが、源氏は書に格別な気を込めて、儀式を準備する。姫君のために書を集める際には、最上の墨や筆が選出される。

大学教育学部国語国文学会、一九七九年一月）四頁

^{一五} 春名好重『平安時代書道史』（思文閣書店、一九九三年）九一頁

^{一六} 川本重雄・小泉和子（編）『類聚雜要抄指図巻』（中央公論美術出版、一九九八年）二〇五頁。
図は七九〜八〇頁、一二八〜一二九頁から確認できる。

^{一七} 国史大系編修会（編）『扶桑略記・帝王編年記』（吉川弘文館、一九六五年）二二一頁

墨、筆ならびなく選り出でて、例の所どころに、ただならぬ御消息あれば、人々難きことに思ひて、返さひ申したまふもあれば、まめやかに聞こえたまふ。高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、(源氏)「このもの好みする若き人々試みん」とて、宰相中将、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中将などに、(源氏)「葦手、歌絵を、思ひ思ひに書け」とのたまへば、みな心々にいどむべかめり。(梅枝③四一七)

源氏は婦人たちから仮名の手本を集める際、格別な手紙を送り、丁寧に書を依頼する。また、宰相中将、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中将などに葦手や歌絵を頼むが、そのために与えた紙は高級の高麗の紙の薄様のものであり、手本作りにかなり細心な注意を払っている父源氏の姿が窺える。

また、姫君のために、手本、草子、巻物を冊子箱に収めるが、特に仮名の手本を人々に依頼していることが目に付く。

またこのごろは、ただ仮名の定めをしたまひて、世の中に手書くとおぼえたる上中下の人々にも、さるべきものども思しはからひて、尋ねて書かせたまふ。この御箱には、立ち下れるをばまぜたまはず、わざと人のほど、品分かせたまひつつ、草子、巻物みな書かせたまつりたまふ。よろづにめづらかなる御宝物ども、他の朝廷までありがたげなる中に、この本どもなん、ゆかしと心動きたまふ若人世に多かりける。

(梅枝③四二二〜四二三)

入内の際に持参する箱には、明石の姫君が入内してから近くにおいて読むべき草子や巻物などが集められているが、書物の内容だけでなく、それを書写した人の類別まで考慮されている。これらの書物は、内容は勿論であるが、その筆跡を書道の模範にすることができるように作られたものであることが見受けられる。

また、明石の姫君の入内に際して、二つの書物の名が並べられているが、螢兵部卿宮から『古万葉集』、『古今和歌集』が贈られていた。

今日は、また、手のことどものたまひ暮らし、さまざまの継紙の本ども選り出でさせたまへるついでに、御子の侍従して、宮にさぶらふ本ども取りに遣はす。嵯峨帝の、古万葉集を選び書かせたまへる四巻、延喜帝の、古今和歌集を、唐の浅縹の紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺の表紙、同じき玉の軸、綵の唐組の紐などなまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる、大殿油みじかくまゐりて御覧するに、(源氏)「尽きせぬものかな。このごろの人は、ただかたそばを気色ばむにこそありけれ」などめでたまふ。やがてこれとはどめたてまつりたまふ。(螢宮)「女子などを持てはべらましにだに、をさをさは見はやすまじきには、伝ふまじきを、

まして朽ちぬべきを」など聞こえて奉れたまふ。侍従に、唐の本などのいとわざとがましき、沈の箱に入れて、いみじき高麗笛添へて奉れたまふ。(梅枝③四二一～四二二)

明石の姫君のための本として、嵯峨天皇筆の『古万葉集』、延喜帝の『古今和歌集』が含まれていたと言及される。これらの書物が当時存在していたかどうかは分らないが、現在残されている書物から想像してみることは物語の理解に役立つと思われる。

年代的には『源氏物語』より後になるが、例えば、『元永本古今和歌集』を「梅枝」巻の場面に重ねてみることができる。能筆家の藤原定実(一〇七七年頃～一二二〇年頃)^{一八}の手によると推定される『元永本古今和歌集』^{一九}には、さまざまな文様の染め紙や金箔・雲母などが撒かれた料紙の上に、優麗な字が書かれている。明石の姫君のために作られた歌集もこのように美術品としても遜色のないものであったと考えられる。河添房江氏によると、螢の宮の書籍の贈呈は、単に明石の姫君の入内を祝うのではなく、六条院を聖帝の「正統を継承すべきところとして」^{二〇}捉えた意味が込められていると指摘される。

『古今集』と関連して、『枕草子』第二十一段「清涼殿の丑寅の隅の」には次のような記述が見える。

村上の御時に、宣耀殿せんえうでんの女御と聞えけるは小一条の左の大殿の御むすめにおはしけると、誰かは知りたてまつらざらむ。まだ姫君と聞こえけるとき、父おとどの教へきこえたまひけることは、「一つには御手を習ひたまへ。次には琴の御琴を、人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十巻をみな浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ」となむ聞こえたまひけると、聞しめしおきて(後略)^{二二}

要するに宣耀殿女御の父藤原師尹が、第一に仮名の書道を、第二に音楽のたしなみを、第三に『古今和歌集』の暗記を娘に課す内容である^{二三}。『大鏡』「師尹」伝には宣耀殿女御が本当に『古今集』を覚えていたか帝に試しを受けた話が次のように載せられている。

「古今うかべたまへり」と聞かせたまひて、帝、ころみに本をかくして、女御には見せさせたまはで、「やまとうたは」とあるをはじめにて、まづの句のことばを仰せら

^{一八} 小松茂美「元永本古今和歌集の筆者推定とその方法」『元永本 古今和歌集の研究』(講談社、一九八〇年) 一三四頁

^{一九} 小松茂美(監修)『国宝 元永本 古今和歌集』上・下(講談社、一九八〇年)にカラーの写真が載せられ、その姿を確認することができる。

^{二〇} 河添房江「梅枝巻の光源氏」『源氏物語の喩と王権』(有精堂、一九九二年) 三三二頁

^{二二} 松尾聰・永井和子(校注)『枕草子』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年) 五三～五四頁

^{二三} 三角洋一「女性の教養と幼学書」三角洋一(他)『日本の散文―古典編』(放送大学教育振興会、二〇〇三年) 一八三頁

れつつ、問はせたまひけるに、言ひたがへたまふこと、詞にても歌にてもなかりけり。
かかることなむと、父おとどは聞きたまひて、御装束して、手洗ひなどして、所々に
誦経などし、念じ入りてぞおはしける^{二三}。

それを聞いた父師尹は様々な神仏に祈願したという。これに関して、阿部好臣氏は兵藤
裕己氏の指摘する「制度化」^{二四}された歌としての『古今集』の構造を踏まえ、勅撰集とし
ての性格を取り上げ、『古今和歌集』を暗んじるとは、人民の掌握ということ、王者の覚
えるべき必須項目なのだということになる^{二五}と指摘する。ほかに、尤海燕氏は「勅撰集
とは王者が人民を薫陶・徳化するために編纂した礼楽のテキスト、国を治めるのに資する
文化的古典・経典そのものである」^{二六}と論じ、『古今集』における礼楽思想を究明する。諸
先行研究の指摘のように、『古今集』は歌を通じて国を治めるという思想のもとで編纂され
た側面があり、その中に制度化が含まれているという。明石の姫君の后がねの教育におい
て『古今集』が基本的に規範的な書物であった理由は以上の検討からも十分に窺うことが
できる。

一方、本論では別の角度から、『古万葉集』、『古今集』なるものが言及される際、父と娘
の関係を思わせる言説が付されていることに注目しておきたい。先の引用部の傍線部のよ
うに、蛭兵部卿宮は、もし娘がいたとしても、その価値を知らない人には与える気になら
ないと言いながら、大切な写本を源氏の娘のために進呈する。その場面からは、特に「女
子」に伝授するものとしての仮名歌集の側面が垣間見える。

『栄花物語』『御裳ぎ』巻には禎子内親王の裳着の後、大宮彰子から紀貫之筆の『古今集』
二十巻が送られていたことが記されている。

三日までおはしますべけれども、日次の凶^あしければ、二日の夜さり帰らせたまへば、
一品宮の御贈物に、銀、黄金の筥^{はつ}どもに、貫之が手づから書きたる古今二十巻、御子左
の書きたまへる後撰二十巻、道風が書きたる万葉集などを添へて奉らせたまへる、
世になくめでたき物なり。故円融院より一条院に渡りけるものどもなるべし。世にま
たたぐひあるべき物どもならず^{二七}。

二三 橘健二・加藤静子（校注・訳）『大鏡』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九六年）一一
八～一一九頁

二四 兵藤裕己「和歌と天皇―『日本』的共同性の論理―『王権と物語』（青弓社、一九八九年）一
七九頁

二五 阿部好臣「『書物』―物語との相克―『源氏物語 物語文学組成論―』（笠間書院、二〇一一
年）五八四頁

二六 尤海燕「音」と「楽」―勅撰集の編纂原理―『古今和歌集と礼楽思想―勅撰和歌集の編纂
原理』（勉誠出版、二〇一三年）一二六頁

二七 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進（校注・訳）『栄花物語』二（新編日本古典文学全集、

女性の教養として和歌が重視されていたことが、『源氏物語』より後のできごとではあるが、再度確認される。貫之筆の『古今集』、兼明親王（御子左）筆の『後撰集』、道風筆の『万葉集』など、書道の手本を入内に備えるということは後代の事例になるが、『栄花物語』からも窺え、后がねの教育において歌集を手元に置き、見て学ぶことの重要性が伝えられてくる。

小松茂美氏が紀貫之自筆本の流传に言及する中で指摘しているように^{二八}、『袋草紙』上巻「万葉あるいは大同の朝と称し桓武の時かと疑ふ事」には「古今証本。陽明門院御本紀貫之筆、是延喜御本相伝也。」^{二九}（古今の証本。陽明門院の御本紀貫之筆、これ延喜の御本の相伝なり。）という記述が見える。陽明門院とは三条天皇と藤原道長の次女妍子の間に生まれ、後朱雀天皇の后になった禎子である。すでに裳着の場面を引用したが、『古今集』の享受には和歌のアンソロジーは勿論、その筆跡も主要な鑑賞の対象であったことが裏付けられるのである。明石の姫君に渡す書物に「嵯峨帝の、古万葉集」、「延喜帝の、古今和歌集」とあったように、歌の鑑賞のためだけでなく、書が重視されていたことが示され、歌と書とが結び付いて一つのものとして機能していたことを窺わせる。

河添房江氏は、能書家であった嵯峨天皇が王羲之などの古人の書跡を蒐集していたことに言及し、「嵯峨帝の、古万葉集を選び書かせたまへる四巻」とは架空の品ながら、楷書ばなれた行草書の万葉仮名で書かれた四巻の『万葉集』としてイメージされているのかもしれない。^{三〇}と指摘し、その具体的な書体について推測している。明石の姫君に与えられる歌集が筆跡と共に語られる重要性がさらに注目されてくる。

現在東京国立博物館に所蔵されている『元永本古今和歌集』には、多様な字母のくずし字が使われ、さまざまな書体が試され、漢字も用いられる特徴がある。その編纂目的については「実際に消息などを書く際に使うための教科書的性格も兼ね備えていた」^{三一}と評価される。特に、同じ歌や詞書が書体や改行の部分を変えて重出していることは手本としての性格を裏付ける^{三二}。明石の姫君に与えられる歌集は、引用本文の二重傍線部「巻ごと

小学館、一九九七年）三四〇～三四一頁

^{二八} 小松茂美「高野切本古今集・第一種」『古筆学断章』（講談社、一九八六年）

^{二九} 藤岡忠美（校注）『袋草紙』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九五年）三五八頁

^{三〇} 河添房江「梅枝巻の文化的権威と対外関係―嵯峨朝・仁明朝と『源氏物語』―」『仁平道明（編）『源氏物語と東アジア』（新典社、二〇一〇年）』一三九頁

^{三一} 遠藤邦基「表記の戯れ」『浅田徹（外編）『和歌が書かれるとき』（和歌をひらく 第二巻、岩波書店、二〇〇五年）』二四〇頁

^{三二} 上掲の遠藤氏の論文には、第五巻の読人しらすの二六四番「ちらねども（下略）」の歌が重複して写されている点、第五巻の二六五番の詞書「やまとの国に（下略）」が二回繰り返して写されている点、第十九巻「短歌」の読人しらすの巻頭歌「あふことの（下略）」が珍しくも七行に分けて写されていることを指摘する。それぞれは、「小松茂美（監修）『国宝 元永本 古今和歌集』上・下（講談社、一九八〇年）の上巻一九七～一九八頁、三〇六～三〇七頁」の写真から確認できる。

に御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる」にあつたように、『元永本古今和歌集』に見えるような多様な書法を駆使したもので、学びの手本としての性格も有していたと推測される。

以上、考察してきた通り、源氏は明石の姫君が離れて住んでいる母へ手紙を書く際に、詳細な指導を授け、入内に対しては手本や書籍を集め送るが、その行為は単に調度品の準備というものではなく、父から娘に流れる、知の繋がりを形成する過程であると考えられる。

『更級日記』には、『源氏物語』ほどの細かな指導の姿は見えないが、父菅原孝標が作者に行成の娘の手跡を手本として与えた逸話が載せられる。

また聞けば、侍従の大納言の御むすめ亡くなりたまひぬなり。殿の中将のおぼし歎くなるさま、わがものの悲しきをりなれば、いみじくあはれなりと聞く。上り着きたりし時、「これ手本にせよ」とて、この姫君の御手をとらせたりしを、「さよふけてねざめざりせば」など書きて、「鳥辺山たにに煙のもえ立たばはかなく見えしわれと知らなむ」と、いひ知らずをかしげに、めでたく書きたまへるを見て、いとど涙を添へまさる 三三〇。

引用部の「これを手本にせよ」と言った人は、父孝標であると読み取れ^{三四}、この叙述には、娘の書の教育に父が携わっていたことが映し出されている。また、その見習うべき手本の書き手が侍従の大納言（行成）の娘であつたことも瞠目すべきであり、当代の能書家行成の娘も達筆であつたことがはっきり示されている。行成の娘は当時十五歳であり、まだ若い年齢であつたが、父の手ほどきを受けて書が巧みであつたと判断される。これらの例は、父が娘の手習を指導していたことを端的に表す。

また、歴史物語には、書道を受け継ぐ際に、女性にもその秘訣が伝授されていたことが窺える例がある。『大鏡』『実頼』伝には、藤原佐理の娘に関する記述が見える。

おほよそこれにぞ、いとど日本第一の御手のおぼえはとりたまへりし。六波羅蜜寺の額も、この大式（佐理）の書きたまへるなり。（中略）その大式の御女、いとこの懐平つねたふの右衛門督の北の方にておはせし、経任の君の母よ。大式におとらず、女手書にておはすめり 三五〇。

三三 犬養廉（校注）『更級日記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）二九六～二九七頁

三四 犬養廉（校注）『更級日記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）二九七頁、秋山虔（校注）『更級日記』（新潮日本古典集成、新潮社、一九八〇年）三三三頁では、「とらせたりし」の主語を父として捉え、本論も同じ視点に立っている。

三五 橘健二・加藤静子（校注・訳）『大鏡』（小学館、一九九六年）一〇〇～一〇二頁

その娘は父の佐理に劣らず、女流の能筆であったと言う。佐理の娘の例は『栄花物語』第三十六卷「根あはせ」巻にも詳しく言及されている。

歌は巻物二つにて、黄金の表紙、玉を貫きて紐にしたり。絵はこれも題に従ひてかきたり。経任の中納言権大夫の母北の方書きたまへり。九十余の人の、さばかり塗りかためかきたる絵に、つゆも墨がれせずかきかためたまへる、あさましうめでたし^{三六}

引用文には、佐理の娘が皇后宮寛子の春秋歌合の清書の役を務めたことが記述されている。当時、九十歳を過ぎていたが、その筆は力強かったと伝えられる。佐理の娘が、父の書を習い、能書家であったことは、平安時代において父の書道が娘に受け継がれていたことを明白に示す例である。

時代は下るが、中世には父が娘に書の秘伝を授ける例がより多く見えてくる。能書家藤原行成の後裔世尊寺家では、書道の秘訣が口伝されてきたが、第六代伊行の『夜鶴庭訓抄』に「此抄は、伊行卿被書與息女云々。」^{三七}（この抄は、伊行卿書かれ息女に与ふると云々。）とあり、娘の建礼門院右京大夫のために秘伝を書記化して残した意図が確認される。『夜鶴庭訓抄』には、和歌の書き方から願文や障子の色紙に至るまで、適切な筆法に関する誠めが並べられ、硯や墨、筆の保管など文房具についても詳細に記されている。また、宮廷で書道に携わる時に注意すべき点や、秘説なども綴られている。そのタイトルは諸先行研究で指摘されているように^{三八}、『白氏文集』第三卷「諷諭三」の「五絃弾」中の詩句「夜鶴憶子籠中鳴。」^{三九}（夜の鶴、子を憶ひて籠中に鳴く）を典拠とするもので、子を思う親の心情を背景にしている、父の娘の教育に掛けた思いが伝わってきて興味深い。その中で娘に秘伝を残す理由が示されている部分を引用してみよう。

所の人の子孫などは、先祖のしたる事をまなぶべき也。若人も難問人あらば、かうかうと答べし。造紙のほかのものは、女のためよしなけれど、家の風なれば、人よりもつまづまをすこしづつ可^レ知事也^{四〇}。

^{三六} 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進（校注・訳）『栄花物語』三（新編日本古典文学全集、小学館、一九九八年）三九二頁

^{三七} 岡麓（校訂）『夜鶴庭訓抄』『入木道三部集』（岩波文庫、岩波書店、一九三一年）一三頁、塙保己一（編）『夜鶴庭訓抄』（群書類従巻第四九四、続群書類聚完成会、一九三三年）一四七頁

^{三八} 「夜の鶴」という表現は『白氏文集』の影響によるというのは諸研究に指摘されている。草野隆「鶴」「久保田淳・馬場あき子（編）『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九五年）」五八三頁、久富木原玲「鶴」「小町谷照彦・倉田実（編）『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年）」六四五頁。

^{三九} 平岡武夫・今井清（編）『白氏文集歌詩索引』下巻（同朋社出版、一九八九年）三九頁

^{四〇} 岡麓（校訂）、前掲書、六頁

伊行は、藤原行成以来伝えられてきた家風の書道の重要性を喚起し、女性であっても書を学ぶべきであると娘に書の練磨の必要性を述べ、誠めを与えている。

『源氏物語』の明石の姫君は、宮中に仕えた建礼門院右京大夫と立場こそ異なるが、宮廷生活に必要な書道の教養を父が教えていることは、右京大夫の場合と重なる側面があるだろう。『夜鶴庭訓抄』の例は、女性教育において、父の役割の大切さを伝える。『源氏物語』の最初の注釈書と言われる『源氏釈』の著者伊行が『夜鶴庭訓抄』を執筆し、娘を教育していたことは、さらなる『源氏物語』の影響もあるかもしれない。

おわりに

『源氏物語』において、紫の上の手習には、「なにはづ（難波津）」に代表される基礎を学ぶ姿が描かれ、書道は少女への求婚という文脈の中に絡められていた。物語が進むにつれて、紫の上は心の中を手習の歌に表現するなど、成長した姿勢を見せる。紫の上が源氏を心から受け入れるようになる過程には、源氏の丁寧な手ほどきのあることが本文から読み取れ、教育によって、教える人と教えを受ける人は新しい関係で結ばれることが確認される。

また、「初音」巻に見える、源氏が明石の姫君に書道の教育を行う場面は、教育の主体が乳母や母ではなく、父である点が特徴的である。生まれてまもなく父と離れて生活してきた明石の姫君が、六条院の生活に短期間で馴染むことができた理由には、源氏が生活の中で、姫君の目線に合わせた教育を行っていたことを窺わせる。明石の姫君が書道を学ぶ過程は、源氏が姫君を我が娘にふさわしく養育していく過程であり、姫君が自分を源氏の娘として認識していく過程である。

「野分」巻で夕霧の視線によって、実母明石の君の身分が考慮されたように、明石の姫君が明石の地で生まれたことは、貴族社会においてはマイナスの要素であった。明石の姫君が源氏から手習を受けることは、明石の姫君が紫の上と繋がっていくことを暗示する。明石の姫君に用意された手習の紙が紫色であったことは、明石の姫君が手習を通じて養母紫の上の高貴性に連関していることを示唆する。明石で生まれた姫君には、出生地の問題はどうしても切り離せない負性であったが、手習はそのような姫君の教養を磨き、后にさせるための準備の過程であることが読み取れる。また、姫君の硯箱が立派なものであったことは、将来を考慮して、幼い頃から心を尽くして教育している父源氏の努力を窺わせる。

「梅枝」巻には、姫君の入内のために、手本を集め、人々に書を頼む源氏の姿が書き込まれている。そこで『古万葉集』や『古今集』について言及されていることが、「后」としての政治的地位と関わっていることは、諸先行研究の指摘する通りである。しかし、源氏

の行為は藤原行成の娘や藤原佐里の娘のように、書を専門とする能書家が娘を教育する姿を思わせる。そのような父による娘への教育の先頭にいたのは、『源氏物語』の明石の姫君の例であったと判断される。要するに、『源氏物語』には源氏の娘へのお后教育の一つとして、和歌と書をめぐる挿話が描き出されていると考えられる。

第七章 女三宮における朱雀院―父親の過度な愛情

はじめに

『源氏物語』には「入内・降嫁・齋宮・齋院・一品宮など、種々様々な形式」^一の皇女の一生が描かれているが、天皇や親王を父親に持つている娘たちはどのように描かれているのか。『源氏物語』の書かれた平安時代に、娘の裳着、結婚など公式的な儀式に際して、父親は儀式の場所の準備から各部門の担当役の選定に至るまで、中心的な役割をしていた^二。物語に描かれている人生儀礼の中で、皇女の父である天皇はどのように努めているのであろうか。また、それは娘の人生にどのような影響を与えているのであろうか。『源氏物語』の多様な人物の中でも、朱雀院と女三宮の親子関係は注目に値する。父親と娘が異例なほど強く結ばれているからである。女三宮は光源氏への降嫁によって、一時的に父親の強い影響力から離れたかのように見える。しかし、柏木との密事とそれによる女三宮の出家は、父親との強い繋がりを再確認させるものであった。そもそも女三宮の結婚に夫婦関係より後見関係が期待されていたことは、女三宮の悲劇を予告していたのであろう。以下、女三宮の結婚と朱雀院の五十の賀を中心に、二人の親子関係を捉えることにする。

第一節 女三宮の降嫁

女三宮の存在が最初に言及されるのは、「若菜上」巻冒頭の朱雀院による女三宮の婿選びが語られる時である。出家を前にして、女三宮の結婚が唯一の心残りである朱雀院は、考え抜いた結果、女三宮を源氏に結婚させる決心をする。

（朱雀院）「この世に恨み遺ることもはべらず、女宮たちのあまた残りどどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける。さきざき人の上に見聞きしにも、女は心より外に、あはあはしく人におとしめらるる宿世あるなん、いと口惜しく悲しき。いづれをも、思ふやうならん御世には、さまざまにつけて、御心とどめて思

一 勝亦志織『物語の〈皇女〉―もうひとつの王朝物語史』（笠間書院、二〇一〇年二月）三九頁
二 服藤早苗「成育儀礼と父親」『平安朝の父と子』（中公新書、中央公論社、二〇一〇年）八八頁

し尋ねよ。その中に、後見などあるは、さる方にも思ひゆづりはべり、三の宮なん、いはけなき齡にて、ただ一人を頼もしきものとならひて、うち棄ててん後の世に漂ひさすらへむこと、いとうしろめたく悲しくはべる」と、御目おし拭ひつつ聞こえ知らせさせたまふ。(若菜上④二〇)

女三宮は早く母藤壺女御を失い、女房や乳母たちに養育されてきた。父朱雀院は、そのような女三宮にとって自分だけが唯一の「頼もしきもの」であるだろうと述べている。朱雀院の考えでは、女三宮は父だけを頼りにしている幼い子供である。朱雀院自らの女三宮への認識が窺える部分であると言える。

先行研究では女三宮の幼さと関連して様々な議論が成されてきた。武者小路辰子氏は幼稚性の持つ「無限の力」^三に注目し、女三宮の「源氏像と個別の生存を得ていく」^四女性像は幼稚性に基づいていることを指摘する。また、柏木の手紙を隠しきれなかったことから女三宮の幼女性性を読み取る高橋亨氏は、「幼女性の罪は、女の存在を物語の主題として露呈させていったのだ」^五と指摘する。

先行研究の指摘から示唆される点は多くあるが、女三宮の幼さについては、登場人物個人の性格ということではなく、人物間の関係に注目する必要があるだろう。朱雀院を父とする皇女であるという点を考慮に入れることで、物語のなかで女三宮の幼さやそれを補おうとする朱雀院の父親像が浮かび上がるだろう。また、女三宮が弱い性格の女性として描かれる理由を父と関連付けて考えることができるだろう。「若菜上・下」巻を中心に朱雀院と女三宮の姿を追ってみよう。

まず、「若菜上」巻導入部の朱雀院の言葉である。

(朱雀院) 今、はた、またなく親しかるべき仲となり睦びかはしたまへるも、限りなく心には思ひながら、本性の愚かなるに添へて、子の道の闇にたちまじり、かたくななるさまにやとて、なかなか他のことに聞こえ放ちたるさまにてはべる。内裏の御事は、かの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、来し方の御面をも起こしたまふ、本意のごと、いとうれしくなむ。(若菜上④二二―二三)

出家を前にして、朱雀院はこれからの東宮や姫君たちのことが心配でならない。「子の道の闇にたちまじり」という文は『源氏物語』のなかで最も多く引用された^六紫式部の曾祖父にあたる藤原兼輔の和歌、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」

三 武者小路辰子「女三の宮像―幼さへの設問―」『日本文学』第二三巻第七号(日本文学協会、一九七四年十月)八九頁

四 武者小路辰子、八九頁

五 高橋亨「紫式部 源氏物語の〈女三の宮〉―幼女性性の罪」『国文学 解釈と教材の研究』第二二七巻第三号(學燈社、一九八二年九月)六七頁

六 伊井春樹(編)『源氏物語引歌索引』(笠間書院、一九七七年)四三五頁による。

（『後撰和歌集』雑一）を踏まえた表現である。同歌は『大和物語』四十五段にも見える。

堤の中納言の君、十三のみこの母御息所を、内に奉りたまひけるはじめに、帝はいかがおぼしめすらむなど、いとかしこく思ひなげきたまひけり。さて、帝によりて奉りたまひける。

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

先帝、いとあはれにおぼしめしたりけり。御返しありけれど、人え知らず^七。

『後撰集』と『大和物語』から窺える歌の成立事情については論議されているところであるが^八、兼輔が娘桑子を醍醐帝に入内させた頃に、娘の行く先を案じて帝に詠み奉った歌という『大和物語』の成立背景は、『源氏物語』の理解に示唆を与える。引歌を介してみると、女三宮を案ずる朱雀院の心がこの表現に仄めかされていることが読み取れる。

朱雀院は夕霧などを嬪の候補として考えてみたこともあるが、最後に決めたのは、源氏である。

（朱雀院）「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生はしたてけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむ人もがな。ただ人の中にはありがたし、内裏には中宮さぶらひたまふ、次々の女御たちとても、いとやむごとなきかぎりものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうのまじらひいとかなかなからむ。この権中納言の朝臣の独りありつるほどに、うちかすめてこそ心みるべかりけれ。若けれど、いと警策に、生ひ先頼もしげなる人にこそあめるを」とのたまはす。（若菜上④二七）

その理由は、源氏が幼かった紫の上を育てて、妻として迎え入れたように、女三宮を「はぐくむ（育む）人」としての嬪を探していたからである。朱雀院の皇子東宮も多くの求婚者の中で、

かの六条院にこそ、親さまに譲りきこえさせたまはめ（若菜上④三九）

と、源氏への降嫁を勧めていたが、その理由も朱雀院の願いと同様に源氏の「親さま」を

^七 高橋正治（校注・訳）『大和物語』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）二八三～二八四頁

^八 伊井春樹「源氏物語の引歌―兼輔詠歌の投影―」（紫式部学会（編）『むらさき』第一七輯（武蔵野書院、一九八〇年七月））、岡山美樹「堤中納言兼輔の「人のおやの心は闇にあらねども……」の詠歌背景について―『大和物語』第四五段、『後撰集』一一〇二番、『兼輔集』を通して―」（『二松 大学院紀要』第二号（二松学舎大学大学院文学研究科、一九八八年三月）など）。

意識したものであった。女三宮の結婚生活は、朱雀院と女三宮の父娘関係を源氏と女三宮の夫婦関係にスライドさせて、父親の後見をもらうことが期待されていたのである。女三宮の結婚生活が柏木との密通という悲劇に結びつけられることには、夫婦関係であるべき源氏との関係が、最初から危さを内包していたことが窺える。

朱雀院が源氏を女三宮の伴侶として選んだ理由、女三宮を「はぐぐまむ人（育まむ人）」としての夫源氏の役割は、結婚後の源氏と女三宮の描写においても看取することができる。

姫宮のみぞ、同じさまに若くおほどきておはします。女御の君は、今は、公さまに思ひ放ちきこえたまひて、この宮をばいと心苦しく、幼からむ御むすめのやうに、思ひはぐくみたてまつりたまふ。（若菜下④一七八～一七九）

本文には今上帝の女御として大人びた姿になっている明石の女御と対比的に、女三宮の幼い性情が指摘され、源氏が女三宮を「むすめ」のように「はぐくみ（育み）たてまつ」ることが語られている。

「若菜上」巻の女三宮の六条院降嫁を振り返ってみると、女三宮の降嫁に際して、多大な調度品が準備されていた。

かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜まゐりし西の放出に、御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。内裏に参りたまふ人の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。渡りたまふ儀式いへばさらなり。

（若菜上④六一～六二）

幼い娘を源氏に預ける不安な心情が多大な調度品に現れているのであろう。朱雀院の指示によって手配された調度品には、光源氏への孝敬と共に、「また難のある女三の宮の周りだけは固めて魅力をまそうという朱雀院の思い」^九が込められている。まだ幼い女三宮の性格を補うかのように、準備された調度品は父親の愛情の深さを象徴しているのであろう。

以上、娘女三宮の人生儀礼の中、結婚をめぐる朱雀院の役割について考察したが、続いて、父親朱雀院の五十の賀における父と娘の関係と照らし合わせてみよう。

第二節 朱雀院の五十の賀

^九 河添房江「女三の宮物語と唐物―メディアとしての室礼と唐物」『源氏物語時空論』（東京大学出版会、二〇〇五年）一七〇頁〈初出〉『源氏研究』第一〇号（二〇〇五年四月）

平安時代貴族社会において、算賀を祝うことは大事な儀礼であり、その主催は子女やそれに準ずる人が行うのが恒例であった。歴史上の記録には四十の賀を始めとして十年単位で、何十歳かの時に、長寿の祝いが行われ、九十の賀までの記録が見える^{一〇}。「若菜下」巻には、すでに出家している朱雀院の五十の賀が描かれていることが注目値する。登場人物の年齢があまり記載されない『源氏物語』の中で、「算賀は意識的な区切り」^{一二}を表すからである。また、『故実拾要』第六巻の「四十御賀」に「親の賀ハ子孫ナト祝ス。師ノ賀ハ弟子ナト祝ス」^{一二}と記されているように、算賀の主催が子孫が主体であるという側面から考えると、算賀の考察は親子関係を探る手掛かりを与える。「若菜上」巻には光源氏の四十の賀の叙述が見えるが、女三宮夫婦が主催する朱雀院の五十の賀の当日の場面は、簡単に言及されるだけである。

朱雀院の五十の賀に関する叙述は、女三宮への対面を願う朱雀院の希望から始まる。娘との対面を願う朱雀院の意向を聞き、源氏は次のように、

ついでなくすさまじきさまにてやは、這ひ渡りたまふべき、何わざをしてか、御覽ぜさせたまふべき、と思しめぐらす。このたび足りたまはむ年、若菜など調じてやと思して、さまざまの御法服のこと、斎の御設けのしつらひ、何くれと、さまことに変わることもなれば、人の御心しらひども入りつつ思しめぐらす。

（若菜下④一七九―一八〇）

朱雀院に参上するきっかけとして、「このたび足りたまはむ年、若菜など調じてや」と、朱雀院の五十の賀を計画するのである。さらに、朱雀院からの女三宮の琴の音を聞きたいという意向を、冷泉帝から伝え聞いた源氏は五十の賀のために、女三宮に琴も熱心に教える。

宮は、もとより琴の御琴をなん習ひたまひけるを、いと若くて院にもひきわかれたてまつりたまひにしかば、おぼつかなく思して、（朱雀院）「参りたまはむついでに、かの御琴の音なむ聞かまほしき。さりとて琴ばかりは弾きとりたまひつらん」と、後言に聞こえたまひけるを、内裏にも聞こしめして、（帝）「げに、さりとて、けはひことならむかし。院の御前にて、手尽くしたまはむついでに、参り来て聞かばや」などのたまはせけるを、大殿の君は伝へ聞きたはひて、年ごろさりぬべきついでごとには、教へきこゆることもあるを、そのけはひはげにまさりたまひにたれど、まだ聞こしめ

一〇 小町谷照彦「算賀」「山中裕・鈴木一雄（編）『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年十二月）」

一二 永井和子「講演」『源氏物語』の年齢意識―光源氏四十賀の現実性」「紫式部学会（編）『むらさき』第四一号（武蔵野書院、二〇〇四年十二月）一一頁」

一二 故実叢書編集部『故実拾要』（改訂増補 故実叢書、第一〇巻、明治図書出版、一九九三年）三八二頁

しどころあるもの深き手には及ばぬを、何心もなくて参りたまへらんついでに、聞こしめさんとゆるしなくゆかしがらせたまはんは、いとほしたなかるべきことにも、いとほしく思して、このごろぞ御心とどめて教へきこえたまふ。（若菜下④一八一）

このように、五十の賀を準備することを通じて、源氏は女三宮に手ずから琴の稽古を授ける。賀の準備は二人が親密に触れ合う時間を設けるものであった。

調べことなる手二つ三つ、おもしろき大曲どもの、四季につけて変るべき響き、空の寒さ温さを調べ出でて、やむごとなかるべき手のかぎりを、とりたてて教へきこえたまふに、心もとなくおはするやうなれど、やうやう心得たまふまゝに、いとよくなりたまふ。（源氏）「昼はいと人しげく、なほ一たびも揺し按ずる暇も心あわただしければ、夜々なむ静かに事の心も染めたてまつるべき」とて、対にも、そのころは御暇聞こえたまひて、明け暮れ教へきこえたまふ。（若菜下④一八一〜一八二）

女三宮に琴を教えるために、源氏は紫の上にまで「御暇聞こえたまひて」、琴を教えることに熱中し、明け暮れ女三宮のそばを離れない。女三宮にとって、この時期は結婚生活の中で、「最も輝いた充実した時代」^{一三}であり、源氏と女三宮には二人がはじめて共有した濃密な、充実した時間^{一四}であったに違いない。しかし、この幸せな時間でさえ、女三宮は、源氏と夫婦というよりは、源氏の娘のように後見される様子である。

源氏が力を入れた甲斐があり、女三宮の琴の上達は、正月に催された六条院の試楽の場面に描写される。

琴は、なほ若き方なれど、習ひたまふ盛りなれば、たどたどしからず、いとよく物に響きあひて、優になりにおける御琴の音かなと大将聞きたまふ。（若菜下④一九〇）

しかし、女三宮は源氏から教えられた優れた琴の音色を、父親の前で披露する機会がなかなか得られない。お祝いの宴が三回に渡り、延期になるからである^{一五}。史実のなかでも賀の延期は「非常に稀有な事態」^{一六}にしか見受けられないが、物語の中で三度の延期が描かれるのは、読者の注意を引こうとする作者の意図を反映したものであろう。

^{一三} 沢田正子「源氏物語の楽の音」『枕草子的美意識』（笠間書院、一九八五年）二九三頁

^{一四} 三村友希「二人の紫の上―女三の宮の恋」『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上』（翰林書房、二〇〇八年）二二頁

^{一五} 三度の延期に関わる本文の引用には、①、②、③の記号をつけた。

^{一六} 相澤佐与「若菜巻の賀宴の準備―源氏四十賀と朱雀院五十賀」『実践国文学』（実践国文学会、一九九三年三月）一〇三頁、相澤氏は『権記』に記された長保三年、東三条院詮子の四十の賀の延期を準備として提示している。

①院の御賀、まづおほやけよりせさせたまふことどもいとちたきに、さしあひては便なく思されて、すこしほど過ごしたまふ。二月十余日と定めたまひて、楽人、舞人など参りつつ、御遊び絶えず。(若菜下④一八三)

②かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、八月は、大将の御忌月にて、楽所のこと行ひたまはむに便なかるべし、九月は、院の太后の崩れたまひにし月なれば、十月にと思しまうくるを、姫宮いたくなやみたまへば、また延びぬ。

(若菜下④二六六)

①、②の本文には賀の遅延された、しかるべき理由が具体的に叙述されている。しかし、そこには以上の表面的な理由のほかに、柏木の懸想文の発見と女三宮の懷妊という事柄が絡んでいたことが注意される。

まだ朝涼みのほどに渡りたまはむとて、とく起きたまふ。(源氏)「昨夜のかはほりを落として。これは風ぬるくこそありけれ」とて、御扇置きたまひて、昨日うたた寝したまへりし御座のあたりを立ちとまりて見たまふに、御褥のすこしまよひたるつまより、浅緑の薄様なる文の押しまきたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて御覧するに、男の手なり。(若菜下④二五〇)

源氏に柏木の文を見つけられたのに、まだ事態を知覚せず、ただ隠れるだけの女三宮の姿からは、彼女の幼さが確認されよう。

宮は、何心もなく、まだ大殿籠れり。あないはけな、かかる物を散らしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、心劣りして、さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまをうしろめたしとは見るかし、と思す。

(若菜下④二五〇～二五一)

文の書き手が柏木であることを看破した源氏は、柏木よりも、まず「あないはけな」と、たあいな女三宮の幼い性情を恨む。すでに中世の物語批評書である『無名草子』の「あさましきこと」に「女三の宮の、右衛門督の文、源氏に見えたること」^{一七}と言及され、不注意で弱い性格について言及されていることも同様な視点からであろう。女三宮の未熟さが強調されるこのような事態を経て、五十の賀の開催はさらに延びる。

そのうち、五十の賀の開催は朱雀院の女二宮である落葉の宮に先を越されてしまう。

衛門督の御あづかりの宮なむ、その月には参りたまひける。太政大臣あたちて、いか

めしく、こまかに、もののきよら、儀式を尽くしたまへりけり。督の君も、そのついでにぞ、思ひ起こして出でたまひける。なほなやましく、例ならず病づきてのみ過ぐしたまふ。(若菜下④二六六)

落葉の宮主宰の賀は、実際は太政大臣が采配をふるい、儀式を尽くした盛大なものであった。そこには夫である柏木も参加していたことが語られ、源氏主催の五十の賀に音楽の名手柏木の不参加であったことと対照的である^{一八}。また、女三宮に比べて、「父院の愛情(庇護)が期待できない」^{一九}落葉の宮の方がむしろ娘としての役割をきちんと果たしているのである。女三宮は父親の愛情にふさわしい娘としての役割を果たすことができないのである。

紫の上の発病、女三宮と柏木の密事の発覚などにより、十月には必ずと決めていたにもかかわらず、五十の賀は行われる兆しが見えない。しかし、父親の長寿を祝うべき娘の女三宮は、夫の源氏に賀を催促する一言も添えることができない状況である。夫による父親の賀の開催という文脈は『落窪物語』にも窺うことができる。『落窪物語』には、姫君の父親の七十の賀が、夫道頼(大納言)の後見によって盛大に行われる場面が見える。

今年なむ七十になりたまひけると聞きたまひて、大納言の思しける、「行先遠く、またもしてむとおぼゆる人ならばこそ、のどかになども思はめ。人は、しきりたるやうに思ふとも、七十の賀せむ。わがせむと思ひし本意とげむ。懲ずべき限りは、あまたたびしてき。うれしとおぼゆることは、ただ一たびにてやみなむは、いとかひなし。死にての後には、よろづのことすれども、誰か見はやし、うれしと思はむとする。こたみばかりのこと、力の堪へむ限りせむ」と、思ほし立ちて、いそぎたまふ^{二〇}。

大井田晴彦氏は『落窪物語』の例を取り上げ、「幸福となった姫君が父に盛大な孝養を尽くし」て、「自分を顧みなかった父に孝心を見せるところに、姫君の理想性」を読み取る^{二一}。賀の開催が娘としての役割の披露を意味するという大井田氏の指摘は『源氏物語』にも適用されよう。女三宮の夫源氏による朱雀院の賀が重ねて延期されることは、落窪の姫君の場合と対照的である。

^{一八}「若菜下」巻の終りには「かかる時のやむごとなき上達部の重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど」(若菜下④二八五)と柏木の病勢による不参加と沈んだ雰囲気の中で行われる賀の実情が描写されている。

^{一九}湯浅幸代「落葉の宮をめぐる人々―一条御息所・小野の律師・小少将―」『久保朝孝・外山敦子(編)『端役で光る源氏物語』(世界思想社、二〇〇九年)』一五四頁

^{二〇}稲賀敬二(校注)『落窪物語』(新潮日本古典集成、新潮社、一九七七年)二二九～二三〇頁

^{二一}大井田晴彦「賀宴」『増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹(編)『源氏物語研究集成』第一巻

「源氏物語の行事と風俗」(風間書房、二〇〇二年)』

やがて物語の時間は十一月になったが、賀は開催される兆しが見えない。三度目の延期である。

③参りたまはむことは、この月かくて過ぎぬ。二の宮の御勢ひことにて参りたまひけるを、古めかしき御身さまにて、立ち並び顔ならむも憚りある心地しけり。(源氏)「十一月はみづからの忌月なり。年の終はり、はた、いとの騒がし。また、いとどこの御姿も見苦しく、待ち見たまはむと思ひはべれど、さりとてさのみ延ぶべきことや。むつかしくもの思し乱れず、あきらかにもてなしたまひて、このいたく面瘦せたまへるつくりひたまへ」など、いとらうたしと、さすがに見たてまつりたまふ。

(若菜下④二七一〜二七二)

いよいよ年の最後、十二月になって、もはや賀を延ばすことはできなくなった。算賀はその年を過ぎると開催ができなくなるからである。物語には年末の頃、ようやく五十の賀の開催が言及される。

御賀は、二十五日になりけり。かかる時のやむごとなき上達部の重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々とどこほりつることだにあるを、さてやむまじきことなれば、いかでかは思しとどまらむ。女宮の御心の中をぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、また、かのおはします御寺にも魔訶毘盧遮那の。(若菜下④二八四〜二八五)

しかし、朱雀院の五十の賀は十二月の二十五日に賀が行われたという記述だけで、「若菜上」巻の源氏の四十の賀のような、詳しい儀式の次第や調度品の描写はない。音楽の名手柏木の重患と、それによる左大臣家の人々の嘆きのなか、五十の賀は時間に攻められるかのように、悲しげな情緒に包まれている。

「若菜上」巻には若菜の献上を重ねて最初に四十の賀を主催した玉鬘の聡明さが際立つように構成されていたが「三」、「若菜下」巻の女三宮の賀は延期を重ね、年末に追われるように開催されてしまう。そこには父親の賀を準備すべき娘としての役割を果たせなかった女三宮の姿が露呈されていると言えよう。玉鬘が四十の賀を開催することによって、光源氏家の養女として、また鬘黒家の北の方としての自分をみごとに披露したこととは異なり、女三宮は源氏に頼り、賀が三度も延期されたことをただ見ていることしかできない。柏木

三 川名淳子「若菜巻 光源氏の四十賀について―玉鬘主催の賀を中心に―」『立教大学日本文学』(立教大学日本文学会、一九八五年七月)七七〜七八頁。川名氏は、光源氏本人によって拒まれた四十の賀を、玉鬘が若菜を進上する年中行事を重ねた形式に催したのは「玉鬘の聡明さ」を現していると指摘する。

との関係が露呈した今、女三宮は父親の愛する自慢の娘としての役割をすることができない。

「若菜上」巻には源氏の四十の賀が、「若菜下」巻には朱雀院の五十の賀が語られるが、父親の長寿を願う算賀を背景に、源氏の養女玉鬘と朱雀院の娘女三宮は対照的に描かれ、女三宮の娘としての役割の弱さを際立たせているのである。また、その根底には、女三宮と源氏との結婚に、擬似親子関係を期待していた朱雀院の娘への過渡な愛情が働いているのであろう。

第三節 薫の誕生と出家

すでに言及したように、出家前の朱雀院の女三宮への心配は、「子の道の闇にたちまじり」という表現を通じて表れていた。柏木との密事が源氏に知られ、薫を生んだ女三宮は、再び父親に対面したい希望を述べる。五十の賀があつてからまもなく、朱雀院は「子の道の闇」を痛感せざるをえない。その経緯について考察してみよう。

六条院の息子の誕生を祝い、盛大な祝儀が行われるなか、女三宮は苦しい心情を抱えている。

宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬことの恐ろしう思されけるに、御湯なども聞こしめさず、身の心憂きことをかかるにつけても思し入れば、さはれ、このついでにも死なばやと思す。(柏木④三〇〇)

密事による不義の子、薫を産んだ女三宮は「このついでにも死なばや」と思うほどつらい心境であり、苦悩する。悩む女三宮の姿はやがて朱雀院にも伝えられるのである。

山の帝は、めづらしき御事たひらかなりと、聞こしめして、あはれにゆかしう思ほすに、かくなやみたまふよしのみあれば、いかにものしたまふべきにかと、御行ひも乱れて思しけり。(柏木④三〇三)

父親に女三宮の無事出産のことが告げられたが、女三宮が病気で悩んでいるということ聞き伝えられた朱雀院は、仏道修行に精進することができない。仏道に専念すべき朱雀院は、女三宮から目を離すことができず、つねに娘の状況に気を緩めないのである。出産したのち、娘の女三宮も、氣力を失い、父親に対面したいと願う。

さばかり弱りたまへる人の物を聞こしめさで日ごろ経たまへば、いと頼もしげなくな

りたまひて、年ごろ見たてまつらざりしほどよりも、院のいと恋しくおぼえたまふを、
（女三宮）「またも見たてまつらずなりぬるにや」といたう泣いたまふ。かく聞こえた
まふさま、さるべき人して伝へ奏せさせたまひければ、いとたへがたう悲しと思して、
あるまじきこととは思しめしながら、夜に隠れて出でさせたまへり。（柏木④三〇三）

朱雀院は、女三宮を「親さま」に源氏に預け、自分は仏道修行に励むつもりであった。
しかし、西山の御寺での修行中にも、娘への「異常な執着」^{二三}を断ち切ることはできず、
六条院に関する情報を「常に「聞こしめす」」^{二四}様である。父親に対面したがる娘の意向を
聞いた朱雀院は、出家者という立場を忘れ、再び父親としての役割を果たさずにはいられ
ない。朱雀院は人目を憚り、「夜に隠れて」下山し、六条院を訪れる。

かねてさる御消息もなく、にはかにかく渡りおはしまいたれば、主の院驚きかしこ
まりきこえたまふ。（朱雀院）「世の中を、かへり見すまじう思ひはべりしかど、なほ、
まどひさがたきものはこの道の闇になむはべりければ、行ひも懈怠して、もし後れ
先だつ道の道理のままならで別れなば、やがてこの恨みもやかたみに残らむとあぢき
なさに、この世の譏りをば知らで、かくものしはべる」と聞こえたまふ。

（柏木④三〇三～三〇四）

消息もなく、突然、六条院を訪れるほど、朱雀院は娘に対する心配に急き立てられてい
たのである。朱雀院は幸福な結婚生活を願ってやまなかつた娘を、自らの手で出家させる
ことになる。井上真弓氏は朱雀院の態度から「父の娘への管理が「子を思ふ道」からの逸
脱であり、「子の惑ふ道」への転換を示している」^{二五}と読み取り、藤原兼輔の歌、「人の親
の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」『後撰集』雑一）の源氏物語的変容
を指摘する。幼い娘への心配のあまり、父親役を期待して源氏と結婚させたことが、逆に
若い娘の出家という結末を迎えさせたのである。また、源氏にとつても「子を思ふ道」に
惑う「親」朱雀院の在り方は、光源氏の人生を負う方向に導いている」^{二六}結果を齎した。
女三宮を出家させた後、朱雀院は「すべてこの世を思し悩まじ」と俗世の煩惱から離れ
ようと努めるが、娘に対する執着を振り払うことはできない。

^{二三} 中西紀子『源氏物語』における密着父娘愛―朱雀院と女三の宮の紐帯をとおして―『王朝
文学研究誌』第一二二号（大阪教育大学大学院王朝文学研究会、二〇〇一年三月）三五頁

^{二四} 陣野英則「「聞こしめす」朱雀院の聴力」「室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源
氏物語』第一巻「朱雀院・弘徽殿太后・右大臣」（勉誠出版、二〇〇六年）三九九頁

^{二五} 井上真弓「大君と八宮の「迷妄」を探る」『狭衣物語の語りと引用』（笠間書院、二〇〇五年）
四七七頁、井上氏は八宮の「子の道の闇」を論じるなか、朱雀院の例を含む『源氏物語』全般
における藤原兼輔歌の引用を確認している。

^{二六} 萩野敦子『源氏物語』における親の〈心の闇〉と〈道〉『駒沢大学苦小牧短期大学紀要』
第三〇号（駒沢大学苦小牧短期大学、一九九八年四月）三六頁

山の帝は、二の宮もかく人笑はれなるやうにてながめたまふなり、入道の宮もこの世の人めかしき方はかけ離れたまひぬれば、さまざまに飽かず思さるれど、すべての世を思し悩まじと忍びたまふ。御行ひのほどにも、同じ道をこそは勤めたまふらめなど思しやりて、かかるさまになりたまひて後は、はかなきことにつけても絶えず聞こえたまふ。

御寺のかたはら近き林にぬき出でたる筈、たかうなそのわたりの山に掘れる野老などの、山里につけてはあはれなれば奉れたまふとて、御文こまやかなる端に、(朱雀院)「春の野山、霞もただどしけれど、心ざし深く掘り出でさせてはべる、しるしばかりになむ。

世をわかれ入るなむ道はおくるとも同じところを君もたづねよ

いと難きわざになむある」と聞こえたまへるを(横笛④三四六〜三四七)

むしろ、女三宮の出家した後は「はかなきことにつけても絶えず」連絡を取っているのである。朱雀院は、山の近くから得られる筈、野老などをことさら送ることによって、娘への愛情を表現する。植物の野老(ところ)に「所」が掛けられているこの歌には、「同じところ」つまり、娘と共に極楽浄土へ向かう念願が示されている。

「同じ所」という表現が和歌に使われた他の例は、「宇治十帖」の「総角」巻の薫の歌に見出すことができる。現世での因縁が来世まで続き、極楽浄土に生まれ変わることを願う意味が込められている。「総角」巻の薫の歌は、

あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ(総角⑤二二四)

とあって、薫は糸を巻く総角に喩えて、いつまでも大君と一緒にいたい心情を現している。薫の歌に永遠の合一を願う意味として使われているように、朱雀院の歌には、同じく出家して仏道に精進している娘と、極楽浄土という同じ所に向かって修行していききたいという願いが込められているのであろう。しかし、出家している朱雀院の、これほど娘のことで悩む姿が描かれるのは、「帝」さえも逃れるすべのない「子を思ふ道」の「闇」の広がりを実感させる^{二七}ことでもある。「若菜下」巻の最後、朱雀院の五十の賀の描写が「女宮の御心の中をぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、また、かのおはします御寺にも魔訶毘盧遮那の。」(若菜下④二八五)と、御寺の誦経の響きのなか、女三宮を案じる朱雀院の心情の描写で終わるゆえんである。

^{二七} 本宮洋幸「朱雀院の苦悩―「若菜・上下」巻の方法から宇治十帖へ―」「室伏信助(監修)上原作和(編)『人物で読む源氏物語』第一巻「朱雀院・弘徽殿太后・右大臣」(勉誠出版、二〇〇六年)二九九頁

おわりに

平安時代の女性の人生儀礼に、父親や後見役は重要な役割を担い、とりわけ母方に有力な後見者のいない皇女の場合には父親の存在が大事な意味を持っていた。しかし、そういう時代背景を考慮に入れても、女三宮の結婚における朱雀院の役割は、通常の程度を越えるものとして叙述されている。女三宮の結婚に際して、物語のなかで女三宮の内面が描かれることはほとんどない。朱雀院は親代わりの夫、光源氏を娘の結婚の相手として定めたが、結果的に、女三宮の結婚生活は朱雀院の期待した通りの幸せなものにはならなかった。朱雀院の愛情が娘の女三宮に必ずしも結果的によい方向に作用したとは言えない理由である。

一方、女三宮は娘として父親の五十の賀を率先して主催することが自然であるが、柏木との密事が源氏に発覚するなど、娘としての役割を果たせない状態に陥る。年末に責められて朱雀院の五十の賀が開催されるが、華やかな長寿の祝いであるべき五十の賀は、物語の本文では柏木の病による沈んだ雰囲気だけが叙述されるのである。

その後、出産した女三宮は出家の意志を表明する。しかし、女三宮が自らの出家を遂げようとする時にも、父親の朱雀院の存在は常に意識されている。西山の御寺で仏道に励むべき「山の帝」朱雀院は、娘を案じたあげく、何の予告もなしに六条院に現れるのである。女三宮の自立の道程は遠くに持ち越されているようである。

第三編 二人の父を持つ主人公たち

第三編 二人の父を持つ主人公たち

第八章 玉鬘における二人の父

はじめに

玉鬘は『源氏物語』の中でかなり長い間、その人生が叙述される人物である。特に、玉鬘十帖の存在は玉鬘という人物が『源氏物語』の中で持つ重みを示しているのである。しかしながら、従来の玉鬘に関する分析において、玉鬘物語の全体を貫く作業は十分に行われていたとは言いがたい。本論では幼い玉鬘のことが最初に言及される「帚木」巻や「夕顔」巻、その後の「玉鬘」巻から「真木柱」巻までの玉鬘十帖、さらに「若菜上」巻、「若菜下」巻、「竹河」巻など、玉鬘が登場する部分のすべてを含めて玉鬘物語と呼ぶことにする。玉鬘は藤原氏の血筋を持ちながら、光源氏側の養女になるという特殊な生き方を見せているが、本論では玉鬘が源氏の養女になる過程やその関係を維持していく彼女の努力に注目し、玉鬘における父について考察していきたい。

第一節 光源氏の後見

『源氏物語』の後見に関する研究のなか、加藤洋介氏によると後見の意義は「特定の間関係を前提としながらも、それだけに限定されてしまうのではなく、他者へ依託することによって次々と補完されていく」^一にあると論じられる。三角洋一氏は光源氏と六条院の女性の関係に着目し、「物語世界の中では、端役にいたるまで女性たち一人ひとりの人生の始終が考え抜かれており、ご都合主義で人物が出入りしているのではない」^二と指摘し、

一 加藤洋介「冷泉―光源氏体制と「後見」―」『文学』第五七卷八号（岩波書店、一九八九年八月）三五頁

二 三角洋一「光源氏と後見」『国語と国文学』第七六巻四号（東京大学国語国文学会、一九九九年四月）三〇頁

源氏は自分の亡き後の後見関係まで思いをめぐらしていると分析している。このように後見はする側と受ける側の両方にたいへん重要な意味をもつ関係作りであった。また、倉本一宏氏は『源氏物語』の後見の用例を詳しく分析し、『源氏物語』においては、後見人の有無とその勢威が后妃の将来を決定するものと描かれてはいるものの、后妃の後見人はかならずしも血縁関係にある者でなくとも差支えなく、後見がないために時めくことができなかったという例については、直系の縁者以外にその后妃を後見しようとする者が現れなかった、換言すれば、その后妃の繁栄は公卿層の総意に反するものであったに過ぎない」^三と述べている。倉本氏の指摘するように、源氏は血縁関係がないにもかかわらず、玉鬘を後見しており、それは源氏の繁栄に反するものではなかったことが読み取られる。

玉鬘は夕顔の頓死の後、乳母夫婦によって育てられてきたが、まだ裳着を行っていない「童」であり^四、上流貴族の女性として生きていくためには後見が必要になる。筑紫から都までの玉鬘の父探しの過程は結果的に後見を獲得する過程であるといえる。「裳着により玉鬘は養父の太政大臣光源氏と実父内大臣双方の後見を担うことが示され、冷泉帝の後宮への尚侍として官仕えする時期も近いことが提示された」^五という川名淳子氏の考察のように、玉鬘の裳着は後見の獲得と官仕えの可能性をも含んだものであった。

玉鬘は六条院での生活を始めて以来、柏木や蛸宮など、多くの男性から求婚されるが、玉鬘をめぐる求婚譚は「蛸」巻、「胡蝶」巻を中心に描かれる。源氏は玉鬘の尚侍としての出仕を思い、裳着の儀式を準備するが、それは、玉鬘二十三歳の時である。内大臣は最初玉鬘の腰結いを断つたものの、母親の大宮の仲介により受け入れ、裳着に参加する。これで玉鬘は実父にも認知できるようになる。

玉鬘にとって父は、養父の源氏と実父の内大臣、二人存在するにも関わらず、養父源氏が玉鬘の出仕の後見の役割を果たすことは注目される。服藤早苗氏によると、「成人した女子を、親族のみならず、貴族社会全体にお披露目する儀式である着裳で、権勢のある腰結役は、女子の背後にある政治力と後見力を見せつけるもの」^六であり、父やその代わりのものが見つかからない場合、裳着は中止される場合まであった^七。また、倉田実氏^八は裳着によ

三 倉本一宏『栄花物語』における「後見」について「山中裕（編）『栄花物語研究』第二集（高
科書店、一九八七年）五七頁」

四 高橋亨氏は著書『源氏物語の詩学』（名古屋大学出版会、二〇〇七年）のなかで、「古代・中
世のライフサイクルにおいて、誕生から成人までの期間は「童（わらは）」であり、成人儀礼
を経て「男」と「女」になり、結婚と子育てにたずさわる（六三九頁）」と述べている。

五 川名淳子「玉鬘十帖について―玉鬘の裳着」『小嶋菜温子（編）『王朝文学と通過儀礼』平安
文学と隣接諸学（三）（竹林舎、二〇〇七年）五〇一頁

六 服藤早苗『平安朝の父と子―貴族と庶民の家と養育』（中公新書、中央公論社、二〇一〇年）
八七頁

七 その例として、服藤氏は歴史上の当子内親王の例を出している。三条天皇の娘、伊勢斎宮を
務めた当子内親王の裳着は、最初、藤原道長に頼まれたが実行されず、父上皇の崩御以来、裳
着儀式の挙行の機会を得られなかった。

つて玉鬘が光源氏の養女として正式に認知された点に着目しているが、倉田氏の指摘のように、裳着は世間に玉鬘の存在を披露する意味を持つのであった。裳着の儀式が氏素性を披露する場である点から考えると、玉鬘の裳着の意義は、養父の認知と実父との再会という二つの柱を中心に展開すると言える。

玉鬘を迎え入れた源氏は花散里に日常における世話を頼むが、源氏と花散里の会話は次のように綴られている。

（源氏）あはれと思ひし人の、もの倦^うじしてはかなき山里に隠れみにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども、え聞き出でなむ、女になるまで過ぎにけるを、おぼえぬ方よりなむ聞きつけたる時にだにとて、移ろはしはべるなり」とて、「母も亡くなりにつけり。中将を聞こえつけたるに、悪しくやはある。同じごとうしろみたまへ。山がつめきて生ひ出でたれば、鄙^{おろ}びたること多からむ。さるべく事にふれて教へたまへ」といともやかに聞こえたまふ。（花散里）「げに、かかる人のおはしけるを知りきこえざりけるよ。姫君のひところものしたまふがさうざうしきに、よきことかな」と、おいらかにのたまふ。（源氏）「かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。御心もうしろやすく思ひきこゆれば」などのたまふ。（花散里）「つきづきしくうしろむ人なども、事多からでつれづれにはべるを、うれしかるべきことになむ」とのたまふ。（玉鬘③一二七～一二八）

源氏から玉鬘を「うしろみたまへ」と頼まれた花散里は、養母になることを「うれしかるべきことになむ」と喜んで受け入れている。その上、夕霧を育てたように玉鬘を大切に世話する。ここで注目したいのは、玉鬘が六条院の西の対に住むことになってからも、継子虐めなどの要素はあまり見えないということである。

歴史的な例を参照すると、当時、子のない人が養子や養女を迎え、話し相手とすることはいしばしば行われていたようである。その例として、『栄花物語』第一巻「月の宴」巻に記される昌子内親王が八の宮を養子にしたことが挙げられる。

冷泉院の後宮、御子もおはしませず、つれづれなるを、「この八の宮子にしたてまつりて、通はしたてまつらん」となんのたまはするといふことを^九

右の文脈からは中宮昌子内親王（冷泉院の後宮）に子がなく、その慰めとして八の宮永

八 倉田実「玉鬘の裳着―養女となる次第―」『王朝撰関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇四年）四三九～四六四頁〈初出〉『詞林』第三五号（大阪大学古代中世文学研究会、二〇〇四年四月）
九 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進（校注・訳）『栄花物語』一（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）七九頁

平親王を養子にして育てたことが窺える。昌子内親王の例の他にも、「家門の繁栄のためとか老後の面倒をみてもらうためとかの理由から、結婚適齢期に達した女性を養女に迎えた、実の娘を引き取ったりして後見し、最後の教育や婿取りの準備をする」^{一〇}ことはよくあったようである。『蜻蛉日記』には藤原道綱母が養女を迎え、後見することが描かれている。

かくはあれど、ただいまのごとくにては、ゆくすゑさへ心細きに、ただひとり男にてあれば、年ごろも、ここかしこに詣でなどするところには、このことを申しつくしつれば、いまはましてかたかるべき年齢になりゆくを、いかで、いやしからざらむ人の女子ひとり取り取りて、後見もせむ、ひとりある人をもうち語らひて、わが命のはてにもあらせむと、この月ごろ思ひ立ちて、これかれにも言ひ合はすれば、「殿の通はせたまひし源宰相兼忠とか聞こえし人の御女の腹にこそ、女君いとうつくしげにて、ものしたまふなれ。おなじうは、それをやはさやうにも聞こえさせたまはぬ」^{一一}。

道綱母は「ゆくすゑさへ心細きに、ただひとり男にてあれば」や「ひとりある人をもうち語らひて、わが命のはてにもあらせむ」と寂しさのなぐさめとして養女を探している。このような養女迎えは当時珍しいものではなかったようである。息子との結婚や出世させる意味など、特別な意図もなかった^{一二}。

花散里にとつて玉鬘は道綱母の例のように、心の慰めになる養女であり、継子虐めの対象ではなかった。それは玉鬘物語の位相を考え直す余地を与える。すでに先行研究で指摘されているように、母夕顔の死により、玉鬘は継子虐めの対象として描かれる可能性は含まれていたが、「夕顔没後の玉鬘の物語は、継子いじめの物語としては展開しなかった」^{一三}のである。さらに、金鍾徳氏の指摘するように『源氏物語』の継子譚は人間関係の特殊性によつて話型が変形^{一四}され、「物語の主題や恋の人間関係を中心に」^{一四}書かれたと捉えることができ、玉鬘物語は継子譚の形式を借りながら、そこに拘束されず、表現領域の射程を

一〇 三角洋一「光源氏と後見」『国語と国文学』第七六巻四号（東京大学国語国文学会、一九九九年四月）二六頁

一一 木村正中・伊牟田経久（校注・訳）『蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）二七九頁

一二 倉田実「養女迎えの意図に関する研究史」『蜻蛉日記の養女迎え』（新典社、二〇〇六年）八一～一〇一頁

一三 藤村潔「継子物語としての玉鬘物語」『古代物語研究序説』（笠間書院、一九七七年）二六五頁

一四 金鍾徳「継子譚の伝承と表現——『源氏物語』の継母子関係を中心に——」『日本文学』第五五巻第五号（日本文学協会、二〇〇六年五月）五二～五三頁

広げていることが知らされる。そこで、玉鬘物語は流離の後、源氏という父を探した玉鬘が、源氏側の繁栄を齎す重要な存在としての役割を果たしていく過程を描いていく。

「玉鬘」巻の時点で、右近の報告によって玉鬘の存在を知った源氏はまず、玉鬘の教養を試していた。源氏は当時、都と遠く離れた筑紫で幼年時代を過ごした玉鬘を養女として受け入れることについて、思案していたのである。次は源氏と玉鬘の贈答歌の部分である。

かの末摘花の言ふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて、まづ文のけしきゆかしく思さるるなりけり。ものまめやかに、あるべかしく書きたまひて、端に、（源氏）「かく聞こゆるを、

知らずとも尋ねてしらむ三島江に生ふる三稜のすぢは絶えじを」（中略）

（玉鬘）数ならぬみくりやなにのすぢならばうきにしもかく根をとどめけむ

とのみほのかなり。手は、はかなだちて、よろばはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心おちゐにけり。（玉鬘③一二三～一二五）

源氏は末摘花のことを思い出して、玉鬘の教養をまず歌で判断し、気品ある玉鬘の歌に満足する。洗練された歌は玉鬘を「六条院にふさわしい尊貴な女性として印象付けられる」^{一五}のである。源氏の和歌の試しに合格した玉鬘は源氏に受け取られることになる。このように、玉鬘が源氏の後見を得るようになった背景には、彼女の聡明さも働いている。それが物語の展開の中で、いかに発揮されていくかについては、続いて考察することにする。

第二節 源氏の養女の玉鬘

「若菜上」巻冒頭には朱雀院の出家と女三宮の降嫁の記事が紹介され、次に玉鬘を筆頭として、紫の上、秋好中宮、冷泉帝の勅命による夕霧主宰の四十の賀が描かれる。一方、「若菜下」巻は女三宮と柏木の関係に触れ、朱雀院の五十の賀の催しを最後に締め括られる。玉鬘による源氏の四十の賀と女三宮による五十の賀は、それぞれ宴の辞退と延期という面で合わせて考える必要があるが^{一六}、今回は玉鬘に焦点を当てて論じることにする。

玉鬘は思いがけないゆきによって鬚黒と結婚したが、「若菜上」巻において「左大将

^{一五} 小町谷照彦「光源氏と玉鬘（一）」『秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第五巻（有斐閣、一九八一年）』一三六頁

^{一六} 相澤佐与「若菜巻の賀宴の準拠―源氏四十賀と朱雀院五十賀」『実践国文学』（実践国文学会、一九九三年三月）

殿の北の方」と呼ばれる。そこには妻、母になった玉鬘の姿が窺える。また、若菜を献じて、源氏の四十の賀を主催する玉鬘は源氏の娘としての役割を見事に果たしている。

さるは、今年ぞ四十になりたまひければ、御賀のこと、おほやけにも聞こしめし過ぐさず、世の中の営みにて、かねてより響くを、事のわづらひ多くいかめしきことは、昔より好みたまはぬ御心にて、みな返さひ申したまふ。正月二十三日、子の日なるに、左大将殿の北の方、若菜まゐりたまふ。かねて気色も漏らしたまはで、いといたく忍びて思しもうけたりければ、にはかにて、え諫め返しきこえたまはず。忍びたれど、さばかりの御勢ひなれば、渡りたまふ儀式など、いと響きことなり。

(若菜上④五四～五五)

准太上天皇の位を得たことで、源氏の四十の賀は、盛大な祝いになることが期待されていた^{一七}。しかし、それとは逆に、源氏は朱雀院の病氣のことも考慮し、儀式だったことは辞していた。玉鬘は正月に、大げさでなく、人目を引かないように、四十の賀を計画する。こつそり準備をしたものの、力を注ぎ調度品も適切に配置し、「勢ひ」のある賀になった。このような玉鬘の役割は次のように叙述される。

南の殿の西の放出に御座よそふ。屏風、壁代よりはじめ、新しく払ひしつらはれたり。うるはしく倚子などは立てず、御地敷四十枚、御褥、脇息など、すべてその御具ども、いとよきにせさせたまへり。螺鈿の御厨子二具に、御衣箱四つ据ゑて、夏冬の御装束、香壺、菓の箱、御硯、泔坏、搔上の箱などやうのもの、内々きよらを尽くしたまへり。御挿頭の台には、沈、紫檀を作り、めづらしき文目を尽くし、同じき金をも、色使ひなしたる、心ばへありいまめかしく、尚侍の君、もののみやび深くかどめきたまへる人にて、目馴れぬさまにしなしたまへり。おほかたのことをば、ことさらにことごとしからぬほどなり。(若菜上④五五～五六)

すなわち、語り手は玉鬘の「かどめきたる」才能を評価している^{一八}。まず、賀の主催者になることは祝賀者の子ということを披露する意味がある。子による親の賀の主催に関して、川名淳子氏は「賀を祝うことは自己を育ててくれたことに感謝の意を表すことであると共に、それは立派に成長した現在の我身を誇示する機会」^{一九}でもあると指摘している。

^{一七} 「藤裏葉」巻に「明けむ年四十になりたまふ、御賀のことを、朝廷よりはじめたてまつりて、大きな世のいそぎなり」(藤裏葉③四五四)と記されている。

^{一八} 玉上琢彌『源氏物語評釈』第七卷(角川書店、一九七六年) 九七頁

^{一九} 川名淳子「若菜巻 光源氏の四十賀について(二)——玉鬘主催の賀を中心に——」『立教大学日本文学』第五四号(立教大学日本文学会、一九八五年七月) 七四頁

『大鏡』『道長』伝には藤原道長の六十の賀の噂が次のように語られる。

今年は満六十におはしませば、督の殿の御産の後、御賀あるべしとぞ人申す。いかにまたさまざまおはしまさへて、めでたくはべらむずらむ^{二〇}。

この道長の六十の賀は中宮彰子によって主催されたことが『千載集』の歌にも言及されている^{二一}。『千載集』『雑歌上』の冒頭には藤原道長の歌が載せられているが、詞書は次のように記されている。

上東門院より六十賀おこなひたまひける時、よみ侍りける

法成寺入道前太政大臣

かぞへしる人なかりせばおく山のたにの松とやとしをつまし^{二三}

〔『千載集』雑歌上・九五九〕

右の歌には六十の賀を催してもらったことに對する感謝が表現されているが、道長の娘彰子が賀の主催の役として記されているように、玉鬘は源氏の四十の賀を捧げることによって養女としての役割を果たしていると言える。

また、賀の主催は子の財力を披露する場にもなる。武者小路辰子氏が「賀宴は祝われる者と祝う者の相互の栄えがあり、祝う者がその財力と勢力をみせ、身分に応じた格式をととのえた宴をひらく」^{二三}と指摘するように、玉鬘の左大将の北の方としての力を發揮する場でもある。

久しぶりに六条院を訪れた玉鬘は振分髪・直衣姿のまだ幼い二人の子供を連れてきている。玉鬘は左大将鬚黒の北の方として確固たる立場を得たのであろう。

尚侍の君は、うちつづきても御覽ぜられじとのたまひけるを、大将の、かかるついでにだに御覽ぜさせむとて、二人同じやうに、振分髪の何心なき直衣姿どもにておはす。
(源氏)「過ぐる齡も、みづからの心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々のもよほしになむ、なまはした

^{二〇} 橘健二・加藤静子（校注・訳）『大鏡』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九六年）三二二頁

^{二一} ただ、管見の限り、『御堂関白記』、『小右記』などの歴史記録には賀の様子の記事が見当たらない。

^{二二} 片野達郎・松野陽一（校注）『千載和歌集』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年）二八七頁

^{二三} 武者小路辰子「若菜巻の賀宴」『日本文学』第一四卷第六号（日本文学協会、一九六五年六月）四七四頁

なきまで思ひ知らるるをりもはべりける。中納言のいつしかと儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人よりことに数へとりたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老を忘れてもはべるべきを」と聞こえたまふ。尚侍の君も、いとよくねびまさり、もののしき気さへ添ひて、見るかひあるさましたまへり。

(玉鬘) 若菜さす野辺の小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな

とせめておとなび聞こえたまふ。沈の折敷四つして、御若菜さまばかりまゐれり。御土器とりたまひて、

(源氏) 小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

など聞こえかはしたまひて、上達部あまた南の廂に着きたまふ。(若菜上④五六〜五八)

右の贈答歌において、「もとの岩根」という歌語で光源氏を喩え、「小松」、つまり、二人の子供が源氏の孫であることが喚起され、四十という「源氏の生きてきた時間の長さ」^{二四}が感じられる。「せめておとなび聞こえたまふ」という玉鬘の態度からは、一人前になった玉鬘の母親としての姿が窺える。この部分に関して、伊藤博氏は「玉鬘は真木柱巻末で長男の出生をみた筈で、この時点でやつと一歳二カ月、次男がうちつづいて生まれたとしてもせいぜい生後四カ月で、とうてい「振分髪・直衣姿」には程遠い」^{二五}と指摘し、そのように設定されたのは、「光源氏の統宰から相対的に独立した存在」^{二六}としての玉鬘を明示するためであると説く。玉鬘はたしかに鬚黒の北の方になり、確固たる位置を得たのである。しかし、その玉鬘が源氏の四十の賀を計画して細やかに準備し、若菜を進上し賀を主催しているのは、玉鬘が光源氏の影響から完全に離脱したのではなく、源氏の養女としての関係を維持するために努力している側面を浮き彫りにする。源氏の養女という位置は源氏の後見を受けることを可能にし、その後見の影響力は鬚黒が亡くなった後にも玉鬘側に有効に作用しているからである^{二七}。

二四 川名淳子、前掲論文、八〇頁

二五 伊藤博「源氏物語における構想の継ぎ目―若菜巻の場合」『源氏物語の基底と創造』(武蔵野書院、一九九四年一〇月) 一五六〜一五七頁〈初出〉一九七二年一二月

二六 伊藤博、上掲論文、一五七頁

二七 「竹河」巻には鬚黒の没後、玉鬘の心細い状況が次のように叙述される。「尚侍の君の御近きゆかり、そこそこそは世にひろりたまへど、なかなかやむことなき御仲らひのもとよりも親しからざりしに、故殿情すこしおくれ、むらむらしき過ぎたまへりける御本性にて、心おかれたまふこともありけるゆかりにや、誰にもえなつかしく聞こえ通ひたまはず。」(竹河⑤六〇) 黒鬘の性格は無愛想な面があり、親しいお付き合いがあまりなかったようである。その時、夕霧や薫など源氏側の人々との交流が玉鬘を支える。

第三節 左大臣家の娘の玉鬘

玉鬘十帖における玉鬘は長谷寺の観音の靈驗によって、右近に出会い、源氏の六条院に引き取られた。そこで、養父の源氏の後見を得、実父の内大臣（「若菜下」巻では太政大臣）にも対面する。それによって「若菜上」巻においては、まさに二人の父の娘としての役割を果たしていく。

森野正弘氏は、玉鬘に流れている「藤原氏文化の文脈」^{二八}を読み取り、特に、和琴の演奏は藤原氏文化を表象すると指摘する。玉鬘が主催した四十の賀にも彼女の父である太政大臣、兄弟である衛門督柏木の姿が見える。左大臣側の人々が積極的に参加し、琴が披露される。

朱雀院の御葉のこと、なほ平ぎはたまはぬにより、楽人などは召さず。御笛など、太政大臣の、その方はととのへたまひて、（太政大臣）「世の中に、この御賀より、まためづらしくきよら尽くすべきことあらじ」とのたまひて、すぐれたる音のかぎりを、かねてより思しもうけたりければ、忍びやかに御遊びあり。とりどりに奉る中に、和琴は、かの大士の第一に秘したまひける御琴なり、さる物の上手の、心をとどめて弾き馴らしたまへる音いと並びなきを、他人は掻きたてにくくしたまへば、衛門督のかたく辞ぶるを責めたまへば、げにいとおもしろく、をさをさ劣るまじく弾く。何ごとも、上手の嗣といひながら、かくしもえ継がぬわざぞかしと心にくくあはれに人々思す。（若菜上④五八～五九）

源氏の四十の賀は玉鬘の準備と左大臣家の人々の参加によって、源氏の願い通り大げさではないが、それなりに趣きのある場が設けられている。私的な音楽の遊びではあるが、柏木の上手な琴が興趣を高めている。

続く場面で、太政大臣が玉鬘の視線から「父大臣」と表現されるのは、実父の存在をさらに浮き彫りにする。

父大臣は、琴の緒もいと緩に張りて、いたう下して調べ、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ。これは、いとわらかに上る音の、なつかしく愛敬づきたるを、いとかうしもは聞こえざりしをと親王たちも驚きたまふ。琴は兵部卿官弾きたまふ。この御琴は、宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴を、故院の末つ方、一品の宮の好みたまふことにて賜りたまへりけるを、このをりのきよらを尽くしたまはんとするため、大臣の申し賜りたまへる御伝へ伝へを思すに、いとあはれに、昔のことも恋し

^{二八} 森野正弘「六条院文化の形態変化―常夏巻の玉鬘と和琴」『河添房江 他編『平安文化』エクリチュール』（叢書 想像する平安文学、第二巻、勉強出版、二〇〇〇年）一〇五頁

く思し出でらる。親王も、酔泣きえとどめたまはず、御気色とりたまひて、琴は御前に譲りきこえさせたまふ。もののあはれにえ過ぐしたまはで、めづらしき物一つばかり弾きたまふに、ことごとしからねど、限りなくおもしろき夜の御遊びなり。

(若菜上④五九く六〇)

源氏と太政大臣は共に桐壺院在世の昔を思い浮かべ、太政大臣は琴こそ桐壺院から伝えられたものであることを思い出して涙ぐむ。この音楽の遊びの場面は光源氏側と左大臣側が共有する過去を想起させるもので、両側が強く結ばれる場面であると言える。玉鬘は二つの家を結ぶ場を提供しているのである。

説話文学には幼い頃に父と別れた娘が後ほど父に再会するタイプの話がいくつか見える。『日本国現報善悪霊異記』(以下、『日本霊異記』上巻・第九話「嬰兒の鷲に擒はれて、他国にして父に逢ふこと得る縁」には、但馬国に住んでいた男の幼女が鷲に獲られる話がある。後に丹波の国に行った男(父)は、宿った家の童女が「鷲の噉ひ残し」とからかわれることを聞き、その故を家の主に質問し、女の子が発見された年月日について話し合う。

擒られし年の月日の時は、^{かむが} 校ふるに今の語に当りたれば、明らかにわが児なりと知りぬ。ここに、父悲しび哭きて、つぶさに鷲の擒りし事を告げ知らせぬ。主人、まことなりと知り、語に応へて許しつ。噫乎、その父、邂逅に見ある家に次り、つひにこれを得たり。まことに知る、天の哀れびて資^{たす}くるところ、父子は深き縁なりといふことを。これ奇異^{あや}しき事なり 二九。

そこで、その童女は幼い頃、鷲に獲られた娘であることが判明し、実父は娘と邂逅する。傍線部のように、評語では父子の深い縁についての認識が示される。この説話からは、玉鬘の場合にもおそらく二人の父との間に尋常ではない深い縁があったと推測することができる。

このように、鷲に子を取られ、後にその子に再会する説話は、『東大寺要録』の良弁僧正の説話^{三〇}などにも類話が見えるなど、様々な形で広く享受されていたと思われる。本論文ではその中でも、特に『今昔物語集』の説話を取り上げたい。『今昔物語集』「本朝付けたり宿報」の「於但馬国鷲取若子語 第一」には、鷲に獲られ失った娘に後に会う内容の説話が収録されている。娘との再会の時点は十年に設定され、細密な部分において『日本霊異記』の八年と少し異なる叙述も見えるが、大きな流れは一致する。ここで注目したいの

二九 小泉道(校注)『日本霊異記』(新潮日本古典集成、新潮社、一九八四年)五三頁の訓読文。

三〇 第一巻の一部を引用すると次の通りである。「根本僧正昔嬰兒之時。於^二坂東^一為^二鷲鷄^一、被^レ取^レ未知^二行方^一。依^レ之父母大歎流浪^二諸国^一。而件兒被^レ落^二山城國多賀邊^一。彼鄉人取^レ之養育。漸以成長。即根本僧正是也。」筒井英俊(校訂)『東大寺要録』(国書刊行会、一九七一年)三〇頁

は、『今昔物語集』の終結部である。

但シ、「我モ亦年来養ヒ立ツレバ、実ノ祖ニ不異。然レバ、共ニ祖トシテ可養キ也」ト契テ、其ノ後ハ、女子、但馬ニモ通テ、共ニ祖ニテナム有ケル。実ニ此レ難有リ奇異キ事也カシ。鷺ノ即チ噉ヒ失フベキニ、生乍ラ櫟ニ落シケム、希有ノ事也。此レモ前世ノ宿報ニコソハ有ケメ。父子ノ宿世ハ此クナム有ケル、ト語り伝ヘタルトヤ^{三二}。

童女が鷺に獲られた年月が確認され、実父はその子が自分の娘であることを確かめるが、その後、養父のセリフが述べられることは注意される。養父は自らも女子を養ってきた「実ノ祖」であると強調し、娘は実父に出会えた後にも、養父と連絡を獲り続けることが記される。これに対して、勝浦令子氏は「捨て子や迷いこんだ子供への使役権を獲得した家主が、これをどのような人格的關係を結んで養育使役するかについての『靈異記』の時代と『今昔』の時代との相違に由来するかもしれない」^{三三}と、養育による権利が重要視された中世の社会像を読み取る。勝浦氏の研究から学んだ所が多くあるが、本論では養育を行った人がその子の労働力を所有するといった経済的な接近より、むしろ、父と子がお互いを父子関係として認識していく過程に行われる教育の重要性について注目したい。

『源氏物語』の玉鬘物語は、先行する『日本靈異記』や後行する『今昔物語集』とは時代的に距離があるが、幼い時に父と子が離れ、靈験や宿縁によって、偶然に泊まった場所で我が子を見付け、語り合い、失った子であることを確認し、父と子が再会する過程は一致する。それに実父と養父という二人の父との關係を維持していくという様相は玉鬘物語とも通い合う所がある。

二つの説話は、玉鬘物語の読解において、父と子の深い縁について考察するに大きな参考になる。というのは、多田一臣氏の注釈によると、類型の古代の説話では母と子の關係が強調されるのが一般的であるにもかかわらず、『日本靈異記』の説話では「幼児が女兒であり、探しもとめるのが父親であることが大きな特徴となっている」^{三三}わけであり、この特徴は玉鬘の父との關係を考察するのに有効な視点を提示する。また、『今昔物語集』の説話は子供の帰属をめぐる問題について示唆を与えるのである。

玉鬘物語は『今昔物語集』の成立より時代が先行するものの、血による父子關係と養育や後見によつて構築された父子關係が同時に存在していた可能性をほのかな形で現わしているのではないか。それは『源氏物語』において後見する人と受ける人との關係が血縁関

三二 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一（校注・訳）『今昔物語集』二（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年）四五九～四六〇頁

三三 勝浦令子『『靈異記』にみえる盗み・遺失物をめぐる諸問題』「平野邦雄（編）『日本靈異記の原像』（角川書店、一九九一年）」一七六頁

三三 多田一臣（校注）『日本靈異記』上（ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九七年）一〇三頁

係に匹敵するほど、かなり緊密に結ばれていたことを具体的に提示しているのであろう。

源氏が玉鬘を社会的に後見するように、玉鬘は源氏に養女としての役割をしっかりと果たす。後見の関係はお互いの努力によって支えられていると言える。特に、玉鬘にとって源氏の養女になったことは、和歌や音楽の教育を受ける機会をもらうことであった。六条院で享受されている季節の美意識の影響で、玉鬘はより洗練された貴族文化に接することになり、出仕に相応しい身の嗜みを備えるようになったわけである。

四十の賀の終わり、玉鬘は暁に帰ることになるが、源氏と玉鬘の心境が次のように語られる。

暁に、尚侍の君帰りたまふ。御贈物などありけり。(源氏)「かう世を棄つるやうにて明かし暮らすほどに、年月の行く方も知らず顔なるを、かう数へ知らせたまへるにつけては、心細くなむ。時々、老やまさると見たまひくらべよかし。かく古めかしき身のところせさに、思ふに従ひて対面なきもいと口惜しくなむ」など聞こえたまひて、あはれにもをかしくも、思ひ出できこえたまふことなきにしもあらねば、なかなかほのかにて、かく急ぎ渡りたまふを、いと飽かず口惜しくぞ思されける。尚侍の君も、実の親をばさるべき契りばかりに思ひきこえたまひて、ありがたくこまかなりし御心ばえを、年月にそへて、かく世に住みはてたまふにつけても、おろかならず思ひきこえたまひけり。(若菜上④六一)

源氏は早く帰る玉鬘を見て「口惜しい」と思うが、もはや源氏も玉鬘を懐かしく思うことだけで、恋心を表すことはない。「年月の行く方も知らず顔なるを、かう数へ知らせたまへるにつけては、心細くなむ。時々、老やまさると見たまひくらべよかし」とたまには消息も聞きたいという意向を述べる。玉鬘は養父の源氏との因縁の深さについて、「実の親をばさるべき契りばかりに」と不思議にもありがたく思う。養育の父の果たした役割を思わせる意味深長な言葉である。

第四節 「竹河」巻の玉鬘

「竹河」巻は冒頭に「これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは」(竹河⑤五九)と語り出され、ほかの巻とは異色を放つ。「竹河」巻の性格についてはまだ議論されている途中であるが、本論文では「竹河」巻は『源氏物語』の正編と宇治十帖を結ぶ橋渡しの役割をするという立場から^{三四}、「竹河」巻に描かれる玉鬘についても玉鬘十帖や「若菜上・下」巻などとの延長

^{三四} 三角洋一氏は句宮三帖について「宇治十帖を始発させるための準備ないし試行錯誤と見なし、

線上で捉えることにする。

「竹河」巻については、藤本勝義氏が「玉鬘を中心に掲げた、竹河巻の物語の独自性」^{三五}を指摘しているように、玉鬘の娘である大君・中君の求婚譚が大きく取り上げられ、母としての玉鬘の姿が強調されている。その中、玉鬘が光源氏の養女であることは次のような形で提示されている。

六条院には、すべて、なほ、昔に交らず数まへきこえたまひて、亡せたまひなむ後のことども書きおきたまへる御処分の文どもにも、中宮の御次に加へたてまつりたまへれば、右の大殿などは、なかなかその心ありて、さるべきをりをり訪ねきこえたまふ。

（竹河⑤六〇）

源氏の遺書には、同様に養女であった秋好中宮のことが述べられ、その次に玉鬘についても言及があったことが読み取れる。「御処分の文ども」とあるように、おそらく玉鬘にも源氏の財産が相続されたことが暗示される。また、玉鬘が光源氏側の夕霧（右の大殿）と緊密な関係を維持していることも注目される。引用文で叙述されているように、頼りにできる味方が少ない状況で、夕霧は玉鬘に心を配り、訪れているのである。

また、玉鬘は薫を源氏の形見として待遇し、親しみを持つて接する。

（玉鬘）「院の御心ばへを思ひ出できこえて、慰む世なういみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも誰をかは見たてまつらむ。右大臣はことごとしき御ほどにて、ついでき対面も難きを」などのたまひて、はらからのつらに思ひきこえたまへれば、かの君もさるべき所に思ひ参りたまふ。世の常のすきすきしさも見えず、いいたうしづまりたるをぞ、ここかしこの若き人ども、口惜しうさうざうしきことに思ひて、言ひなやましける。（竹河⑤六四く六五）

「はらから」という言葉で表現されるように、玉鬘にとって薫は兄弟であることが強く意識されていく。玉鬘と薫の関係は官位が上がった薫が玉鬘を訪れる場面でも窺うことができる。

左大臣亡せたまひて、右は左に、藤大納言、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ。次々の人々なり上がりて、この薫中将は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこびしたまへる人々、この御族より外に人なきころほひになんありける。中納言の御よ

推敲をへないまま流布したことも考えられる」と異質性を認めつつ、宇治十帖との繋がりを読み取る姿勢を示す。三角洋一「作者説をめぐって」『源氏物語と天台浄土教』（若草書房、一九九六年）一八六頁

^{三五} 藤本勝義「源氏物語「竹河」巻論―光源氏の世界の終焉」『青山学院女子短期大学紀要』第四六号（青山学院女子短期大学、一九九二年）七八頁

ろこびに、前尚侍の君に参りたまへり。御前の庭にて拝したてまつりたまふ。尚侍の君対面したまひて、(玉鬘)「かくいと草深くなりゆく葎の門を避きたまはぬ御心ばへにも、まづ昔の御こと思ひ出でられてなん」など聞こえたまふ、御声あてに愛敬づき、聞かまほしういまめきたり。(竹河⑤一〇七〜一〇八)

中納言に昇進した薫は玉鬘を訪れ、その庭で謝意を表現し、舞踏する。「御昔の御こと」とは源氏との縁を指しているが、このように薫の訪問は玉鬘が六条院の養女であったことに起因すると考えられる。以上のように、「竹河」巻には源氏の養女であったことを大切に、六条院の形見であるという理由から薫と兄弟としての関係を緊密に結んでいく玉鬘の姿が見える。

おわりに

以上、玉鬘物語を光源氏の後見と玉鬘の四十の賀の主催という点から考察した。夕顔の娘玉鬘は筑紫で過ごすなど、流離を経て、六条院に引き受けられることになるが、そのさすらいは後見を獲得するための過程であったと言える。また、源氏の後見を受けることは、裳着の儀式を通じて、実父と対面することも可能にした。物語の中の時間が経って、「若菜上」巻で左大将鬘黒の北の方として家庭を担っている玉鬘は、光源氏の養女として源氏の四十の賀を誰よりも早く、若菜の献上という名目で開催する。そこには玉鬘の聡明さが浮き彫りに描かれている。さらに、四十の賀の主催は、玉鬘の実父の左大臣側の参加を可能にさせ、光源氏と太政大臣が心をうちとける切っ掛けを提供した。玉鬘が長谷寺観音の霊験により獲得したのは、二人の父親であり、玉鬘は二人の父の間で娘としての役割を手際よく果たしていると言える。

説話文学を糸口にとると、源氏の後見を受ける玉鬘には、子供の帰属問題が関わっていることが考えられる。失った子供を後に取り戻すタイプの説話は『日本霊異記』の時代から『今昔物語集』の時代まで、広く享受されたようであるが、その変転を探ってみると、先行研究の指摘の通り、時代が下るにつれて、血縁だけでなく、後天的な養育関係も重視されていった傾向が読み取れる。そのような説話の内容は、玉鬘のように、実父(内大臣)と再会した後も、養父(源氏)と関係を引き続いていく父と子のあり方を理解するためによい参考になる。玉鬘は六条院の養女になることによって、源氏に教育を受け、出仕に必要な教養を身に付けることが可能であった。

さらに、「竹河」巻は他の巻に比べて、異彩を放っていることが指摘されていて、その分析には慎重に接近する必要があるものの、「竹河」巻の本文からは源氏の養女としての玉鬘のあり様について示唆を得る所が多い。考察してきたように、玉鬘と薫がお互い緊密な関

係を維持するために努力することには、兄弟という視点が介入していて、玉鬘が源氏の養女であったことが大きな理由になっている。鬘黒の死後、心細くなった玉鬘にとって六条院の養女という立場は、玉鬘の娘大君を冷泉院へ入内させ、中君を尚侍として出仕させることにおいても、有利に作用したと判断される。このように、玉鬘物語には二人の父との関係を上手に結ぶことによって、貴族社会を生き抜く玉鬘のたくましい姿が描かれている。玉鬘物語は、血筋による父と子、教育による父と子の問題を提起していると言える。

第九章 薫の実父柏木への思い

はじめに

早く秋山虔氏が薫の「道心と愛情の問題に生きなすむ複雑な姿」^一に触れられているように、薫の人物論を考察する際には、仏道修行の道心と姫君への恋心という対立する性格が注目され、そのような性格が薫に同時に付与されていることについて疑問が提示されてきた。藤村潔氏の指摘しているように「二つの薫論」^二が存在するわけで、一つの言葉では説明し切れない薫像を捉えるために、それぞれの角度から人物を徹底に分析していくという研究が蓄積されてきた。例えば、三枝秀彰氏は「薫という人物は、大変複雑で矛盾的な人物造型であり、その行動は極めて理解し難い」^三と評して、このような薫像のずれの原因を、第二部から第三部への主題の変更という点に求め、物語構造論で説明する。また、神野藤昭氏は、表現論から薫を描写する語彙に注目し、「宇治は、（中略）俗なる世界の愛情とは異なる精神的な愛情を可能にした空間であり、薫はいま異装してその世界に分け入ろうとしている」^四と読み解く。この見解は、薫における道心と恋心の共存を「異装」によるものとして理解しようとした試みである。一方、最近の研究では、対立するかのように見える道心と恋心が矛盾することではなく、薫という立体的な人物を造型していると捉える視点もある^五。本論においては、薫における道心と恋心が矛盾しないと受け止める先行研究の姿勢を踏まえながらも、道心が恋心に繋がっていく過程に目を留める。その時、父の喪失という側面において、薫は宇治の姫君たちと同じ立場に置かれていくという点に注目してみたい。特に、「宿木」巻、「総角」巻の唱和歌の場面を取り上げ、薫の歌の意味について新たに考えることにする。

一 秋山虔「薫大将の人間像」『源氏物語の世界―その方法と達成―』（東京大学出版会、一九六四年）一九五頁

二 藤村潔「源氏物語薫論の迷走」『藤女子大学国文学雑誌』第四三号（藤女子大学国語国文学会、一九八九年九月）六〇頁

三 三枝秀彰「薫試論―その主題的に内実とするもの―」『中古文学』第三五号（中古文学会、一九八五年五月）三八頁

四 神野藤昭氏「異装する薫―『源氏物語』橋姫巻の一節―」『日本文学』第三七巻第一〇号（日本文学協会、一九八八年一〇月）八二頁

五 尹勝玟「多面体としての薫」『日語日文学研究』第八三輯第二巻（韓国日語日文学会、二〇一二年一月）二二一～二三〇頁

第一節 「宿木」巻における薫の和歌

まず、宇治の弁の尼を訪れた薫の歌が詠まれる「宿木」巻の表現に注目してみよう。

木枯のたへがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を踏み分けける跡も見えぬを見わたして、とみにもえ出でたまはず。いとけしきある深山木にやどりたる薫の色ぞまだ残りたる。こだになどすこし引き取らせたまひて、宮へと思しくて、持たせたまふ。

(薫) やどり木と思ひいでは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし
と独りごちたまふを聞きて、尼君、

荒れはつる朽木のもとをやどり木と思ひおきけるほどの悲しさ
あくまで古めきたれど、ゆゑなくはあらぬをぞいささかの慰めには思しける。

(宿木⑤四六二〜四六三)

二人の歌は巻名の「宿木」のもとになる歌として有名であり、巻名に関する研究において、まず、小林正明氏は「宿木」という言葉の含まれる和歌を考察し、「出自において柏木の血縁をひく薫自身、光源氏の家系樹に寄生した寄生木ではなかったか。」^六と指摘する。薫の歌に六条院の息子として生きていく薫の立場を読み取るのである。小林氏の研究を踏まえた上、今井上氏は「宿木」巻が大君物語を終え、新しく浮舟物語を切り開いていく転換点になることを指摘し、物語における「宿木」巻の位相を論じている。その中で、宿木とは「頼る人を変えながら自らの安息の地をもとめて揺れつづけた中君」^七、八の宮に認知されなかったことに起因する彷徨の人生を送る浮舟、「出生、すなわち根ざしの危うさによる不安から宇治の世界に分け入った薫」^八を象徴していると捉える。

一方、古注釈には歌の場面に對する詳細な指摘がある。『萬水一露』は薫の歌に對して、「始もこゝにやどりつけたる所なれば今の旅ねもその心にてさびしくなきとの心也。又、弁尼をやどり木と云るにや。」^九と、「やどり木」にやどりつけたる所、旅寝の所という意味を読み取る。弁の尼の歌に對しては「やどるべき所と思へばこそ爰にはあれと也。さながら我さまはやどり木のごとくなるとの義也。木をたのみてかりにあるさまのかなしきと

六 小林正明『源氏物語』王権樹解体論―樹下美人からリゾームへ―「物語研究会（編）『源氏物語を（読む）』（新物語研究第四巻、若草書房、一九九六年）」一九〇〜一九一頁

七 今井上「宿木巻論―時間・語り・主題―」『源氏物語 表現の理路』（笠間書院、二〇〇八年）

二九八頁（初出）『国語と国文学』第七八巻第二二号（二〇〇一年十二月）

八 今井上、上掲書、三〇三頁

九 伊井春樹（編）『萬水一露』第五巻（源氏物語古注集成、桜楓社、一九九二年）八〇頁

也。」^{一〇}と説明を付けている。

また、本文中の「深山木」と弁の尼の歌に見える「朽木」という表現には、『古今和歌集』「雑歌上」兼藝法師（生没年不明）の歌（八七五番）を踏まえていることが『河海抄』に指摘されている^{一一}。

女どもの見て笑ひければよめる

形こそみ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなん

薫の独詠を聞いて弁の尼が歌を返し、贈答歌のようになった薫と尼君の歌は、山里の散り敷かれている紅葉を踏み分けて宇治を訪ねた薫が「深山木」の薦を取ることや、弁の尼が歌に「朽木」という表現を使つて老いた自分を「朽木」で表現することなど、『古今集』の右の歌が引かれていることはたしかに確認される。

『細流抄』は薫の歌について、「昔の名残をおもはすはさびしかるべしと也。そうして薫は一生をより所なく思ひ給へり。東坡詩吾生如寄耳といへるごとくいづくをもさだめざると也。」^{一二}と漢詩との関連を指摘する。吉川幸次郎氏は蘇軾の「吾生如寄木（吾が生は寄するが如き耳）」の詩句の「寄」に「かりのやどり」^{一三}という解釈を当て、蘇軾はこの句を「あちこちの詩で頻繁に使う。」^{一四}と指摘する。また、吉川氏が引用している山本和義氏の論文には、「吾生如寄木」の詩句に対する徹底した分析があり、示唆に富む。山本氏は蘇軾の他の詩や漢代の古詩との比較を行い、『蘇軾詩集』^{一五}第一八巻「徐州を罷めて南京に往く、馬上筆を走らせて子由に寄す五首」、第二〇巻の「淮を過ぐ」、第二七巻「王晋卿（誥）に和す」、第四五巻「鬱孤臺」などに出てくる「吾生如寄木」の句に注目し、その意味を「私の一生は、仮のものではないのに、どうして災禍だの幸福だのを区別することがあるのか。」^{一六}、「人生は転転と移りやすいものだから、はじめから行くところを選んだりはしないのだ」^{一七}などと解釈する。薫の歌が人生を仮の宿に喩える蘇軾の詩句を思わせることは確かであるが、蘇軾は「北宋第四代皇帝仁宗の景祐三年（一〇三七）」^{一八}に生まれたので、

一〇 上掲書、八〇頁

一一 玉上琢彌（編）『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）五五一頁

一二 伊井春樹（編）『細流抄 内閣文庫本』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八〇年）四〇〇頁

一三 吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波文庫、岩波書店、二〇〇六年）一七四頁

一四 上掲書、一七四頁

一五 孔凡禮（點校）『蘇軾詩集』（王文誥輯註）中華書局、一九八二年

一六 山本和義「蘇軾詩論稿」『中国文学報』第三六冊（京都大学文学部中国語学中国文学研究室、

一九六〇年一〇月）八〇頁

一七 上掲論文、八三頁

一八 内山精也『蘇軾詩研究——宋代士大夫詩人の構造』（研文出版、二〇一〇年）一〇頁。

『源氏物語』が執筆されたと推定される一一世紀初より少し後に活躍した詩人である。従って、本論では、薫の歌と蘇軾の詩とが意味上通じる部分があることを認めながらも、深入りはしない。むしろ、歌ことばに沿って薫の歌を考えてみたい。

現代の注釈書においても、薫と弁の尼の歌は歌語「朽木」が中心に取り扱われている。「新編日本古典文学全集」の頭注は、薫の歌に対して「宿木」(他の植物に寄生する植物、こは蔦)に「宿りき」(以前泊まった意)をかける。宇治の荒涼とした邸での、懐旧と孤独のなかばする詠歌。^{一九}と説明し、弁の尼の歌に対して「薫が「やどり木」と言った宇治の邸は、実際には荒廃しきった「荒れはつる朽木」にほかならぬとした。前歌に対して注解的な機能をさえた詠歌。^{二〇}と指摘している。

「新潮日本古典集成」の頭注は、薫の歌に対して「前にここに泊まったことがあると思ひ出さなかつたなら、この深山木^{みやまぎ}のもとの旅寝もどんなにさびしかったことであろう。「宿木」(こは前文にあるように蔦のこと)に「宿りき」を掛ける。卷名出所の歌。」^{二二}と注を付ける。弁の尼の歌に対して、「荒れ果てた朽木のもとを、前に泊まったことがあると覚えていて下さるにつけても悲しゅうございます―亡き姫君のことが思われまして。「朽木」は、尼になってこの山里に隠れ住む自分をいう。」^{二三}と解説する。

「新日本古典文学大系」は、「薫の歌。(ここにかつて姫君たちがおられて) 自分も泊まったのだという思い出がなければ、宇治の旅寝もどんなにかさびしいことであろう。「宿りき」に蔦をさす「宿り木」を掛ける。」^{二三}と解説し、弁の尼の歌については、「弁の歌。(大君も亡く) 老耄した私しか残っていないこの邸を、かつての宿りとして今も思ってくださいるとは悲しいことよ。「かたちこそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ」(古今集・雑上・兼芸。)^{二四}と注釈する。

「日本古典文学大系」は薫の歌について、「昔かつてここに宿ったと思^マ出さなければ、宿木の下(山荘)の旅寝も、どんなにか寂しい事であろうになあ。(思^マ出すから、寂しくはないけれども)。「宿りき」に「宿(寄生)木」を掛けた。底本の「やどり木」を改めた。」^{二五}と註を付ける。また、弁の尼の歌に対して「荒れてしまった、朽ちた木(老い朽ちた尼)のもとを、昔かつて宿った所(寄木)と考えて置く(記憶している)のであった、心情の

一九 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男(校注・訳)『源氏物語』五(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年)四六四頁の頭注一一。

二〇 上掲書、四六四頁の頭注一三。

二二 石田穰二・清水好子(校注)『源氏物語』七(新潮社、一九八三年)一三四頁の頭注五。

二三 上掲書、一三四頁の頭注六。

二四 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎(校注)『源氏物語』五(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年)九二頁の脚注九

二五 上掲書、九二頁の脚注十

二六 山岸徳平(校注)『源氏物語』第五卷(日本古典文学大系、岩波書店、一九六三年)一〇一頁の頭注二八。

悲しさよ。(大君は今ではなくて、私だけなのに。)[宿(寄生)木]に「宿りき」を掛けた。巻名は、これらの歌によった。^{二六}とする。

以上のように、諸注釈の関心は「宿り木」や「朽木」について集中しているが、一方、本論では薫の歌の「このもと」という表現に留意してみたい。『萬水一露』の注釈にあったように薫の歌には、宿り木のもと、旅寝の場所としての宿る所などの意味が込められるが、薫の歌には、さらに「このもと」に「子」を掛ける当時の歌の影が響いていると思われるからである。薫の歌には、八の宮が他界し、大君までいない今、その許の寂しさを示す意味が重ねられていると考えられるが、まず、平安時代の和歌における「このもと」の表現に注目してみたい。

第二節 歌における「このもと」の表現

『歌ことば歌枕大辞典』には「このした」が見出し語として取り上げられ、「このもと」とも」と記されている。この表現は両方の言い回しがあることが知られるが、本論では「このもと」だけに集中して論を展開していくことにする^{二七}。まず、『古今集』「秋下」には僧正遍照の歌に「このもと」の例がある。

うりんあんの木のかげにたたずみてよみける

わび人のわきて立ち寄る木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり。

（『古今集』秋下・二九二・僧正遍照）

右の歌は「木」に「子」を掛けない「このもと」の言葉を用いる一般的な例であると言えるが、「頼む影」という表現が後の歌に引き継がれていくことが考えられる。その分析は後述する。

次に、『伊勢集』には、春と秋に二人の子供を亡くしてしまった人の歌に「このもと」の例がある。この歌は『拾遺集』「哀傷」にも「詠み人しらず」の歌として収められている。

春秋子をなくなして思ひなげく

^{二六} 上掲書、一〇一頁の頭注二九。

^{二七} 久保田淳・馬場あき子（編）『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）三四六頁。該当部分の執筆者は笹川伸一氏である。

春は花秋はもみちと散りぬればたちかくるべきこのもともなし『伊勢集』四五八

子二人侍ける人の一人は春まかり隠れ、今一人は秋亡くなりけるを、人の弔ひて侍ければ

春は花秋は紅葉と散りはてて立ち隠るべき木の下もなし『拾遺集』哀傷・一三二一

右の歌では、「木の下」に「子の許」を懸ける」二八と注釈されているように、子の喪失による悲しみを表現している。特に、子の許も「なし（無し）」という言葉が意味を強調している。

次に、『拾遺集』「哀傷」には次のような歌が見える。

夏、柞はくその紅葉の散り残りたりけるに付けて、女五の内親王のもとに

時ならで柞はくその紅葉散りにけりいかに木のもとさびしかるらん

『拾遺集』哀傷・一二八四・村上天皇

この歌は母御息所を失った盛子内親王を慰める村上天皇の御製歌である。歌詞の「柞（はそ）」には「同音の「母」を意識した用法」二九があり、ここの「柞（はそ）」にも「母（はは）」が掛けられている。御息所の死は突然の夭折であったという状況が「時ならで」という表現に詠み込まれている。この歌で「このもと」に「子の許」が掛けられ、親を失った盛子内親王を象徴するものとして理解できる。

さらに『紫式部集』四三番歌には、以下のような歌が存在する。紫式部の夫宣孝の他の妻との間に生まれた遺児の歌である。

同じ人三〇、荒れたる宿の桜のおもしろおきこととて、折りておこせたるに
散る花を嘆きし人は木のもとさびしきことやかねて知りけむ

「思ひ絶えせぬ」三二と、亡き人の言ひけることを思ひ出でたるなりし。

二八 関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』（私家集全釈叢書、風間書房、一九九六年）五二〇頁。
底本は西本願寺蔵三十六歌仙集である。

二九 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂出版、一九九四年）二七四頁

三〇 宣孝の娘。

三一 左注で『拾遺集』「春」三六番の歌を引いている。

子にまかりおくれ侍りける頃、東山にこもりて

中務

咲けば散る咲かねば恋し山桜思ひ絶えせぬ花の上かな

この歌の「このもと」も「子の許」(子ども我身边・子供の将来のこと)の掛詞^{三二}である。「同じ人」とは、父を亡くした娘であり、「さびしき」心情が語られている^{三三}。紫式部の夫宣孝は生前、娘のことを常に心配していたが、その宣孝も今は故人になっている状況を見つめる紫式部の心情が表現されている部分である。

『源氏物語』より成立は後であるが、『千載集』『雑中』にも「このもと」を用いた表現の贈答歌が見える。

大納言実家のもとに卅六人の集を返しつかはしける中に、

故大炊御門右大臣の書きて侍ける草子に書きてをし付けられて侍ける

太皇太后宮

このもとに書き集めたる言の葉を別れし秋の形見とぞ見る

『千載集』雑中・一一〇五)

返し

権大納言実家

このもとは書く言の葉を見るたびに頼みし蔭のなきぞかなしき

『千載集』雑中・一一〇六)

右の歌は二人の父大炊御門右大臣(藤原公能)^{三四}の筆跡が残っている「卅六人の集(三十六歌仙の歌集)」を返す時、太皇太后宮が弟の実家に送った歌とその答歌である。この贈答歌において「このもと」にも「子」が掛けられ、父に死別し残されて悲しい子の許を意味する。実家の答歌の「頼みし蔭のなき」とは、前の部分で触れた『古今集』秋下の遍昭作の「頼む蔭なく」を踏まえた表現で、意味の外縁を広げて、父を亡くした悲しみの表出に用いていることが考えられる。

『栄花物語』第三十四巻「暮まつほし」巻にも「このもと」の用例が確認される。女院彰子が内裏を訪れた際、一品宮章子に立ち寄らなかつたことに対して、章子内親王は次のような歌を送った。「散りにし花の木のもと」とは故後一条院、故中宮威子を失った章子本人を喻えた表現になる。

三月ばかりに、院、内裏に入らせたまひたり。道など隙なくて、一品宮に御対面な

^{三二} 南波浩『紫式部集全評釈』(笠間書院、一九八三年)二五三頁

^{三三} 『紫式部集』古本系(第二種)の京都大学本には「した」と作られ、本文異同がある。「木」に「子」が掛けられるのは同様である。

^{三四} 永暦二年(一一六一)八月一日没。(国史大系編修会(編)『公卿補任』(吉川弘文館、一九六四年)四五〇頁

し。宮より、

君はなほ散りにし花の木のもとに立ち寄りとは思はざりしを
御返し、

花散りし道に心はまどはれて木のもとまでも行かれやはせし

御手などいと若くあてに書かせたまへり 三五。

その返事に彰子も「花散りし道に心はまどはれて」とあるように、故院と故中宮に先立たれた悲しみを述べ、残された章子内親王のことを「このもと」と指している。女院彰子にとつて後一条院、中宮威子は、息子と妹に当たるわけで、後一条院の他界を契機に彰子は再出家し、完全に削髪することになる。彰子と章子の贈答からは、肉親を失った深い悲しみが綴られていると言えよう。

以上、考察してきたように、「このもと」の歌ことばは、親を亡くした子供たちについて詠む際に、使われることが段々定型化されていったらしい。時代は下るが、寂然の『法門百首』『別部(五二番)』にも「木」に「子」を掛けた歌が見える。

作是教已復至他国

山深き木のもとごとに契りおきて朝立つ霧のあとの露けさ

病にしづめる子の、本心を失ひて薬を服せざるがために、われは他の国へ去りなんとす。留めおく薬を服すべしといひて、父の薬師別るゝなり。これは仏常に世に住したまへしは、衆生いとふ心をなすべきがゆゑに、法を留めて滅し給ふなり。今如来滅後にあふて、わづかにこの法にあへり。機縁の浅きを思ひ、仏恩の深きを思ふに、涙とゞめがたかるべし 三六。

『法華経』『如来寿量品』の良医治子の譬喩を踏まえた右の歌で、「朝立つ霧」は父を意味し、「あとの露けさ」は父に去られ残された子たちの涙を意味する 三七。 深山の情景に重ね、父の言葉が子たちにはまだ不明確で「霧」のようであることを表す。山本章博氏の『寂然法門百首全釈』には特に言及されていないが、この歌も「このもと」の歌ことばの流れを汲んでいると思われる。

他に、中世王朝物語『風につれなき』下巻にも「このもと」の表現が見える。中宮の死を悲しみ、残された若宮の存在を心に留めた帝が、若君を育てている中宮の妹の姫君に手紙を送った場面である。

三五 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進(校注・訳)『栄花物語』三(新編日本古典文学全集、小学館、一九九八年)三〇〇頁

三六 山本章博『寂然法門百首全釈』(風間書房、二〇一〇年)一〇二〜一〇三頁

三七 山本章博、上掲書、一〇四頁。

内裏よりもやる方なき御心の慰めには、書き尽くし給はする御文も、もののおぼえねば、まして聞こゆべしとも思しかけぬを、(帝)「さは、慰む方なし」と恨みのたまはするも、苦しう思さる。時雨の音も常より殊にあはれに聞こえて、木の葉吹きまく風の音も気色も、頼むかげなく心細き古里の庭は、涙の残りあらじと濡らし添へ給ふに、内裏より御文あり。夕べの空の色したる色紙に、

(帝) 我が袖の涙を空の時雨にてはらふあらしもいかに木のもと^{三八}

思ひやりきこゆるも例なう心細きを、ただ今の御返りなからんこそ、いと憂かるべけれ^{三九}

引用文における「このもと」は母を喪失した若君を指し示している。「このもと」の歌ことばには、「木」に「子」を掛けて詠む傾向が定着していったと思われる証左である。以上の例から窺えるように、「このもと」という表現は、肉親を喪失した悲しみに深く関わる言葉である。

和歌史において、このような使い方をもつ「このもと」という歌ことばを媒介に、『源氏物語』に戻って薫の歌を考察してみたい。「宿木」巻の薫の歌の「やどり木と思ひいずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし」について、従来の註釈においては、「宿り木」という歌ことばに注目が集められてきたが、平安時代の歌の例を考察してきた結果、薫の歌の「このもと」、「さびしからまし」の表現に、親を亡くした子供の処遇を表す「子の許」の意味合いが踏まえられている可能性が見えてきた。つまり、薫が宇治の邸を訪れた時、その邸は「このもと」として指し示されるのであり、そこには、八の宮の不在が強く思い起こされているのである。そうであれば、「木」には「子」が掛けられていることも考えられる。諸註釈で指摘している通り、薫の歌の中心的詠題は宿ったことがある所の思い出であるが、「このもと」の言葉に光を当てることによって、八の宮の不在という側面が浮かび上がってくる。薫の歌は、父と大君を失った中君に、実父を知らない自らの境遇を重ね、共感を覚える薫の認識を垣間見せるものであるかもしれない。続いて、「総角」巻における「このもと」の歌ことばについて考察する。

第三節 「総角」巻における「このもと」の表現

^{三八} 市古貞次・三角洋一(編)『風につれなき物語』『鎌倉時代物語集成』第二巻(笠間書院、一九八九年、四一六頁)に従い、「じ」を「し」に改めた。『鎌倉時代物語集成』の底本は丹鶴叢書本である。

^{三九} 森下純昭(校訂・訳注)『風につれなき』(笠間書院、一九九七年)一六三頁

次は「総角」巻の場面で、紅葉狩の際に宇治を訪れた五人の唱和歌である。

去年の春、御供なりし君たちは、花の色を思ひ出でて、後れてここにながめたまふらむ心細さを言ふ。かく忍び忍びに通ひたまふとほの聞きたるもあるべし。心知らぬもまじりて、おほかたに、とやかくやと、人の御上は、かかる山隠れなれど、おのづから聞こゆるものなれば、「いとをかしげにこそものしたまふなれ」「箏の琴上手にて、故宮の明け暮れ遊びならはしたまひければ」など、口々言ふ。

宰相中将、

いづこやも花のさかりにひとめ見し木のもとさへや秋はさびしき

主方と思ひて言へば、中納言（薫）

桜こそ思ひ知らすれ咲きにほふ花も紅葉もつねならぬ世を

衛門督、

いづこより秋はゆきけむ山里の紅葉のかげは過ぎうきものを

宮の大夫

見し人もなき山里の岩垣に心ながくも這へる葛かな

中に老いしらひて、うち泣きたまふ。親王の若くおはしける世のことなど思ひ出づるなめり、宮（匂宮）、

秋はててさびしさまさる木のもとを吹きなすぐしそ峰の松風

（総角⑤二九六―二九七）

匂宮は宇治の中の君に会うために、紅葉狩を口実に宇治を訪れるが、結局、中の君には会えず、帰京するようになる。右の唱和歌はその際に詠まれたものである。まず、宰相中将は一年前の春、薫と匂宮は宇治の八の宮邸を訪れ、歓待された昨春と比べ、八の宮がない今秋の寂しさについて詠じる。『湖月抄』師説は「八宮のかくれ給ひしあとを、木のもととよみて、子をそへて、姫君達のさびしかるらん事を思ひやりたるうた也」^{四〇}と説き、「木」に「子」が掛けられている事実を明らかにする。この宰相中将の歌に対して、薫は季節の移り変わりによる花と紅葉の無常観だけを詠み返す。続いて、衛門督は世を去った八の宮を追慕し、宮の大夫は残されている葛の葉と、八の宮の不在を対照的に捉える歌を詠む。最後に、匂宮は、宰相中将の歌の「木のもと」を受け、姫君たちの寂しい思いを配慮することによって唱和歌を締め括る。

「総角」巻の唱和歌の場面は、紅葉を背景に、八の宮を追慕する歌になり、残された姫君たちを憐れむ情趣を醸し出す。島内景二氏はこの場面について、「木のもと」は、宇治十帖においては八の宮に庇護される（あるいは心引かれる）人物たちのあり方を指す特徴

四〇 有川武彦（校訂）『源氏物語湖月抄』下（講談社、一九八二年）四八一頁

的な表現なのである」^四と指摘し、「木のもと」という言葉の響きに注意を向ける。しかし、島内氏は『都のつと』論を述べていて、これ以上、『源氏物語』については言及していないが、右の唱和歌の場面は、すでに様々の和歌の考察から導き出されたように、残された子たちの意味が込められた「このもと」の歌ことばが含まれている。唱和歌は残された子の寂しさを詠む代表的な例として捉えることができるかと指摘したい。

一方、この唱和歌が繰り広げられる背景を考えてみよう。匂宮は紅葉狩を口実に中君に会うため、側近だけを連れてそつと宇治を訪れる予定であった。

十月一日ごろ、網代もをかしきほどならむとそそのかしきこえたまひて、紅葉御覽ずべく申しさだめたまふ。親しき宮人ども、殿上人の睦ましく思すかぎり、いと忍びてと思せど、ところせき御勢ひなれば、おのづから事ひろごりて、左の大殿の宰相中将参りたまふ。さてはこの中納言ばかりぞ、上達部は仕うまつりたまふ。ただ人は多かり。(総角⑤二九二)

しかし、今上帝の皇子である匂宮であるので、噂はすぐ広まり、殿上人などが参加する。さらに、明石の中宮から目付役として派遣された人々も加わり、紅葉狩の一行は規模が大きくなり、宇治の姉妹のもとに行くことは難しくなってしまった。

人のまよひすこししづめておはせむと中納言も思して、さるべきやうに聞こえたまふほどに、内裏より、中宮の仰せ言にて、(※)宰相の御兄の衛門督、ことごとしき隨身ひき連れてうるはしきさまして参りたまへり。かうやうの御歩きは、忍びたまふとすれどおのづから事ひろごりて、後の例にもなるわざなるを、重々しき人数あまたもなくて、にはかにおはしましにけるを聞こしめしおどろきて、殿上人あまた具して参りたるにはしたなくなりぬ。宮も中納言も、苦しと思して、物の興もなくなりぬ。

(総角⑤二九四)

ここに突然登場したのは明石の中宮の命令によって派遣された衛門督とその一行であった。もはや宇治の姉妹を訪れることは難しくなり、匂宮と薫は興醒めたと叙述される。ところで、この「衛門督」という官職名に注目したい。『源氏物語』に衛門督と呼ばれる人物は七人見えるが、その代表は柏木である。「柏木」巻には「あはれ、衛門督」といふ言ぐさ、何ごとにつけても言はぬ人なし。」(柏木④三四〇～三四一)とあり、柏木は人々の記憶の中で「衛門督」として留められている。家井美千子氏は柏木について、「彼は、主要人物として活躍する若菜上巻から柏木巻まで、あるいはその死後までも、一貫して「右衛門督」と呼ばれるのが普通で、宰相(参議)や、中納言などの太政官の官名でよばれるこ

とは少なかつたのである。」^{四二}と指摘している。その通り、柏木には「衛門督」という官職名が強く貼り付けられている。本論も同様の立場にいるが、ただ、家井氏は「柏木巻で亡くなった右衛門督以外には、左右どちらの衛門督にしても強い印象を残す人物は他にない。」^{四三}という事で、他の人物については検討していないが、本論では一応手続きとして他の衛門督についてもひとまず検討してみることにする。

『源氏物語』における「衛門督」の例を紹介すると、まず、空蟬の父であつたという故衛門督（一）、次に左大臣の弟（二）、また「梅枝」巻に一回だけ登場する左衛門督（三）、そして柏木（四）、他に「鈴虫」巻（④三八五）に見える柏木の弟と思われる左衛門督（五）がいる。さらに宇治十帖には、夕霧の長男であり「総角」巻に登場する衛門督（六）、小野の妹の尼君の亡き夫故衛門督（七）もいる。この中で（二）と（七）はすでに故人であり、その姿が描写されることはない。（二）、（三）の場合も名前が列挙されるほどで、物語の展開に大きく関わることは少ない。柏木の弟の左衛門督（五）は「紅梅」巻の冒頭に以下のように描写されている。

そのころ、按察大納言と聞こゆるは、故致仕の大臣の二郎なり、亡せたまひにし衛門督のさしつぎよ^{四四}、童よりらうらうじう、はなやかなる心ばへものしたまひし人にて、なりのぼりたまふ年月にそへて、まいていと世にあるかひあり、あらまほしうもてなし、御おぼえいとやむごとくなりけり。（紅梅⑤三九）

この人物は「鈴虫」巻に遊びに参加している時の官職が「衛門督」であるが、物語の中で印象的に描かれるのは、按察大納言になっている「紅梅」巻で継娘への恋をめぐる物語であり、本論で扱おうとする衛門督としての影は薄い。

第二部の主人公と言える柏木のほかに、衛門督として活躍する姿が多少とも書き留められているのは、夕霧の長男の衛門督（六）である。「橘姫」巻で薫は出生の秘密を告知されるが、その時の弁の言葉の中で夕霧の長男の衛門督が始めて紹介される。

このころ藤大納言と申すなる御兄の右衛門督にて隠れたまひにしは。（橘姫⑤一四六）

引用部の言説は、前の引用部の（※）「宰相の御兄の衛門督、ことごとしき隨身ひき連れ

^{四二} 家井美千子「右衛門督―『源氏物語』における―」『中古文学』第三六号（中古文学会、一九八六年三月）一二頁

^{四三} 家井美千子、前掲論文、一二頁

^{四四} 別本には「さしつぎに」を取る場合がある。しかし、「さしつぎよ」でも「さしつぎに」でも、按察大納言が柏木の弟であり、左大臣家の次男である事実には変わりがなく、本論では問題にならないが、「人物を指して」「〇〇は〇〇よ」という言い方が平安時代にはあつた」という今西氏の説を参考に「さしつぎよ」を取った。「今西祐一郎「衛門督のさしつぎよ」考―『源氏物語』紅梅巻の一文―」『語文研究』第九一号（九州大学国語国文学会、二〇〇一年六月）一九頁

てうるはしきさまして参りたまへり」と似ている言い方である。二つの場合とも「御兄の」と系図が示されているのが特徴で、夕霧の長男衛門督は「総角」に脇役として登場する。脇役なので、従来の人物論ではあまり注目されていないが、この人物は、緻密な構成の意図を持って造型された人物である可能性が高いと判断される。

衛門督は「ことごとしき隨身」を連れて「うるはしきさま」で頭れた。ここには「若菜上」巻に見えていた柏木の力動的な姿、武官を代表する衛門督としての堂々とした姿が連想される。活気溢れる柏木の姿については、永井崇大氏が蹴鞠の場面から窺える「足技の軽快さ」^{四五}に注目し、衛門督柏木のイメージを的確に捉えている。一方、永井氏は「総角」巻の唱和歌については言及していないが、本論では生き生きとした姿の衛門督の柏木の表象は「総角」巻の衛門督に繋がると指摘したい。

ここで、唱和歌の場面を再び引用してみよう。

宰相中将、

いづぞやも花のさかりにひとめ見し木のもとさへや秋はさびしき

主方と思ひて言へば、中納言（薫）

桜こそ思ひ知らすれ咲きにほふ花も紅葉もつねならぬ世を

衛門督、

いづこより秋はゆきけむ山里の紅葉のかげは過ぎうきものを

宮の大夫

見し人もなき山里の岩垣に心ながくも這へる葛かな

中に老いしらひて、うち泣きたまふ。親王の若くおはしける世のことなど思ひ出づるなめり、宮（匂宮）、

秋はててさびしさまさる木のもとを吹きなすぐしそ峰の松風

（総角⑤二九六～二九七）

宰相中将の和歌には「このもと」という表現があり、八の宮を失った姫君たちの寂しさについて言及されるが、薫の和歌は世の無常を詠んだものであり、宰相中将の歌の答歌としては繋がりが弱い。関連して、薫の歌について「新編日本古典文学全集」の「頭注」は「主方と思ひて言へば」の意味を読み解こうとしたらしく、「宰相中将の問いにまともに答えると、自分がいかにも「主」らしく、姫君たちの日常に通じている形となるので、無常論にすりかえて受け流す。」^{四六}と注釈する。とはいえ、薫は単に姫君についての話題をすり替えるために、世の無常を取り出し、即答を回避しただけであろうか。以下、古注釈を紐

^{四五} 永井崇大『源氏物語』衛門督攷―柏木論への視角』『古代中世文学論考刊行会（編）『古代中世文学論考』第一八集（新典社、二〇〇六年）』一二〇頁。

^{四六} 阿部秋生（他校注）『源氏物語』五（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年）二九六頁

解いて見る。

『一葉抄』「桜こそおもひしらすれ」飛花落葉ハ世の常なき理をしらす中にも、桜ハことに猶あたなると也。宮の去年の春ハおハしてながめ給しを心にこめてよめり四七。

『細流抄』「さくらこそ」桜をみて世のつねなきをおもふとなり四八

『孟津抄』「桜こそおもひしらすれさきにほふ花も紅葉もつねならぬ世を」桜をみて飛花落葉の無常を觀して、かやうに世もうつるよとて、扱は桜も紅葉もつねならぬ也四九。

『萬水一露』「さくらこそ思ひしらすれ咲匂ふ花も紅葉も常ならぬ世を」中納言、八宮なく成給へる事を心にこめて、無常を花によそへたり。花こそしらすれとよめり。飛花落葉は世の常なき理をしらす中にも、桜は猶あたなると也。宮去年の春はおはしてながめしを心にこめてよめり五〇。

『岷江入楚』「桜こそ思ひしらすれさきにはふ花も紅葉もつねならぬ世に」〔秘〕桜を見て世の常なきをおもふとなり。さきのたびさくらを見ずは今日の感はあるまじと也。〔私〕桜の花の葉とにかけていへる心歟五一。

古注釈には、薫が姫君たちについて言及を回避するために無常を取り出す、という理解はない。姫君についての話題を避けるため無常觀にすり替えた、という読みは一面だけを取り上げた解釈ではないか。薫が世の無常について詠んでいるのは、八の宮を亡くした姫君の状況にも通じるもので、宰相中將の歌の続きとしてもおかしくなく、自然な流れを形成している。

しかも、この唱和歌が衛門督とその一行の訪れによって触発されたことに注目すると、衛門督柏木の子である薫の歌が読者に新たに感じられて来るのである。つまり、突然の衛門督の登場によって、薫は、会ったことのない、若き時代の父をふっと思ひ出したのではないか。そうであるならば、単に姫君たちについての話題から逃げるためではなく、自らも実父を失っている薫の率直な無常觀が歌に刻まれていると捉えられるのではないか。「このした」という歌ことばに注目してみると、薫の歌は、誰にも理解してもらえない薫の無常觀がそのまま表出された返歌として解釈されてくるのである。

四七 井爪康之（編）『一葉抄』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八四年）四一八頁

四八 伊井春樹（編）『細流抄 内閣文庫本』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八〇年）三七七頁

四九 野村精一（編）『孟津抄』下巻（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八二年）一三四頁

五〇 伊井春樹（編）『萬水一露』第四卷（源氏物語古注集成、桜楓社、一九九〇年）四一三頁

五一 中田武司（編）『岷江入楚』第四卷（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八三年）二六四頁

おわりに

「宿木」巻の薫の歌「やどり木と思ひいでは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし」の歌ことば「このもと」には八の宮の不在が意識されていたように、薫にとって宇治は、八の宮のいない空間として意識されていることが窺える。

「このもと」の歌ことばは、物語の展開上「宿木」巻より遡った時点の「総角」巻にも見える。「総角」巻においては、宇治を訪れた人々が、父を失った姫君たちに同情する唱和歌を詠む場面が描かれている。その唱和歌の薫の歌は、姫君たちへの恋心という本音を隠すためのものとして解釈される場合があった。一方、古注釈には、そのような見解は見えず、解釈が分かれている部分である。本論では、この唱和歌が衛門督の登場によって触発されたことに注目した。すでに考察してきたように、平安時代の「このもと」の用例を調べた結果、「このもと」の歌ことばには、肉親の喪失という意味が付与されていたことが導き出された。宰相中将の歌を受けた薫の歌には、率直な無常観が表出されていると解釈されるのである。衛門督が堂々としたその姿を表わした時、薫は一瞬若き柏木の影を想像するようになったのであろう。しかし、薫は表向きの立場においてあくまでも六条院の息子であり、実父への思いは秘められたまま、唱和歌は勾宮の「このもと」の歌ことばによって締めくくられていく。「このもと」の歌ことばは、源氏の息子として生きていきながら、実父への思いに引かれ、それが道心に繋がっていく薫の存在を端的に照らし出す表現であると言える。

補論

第十章

『源氏物語』を読んだ比較文学者

——六堂崔南善の京城府立図書館講演

補論

第十章 『源氏物語』を読んだ比較文学者

―六堂崔南善の京城府立図書館講演

はじめに

第一編から第三編まで、『源氏物語』における教育を取り扱ってきたが、『源氏物語』享受という観点から、二人の学者について取り上げてみたい。平安時代から近代に移ることになるが、『源氏物語』を読む今の私の足元を確認する作業にも通じると思うので、補論として付け加えておく。補論では、日本の朝鮮に対する植民地支配が始まる、また、強まっていく時期、お互い日本と朝鮮を往復した二人の学者に注目している。その対象は、歴史学者であり、朝鮮の近代詩の先駆者とも言われる六堂崔南善（チェ・ナンソン、一八九〇～一九五七）と、歴史学者、教育者で、東京帝国大学で歴史を担当し、九州帝国大学に多くの蔵書を残している萩野由之（一八六〇～一九二四）博士である。歴史家、教育者である上、さらなる二人の共通点は、平安時代の文学・文化に関心を持ち、『源氏物語』に代表される文学作品を詳しく読み、そこから得られた歴史認識の上、朝鮮の現実に目を向けていることである。まず、崔南善が『源氏物語』に言及している講演の日本語原稿を新たに紹介し、萩野由之の「韓国旅行談」をめぐる状況を確かめた後、二人の知の交流の可能性について言及する。

第一節 崔南善の学問―先行研究の指摘から

まず、崔南善の話から始めよう。崔南善は日清戦争（一八九五）が起こり、東アジアの朝鮮、中国、日本が西欧を認識しはじめ、その力を競い合う国際情勢の中で、ハングルを習い、漢文学と日本語を勉強し、幼年時代を過ごした。ハングルは朝鮮語の文字体系、表記システムのことで、当時の知識人は漢文中心の知識を持っていたため、朝鮮語で書かれた知の蓄積はまだ少なく、段々その刊行物が増えていく時代であった。崔南善は当時の伝統に従って漢文をしつかり学び、中国の古典を勉強したと思われ、彼は漢文で書かれた『三国遺事』などに注釈を付けるなど、深い漢文の教養を持っていたことが、膨大な著作から

―【付録】の〈表一〉に年表を載せた。

窺える。

漢文、朝鮮語、日本語をめぐる思想の中で、崔南善はそれらの言語を通じて得た知識をもとに、自らの知の世界を構築していった。彼の学術活動は、漢文学のものの上に、朝鮮語の使用による自分の文化に対する自覚、それに加えて、日本語というもう一つの外国語の刺激の上に成り立ったものである。日本語は彼にとつて近代の文明を受け入れる通路を与えるものであった。彼は西洋の古典を日本語を経由して受け入れ、それをまた朝鮮に紹介した。その一方、朝鮮語に対する自覚も高くなったと思われ、近代最初の新体詩の嚆矢である「해에게서 소년에게 (海から少年に)」を書き、啓蒙的な性格の雑誌を発行するなど、文学史においても忘れられない人である。

ただ、すぐれた業績にも関わらず、日本語という言語には、帝国日本の影が強く付されていた。一九一九年、民族代表三三人の筆頭として「三・一独立宣言文」を書いた彼であるが、一九四〇年代には日本の学徒兵募集に協力する講演をすることになる。朝鮮が日本の植民地から独立し、分離された後、彼には戦後の韓国社会から厳しい批判が寄せられる。

十五冊に及ぶ『六堂崔南善全集』(高麗大学校亜細亜問題研究所の六堂全集編集委員会、玄岩社、一九七三～一九七五年)や十四冊の影印本全集『六堂崔南善全集』(図書出版亦楽、二〇〇三年)が示しているように、彼は文学者、歴史学者、教育家、思想家であったが、戦後には、彼の著作に関する研究が一時的に好まれない状況に陥ったこともある。しかし、彼はその膨大な業績を通じて広い分野に渡る深い知識を発揮している。思想史研究の荻生茂博氏が崔南善のことを、「韓国の近代思想史を体現する知識人」^二と評価するように、その知識の世界を経由せずには、韓国の近代について語れない。植民地時代の知識人を再評価しようとする最近の雰囲気の中、彼の詩や歴史に関する著書が再び出版されている。二つの全集がすでにあり、単行本として出版されている著作も多いが、それぞれの分野の専門家が注釈を付ける作業が行われ、景仁文化社から『崔南善韓国学叢書』(二〇一三年)が次々刊行中である。

韓国文学や韓国歴史の学問分野で取り上げられることの多い崔南善であるが、彼が戦前において『源氏物語』を丹念に読んでいたことについては、『源氏物語』を中心に日本文学・日本文化について数多くの論文を発表されている金鍾徳氏の一連の研究において明確に指摘されている。金鍾徳氏の研究は、誰も注目しなかった崔南善の『源氏物語』研究を、最初に取り上げた先駆的なものであり、韓国における最初の『源氏物語』の研究者として崔南善を位置づけた業績は至大である。筆者も教えられた点が多めで、深く敬意を払う。先行研究によると、おそらく崔南善は「韓国人として初めて『源氏物語』を鑑賞した人物」^三

二 荻生茂博「崔南善の日本体験と『少年』の出版―東アジアの〈近代陽明学〉」(三)―1『近代・アジア・陽明学』(ペリカン社、二〇〇八年) 四四八頁

キム・チンドン

三 金鍾徳「韓国における近年の源氏物語研究」『国文学 解釈と鑑賞』第六五巻第一二二号(至文堂、二〇〇〇年十二月) 一三四頁

また、金栄心氏は、金鍾德氏の研究を踏まえた上、さらに法律学者であり小説家としても活動した俞鎮午（ユ・チンオ、一九〇六―一九八七）に注目して、植民地における『源氏物語』の受容について精緻な分析を行っている^六。俞鎮午を中心とする論の中で、崔南善については、「崔南善が「もののあはれ」に対抗できる朝鮮の情緒を発掘したり、源氏物語の中の朝鮮の文化を掘り出したりするなど朝鮮的な眼差しで源氏物語を享受したのは植民地の文教教育に従属しない、京城帝大の制度圏外にいたからこそ出来た「知の主体性」なのである。」^七という評価を与える。金栄心氏の研究は、植民地における日本文学という大きな視野を提示したもので、先行研究を通じて当時の教育について多く学んだ。

第二節 六堂の府立図書館における講演

「玄岩社全集」第九巻に収録された講演原稿の末尾には「（一九三一年二月二日 図書館週間 社会館에서）尹在瑛 訳」（一九三一年二月二日 図書館週間 社会館で）尹在

五 金鍾徳「韓国における源氏物語研究」〔今井卓爾（外編）『近代の享受と海外との交流』（源氏物語講座、第九卷、勉強社、一九九二年）二三四頁

七 金栄心、前掲論文、二〇〇八年、二〇五頁

八 「日本文学에 있어서의 朝鮮의 모습（日本文学に於ける朝鮮の面影）」
高麗大学校重細重問題研究所（編）『六堂崔南善全集』第九卷「論說（一）」（ソウル、玄岩社、一九七四年）四一六～四二九頁、以下、「玄岩社全集」と表記。

瑛 訳」と書かれている。この注記によると、「玄岩社全集」第九卷に収録されている韓国語の翻訳文は、日本語であったと思われる六堂の原稿を「尹在瑛」氏が韓国語に訳した訳文であるわけになる^九。

日本語訳は省略するが、「玄岩社全集」の講演原稿で得られる情報を纏めてみると、①六堂が図書館週間という時期に、②府立図書館の社会館で、③恩師であり府立図書館長の大山先生という方の推薦によって、④講演を行い、その講演の内容の中で、『源氏物語』『桐壺』巻などについて言及している。⑤講演の日には一九三一年二月二日である、ということになり、この情報は諸先行研究で紹介されている通りである。ところで、韓国語の翻訳文で載せられている「玄岩社全集」の講演原稿を興味深く読み、筆者は六堂が講演を行ったという府立図書館の講演のものと資料を確かめたいと思うようになった。

六堂の著作は影印本全集も出版されていて、二〇〇三年度に「図書出版亦楽」から全十四冊の『六堂 崔南善全集』（以下、「影印本全集」）が刊行された。書誌は【付録】の〈表三〉に記す。文学・風俗史研究会による「刊行辞」には長い間の膨大な資料の調べの上、資料が集められたことや、「影印本全集」が「一次資料」として広く使われることを願う編者の望みが書かれている。「影印本全集」なので、活字版「玄岩社全集」と重なる書物が多くあり、研究のよい資料である。しかし、六堂の府立図書館での講演原稿は含まれていなかった。

六堂の講演原稿を掘り出したいと思い、まず、府立図書館の「府立」の字に引きずられた。六堂の最初の留学は短いものであったらしく、彼は一九〇四年、日本の東京府立第一中学校へ留学し、個人的な理由によって、三ヶ月で帰っている^{一〇}。その後、一九〇六年、彼は再び渡日、早稲田大学に留学し、高師部の地理歴史科で学ぶが、模擬国会事件によって途中退学し、朝鮮に戻る。このように、崔南善は二度の日本留学を経験したが、「玄岩社全集」の講演原稿には、大山先生が府立中学校に留学した時の恩師であると書かれている。原稿の所在を確かめるために、まず、大山先生という人は、府立中学校に勤めた後、府立図書館に移ったという仮説を立ててみた。六堂が通った府立中学校は、東京府立第一中学校のことで、現在の東京都立日比谷高等学校である。東京府立第一中学校の教師が転職

^九 「玄岩社全集」には訳者に関する情報がないが、筆者の調査によると、尹在瑛氏は漢籍、歴史に関して多くの訳書を残している。出版社を立ち上げ、韓国の古典や歴史の書籍の普及に手がけていたようであり、訳書に、羅萬甲著の『丙子録』（ソウル、正音社、一九四七年）、秋適、李珥著の『明心宝鑑・擊蒙要訣』（ソウル、正音社、一九七六年）、『大学・中庸』（ソウル、正音社、一九七七年）、李能和著の『朝鮮仏教通史』（ソウル、博英社、一九八〇年）、朴趾源著の『熱河日記』（ソウル、博英社、一九八三年）などがある。高麗大学校亜細亜問題研究所の六堂崔南善全集編集委員であったことが他の訳書に記されている。

^{一〇} 「六堂崔南善先生年譜」「玄岩社全集」第一五卷、二七二～二八四頁、洪一植『六堂研究、六堂文選』（ソウル、日新社、一九五九年）

しそうな府立図書館を定めたいと思い、東京の図書館の歴史を調べ始めた。現在の東京都は一八六八年（明治元年）から一九四三年（昭和一八年）まで、東京府と呼ばれていた歴史があり、当時の名門の東京府立中学校の大山先生が、転職しそうな候補の一つとして、東京に府立図書館があったかを調べるようになった。例えば、現在の東京都立図書館は、東京市立日比谷図書館として一九〇八年に開館し、長い歴史を持っている。しかし、東京都立図書館に関する多くの資料の中で、現在の東京都立図書館が「府立図書館」と呼ばれていた時代を特定することはできなかった。

次に調べたのは、大阪府立図書館である。現在の大阪府立図書館には二つの建物があり、大阪府立中央図書館と大阪府立中之島図書館が存在する。『中之島百年——大阪府立図書館のあゆみ』^二所収のカラー写真で窺えるように、大阪府立中之島図書館は、歳月の流れを感じさせる明治時代の面影を残している建物を使っている。このような古い跡を残している図書館なら、一九三〇年代に大山先生が勤めたあの図書館であるかも知れないと思った。大阪府立中之島図書館の本館は、一九〇四年（明治三十七年）に設置されたものであるが^三、初代館長今井貫一氏で、今井氏は一九〇三年（明治三十六年）から館長に任ぜられ、開館の前、準備段階から大阪府立図書館の仕事に携わり、一九三三年（昭和八年）まで、長く図書館の業務に関わっていたことが知られる。ところで、残念なことに、初代館長は今井氏、一九三三年からの二代館長は長田富作氏で、大山先生に関する情報は見つけることができなかった。

第三節 府立図書館の大山先生

このように、府立図書館について調べていく一方、大山先生が留学時代の恩師であるという記述から、六堂の留学時代について調べる必要を感じ、東京府立中学校や東京都立日比谷高等学校の関連資料に目を通すことになった。東京都立日比谷高等学校関係の資料『日比谷高校百年史』下巻の写真集には、明治三十七年の皇室特派留学生の集合写真がしっかりと載せられてある^三。また、その皇室特派留学生たちの同盟休校についても勝浦校長時代の歴史叙述の中、第九節「韓国留学生の問題」^四に「韓国留学生の受け入れ」、「韓国留学生

二 大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会『中之島百年——大阪府立図書館のあゆみ』（二〇〇四年）

三 「大阪図書館の誕生」『中之島百年——大阪府立図書館のあゆみ』四七頁。この部分の担当執筆者は垣口弥生子氏。

三 日比谷高校百年史編集委員会『日比谷高校百年史』下巻（一九七九年）三八〜三九頁。崔南善については、名前の表記されていないものの、有名人である彼の顔は韓国では知られていて、大きい顔、澄んだ目付きをしている十五歳の彼の顔をすぐ見分けることができる。

四 前掲書、『日比谷高校百年史』上巻（一九七九年）八八〜九三頁

の状況」、「勝浦の苦渋」、「韓国留学生同盟休校」、「同盟休校後の措置」、「その後の韓国留学生」という小見出しと共に詳しく叙述されている。また、同時期に在学していた小説家の谷崎潤一郎の多くの作文に出会うこともできたが、六堂や大山先生について詳細な記録は見当たらなかった。

東京府立中学校、東京都立日比谷高等学校の関係資料を調べていく中、武井一氏の著書『皇室特派留学生―大韓帝国からの50人―』（白帝社、二〇〇五年）に出あった。著書紹介によると、武井氏は東京都立日比谷高等学校の教師であり、一九〇四年十月、大韓帝国皇帝の派遣という制度で日本に渡った皇室特派留学生について徹底的に取り上げている。六堂の最初の留学が朝鮮の皇室特派留学生制度によるものだったとは広く知られているが、武井氏は、細密な資料調査に基づいて、歴史の事実を提示しているので、当時の留学生たちの生活が目に見えられ、たいへん興味深い。最初の頁の「明治37年入学 韓国委託生」の写真には大山先生の名前が見える。『日比谷高校百年史』下巻と同じ写真であるが、武井一氏の著書には皇室特派留学生の集合写真中の「大山一夫」がはっきり記されている。写真の大山先生は、講演録のあの大山先生に違いはないと考えた。さらに、この本には、一八五頁から一八六頁に渡って大山先生についての項目がある。

大山は明治三九（一九〇六）年、朝鮮に渡った。韓国学制参与館附小学校教師として海州（ヘジュ）公立普通学校、鎮南浦（チンナムポ）公立普通学校教監（教頭）・校長、鎮南浦簡易商業学校校長を務めた。いずれも朝鮮人のための学校である。その後ソウルへ行き、京城巨留民団学事係、京城府書記、京城府学務係主任などを行った後、日の出小学校校長になった。

日の出小学校はソウルの中心街、南山（ナムサン）の麓にあった学校で日本人が主に通っていた。大山は大正八（一九一九）年八月から昭和六（一九三一）年三月までここで校長をつとめた。日の出小学校に勤務しているときには、悲劇の王女として知られる高宗の娘、李王家の徳恵（トッケ）翁主（オンジュ、側室の王女のこと。正室の場合は公主（コンジュ）という）が在学したこともあった。その後京城公立商業学校教諭などを経て、昭和五（一九三〇）年に京城府立図書館長に就任した。その後のことは今の所分らない 一五。

この資料により、大山先生が京城府立図書館長であったことが判明した。従って、六堂の府立図書館における講演は、日本ではなく、植民地朝鮮に設置された京城府（現在のソウル）で行われた可能性が高くなってきた。

一五 武井一『皇室特派留学生―大韓帝国からの五〇人―』（白帝社、二〇〇五年）一八六頁。傍線は筆者。

第四節 京城府立図書館

現在、ソウル駅の向かい側、ソウル・タワーが立っているソウルの真ん中の南山にはソウル市立の「南山図書館」という建物が立っている。南山図書館からは『南山図書館六十年史』（一九八二）^{一六}や『南山図書館八十年史』（二〇〇二）^{一七}が編纂され、新聞記事が整理されていて、図書館の歴史を知るために貴重な手引きになる。以下、『南山図書館八十年史』を参考に南山図書館の歴史を要約してみる。

一九一〇年に朝鮮は国権を失い、植民地朝鮮には総督府が設置された。京城府立図書館は、「文化政治」に活用するため、また、文献の収集のため、総督府の実務における必要な書籍の具備のためなどの目的も加わって一九二二年に、京城における最初の公立図書館として開館することになった。府立図書館は最初、「明治街二五番地」（現在の明洞^{ミョンドン}）に設置された。病院で使われた建物を改装したもので、六年後、「長谷天町一一五番地」（現在の小公洞^{ソゴンドン}）の大観亭に移された。一九二八年には「社会館」が新しく建てられ、三七年間、その地で図書館が利用された^{一八}。

「玄岩社全集」の六堂の講演原稿の末尾に、「（一九三二年二月二日 図書館週間 社会館[・]에서」尹在瑛 訳」（一九三二年二月二日 図書館週間 社会館[・]で」尹在瑛 訳）とあったように、「社会館」に関する疑問もここで解けた。

『南山図書館八十年史』には京城府立図書館時代から南大門図書館時代を経て、現在の南山図書館に至るまでの歴史が綴られていて、「『京城府立図書館時代：一九二二～一九四六』には一・時代状況、二・設立および開館、三・庁舎の移転、新築拡張および分館の設置、四・施設、五・機構および予算、六・資料の収集・整理および管理、七・閲覧奉仕および其の他の図書館活動、八・刊行物、の順に分けられ、約五四頁に渡って図書館の歴史が叙述されている。

「写真から見る南山図書館八十年」の「歴代館長」には「第四代 大山一夫（おおやま・かずお）」の名前が「一九二九年九月二日～一九三二年四月二九日」という在職期間と共にはっきり書かれていた。この情報に接し、六堂の講演は、京城府立図書館で行われた可能性がさらに強くなってきた。

『南山図書館八十年史』の第八章「刊行物」には、次のような叙述がある。

^{一六} ソウル特別市南山図書館（編）『南山図書館六十年史』（一九八二年）

^{一七} 南山図書館八十年史編集委員会（編）『남산도서관 80년사—1922～2002—』

南山図書館八十年史—一九二二～二〇〇二（ソウル、二〇〇二年）以下、『南山図書館八十年史』と表記。

^{一八} 以上は、『南山図書館八十年史』一二九頁から一八三頁を読み、筆者が日本語に要約した。

1933년 발간된「장서목록」 외에「경성부립도서관보」、「도서관 강연록」 등의 책자가 발간되었으나 장서 목록 외에 관심을 가질만한 것은 없다. 이외에 소위「일본정신과 국방에 관한 도서목록」 분류표 및 열람 규정 등 판매했 형식의 간행물이 발간 배포되었다.

一九三三年發刊されえた「藏書目錄」の他に「京城府立図書館報」、「図書館講演録」などの冊子が發刊されたが、藏書目錄の以外に関心を持つほどのものはない。その他、いわゆる「日本の精神と国防に関する図書目錄」の分類表および閲覧規程など、パンフレット形式の刊行物が發刊、配布された一九。

つまり、『南山図書館八十年史』の編纂委員会にとって、「京城府立図書館報」、「図書館講演録」などの冊子は、あまり注目を引くものではなかったようである。しかし、筆者は「図書館講演録」という冊子こそ大事なものに違いないと思うようになった。

第五節 六堂の読んだ『源氏物語』

南山図書館の書庫には、植民地時代に朝鮮総督府によって集められた貴重な書籍や当時の資料が残っている。多数の京城府立図書館の資料を受け継いでいる書庫は、閉架式に運営されている。そこで、筆者は二〇一三年一月『図書館講演録』という冊子の閲覧を申請し、六堂崔南善の講演原稿「日本文学に於ける朝鮮の面影」^{二〇}を見付けることができた。この薄い冊子の目次の主要記事は【付録】の〈表四〉に載せる。

六堂はこの講演の中で、『源氏物語』について言及しつつ、朝鮮文化について語っていく。『図書館講演録』はA5サイズの六十九頁までが綴られた小冊子である。六堂の講演は三十四頁から五十四頁まで、ちょうど二十頁に渡って載せられている。五箇所に菱形（◇）が付いていて、五節に分けられるようである。「光る源氏」という語彙は第一節から取り上げられているが、四十八頁から五十一頁の upper 段に掛けて、講演のタイトル通り、日本文学の『源氏物語』における朝鮮の面影について述べている。全体の約十八%の割合である。主に『源氏物語』の本文から看守される平安時代の風俗と朝鮮の衣服、食物、年中行事の類似性について触れているが、「桐壺」巻に関する部分を引用してみよう。

試みに源氏物語を繙いて見ますと、開卷第一の桐壺の巻に時のみかどが、身分高から

^{一九} 『南山図書館八十年史』一八二頁。日本語訳と傍線は筆者による。

^{二〇} 崔南善「日本文学に於ける朝鮮の面影」京城府立図書館『図書館講演録』（一九三一年一月二八日）三四～五四頁、編集兼発行者は「大山一夫」である。

ざるも寵愛並々なぬ更衣の身から、玉の様な若君を生んで貰つて、太子にも立てたのであるが、勢家を背景にもつ第一皇子に気兼ねして、何うしたものであらうか、御思案にくれられたが、それらの猜忌を解き、身命を全うさせる為めには、どうしても臣籍に下して置くが宜しいと考へられたものゝ、然し慾目で用意に決定がつかなくつたが、みかどをして万事を放下してこれを決行せしめる上に、以外の刺戟が現はれた。それは、その時丁度高麗の国から使が来てゐたが、一行の中に偉い人相見が居ることを御聞きになつて、第二の若君を、常人のつくりをさせて、ソツと使達の居る処へ寄越して、相に現はれる運命を判断させて見た。すると、人相見は吃驚して、幾度も頭を傾けて不審を打ちながら申すやう――

国の親となつて、帝王といふ無上の位置に昇る筈の人相であるが、併しその帝王といふ方面から見ると、紛紜が起つて心配事があるかも知れませぬ。又朝廷の柱石として、天下の政務を輔けてゆく方面から見ると、この人相を別の方法で判断せねばなりません。

と判じた二。

講演文は『源氏物語』の「桐壺」巻のストーリーを正確に伝えている。「桐壺」巻に登場する高麗相人とは渤海の人であるという指摘も付け加えられていて、六堂が『源氏物語』を読み解いていることが看守される。彼は『源氏物語』に垣間見える風俗を朝鮮のそれと対照的に分析しているが、紙面の関係上、詳細は割愛する。

六堂がこのように、時代の離れている平安時代と朝鮮の文化を比較することが可能であった理由としては、まず、彼が日本語に不自由のなかった学識と幅広い見識を持っていたからだと思われるが、彼の生きていた当時の朝鮮には『源氏物語』を連想されるような要素が多くあったことも関係が深いと思われる。例えば、彼は「我々が心して源氏を読みますと、文献と遺物の乏しい、半島古代の或る生活様式がマザ／＼と眼の前に現はれて、一種の頼もしい気のする点がございます。」^三と述べる。

第六節 図書館講演はいつ行われたか

「日本文学に於ける朝鮮の面影」の冒頭を引用してみよう。

①虫鳴く秋と、木枯らし吹く冬とは、淋しく侘しい季節と、昔から相場が定つて居る様であります、実は気も清々に、夜も段々長くなつてゆく此頃は、いはゆる灯火親

二 崔南善「日本文学に於ける朝鮮の面影」四八～四九頁。

三 崔南善「日本文学に於ける朝鮮の面影」四九頁。

むべき時節であつて、読書が人間最大の楽しい事である限り、秋冬は寧ろ精神的緊張を要し、大いに慰安を得る時でなければならぬのであります。②兼好法師が徒然草に――

ひとり灯の下に、文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むわざなれ

と申したのも、この意味であらうと存ぜられます。③日本に於ける図書館当局が、この時を択んで、読書週間を設け、諸種の催しと集まりとを以つて、これに対する反省を新にし、万人に心の糧を恵まうと致しますることは、誠に意味深長と申すべきであります。

④サテ私は、当府立図書館長大山先生から、この機会に朝鮮文芸に関する興味ある事実を、成るべく書物に関係を有たして、皆様に御話ししてくれる様、御依頼を受けましたが、何よりも言葉の自由でない私は、他に然るべき方にと、御断りを致さざるを得ませぬでした。ところが先生から、色々御都合もあるとて、重ねて申し付けられて見れば、昔の教子の一人として、強つて御免を蒙むる訳に参りませぬので、不束ながら一場の責塞ぎを致すことにした次第であります 二三。

まず、④の部分の「当府立図書館長大山先生」とは、京城府立図書館の館長の大山一夫であることはすでに考察してきた通りである。一方、「玄岩社全集」所収の翻訳文の末尾には、『図書館講演録』所収の原文の最後の文章「私の御話はこれで終りますが、御聞苦しいところを御清聴下さいまして、有難く御礼申し上げます。」という文が省略されている。代わりに「玄岩社全集」には、『図書館講演録』の原稿にはない、「（一九三一年二月二日 図書館週間 社会館で 尹在瑛 訳）の付加情報が記されている。文字通りに読めば、一九三一年二月二日は図書館週間中の日であつて、六堂が社会館で行われた講演を尹在瑛氏が訳したこととして理解される。ところで、冒頭の表現と「玄岩社全集」の注記の間に、多少の違和感を覚えた。

六堂が引用した②の兼好法師の文とは、『徒然草』第十三段の冒頭である。

ひとり灯のもとにて文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。

文は、文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。此の国の博士どももの書ける物も、いにしへのあはれなること多かり 二四。

「見ぬ世の人の友」という言葉は日本文学史の中で有名な言葉であり、古来の優れた断

二三 崔南善「日本文学に於ける朝鮮の面影」三四～三五頁

二四 永積安明（校注・訳）『徒然草』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）九一～九二頁

簡を集めた古筆手鑑の書名にも使われている。六堂は、読書にふさわしい季節に言及しながら、『徒然草』の第十三段の冒頭を引用するわけである。一方、「玄岩社全集」の注記に沿って、この講演が二月二日に行われたと仮定すると、「虫鳴く秋と、木枯らし吹く冬」や「実は気も清々に、夜も段々長くなってゆく此頃」という言葉は少し腑に落ちない気がしてならない。秋から冬への季節と二月は距離があるからだ。

従って、「図書館週間」という言葉に注目した。六堂の講演の冒頭には二重傍線部「読書週間」という言葉があったが、読書週間もしくは図書館週間の時期が特定できれば、六堂が講演を行った日にちの推測の範囲を狭くすることができると思った。

第二節で大阪府立図書館について検討したが、『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』で紹介された大阪府立中之島図書館の初代館長今井貫一氏の業績に関する記述を見てみよう。

近畿図書館協議会が近畿圏の図書館間の親睦や館務報告の交換を目的としていたのに対して、大阪府内の図書館を対象として協会も設立されることになった。

一九二三（大正一二）年二月に大阪府下図書館関係者懇談会が当館で開催され、以後この会は大阪市立清水谷図書館、天満宮文庫、大阪府立商品陳列所図書館、大原社会問題研究所図書館を巡った。翌年に大阪図書館連盟が結成され、同年十一月一日から一六日までを図書館週間にすること。図書館週間に図書館関係者懇談会を開催すること決定した。この時に大阪図書館協会の設立が提議された。

創立委員会には、今井貫一（当館館長）、小笹国雄（大阪府立図書館長）、森川隆夫（大原社会問題研究所）、内海景晋（大阪朝日新聞社）、毛利宮彦（大阪毎日新聞社）、城野雄介（大阪高等学校）、東出清光（大阪府立商品陳列所）が選ばれた。十二月一日に大原社会問題研究所で開催した府下図書館員懇談会で大阪図書館協会の発足が正式に決まり、一八日に創立調査委員の七名がそのまま理事となり、理事会の互選で理事長に今井が就任した。翌年二月二十八日に当館において発会式を催している。

協会の活動には、一つには図書館週間の挙行があった。一九二五年（大正一四）年一月八日から一四日までを第二回図書館週間として、今井が大阪放送局から「読書の今昔」を放送した。さらに良書目録の刊行もおこなっている。二つには展示会の開催がある。当館では数々の展示会を開催してきたが、協会の主催する展示会に会場を提供することもおこなっている。当館で開催された協会主催の展示会は第二回図書館週間時の「蒐集趣味展覧会」と一九三一（昭和六）年十一月一四日から一六日までの「大阪商工文献展覧会」がある^{二五}。

^{二五} 「戦争と図書館」中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ編集委員会『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』（大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会、二〇〇四年）一三二、一三三頁、この部分の担当執筆者は門上光夫氏。

この記事によると、「図書館週間」は今井貫一館長などが関わった図書館連盟や大阪図書館協会が中心に行ったもので、一九二四年には一月一〇日から一六日までに、一九二五年には一月八日から一四日まで、一九三一年には一月一四日から一六日までであったことが確認される。

他に、「図書館週間」という言葉を『中之島百年―大阪府立図書館のあゆみ』『年表』から拾ってみると、次の通りである。

〈一九三〇年〉

一月六日～一二日まで。図書館週間。日本図書館協会のポスターを掲示。葉を配布。

〈一九三二年〉

一月一日～七まで。

図書館週間。ポスターを掲示。葉を配布。^{二六}

つまり、内地における「図書館週間」は主に秋から冬へ移る一月に行われたことが見受けられる。それでは植民地朝鮮における「図書館週間」は、どの時期に設けられていたのか。『南山図書館八十年史』には、「一九三〇年図書館週間のポスター」が載せられている。縮小印刷のため、印刷状態は鮮明ではないが、上に横文字で「図書館週間」、右側に「十一月六日より十一月十一日まで」^{二七}と縦に書かれている。これによると、おそらく植民地朝鮮においても、一九三〇年の図書館週間は、十一月のほぼ同時期に指定されたことが確認される。六堂の講演原稿には③「日本に於ける図書館当局が、この時を択んで、読書週間を設け」とあった。読書週間が図書館週間を意味するものであれば、京城府立図書館の図書館週間は、日本と同様な時期に儲けられたのではないか。

『図書館講演録』に載せられている大山一夫の「図書館講演録発刊に就て」の冒頭には次のように書かれている。

本館デハ、作昭和五年ノ全国図書館週間中ニ、第一回ノ図書館講演会ヲ開キ、京城デ
ノ図書館通デアラセラル、城大司書官吉村定吉氏、並ニ京城師範学校長渡邊信治氏ノ
御出演ヲ煩ハシタ。又第二回ノ図書館講演会及ビこども会ヲ、本年ノ全国図書館週間
中ニ催シ、朝鮮総督府囑託崔南善氏、京城第一高女教諭大場勇之助氏、並ニ童話家ト
シテモ定評アル梅洞校長土生米作氏ノ御出馬ヲ願ツタ^{二八}。

大山館長の文章から、一九三〇年の図書館週間に第一回の講演会が開かれ、一九三一年の講演会は第二回目の図書館週間に開かれたことが窺える。文章中の「全国」とは、植民

^{二六} 上掲書、三一頁

^{二七} 『南山図書館八十年史』一七九頁。

^{二八} 大山一夫「図書館講演録発刊ニ就テ」京城府立図書館『図書館講演録』（一九三一年二月二十八日）一頁

地朝鮮を含む帝国日本の全国のこと、内地でも外地でも、図書館週間はほぼ同時期に行われたことが見て取れる。

以上の考察を経て、六堂の講演が何かの事情によって「玄岩社全集」の注記のように、「一九三一年二月二日」に行われたものであれば、またその事情を知りたくなる所であり、興味深い問題だと思われる。しかし、図書館週間に関する調べから考えて、筆者は「玄岩社全集」の注記、「一九三二年二月二日」とは、一九三一年一月二日の「二一」がなんらかの理由で「二」と読まれて「玄岩社全集」に表記されてしまった可能性はないか、と考える次第であり、六堂の講演は一月に行われたと推測する。

第七節 朝鮮を訪れた歴史家、萩野由之

六堂が『源氏物語』に関心を持ち、そのストーリーは勿論、そこに嵌め込まれている平安時代の歴史的背景や風俗と朝鮮の関係にも関心を持っていたことは、すでに先行研究で指摘された通りである。一方、筆者は図書館講演「日本文学に於ける朝鮮の面影」を読みながら、六堂の次のような発言に注目した。

日本の或る有名な歴史家が、朝鮮の風俗を見て、平安朝時代相の絵巻が、眼前に広がってゐると申したのは、至言であると思ひます^{二九}。

この部分に関する先行研究はまだない。「日本の或る有名な歴史家」とは誰か。大山一夫が「図書館講演録発刊二就テ」の中で、六堂のことを「朝鮮総督府嘱託崔南善氏」^{三〇}と紹介しているように、図書館講演が設けられた一九三一年、六堂は朝鮮総督府傘下の「朝鮮史編修会」の嘱託として活動していた。後に彼は委員にまで上るが、このように活動していた六堂であれば、日本の歴史学についても多くの知識を持ち、「朝鮮史編修会」で勤めていた日本の歴史家との交流もあったはずである。

一七歳の六堂は一九〇六年、再び日本へ留学、早稲田大学で地理を研究したが、一九〇七年退学し、朝鮮に戻り、文筆活動や出版業に集中していた。それからまもない一九〇九年、日本から朝鮮を訪れた日本の歴史学者がいた。東京帝国大学で歴史を担当した萩野由之（一八六〇～一九二四）博士は、学術調査のために、朝鮮、中国を訪れることを命じられ、明治四十二年（一九〇九）一月九日から二月二十八日まで旅立つことになる。揚原敏

^{二九} 崔南善「日本文学に於ける朝鮮の面影」京城府立図書館『図書館講演録』（一九三一年二月二十八日）五一頁。旧字は常用漢字に改めた。

^{三〇} 大山一夫「図書館講演録発刊二就テ」京城府立図書館『図書館講演録』（一九三一年二月二十八日）一頁。

子氏が「評伝萩野由之」で紹介している萩野の文章は印象的である^{三二}。揚原氏は現代仮名遣いに改めて引用しているが、その部分を萩野の原文に当たって確かめてみよう。

扱て目的とする所の日本の歴史と朝鮮の現状との比較は如何といふと、是は自分がコ
チラに居て考へましたよりも、より以上に能く似て居る、甚だ面白いと思ひました、
それは藤原時代院政時代の国史学・国文学に従事する人は朝鮮の現状を行つて見ねば
本當の事が分るまいかと思ふ程である、藤原時代の絵巻物の内を旅行して居るやうな
心地が致しました^{三三}。

右の部分からには萩野が持っていた歴史学者としての冷静な視線とするどい觀察力を發揮されていることが窺えるが、萩野のこの発言は六堂の図書館講演の言葉と一致するのではないか。つまり、六堂が仄めかした「日本の或る有名な歴史家」とは萩野由之だと筆者は判断する。

一九〇九年の学術調査の後も、萩野はまた史料蒐集を命じられ、朝鮮を訪れる。すでに揚原敏子氏が概略を紹介しているが、具体的な情報を当時の新聞から確認することができ。朝日新聞社のデータベース「開蔵『ビジュアル』」を利用して検索してみると、『東京朝日新聞』一九一八年（大正七年）六月七日の五頁の「国史研究の立場から支那を觀察に――萩野田中両博士の渡支」記事に「先づ朝鮮から奉天大連青島に渡り（後略）」^{三四}とあり、この時期、萩野由之が史料収集のために再び朝鮮、満州に向かうべき内命を受けたことが確認される。また、『東京朝日新聞』同年九月二日の四頁には「両博士渡支」という短い記事があり、「研究觀察の為、支那へ出張仰付けられたる東京帝国大学文科大学教授文学博士萩野由之、同上田中義成両氏は、一日午前八時三十分東京駅発汽車にて出発したり」^{三四}とある。

記録に見える萩野の二回の朝鮮訪問は内命を受けた出張であるが、九州帝国大学図書館編の『萩野文庫目録』^{三五}を参考にし、本の題目をみるだけでも、萩野の朝鮮に関する関心や知識がけっして浅いものではなく、彼は貪欲的に朝鮮について研究していたことが推測される。九州帝国大学図書館編の『萩野文庫目録』から、朝鮮関係の資料を【付録】の〈表五〉に取り上げる。目録からは、歴史や地理、文学を研究していた萩野が朝鮮の地理、歴史に関する書籍が多く収められていることが目に付き、朝鮮だけでなく、朝鮮王朝を遡る韓

三二 揚原敏子「評伝萩野由之」『学苑』第三一五号（昭和女子大学光葉会、一九六六年三月）二五頁

三三 萩野由之「韓国旅行談（国史学会講演）」『国学院雑誌』第一六卷第四号（国学院大学、一九一〇年四月）四三四頁。常用漢字を用い、句読点を補った。

三四 朝日新聞社 開蔵『ビジュアル』（二〇一二年一月一日、アクセス）
（http://www.asahi.com/information/db/2for1.html?iref=com_rnavi）

三五 朝日新聞社 開蔵『ビジュアル』（二〇一二年一月一日、アクセス）
九州帝国大学図書館（編）『萩野文庫目録』（一九三二年）

半島の古代史にまで関心の領域を広げていたことが確認される。

一方、萩野文庫は九州大学の他に、萩野の在職していた東京大学総合図書館にも所蔵されている。そのリストは、大学ノートの手書きの形式であるが、東京大学付属図書館所蔵『萩野由之旧蔵書目』^{三六}から確認される。目録には、約一〇〇項目の蔵書が書名のアルファベット順に整理されているが、その中で、朝鮮関係の資料は、管見の限り、無かった。東京大学総合図書館の萩野文庫には、日本の漢籍が中心に蒐集されている。部分的に朝鮮やその以前の歴史に関する内容が含まれる書物があるかもしれないが、書名に「朝鮮」が含まれる書物はない。

萩野は冷静に朝鮮のことを調査したものであり、彼の旅行記の言説からは、まだ近代化がほど遠く見える朝鮮の実情に関する批判的な視線が感じられる所もある。しかし、講演の形式を取っている旅行記だけあって、萩野博士の朝鮮に対する理解がどのようなものであったかについては、より慎重な検討が必要であると思われる。まずは彼が朝鮮の歴史に関心を持っていた事実重点を置きたい。

六堂が『源氏物語』に朝鮮の面影を見ていたことや、萩野由之が朝鮮で平安時代を思い浮かべたことも無理はないようである。朝鮮の風俗は、平安時代を思わせる要素を多分含んでいたことは確かであったようで、そのような傾向については、現代の学者の指摘もある。小泉和子氏の研究『類聚雑要抄』にみる宮中および摂関家の宴会における飲食・供膳具』において、小泉氏は一二世紀の天皇や貴族の文化が収められている『類聚雑要抄』第一巻の饗宴の例を取り上げ、以下のように述べる。

また朝鮮半島でも高句麗舞踊塚古墳の墓室内図で来客を接待する図にも木菓子のようなものは円錐状に盛っている。とくに韓国の場合、その後も古代の方式を伝えていて、現在でも年中行事や冠婚葬祭などのハレの儀式的な食物は山盛り方式だし、食器の並べ方も多数の整列方式である。食事具についても、韓国では匙は飯、おかずは箸ときつちり使い分けているし、食器は食卓に置いたままで、手で持ち上げることは不作法とされている。つまり『類聚雑要抄』にみえる貴族階級の宴会の方式と古代中国・朝鮮半島の方式は、非常によく似ていたわけで、貴族階級では、この方式を忠実にとりいれていたことがわかる。ただ中国や朝鮮半島の場合、十二世紀になると、食器類の種類も豊富になっていたし、質も高く、金属器も多く使われている。とくに陶磁器においては中国は北宋から南宋時代に当たるし、朝鮮半島では高麗時代になる。(中略)要するに平安時代の貴族階級の食文化には、中国や朝鮮半島の食文化が大きな影響を及ぼしていたということは間違いない。たがその一方、日本古来の、独自の食文化も根強く残っていた―この点は食品の方に顕著にみられる―ということである。おそらくこれは、当時の貴族社会のあり方を反映していたのであろう^{三七}。

三六 東京大学付属図書館所蔵『萩野由之旧蔵書目』(和漢書目録掛作成、一九五九年二月)
三七 小泉和子『類聚雑要抄』にみる宮中および摂関家の宴会における飲食・供膳具」〔川本重雄・

引用文によると、古代中国や朝鮮の食文化が日本に伝えられ、平安時代の貴族の食文化でその影響が見えるが、日本では、独自の食文化も根強く残っていたので、固有の文化が創造されていくとされる。従って、日本では時代の流れとともに、外来文化の影響はつきり残っていない。反面、朝鮮では古代からの食文化が守られていて、朝鮮の食文化や現代に残されている朝鮮の伝統文化から、平安時代の貴族の食文化を想像してみることができるといふ説明である。

『萩野文庫目録』の書籍には、朝鮮版や朝鮮総督府の刊行したものが含まれているが、同時期に六堂が出版社を立ち上げ、手がけていた歴史書と同じタイトルの書物もしばしば見える。追加調査が必要になる所であるが、他日を期したい。萩野は六堂より、約三〇年早く生まれ、先を歩いたことになるが、二〇世紀初めの頃、生の奇跡が交差した二人の知識人が、同様の書籍を読み、同じく歴史、地理、文学、文化を研究し、教育に携わっていたことだけあって、その知の繋がりにたいへん関心をもたれる。

六堂の最初の日本訪問は皇室特派留学生という公の名分を担いだ形であった。萩野の場合は、命令による調査、出張の性格のものであった。二人とも個人的な旅行ではなく、歴史の流れの中で、日本と朝鮮という異文化に接したわけである。彼らの講演記録から六堂と萩野は異文化との出会いをそれぞれ自文化のもとで反応した知識人であると評価される。二人の研究の領域は、歴史、地理、文学、教育という多方面で重なり合う。東アジアにおける知の系譜を考える時、二人は歴史という学問によって、または『源氏物語』をはじめ、平安文学によって繋がっていた。彼らが接した書物、風習、地域の記憶が、彼らの思想を動かし、同時代を生きていた血の異なる二人の知による対話を可能にさせたと思われる。

おわりに

六堂の府立図書館における講演原稿の原文が知られていなかったのは、彼が国文学と歴史学に大きな業績を残していたことと関連があるかもしれない。彼は新体詩を最初に紹介し、朝鮮語で書かれた文学を普及する啓蒙思想家であり、神話や伝説などを収集、整理した国文学者であった。また、『三国遺事』などの古代の書物に注釈を付け、民族を象徴するものとして霊山を研究し、その思想を展開していた歴史学者でもある。国文学と歴史学の二つの分野に渡る業績が甚だしく、彼の府立図書館の講演原稿は、六堂の思想を論じる先行研究の中で、しばしば彼が日本文学にも通じていたこと示す指標として想起されるほどであった。しかし、『源氏物語』が詳細に分析され、『徒然草』が引用され、『伊勢物語』、『曾

我兄弟』『八百屋お七』が列挙されているように、彼の講演原稿は、韓国の国文学と歴史学のどちらにも当て嵌めにくい性質を含んだものである。従って、日本語の原文に触れることなく、語られてきた。しかし、この原稿は比較文学者としての彼の面貌を窺わせるものであり、そこには日本文学と韓国文学をめぐる大きな手掛かりが含まれていて、注目すべきであることは先行研究の指摘通りである。

本博士論文においては、『源氏物語』における教育を調べ、教育によって結ばれる関係について考察した。その前提は教育のもつ関係形成の役割である。例えば、源氏の息子夕霧は大宮によって育てられていたが、大学入学を切っ掛けに、源氏が教育を行うことになり、その教育の時間を経て、父と子として改めてお互いを認識し始めるのである。また、源氏の娘の明石の姫君は、生まれた明石から源氏のもとに移動し、源氏の手による教育を受けることによって、六条院の文化を受け継ぐ娘として成長する。

要するに、『源氏物語』における父と子は、血が繋がっているからだけではなく、教育という行為を通じて、父と子として結ばれるものである。『源氏物語』が伝えている教育や知の伝授によって結ばれる関係は、母語を異にする間柄においても、知の交流による関係作りの可能性を示唆するのではないか。六堂崔南善と萩野由之が提示した知の交流の痕跡、手掛かりを確かめ、踏まえながら、比較の視点を持ちつつ、平安文学を眺めることを、今後の課題とさせていただきたい。

【付録】 ※旧字は常用漢字に改めた。 日本語訳はすべて筆者による。

〈表二〉「玄岩社全集」第一五巻の「六堂崔南善先生年表」をもとに作成した。

年度	年齢	重要事項	国際情勢
一八九〇	〇	四月、漢城（現在のソウル）で出生	
一八九四	五		日清戦争
一九〇四	一五	十月、皇室特派留学生として東京府立第一中学校に入学	日露戦争
一九〇五	一六	一月、退学	
一九〇六	一七	三月、渡日、早稲田大学に入学	
		六月、模擬国会事件で早稲田大学を退学	
一九〇七	一八	出版社の新文官を設立	
一九〇八	一九	月刊雑誌『少年』を創刊	
一九一〇	二一		韓日合併
一九一一	二二	『東国歳時記』刊行	
一九一三	二四	訪日、東洋文庫を訪問	
一九一九	三〇	独立宣言を書く	
		逮捕される	
一九二二	三三	出版社の新文館を解散	
		東明社の設立、週刊誌『東明』を刊行	
一九二五	三六	東亞日報の客員になる	
一九二七	三八	『三国遺事』を発表	
		朝鮮総督府の朝鮮史編修会の囑託、後に委員	
一九三一	四二	京城府立図書館講演、『壬辰乱』を発表	
一九三二	四三	中央仏教専門学校の講師に就任	
一九三六	四七	「朝鮮の神話」を講演	
一九三九	五〇	満州国 建国大学の教授に就任	
一九四三	五四	訪日、明治大学で学徒兵勧誘の講演	
一九四五	五六		朝鮮独立
一九四六	五七	『新板朝鮮歴史』を刊行	
一九四七	五八	『朝鮮歴史地図』を刊行	
一九四九	六〇	過去、日本側に協力した疑いで収監	
一九五〇	六一		韓国戦争
一九五一	六二	李舜臣の遺跡を巡歴	
一九五七	六八	永眠	

〈表二〉

高麗大学校亜細亞問題研究所（編）『六堂崔南善全集』（ソウル、玄岩社、一九七四～一九七五年）

卷数	題目
第一卷	韓國史（Ⅰ）通史篇
第二卷	韓國史（Ⅱ）壇君・古朝鮮・其他
第三卷	朝鮮常識問答・朝鮮常識
第四卷	故事千字
第五卷	神話・説話・詩歌・隨筆
第六卷	白頭山謹參記・金剛札讀・尋春巡礼
第七卷	別集（Ⅰ）新字典
第八卷	別集（Ⅱ）三国遺事・大東地名辞典・時文読本
第九卷	論説（Ⅰ）
第一〇卷	論説（Ⅱ）
第一卷	歴史日鑑（Ⅰ）
第二卷	歴史日鑑（Ⅱ）
第三卷	韓國歴史辞典
第一四卷	別集（Ⅲ）新校本・時調類聚
第一五卷	別集（Ⅳ）付録 総目次・総合索引・年表

〈表三〉 崔南善『六堂崔南善全集』（図書出版亦楽、二〇〇三年）（影印本全集）

卷数	内容
第一卷	文学（詩・詩歌・随筆）
第二卷	文学（翻訳詩歌・翻訳小説・紀行）
第三卷	文学（紀行…白頭山謹参記・金剛礼讃）
第四卷	文学（紀行…松漠燕雲録、文学評論、神話・説話、其他）
第五卷	歴史（論文）（日本語で執筆された『不咸文化論』などが含まれている。）
第六卷	歴史（論文、断行本…兒時朝鮮、壬辰乱）
第七卷	歴史（断行本…歴史日鑑、故事通）
第八卷	歴史（断行本…朝鮮独立運動小史、新版 朝鮮歴史、独立運動の経過、やさしくすぐわかる朝鮮歴史）
第九卷	歴史（断行本…国民朝鮮歴史、朝鮮の古蹟）
第一〇卷	文化・風俗（宗教・思想・文化・民俗・風俗）
第一一巻	文化・風俗（朝鮮の山水、朝鮮常識問答続編、朝鮮常識 地理篇）
第一二巻	文化・風俗（朝鮮常識 制度篇、朝鮮常識 風俗篇）
第一三巻	教養・其他（伝記・教養・満蒙関係・地理）
第一四巻	教養・其他（序文・書評・其他、断行本…時文読本）

〈表四〉 京城府立図書館『図書館講演録』（一九三一年）

筆者	講演タイトル
大山一夫	「図書館講演録発刊ニ就テ」
渡辺信治	「図書館の利用」
吉村定吉	「本の読ませ方実演」
大場勇之助	「日本音楽界の展望」
崔南善	「日本文学に於ける朝鮮の面影」
土生米作	「山羊の耳（慶州伝説童話）」
田中敬	「時代の要求と図書館の施設」

〈表五〉

※『萩野文庫目録』（九州帝国大学付属図書館、一九三二年一月）。『萩野文庫目録』は本題の五十音順に並べられている。本論の分類は、便宜上、大きな枠組みから行ったもので、必ずしも一つの項目に当てはまらない書籍もある。書名の旧字は常用漢字に改めた。明確な誤字は改め、朝鮮と日本の年号は、西暦に統一した。

(一) 建築・教育・語学・行政・語学分野

著者	題目	出版地	出版年
《建築》			
農商工部観測所編	『韓国観測所學術報文』第一卷	仁川	一九一〇
東京帝国大学工科大学編	『韓国建築調査報告』	東京	一九〇四
《教育》			
韓国学部編	『韓国教育』	京城	一九〇九
官立漢城外国語学校編	『国語朝鮮語字音及用事比較例』	京城	一九一一
小倉進平著	『朝鮮語学史』	京城	一九二〇
朝鮮総督府編	『朝鮮の謎』	京城	一九一九
朝鮮総督府編	『謎の研究―歴史とその様式』	京城	一九二〇
金澤庄三郎著	『日鮮古代地名の研究』	京城	一九一二
《行政・社会》			
韓国内務警察局編	『韓国警察一斑』	京城	一九一〇
統監部鉄道管理局編	『韓国鉄道線路案内』	京城	一九〇八

(二) 地理分野

著者	題目	出版地	出版年
信夫淳平著	『韓半島』	東京	一九二〇
忠清南道	『忠清南道道勢一斑』	忠清南道	一九一八
忠清南道	『忠清南道史蹟年表』	忠清南道	一九一八
金澤庄三郎、 小藤文次郎編	『朝鮮地名字彙—羅馬字索引』 第一部、第二部	東京	一九〇三
朝鮮総督府編	『朝鮮土地調査 殊ニ地価設定ニ関スル説明書』	ナシ	ナシ
小松運編	『朝鮮八道誌』	東京	一八八七
李荇等編	『新增一 東国輿地勝覧』三冊	京城	一九〇六
成海應撰	『東国名山記』	京城	一九〇九
中山助治著	『平壤要覧』	平壤	一九〇九
東京帝国大学 文学部編	『満鮮地理歴史研究報告』第一〜九	東京	一九一五 〜一九二二

(三) 歴史・文化分野―主に朝鮮時代以前を扱うもの

著者	題目	出版地	出版年
百済古蹟保存会編	『百済の事蹟と扶余の名勝旧蹟』	忠清南道扶余	一九一八
ナシ	『高句麗古碑考』	ナシ	ナシ
ナシ	『高句麗永樂大王古碑』	東京	ナシ
国書刊行会編	『高麗史』	東京	一九〇八 ～一九〇九
池内宏著	『高麗時代の古城址』	東京	一九一九
京都帝国大学文学部	『三国遺事』一～五	京都	一九二〇
坪井九馬三、日下寛校	『三国遺事』上中下	東京	一九〇四
坪井九馬三、日下寛校	『三国史記』七冊	東京	一九一三
島地嘿雷、生田得能著	『三国仏教略史』三冊	東京	一九九〇
吉田東伍著	『日韓古代断』	東京	一八九三
西川権著	『日韓上古史／裏面』上中下	東京	一九一〇
鳥山喜一著	『渤海史考』	東京	一九一五

(四) 歴史・文化分野―朝鮮時代を中心に扱うもの

著者	題目	出版地	出版年
幣原坦著	『韓国政争志』	東京	一九〇七
ナシ	『正徳朝鮮被遺御屏風賛并和解』	ナシ	ナシ
川口長孺著	『征韓偉略』一〜五	江戸	ナシ
青山延光著	『征韓雜志』	水戸	ナシ
ナシ	『征韓私記』(海外考証、二冊)	ナシ	ナシ
北豊山人著	『朝鮮役』	東京	一八九四
横井忠直(北豊山人) 著	『朝鮮役』	東京	一八九四
鈴木信仁編	『朝鮮紀聞』	東京	一八八五
鈴木信仁編	『朝鮮紀聞』	東京	一八九四
朝鮮総督府編	『朝鮮金石総覧』上下	京城	一九一九
朝鮮宮内府奎章閣記録課	『朝鮮宮内府記録総目録』	京城	一九〇九
孔子祭典会編	『朝鮮京城文廟釈天志』	東京	一九一九
唐世濟編	『朝鮮国聘使録』	ナシ	ナシ
ダレー著、榎本武揚重訳	『朝鮮事情』(原名「高麗史略」)	東京	一八八二
今村軼著	『朝鮮風俗集』	京城	一九一五
李能和編	『朝鮮仏教通史』上中下	京城	一九一八
林恕著	『朝鮮物語』附柳川始末、朝鮮風俗(雨森芳洲)	ナシ	ナシ
柴山尚則著	『朝鮮李舜臣伝』	ナシ	一八九二
津田左右吉著	『朝鮮歴史地理』第一、二巻	東京	一九一三
大庭寛一著	『朝鮮論』	東京	一八九六
洪錫謨選	『東国歳事記』	京城	一九一一
ナシ	『東国通鑑』	京都	一八八三
ナシ	『東国文献録』	〔朝鮮版〕	ナシ
ナシ	『東国文献録』上中下	〔朝鮮版〕	ナシ

終章

『源氏物語』の提示する教育

終章 『源氏物語』の提示する教育

本論においては『源氏物語』における教育というテーマで、『源氏物語』に流れている父と子の教育の姿について取り上げた。まず、それぞれの章を短く要約してみたい。第一編「息子を教育する父―漢籍を通じた教育」においては、第一章「桐壺帝の光源氏への教育」で、息子源氏を教育していく桐壺帝の姿に注目した。このような考察をすることになった理由は、「七つになりたまへば読書始^{ふみはじめ}などせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覽ず。」(桐壺①三八)という文に引かれたからである。源氏の読書始(ふみはじめ)については、極めて簡略ではあるが、七歳に行われたことがはっきり示されていることが注目された。その意味を読み解くために、第一節「読書始の儀式」において、平安時代の宮廷で行われた読書始の記録を調べ、源氏の例と比較した。読書始の記録については、尾形裕康氏の詳細な研究があり、それに基づいて史料を確認した。『三代実録』や『日本紀略』の記事を検討し、寛和二年(九八六年)一条天皇の読書始を起点に、天皇、皇子、親王の読書始には、『御注孝経』が置かれるのが規範化していく傾向があることを確認した。

その上、本論では、第二節「敦康親王の例」において、光源氏の物語を読むために、『源氏物語』の書かれた時代、一条天皇の中宮定子の生んだ敦康親王の例を引き合いに出して比較を行った。祖父の中関白藤原道隆が没し、母定子の死後、藤原道長と中宮彰子は敦康親王を後見し、特に彰子は敦康親王に深い愛情を掛けていたことが『大鏡』『師尹』伝から読み伝えられるが、結局、敦康親王が帝位に付くことはなかった。源氏の場合も読書始に関する叙述とともに、第一皇子(朱雀)の母弘徽殿女御の存在が意識されているが、敦康親王の例を通してみると、読書始の後の源氏の立場も、敦康親王がそうであったように政治的に不安定なものであったことが想像される。しかし、そのような状況の中、桐壺帝は漢籍による教育を授けることによって、源氏に学問の知識を備えさせ、力を付けさせる。

第三節「高麗相人の予言」においては、相人の言葉を中心に、桐壺帝の教育について考察した。読書始を終えた七歳の源氏は、漢詩の読み書きが上手であることが提示され、相人は「国の親となりて帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」(桐壺①三九〜四〇)という謎の言葉を残す。この場面と、『聖徳太子伝暦』に記される百濟僧日羅が聖徳太子の観相を見る場面との関連性については、松本三枝子氏などの研究によってすでに指摘されている。

一方、本論では予言の内容より、予言の語りの文体に注目し、『御注孝経』『紀孝行章』を引用した。「親に事うる者、上に居りて驕おごらず、下と為りて乱みだらず、醜しゅうに在りて争わず。上に居りて驕おごれば則ち亡ぶ。下と為りて乱みだれば則ち刑せらる。醜しゅうに在りて争えば則ち兵せらる。三者除かざれば、日に日に三牲の養を用うと雖も、猶不孝為らん。」とあるように、相人の予言の言葉と「紀孝行章」の言葉を比較してみると、その言い方が似ていることが目に付く。つまり、『源氏物語』における相人の予言は、漢文訓読的な表現を使っているのである。

以上の考察を通じて、「桐壺」巻における源氏の読書始から相人の予言、元服までは、緊密な構成の中で配置されるものであることを明らかにした。源氏の読書始は、非常に簡単に記されるだけであったが、読書始といえは思いつく『御注孝経』の漢文訓読的な表現が相人の予言の言い方とも似ていたように、桐壺帝の源氏の教育の場面には、儒学の影響が窺える。さらに歴史の敦康親王の例のように、源氏は右大臣側との権力争いの中で、政治的に有利ではない立場にいたわけであるが、桐壺帝は源氏を教育することによって、困難を克服する知恵を与えたと読むことができる。

第二章「源氏の夕霧教育―「少女」巻を中心に」においては、父源氏によって教育される夕霧について取り上げた。このようなテーマに着目した理由は、夕霧が源氏と葵の上の子であるにも関わらず、物語の前半においては、父との関係が注目されないからである。母方の左大臣家の大宮に育てられた夕霧であるが、源氏の教育を受けることになってから、父源氏の二条東院で過ごすことになる。大学入学をめぐる源氏の教育は、夕霧と父と子の関係を築いていく過程に描かれている。

第一節「夕霧の大学入学」では、源氏自らが桐壺院から受けた教育を振り返りながら、夕霧の教育に指揮を執っていく姿を捉えた。諸注釈書で指摘されている通り、『令義解』『選叙令』によると、三位以上の貴族の子女は、大学で勉強しなくても高い官位に付くことが可能であったが、源氏は夕霧を大学に行かせることによって、夕霧は同年輩より低い六位に叙せられる。当時の「学生」という存在がどのようなものであったかを、『源氏物語』以前の『うつほ物語』の藤英の例と比較し、『今昔物語集』に載せられている大江匡衡の例を提示して分析した。

第二節「寮試の場面を中心に」では、源氏の教育態度を平安時代の教育する父像に重ねてみた。すでに日向一雅氏は、源氏に『九条右丞相遺誠』を残した藤原師輔の姿が重なることを指摘していて、その通りであると思われるが、本論では、さらに『菅家文草』の漢詩を新しく提示し、源氏に菅原道真の父是善の教育態度と類似した点があることを指摘した。

第三節「省試の場面を中心に」では、大曾根章介氏、竹内正彦氏の研究を踏まえながら、『御堂関白記』の例を引き合いに出し、夕霧の勉学を検討した。わずか三人が合格したという「少女」巻の記述は、源氏の厳しい教育の成果を強調するものであると言えよう。『源

氏物語』は教育する父親像の造形にかなり意識的であつたと思われ、夕霧の教育は、冷泉帝の治世を輔弼する官人、明石の中宮を支える大臣としての夕霧の役割を考慮に入れた構想になっているのであり、源氏の子供たちは、源氏の教育によつて繋がっていく。

第三章「冷泉帝における学問」においては、「薄雲」巻を中心に、源氏と藤壺の子、冷泉帝について論じた。第一章で取り上げた桐壺帝の源氏の教育とは異なり、冷泉帝は幼年に帝位に付く人物である。従来の研究では、密通によつて生まれた子の罪について注目されることが多くあつた。しかし、本論では、実父が源氏であるという問題に出会った時、漢籍を調べる冷泉帝の姿に注目した。

まず、第一節「古注釈の検討」においては、「唐土には、顛れても忍びても乱りがはしきこといと多かりけり。日本には、さらに御覧じうるところなし。」（薄雲②四五五）の表現をめぐる『河海抄』、『細流抄』、『弄花抄』、『孟津抄』などを調べた。その結果、古注釈においては、皇統の乱れの典拠探しが中心になり、『史記』の始皇帝の故事が多く挙げられていたことを確認した。

その上、第二節「冷泉帝の勉学の姿」では、「いよいよ御学問をせさせたまひつつさまざまの書どもを御覧ずるに」（薄雲②四五五）の文に注目した。物語は「書（ふみ）」という表現の中に、どのような書物を想定していたかを疑問に感じたからである。「薄雲」巻において冷泉帝は、十四歳として設定されているが、冷泉帝の「書（ふみ）」を読む姿が指すものを読み解くために、若い年齢に即位した帝の例を調べた。例えば、宇多天皇が醍醐天皇に与えた『寛平御遺誡』には、儒学の經典を読むように戒められている。本論では物語の本文を詳しく検討し、冷泉帝は漢籍を調べる力を身に付けている帝として設定されているという結論を導き出した。また、出生をめぐる秘密や国の危機に直面して、典籍を調べる冷泉帝の態度には、唐太宗が『帝範』「序」を通じて提示した理想の帝の姿勢と重なる側面があることを指摘した。倉本一宏氏の指摘を踏まえ、藤原行成の『権記』の記事を考察した結果、『源氏物語』が書かれた時代的一条天皇は、唐太宗の治世を理想と考えていたことが確認された。『源氏物語』の冷泉帝に、深い学問の教養を身に付けていた唐太宗や一条天皇の面影が重ねられることが読み取れた。

第三節「夜居の僧都との対面」においては、出生に関する秘密が告知される場面に注目した。従来の研究では、歴史における夜居の僧都のモデルを探し、それに照らし合わせて物語を読み解く研究が行われた。本論では夜居の僧都ではなく、帝の方に焦点を当てたのが特徴である。この場面には、帝に奏上したいことがあるが、はっきり言えない僧都の姿と、そのような僧都に丁寧な話を請う冷泉帝の姿が描かれている。平安時代の状況を考えると、このような帝と僧都の関係は、普通のものではなく、『源氏物語』は極めて特殊な描き方をしていることが看取される。第二節で唐太宗の『帝範』を取り上げたように、第三節では唐太宗の編纂させた『貞観政要』について注目した。その結果、『貞観政要』「求諫」に臣下の言葉に耳を傾ける帝の態度が理想として挙げられていたように、冷泉帝には

『貞観政要』の指し示す理想的な帝の姿が投影されていることを指摘した。

第二編「娘を教育する父」では、『源氏物語』における娘の教育を考察することにし、明石の姫君を教育する源氏の父親像を捉えた。先行研究において、源氏の須磨・明石での退居生活は、朧月夜との密通による禍を避けるためだけでなく、むしろ、明石の君との出会いを可能にさせ、最終的には、明石の姫君が后になる予言の実現という大きな構想のために配置されていると指摘されている。それほど明石の姫君は、『源氏物語』全体の流れの中で大きな役割を果たす人物である。

まず、第四章「源氏の明石の姫君への物語教育」の第一節「『蜩』巻の物語論」では、先行研究を検討した。「蜩」巻に関する研究は、大きく二つの立場に分かれる。一つは、「蜩」巻の物語論に作者の物語観が投影されていると捉える立場である。もう一つは、玉鬘を口説くという場面に注目し、源氏と玉鬘の会話に目を向く読みである。しかし、近年では、作者の意図を把握することや文脈に徹底して読むという二つの方法の中で、片方に傾けない読み方が提示された。三角洋一氏、工藤重矩氏などは、「子女教育論」として「蜩」巻を読み、文脈を徹底に分析した上、作者の主題意識を導き出すという方法を使っている。本論では先行研究を踏まえ、教育という立場から、玉鬘と明石の姫君の教育の例が対照的に描かれていることに注目した。

第二節「源氏の教育態度」では、明石の姫君の成長のほどを把握し、段階によって教育方法を変えていく源氏の教育態度に注目した。「蜩」巻の物語論について、先行研究においては、娘を管理する父親像について論じられることがあった。しかし、本論は、源氏の教育が子供を管理するもので、家父長制度に子供を従属させるためであるという先行研究の立場とは意見を異にする。「管理」といえば、ある対象の行動範囲を設定し、そこからはみ出ることがないように、対象の行為を制限するという概念が強いと思われる。一方、段階に合わせて適切な教育が行われることを、三角洋一氏が仏教の教相判釈を引いて説明されるように、本論では、対象の成長段階に合わせて適切な指導を与えることに注意し、育ち伸びる可能性を認識した上で、その段階に合わせてよい方向を提示していくということが、「教育」の概念であると前提した上で論を展開した。

第三節「点付かる」に対する教育観」では、源氏の教育観が端的に現れている「点付かる」の用例に新しく注目した。「点付かる」は、辞書・辞典類には特に説明がない言葉であり、また、『うつほ物語』や『栄花物語』、『狭衣物語』などの平安時代の他の物語作品においても、その用例が見当たらない独特な言葉である。『河海抄』には、「古人詩冊に批点などいふはいさゝか褒貶したる心也。さればてんつかるまじきとは人にほめそしらるまじきといふ歟。」という説明があり、和歌や文章に批評の点を打つことから派生した言葉であるようである。本論では「点付かる」の意味を探り、さまざまな作品の「点」の例を分析する手続きを取ったが、その意味を定めることが目的ではなく、「点付かる」の用例の発見される場面の分析を、明石の姫君の教育に還元して考えた。「点付かる」は、「蜩」巻に一例、「若菜下」巻に二例が見える。三つの例を調べ、島田とよ子氏の研究を踏まえながら、明

石の姫君の教育には、儒学の「中庸」が重視されていて、片寄る所がなく、貴族社会の中で調和を保って生きていくことができるような教育が行われていたことを確認した。また、これは、明石の姫君が中宮になって子女たちを教育していく宇治十帖においても繋がることで、『源氏物語』は、父源氏の明石の姫君の教育を通じて、物語の長編性を獲得していることが指摘できる。

第五章「須磨・明石の絵日記の考察」は、源氏が明石の姫君の生まれる前に書いたとする絵日記が、娘明石の姫とどのように関連するかについて考察したものである。まず、第一節「源氏の絵日記という用語」では、本論で使う用語を定めた。石原昭平氏は、絵日記と日記絵の用語を区別し、公の儀式を描いたものを日記絵、個人の感情を込めて私的な立場から描いたものを絵日記と定義しているように、源氏が須磨・明石で描いた絵について、本論では、絵日記という用語を使うことにした。

第二節「絵日記の性格―『土佐日記』との関わり」においては、須磨・明石の絵日記が『うつほ物語』に影響されたものであり、菅原道真とその先祖の『菅家三代集』の影響があるという先行研究を踏まえ、現在にも伝来されている文学作品との関連を考えてみた。このような考察を行うようになった理由は、須磨・明石の絵日記は、物語の中の作品として描写され、実物はないもので、そのイメージが掴みにくいと思ったからである。その具体的な姿を想像するために、須磨・明石の絵日記に投影されている作品の例として、本論では『土佐日記』との関連を新しく指摘した。『土佐日記』は、女性に仮託して書かれたものであるが、紀貫之が土佐の地に足を運んで暮しながら見た風景を、歌と絵に仕立てたものであることが強調されているからである。

第三節『蜻蛉日記』における絵の意識」では、須磨・明石の絵日記に付与されている『蜻蛉日記』の性格について考察した。『蜻蛉日記』は、平安時代の女性の苦悩が書き込まれているものとして有名であるが、今西祐一郎氏の研究で指摘されるように、代々の子孫に伝えられる「家」の歌集としての性質を持っていたことも注目される。また、田村悦子などの先行研究によって、『蜻蛉日記』が絵を伴って享受されたことが指摘されているように、『蜻蛉日記』と絵の深い関連にも注目した。このような点は、須磨・明石の絵日記が「梅枝」巻で、明石の姫君に伝えられることが暗示される場面を理解するためによい参考になる。つまり、「かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむと思せど、いますこし世をも思し知りなりに、と思し返して、まだ取り出でたまはず。」（梅枝③四二二〜四二三）には、子孫に伝えるものとしての絵日記の性格が窺え、『蜻蛉日記』の例は、須磨・明石の絵日記を理解するためのよい資料になる。

第四節『狭衣物語』における絵日記、第五節『浅茅が露』における絵日記」においては、伊井春樹氏の指摘を踏まえ、『源氏物語』以後の作品に描かれる絵日記の性格について論じた。二つの作品は、『源氏物語』の影響を受けているが、絵日記に関していうと、『源氏物語』とは差異がある。とはいえ、その違いは『源氏物語』の特徴を照らし出すものである。『狭衣物語』の絵日記の書き手は、飛鳥井女君であり、中世王朝物語『浅茅が露』の

絵日記の書き手は、二位中将との間に子供を儲けた姫君である。子の母の描いた絵日記は子と離れていた父に、子の血筋を証明するものとして機能する。他の物語から『源氏物語』を逆照射し、本論では、須磨・明石の絵日記の伝達には、明石の姫君を六条院の娘として認める意味が込められていると指摘した。明石の姫君のために絵日記を制作したことではないが、「梅枝」巻で絵日記を明石の姫君に受け継ぐ意識が見えることは、明石の地で生まれ、後に源氏に引き取られた明石の姫君を、我が娘として認知することを意味する。明石の姫君が絵日記という文化的な仕業の産物によって娘として認められていくことは、『源氏物語』が血筋だけでなく、教育によって結ばれていく関係を重視している点を明らかにする。

第六章「源氏の明石の姫君への書道教育」においては、源氏の明石の姫君教育の続きとして書道教育に注目した。先行研究では、「帚木」巻に見える書道論が注目されていて、中国の画論との関係や平安時代の書道観と物語の関係、書道の場面を通じて登場人物の特徴を取り上げる研究などが為されてきた。一方、本論では、父と子を繋げていく教育行為として書道に着目した。

まず、第一節「若紫」巻における手習」において、源氏の紫の上への手習の教育について分析した。先行研究においては、紫の上の和歌を通じた成長について注目されてきたが、本論では、教育する側である源氏についても焦点を当てた。源氏が紫の上に書道を教える場面を考察した結果、源氏の教育態度には、時代は下るが、入木道の秘伝『麒麟抄』などの教えと重なる側面があることが確認された。源氏は能書家に順ずるほど丁寧の手解きをしていることが窺えた。

続いて、第二節「初音」・「野分」巻における書道教育」で、源氏の明石の姫君への教育について論じた。源氏は予言を信じ、姫君を后にふさわしく教育を施していく。「初音」巻には、日常生活において、こまめに手習をさせる源氏の姿が見える。また、「野分」巻には、夕霧が突然訪れて硯を借りる場面があるが、物語はその硯や文房具が明石の姫君の所有であることを提示することによって、姫君が日頃、硯を近くにおいて手習に励んでいることを暗示する。特に、本論では、姫君の硯に『類聚雑要抄』の「重硯筥」を連想してみた。姫君の硯は、立派なもので、父源氏が娘のために備えたと思われ、源氏が丁寧な書道教育を行っていたことを垣間見せる。同場面で実母の明石の君の身分に言及されることは、明石の姫君が教育によって、出生地が都ではないという短所を乗り越えて、后に要求される教養を授けられていくことを意味する。

第三節「梅枝」巻における書道教育」では、明石の姫君の入内に際して、源氏が書籍を集める場面に魅了された。姫君が持参する箱には、嵯峨天皇筆の『古万葉集』、延喜帝の『古今和歌集』が含まれることが提示されている。三巻本『枕草子』第二十一段「清涼殿の丑寅の隅の」に、父藤原師尹が宣耀殿女御の『古今集』を暗記させた例があるように、貴族の姫君の教育において『古今集』が規範的な書物であったことは、確かである。先行研究では、このような『古今集』の制度性について指摘しているが、本論では、これらの歌集

の内容はもちろん、筆跡が明示されている点に着目した。明石の姫君に与えられる歌集のイメージを掴むために、現存する歌集との関連も考えてみた。遠藤邦基氏の指摘によると、『元永本古今和歌集』は、同じ歌が異なる筆跡によって繰り返して書かれているなど、手本としての役割を持っていたことが知られ、筆跡の重要性が際立つ。また、最初の『源氏物語』の注釈である『源氏釈』の著者伊行が、『夜鶴庭訓抄』を執筆し、娘の建礼門院右京大夫に与えるなど、中世の歴史においては、父の娘への教育がより鮮明になっていくが、そのような後世の教育には、『源氏物語』の影響があったかもしれないことを指摘した。

以上の考察を通じてみると、『源氏物語』において、硯と筆が行われ、書道教育が描写されるのは、単なる風景ではなく、父と娘が空間を共有する時間を作り出し、物語の人物たちの関係を結んでいく機能を果たしていることが考えられる。

第四章、第五章、第六章において、明石の姫君の教育について論じてきたが、第七章「女三宮における朱雀院―父親の過度な愛情」では、源氏の場合と対照的な例として、女三宮の教育を取り上げた。先行研究の指摘通り、女三宮の「幼さ」が物語の中でたびたび語られていることは、知られている通りであるが、本論では、その幼さの原因を父朱雀院の教育との関係から捉え直した。第一節「女三宮の降嫁」では、朱雀院の養育態度が物語の展開にどのように影響を与えているかについて考察した。本文の表現を精読してみると、朱雀院が源氏を婿に選んだ理由は、女三宮を「はぐくむ（育む）人」として源氏が適切であると判断したからである。柏木との密通によって、女三宮は出家することになるが、そのような結末に至る過程の根底には、源氏と女三宮の振れた関係が置かれていたことが原因として考えられる。つまり、源氏と女三宮の夫婦関係には、朱雀院と女三宮の父と娘の関係がスライドされ、源氏に父親の後見をしてもらうということが期待されていたのである。

第二節「朱雀院の五十の賀」は、女三宮の主催する予定の朱雀院の五十の賀が、三度も延期されることの不思議さに注目した考察である。玉鬘の源氏の四十の賀が盛大に行われ、彼女の賢さを披露することとは対照的に、女三宮の主催しようとする朱雀院の五十の賀は、柏木と女三宮の密通が源氏に知られるなどの理由によって、三度も延期されていく。五十の賀の延期は、女三宮が父親の愛情にふさわしい娘としての役割を果たすことができないことを、暗示的に表現している。

第三節「薫の誕生と出家」では、薫を出産し、出家する女三宮の姿を追った。物語には出産や出家の場面ごとに、娘を心配する朱雀院の態度が書き込まれている。幼い娘に対する心配から、父親役を期待して源氏に降嫁させたが、それは逆に若い娘の出家という悲劇を招いた。自らの意志によって出家する時でさえ、女三宮は父に依存することになる。女三宮の物語は、父との関係に注目して読み解くことによって、その陰影がより鮮明に読み取れる。

以上、第一編、第二編においては、父と息子、父と娘の教育について取り上げてきたが、第三編「二人の父を持つ主人公たち」においては、『源氏物語』の中で実父と養父の二人の父を持つ子供たちについて論じた。まず、第八章「玉鬘における二人の父」において、夕

顔と頭中将（後の左大臣）の娘であり、後に源氏の養女になる玉鬘について分析した。長谷寺で玉鬘に出会った右近（亡き夕顔の乳母の子）は、玉鬘を「藤原の瑠璃君」（玉鬘③一二）と呼び示す。つまり、玉鬘は藤原氏であり、左大臣家の娘であることが明確に示されるわけである。しかし、血筋とは異なり、物語の中で玉鬘は、源氏の娘として活躍する姿が浮き彫りにされている。

第一節「光源氏の後見」では、源氏の養女という視点から玉鬘を捉えることを試みた。玉鬘は六条院に引き取られることによって、裳着を済まし、その氏素姓を披露することになる。養父源氏によって、実父の内大臣にも対面することができたわけである。玉鬘は源氏の後見によって、貴族の姫君にふさわしい教養を身に付けていくことが看守される。

第二節「源氏の養女の玉鬘」では「若菜上」巻において、若菜の献上という適切な機会を通じて、源氏の四十の賀を主催する玉鬘の姿に焦点を合わせた。玉鬘が源氏の四十の賀を主催したことは、娘としての役割を見事に果たしたことを意味する。このような玉鬘と対照的に描かれているのは、第二編の第七章で取り扱った女三宮の例である。二人の人物を父との関係を通じて捉える時、玉鬘が主催した源氏の四十の賀と、女三宮が主催した朱雀院の五十の賀は、対照的に描かれていることが読み取れ、別々の時空で語られるそれぞれの人物の物語が、繋がりを持つて読めるようになる。

第三節「左大臣家の娘の玉鬘」においては、左大臣家の娘としての側面に注目した。森野正弘氏が指摘しているように、玉鬘が和琴の演奏の卓越な実力を持っていることは、藤原氏の教養を受け継いだ性格を顕にするものであるが、本論では、玉鬘主催の源氏の四十の賀の場面を取り上げ、そこに現れている左大臣家の娘としての姿について捉えようとした。四十の賀の場面には、玉鬘の視点から左大臣を示す「父大臣」という言葉が書き込まれ、養父の四十の賀を主催しながら、実父の存在についても眼を離さない彼女の姿が浮き彫りにされている。さらに、玉鬘が主催した源氏の四十の賀は、左大臣家側の参加を導き出し、二つの家を結ぶ場を提供することになる。物語は、養父と実父の間で賢明に生きている玉鬘の姿を通じて、父側の努力だけでなく、子からの努力が父と子の関係に与える比重について示唆を与える。

第四節「竹河」巻の玉鬘」においては、源氏側と親密な関係を維持している玉鬘について捉えた。「竹河」巻は、『源氏物語』全体の中でも異彩を放っていることが指摘されているように、その性格に気を付けながら、母としての玉鬘について注目した。「御処分の文ども」という表現によって、玉鬘は六条院の養女として財産の相続を受けていることが推測され、また、玉鬘が夕霧や薫など、源氏の息子たちとも親密な兄弟関係を維持していることが読み取れる。そのような玉鬘の姿からは、夫鬚黒もいなく、頼る人がいない状況の中、六条院の養女としての立場を十分に生かし、娘たちの将来を切り開いていく逞しさが伝わってくる。

このように、父との関係から玉鬘を捉える時、血筋だけでなく、源氏の教育によって培われた関係が彼女の人生を導いていることが浮き彫りになり、『源氏物語』は、血筋上の父

と養育の父の、両方の大切さを仄めかしているように考えられる。

第九章「薫の実父柏木への思い」では、二人の父を持つもうひとりの主人公、薫の物語を、和歌を中心に分析した。まず、第一節「宿木」巻における薫の和歌」においては、薫と弁の尼の和歌に注目した。「やどり木と思ひいでは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし」の歌は、「宿木」巻の巻名の由来の歌であることと有名であるが、本論では、多少異なる視点から「木のもと」に「子のもと」が掛けられる可能性を提示した。第二節「歌における「このもと」の表現」においては、『古今集』、『拾遺集』、『伊勢集』、『紫式部集』の用例を検討した。これらの歌において、「このもと」という歌ことばは、「さびしさ」や「かなしさ」と共に詠まれ、肉親を失い、残された子の悲しみを強調することを確認した。

また、『栄花物語』や『千載集』における「このもと」の用例も新しく調べた。さらに、『法門百首』の用例にも触れ、ほかに、中世王朝物語『風につれなき』下巻にも「このもと」の表現が見えることを指摘した。平安時代の歌の例を考察してきた結果、薫の歌の「このもと」、「さびしからまし」の表現に、親を亡くした子供の処遇を表す「子の許」の意味合いが踏まえられていて、八の宮の不在が強く思い起こされていたことを読み解いた。

第三節「総角」巻における「このもと」の表現」においては、「総角」巻で勾宮一行が紅葉狩を口実に宇治を訪れるが、そこで詠じられる五人の唱和歌の場面に注目し、「このもと」の歌ことばを考察した。特に、この唱和歌は、衛門督の登場によって触発された側面があり、本論では『源氏物語』における衛門督の例を調べ、夕霧の長男と思われるこの衛門督の姿に、柏木の影が重ねられている可能性を提示した。従来の解釈において、薫の歌は、姫君についての話題から逃げるため、無常観に摩り替えた内容であるという見解があったが、それは「主方と思ひて言へば」の前置きに多く引かれた解釈になる。宰相中将の歌には、「このもと」という歌ことばがあったことを根拠に、薫は姫君たちと同様に父を失った自分の状況を省みるようになり、率直な無常観をそのまま表出したと解釈した。

また、補論の第十章『源氏物語』を読んだ比較文学者―六堂崔南善の京城府立図書館講演」においては、六堂崔南善（一八九〇～一九五七）と萩野由之博士（一八六〇～一九二四）に触れた。崔南善は、韓国における歴史学者、文学者、啓蒙思想家であり、萩野博士は、明治期から大正に掛けて活躍した影響力の多かった歴史学者、文学研究者、蔵書家である。まず、第一節「崔南善の学問―先行研究の指摘から」では、彼の業績について簡単に要約し、彼は『源氏物語』を精読した最初の韓国人の一人であるという先行研究を紹介した。第二節「六堂の府立図書館における講演」では、彼が『源氏物語』を享受したことは、『玄岩社全集』の韓国語訳の講演原稿がその根拠になっているが、日本語原文は「玄岩社全集」にも「影印本全集」にも載せられていないことを述べた。第三節「府立図書館の大山先生」では韓国語訳の原稿に登場する「府立図書館長」の大山先生に関する資料を調べ、武井一氏の著書『皇室特派留学生』から大きな示唆を得て、大山先生の勤務先が京城府立図書館であったことについて論じた。第四節「京城府立図書館」においては、京城府立図書館を引き継いだソウル市立の南山図書館の史料を検討した。第五節「六堂の読んだ

『源氏物語』では、筆者が、崔南善の日本語原稿「日本文学に於ける朝鮮の面影」を南山図書館から掘り出したことを叙述した。新しい資料の発見により、六堂が講演を行った府立図書館とは、植民地朝鮮に設置された京城府立図書館であったことが明らかになった。また、六堂が『源氏物語』について述べている部分の中でも、「桐壺」巻に関する講演内容を引用し、彼は『源氏物語』を正確に読んでいたことを再び確認した。第六節「図書館講演はいつ行われたか」では、戦前の「図書館週間」に関する記録を調べ、「玄岩社全集」所収の韓国語訳文の注記に疑問を提出した。「玄岩社全集」の注記のように講演が二月に行われたとすると、講演の冒頭で秋の読書について述べられ、『徒然草』の第十三段に触れられることに矛盾が生じるからである。本論では、当時の通常の図書館週間が十一月初旬に設けられていたことを、大阪府立図書館関係資料の調査を通じて確かめ、六堂の講演もおそらく十一月に行われたのではないかと指摘した。

第七節「朝鮮を訪れた歴史家、萩野由之」においては、六堂の原文を詳細に検討した結果、本文中の「日本の或る有名な歴史家」とは萩野由之博士に違いがないことを指摘し、萩野の『韓国旅行談』に触れた。さらに、九州帝国大学図書館編の『萩野文庫目録』から、多数の朝鮮関係の書籍のタイトルを確認した。蒐集された書物の中には、六堂崔南善が関心を持ち、注釈を付け、出版したものと重なるものが見える。追加調査が必要となるが、六堂と萩野の間では、お互いの学問を通じて知的交流が行われていた可能性が高い。二人の学者の思惟の流れに寄り添うことで、二〇世紀初、東アジアにおける知の交流について考えることができる。

以上、『源氏物語』における父と子の教育について考察した。第一編では、父と息子との間の教育、第二編では、父の娘への教育の姿について論じ、第三編では、二人の父親を持つ主人公たちについて考察した。息子の場合には、漢籍の学習が目され、娘たちの場合には、和歌や物語など文学と関わる教育、また、琴や和琴など音楽の教養、手習や書道の教育がこまめに描かれていることが確認される。このように『源氏物語』が取り立てて父と子の教育を詳細に描いている点は興味深い。平安時代に、子供の養育や教育は、乳母が担当する場合が多かったが、『源氏物語』においては、父がその教育を担当していることが特徴である。源氏の教育ぶりは、漢学者や能書家の教育態度に準じ、子供の成長段階を考慮しながら、専門的な教育を行っていく姿が描かれる。一般的に、『源氏物語』以後の物語は、『源氏物語』の影響を多く受けるとされるが、『源氏物語』ほど父の教育の姿が描かれる作品はあまりない。『源氏物語』は、源氏の恋と栄華の物語の中で、父と子の教育というテーマを底に敷いているように受け止められる。物語の大きな筋は、源氏の恋と栄華であるが、源氏の女性との恋は、それ切りで締め括られるのではなく、多くの場合、子供の世代の物語が紡ぎ出されていく。

例えば、桐壺帝の更衣に対する恋は、息子源氏への愛に繋がり、源氏の藤壺に対する情熱は、秘密の子の冷泉帝に注がれる。死別してから、さらに深くなった葵の上への愛情は、息子夕霧に注がれ、明石の君や紫の上に対する愛情は、明石の姫君の養育に反映される。

夕顔との恋は、玉鬘の後見に繋がり、女三宮に対する愛しさは、血筋的には他人の子供である薫を、六条院の息子として大切に育てる配慮に現れているようである。

しかし、物語は、単純に血筋が通っているから父と子として描くのではなく、教育という行為を通じて、お互いを父と子として認識していく過程を描いていく。その過程には、漢籍の勉強や音楽・書道の伝授が具体的に配置されている。玉鬘や薫が六条院の子女として生きていくことは、養子や養女を取り入れる当時の文化的文脈と緊密に関わっているが、『源氏物語』はその影響を受けながらも、玉鬘や薫の例から窺えるように、人物たちが産みの親だけでなく、養育の親との関係の中で生きていくことを垣間見せている。玉鬘の場合は、源氏の四十の賀を率先して主催するなど、娘として役割を果たしていく過程が繰り広げられているが、薫は実父への思いから道心を持ち、出家を求める姿として描写される。物語の正編と続編の宇治十帖の情緒の差に起因するかもしれないが、玉鬘と薫の対照的な姿は実父と養父の意味について考えさせる。物語は血筋だけでなく、生まれた後の養育や教育の大切さを伝えているように読める。

このように物語の根底に据えられている文脈には、血の繋がりでなく、教育、すなわち、知の繋がりによって築かれる関係が強調されている。これは平安時代という男性貴族の中心に学問が行われた時代に、知の繋がりによって自分の存在を証明したかった物語の創作の立場とも関わるだろうと思われる。

『源氏物語』は血縁だけでなく、教育によって結ばれる関係の大事さを仄めかしている。そこから、読者は、血だけでなく、知によって構築される関係の可能性を読み取ることができる。平安時代に書かれた『源氏物語』が意図していたとは言えないが、近代の『源氏物語』の受容においては、民族主義を超えた知識の交流があったことが考えられる。「反民族」という立場から六堂崔南善の視点は、批判を受けることが多いが、「日本文学に於ける朝鮮の面影」に見える六堂の姿勢は、自文化をもとに異文化を理解しようとした努力を明らかに見せている。また、萩野由之博士の「韓国旅行談」に見える異国の朝鮮文化に携える彼の視線も、平安時代という自文化をもとにしたものであった。それぞれ日本と朝鮮を訪れた軌跡を残している二人の学者が眺めた異文化への視線には、『源氏物語』や平安時代という接点関わっていたことの意味を、『源氏物語』の研究にも還元して考えていきたい。

参考文献

参考文献

【一次資料】（校注者名・編者名の五十音順）

『源氏物語』のテキスト

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛（校注・訳）『源氏物語』一～六（日本古典文学全集、小学館、一九七〇～一九七六年）

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注・訳）『源氏物語』一～六（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四～一九九八年）

・伊井春樹、伊藤鉄也、小林茂美（編）『源氏物語別本集成』第一巻～第一五巻（桜楓社、一九八八～二〇〇二年）

二〇〇五～二〇一〇年

・池田亀鑑（編）『源氏物語大成』校異篇（中央公論社、一九五三～一九五四年）

・石田穰二・清水好子（校注）『源氏物語』一～八（新潮日本古典集成、新潮社、一九七六～一九八五年）

・柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎（校注）『源氏物語』一～五（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三～一九九七年）

・山岸徳平（校注）『源氏物語』一～五（日本古典文学大系、岩波書店、一九五八～一九六三年）

『源氏物語』の注釈書および梗概書

・伊井春樹（編）『源氏物語引歌索引』（笠間書院、一九七七年）

・新居和美・山口正代（校）『原中最秘抄（略本・広島大学蔵）』（広島平安文学研究会、二〇〇六年六月）

・有川武彦（校訂）『源氏物語湖月抄』上・中・下（講談社、一九八二年）

・阿部秋生・岡一男・山岸徳平（編）『源氏物語』上巻・下巻（国語国文学研究史大成、三省堂、一九六〇～一九六一年）

・伊井春樹（編）『花鳥余情 松永本』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九七八年）

・——（編）『細流抄 内閣文庫本』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八〇年）

・——（編）『弄花抄』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八三年）

・——（編）『萬水一露』一～五（源氏物語古注集成、桜楓社、一九九二年）

・井爪康之（編）『二葉抄』（源氏物語古注集成、桜楓社、一九八四年）

・岩坪健（編）『源氏小鏡』諸本集成』（和泉書院、二〇〇五年）

・大野晋・大久保正（編）「玉勝間」「本居宣長全集」第一巻（筑摩書房、一九六八年）

・——「源氏物語 玉の小櫛」「本居宣長全集」第四巻（筑摩書房、一

九六九年)

・久保田淳(釈)『定家自筆本 奥入』(復刻日本古典文学館釈文、日本古典文学会、一九七二年)

・熊沢了介『源氏外伝』(『国文註釈全書』一四、すみや書房、一九六九年)

・平重道・阿部秋生(校注)『近世神道論・前期国学』(日本思想大系、岩波書店、一九七二年)

・武田孝(編)『源氏小鏡 高井家本』(教育出版センター、一九七八年)

・玉上琢彌(評釈)『源氏物語評釈』(角川書店、一九六四～一九六九年)

——(編)『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八年)

・中田武司(編)『岷江入楚』一～五(源氏物語古注集成、桜楓社、一九八〇～一九八四年)

——(編)『明星抄』(源氏物語古註釈叢刊、武蔵野書院、一九八〇年)

・中野幸一・栗山元子(編)『源氏釈・奥入・光源氏物語抄』(源氏物語古註釈叢刊、武蔵野書院、二〇〇九年)

——(編)『源氏一部抜書・源概抄・源氏こかゝみ・源氏小鏡・光源氏一部歌并詞』(源氏物語古註釈叢刊、武蔵野書院、二〇一〇年)

・珍書刊行会(編纂)『紫文蛩の囀』(近世史料叢書、第一卷、歴史図書社、一九七五年)

・野村精一(編)『孟津抄』上・中・下(源氏物語古注集成、第四卷～第六卷、桜楓社、一九八〇～一九八二年)

・久松潜一(校訂)『源註拾遺』(契沖全集、岩波書店、一九七四年)

・藤原為章(撰)「紫家七論」「平重道・阿部秋生(校注)『近世神道論・前期国学』(日本思想大系、岩波書店、一九七二年)」

その他の物語文学・御伽草子

・秋葉安太郎『大鏡の研究』本文篇・語法篇(訂補版、桜楓社、一九六八年)

・阿部好臣(校訂・訳)『松陰中納言』(中世王朝物語全集、笠間書院、二〇〇五年)

・池田利夫(校注・訳)『浜松中納言物語』(新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年)

・市古貞次・三角洋一(編)『鎌倉時代物語集成』第一卷～第七卷、別巻(笠間書院、一九八八～二〇〇一年)

——(校注)『御伽草子』(日本古典文学大系、岩波書店、一九五八年)

——・佐竹昭広(校注)『室町物語集』上・下(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九二年)

——(校注・訳)『平家物語』一・二(新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年)

・稻賀敬二(校注)『落窪物語』(新潮日本古典集成、新潮社、一九七七年)

・今井源衛(校訂・訳)『苔の衣』(中世王朝物語全集、笠間書院、一九九六年)

・大槻修・田淵福子・森下純昭(校訂・訳)『木幡の時雨・風につれなき』(中世王朝物語全集、笠間書院、一九九七年)

- ・――・田淵福子・片岡利博（校訂・訳）『しのびね・しら露』（中世王朝物語全集、笠間書院、一九九九年）
- ・――・大槻福子（校訂・訳）『我が身にたどる姫君』上（中世王朝物語全集、笠間書院、二〇〇九年）
- ・梶原正昭・山下宏明（校注）『平家物語』上・下（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九一～一九九三年）
- ・片岡利博（校訂・訳）『我が身にたどる姫君』下（中世王朝物語全集、笠間書院、二〇一〇年）
- ・辛島正雄（校訂・訳）『小夜衣』（中世王朝物語全集、笠間書院、一九九七年）
- ・河北騰『大鏡全注釈』（明治書院、二〇〇八年）
- ・小林保治（編著）『唐物語全釈』（笠間書院、一九九八年）
- ・小町谷照彦・後藤祥子（校注・訳）『狭衣物語』一・二（新編日本古典文学全集、小学館、一九九九～二〇〇一年）
- ・妹尾好信（校訂・訳）『海人の刈藻』（中世王朝物語全集、笠間書院、一九九五年）
- ・鈴木一雄（校注）『狭衣物語』上・下（新潮日本古典集成、新潮社、一九八五～一九八六年）
- ・――・伊藤博・石埜敬子（校訂・訳）『夜寝覚物語』（中世王朝物語全集、笠間書院、二〇〇九年）
- ・高橋正治（校注・訳）『大和物語』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）
- ・橘健二・加藤静子（校注・訳）『大鏡』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九六年）
- ・友久武文・西本寮子（校訂・訳）『とりかへばや』（中世王朝物語全集、笠間書院、一九九八年）
- ・中西健治・常盤井和子（校訂・訳）『風に紅葉・むぐら』（中世王朝物語全集、笠間書院、二〇〇一年）
- ・中野幸一（校注・訳）『うつほ物語』一～三（新編日本古典文学全集、小学館、一九九九～二〇〇二年）
- ・樋口芳麻呂・久保木哲夫（校注・訳）『松浦宮物語・無名草子』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九九年）
- ・平林文雄・水府明德会（編著）『小野篁集・篁物語の研究』（和泉書院、二〇〇一年）
- ・福田百合子・鈴木一雄・伊藤博・石埜敬子（校訂・訳）『あきぎり・浅茅が露』（中世王朝物語全集、笠間書院、一九九九年）
- ・藤井貞和（校注）『落窪物語』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年）
- ・保坂弘司『大鏡全評釈』上・下（學燈社、一九七九年）
- ・松村博司『栄花物語全注釈』第二卷（角川書店、一九七一年）
- ・三角洋一（訳注）『堤中納言物語』（講談社、講談社学術文庫、一九八一年）
- ・――・石埜敬子（校注・訳）『住吉物語・とりかへばや物語』（新編日本古典文学全集、

集、小学館、二〇〇二年

・水原一（校注）『平家物語』上・中・下（新潮日本古典集成、新潮社、一九七九～一九八一年）

・美濃部重克（校注）『閑居友』（中世の文学、三弥井書店、一九七四年）

・宮田光・稲賀敬二（校訂・訳）『恋路ゆかしき大将・山路の露』（中世王朝物語全集、笠間書院、二〇〇四年）

・室城秀之（校注）『うつほ物語 全』（改訂版、おうふう、二〇〇一年）

・———・桑原博史（校訂・訳）『零ににこる・住吉物語』（中世王朝物語全集、笠間書院、一九九五年）

・柳瀬喜代志（他校注・訳）『将門記、陸奥話記、保元物語、平治物語』（小学館、二〇〇二年）

・山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進（校注・訳）『栄花物語』一～三（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五～一九九八年）

和歌文学

・伊藤正義、黒田彰、三木雅博（編）『和漢朗詠集古注釈集成』一～三（大学堂書店、一九八九年～一九九七年）

・大養廉（編）『和歌大辞典』（明治書院、一九八六年）

・片桐洋一『古今和歌集全評釈』上・中・下（講談社、一九九八年）

・片野達郎・松野陽一（校注）『千載和歌集』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年）

・川村晃生・松本真奈美『恵慶集注釈』（私家集注釈叢刊、貴重本刊行会、二〇〇六年）

・窪田空穂『古今和歌集評釈』（窪田空穂全集・第二〇巻～第二二巻、角川書店、一九六五年）

・久保田淳・馬場あき子（編）『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九五年）

・小島憲之・新井栄蔵（校注）『古今和歌集』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年）

・小西甚一『古代歌謡集』（日本古典文学大系、岩波書店、一九五七年）

・小林芳規・武石彰夫・土井洋一・真鍋昌弘・橋本朝生（校注）『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年）

・新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観』第一巻～第一〇巻（角川書店、一九八三～一九九二年）

・関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』（私家集全釈叢書、風間書房、一九九六年）

・高田祐彦（訳注）『古今和歌集』（角川学芸出版、二〇〇九年）

・竹岡正夫『古今和歌集全評釈 古注七種集成』上・下（右文書房、一九七六年）

・南波浩『紫式部集全評釈』（笠間書院、一九八三年）

- ・橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』（笠間書院、一九八五年）
- ・平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂出版、一九九四年）
- ・藤岡忠美（校注）『袋草紙』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九五年）
- ・山本章博『寂然法門百首全釈』（風間書房、二〇一〇年）

日記・随筆文学

- ・菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久（校注・訳）『土佐日記・蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）
- ・神田秀夫・永積安明・安良岡康作（校注・訳）『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）
- ・萩谷朴『紫式部日記全注釈』上・下（角川書店、一九七三年）
- ・藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫（校注・訳）『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）
- ・長谷川政春・今西祐一郎・伊藤博・吉岡曠（校注）『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年）
- ・東原伸明・ローレンウオーラー（編）『新編 土左日記』（おうふう、二〇一三年）
- ・本位田重美、古典と民俗の会（編著）『健寿御前日記撰釈』（和泉書院、一九八六年）
- ・松尾聡・永井和子（校注・訳）『枕草子』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年）

神話及び説話文学

- ・大曾根章介・久保田淳『鴨長明全集』（貴重本刊行会、二〇〇〇年）
- ・神谷勝広（編）『和製類書集』（江戸怪異綺想文芸大系、国書刊行会、二〇〇一年）
- ・小泉道（校注）『日本霊異記』（新潮日本古典集成、新潮社、一九八四年）
- ・小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一（校注）『宝物集・閑居友・比良山古人霊託』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年）
- ・小島憲之他（校注・訳）『日本書紀』一～三（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四～一九九八年）
- ・小林保治・増古和子（校注・訳）『宇治拾遺物語』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九六年）
- ・坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋（校注）『日本書紀』上・下（日本古典文学大系、岩波書店、一九六五～一九六七年）
- ・多田一臣（校注）『日本霊異記』上・中・下（ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九七～一九九八年）
- ・筒井英俊（校訂）『東大寺要録』（国書刊行会、一九七一年）
- ・西尾光一・小林保治（校注）『古今著聞集』上・下（新潮日本古典集成、新潮社、一九八三～一九八六年）

- ・馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一（校注・訳）『今昔物語集』一～四（新編日本古典文学全集、小学館、一九九九～二〇〇二年）
- ・馬淵和夫・小泉弘・今野達（校注）『三宝絵・注好選』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年）
- ・山口佳紀・神野志隆光（校注・訳）『古事記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年）
- ・山根對助・後藤昭雄・池上洵一（校注）『江談抄・中外抄・富家語』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年）

漢文学

- ・石川忠久『詩経』（新釈漢文大系、明治書店、二〇〇〇年）
- ・今浜通隆（注釈）『本朝麗藻全注釈』一～三（新典社注釈叢書、新典社、一九九三～二〇一〇年）
- ・小川環樹、木田章義『注解 千字文』（岩波書店、一九八四年）
- ・尾崎康・小林芳規（解題）『群書治要』（古典研究叢書第九卷～第一五卷、古典研究会、一九八九～一九九一年）
- ・遠藤光正（編）『管蠡抄・世俗諺文の索引並びに校勘』（現代文化社、一九七八年）
- ・王先謙（補注）『漢書補注』（上海古籍出版社、二〇〇八年）
- ・王瑞来（点校）『鶴林玉露』（中華書局、一九八三年）
- ・柿村重松（註）『本朝文粹註釈』（内外出版、一九二二年）
- ・加地伸行（全訳注）『孝経』（講談社学術文庫、講談社、二〇〇七年）
- ・加藤常賢『書経』上・下（新釈漢文大系、明治書店、一九八五年）
- ・川口久雄（校注）『菅家文草 菅家後集』（日本古典文学大系、岩波書店、一九六六年）
- ・金谷治（訳注）『論語』（岩波文庫、岩波書店、一九六三年）
- ・鎌田正『春秋左氏伝』一～四（新釈漢文大系、明治書店、一九八四年）
- ・孔凡禮（點校）『蘇軾詩集』（王文誥輯註、中華書局、一九八二年）
- ・続國譯漢文大成『韓退之詩集』上・下（文学部第七～八卷、国民文庫刊行会、一九二九年）
- ・竹内照夫『礼記』（新釈漢文大系、明治書店、一九七一年）
- ・原田種成『貞觀政要』上・下（新釈漢文大系、明治書院、一九七八年）
- ・范曄撰・李賢等（注）『後漢書』（中華書局、一九六五年）
- ・平岡武夫・今井清（編）『白氏文集歌詩索引』上・中・下（同朋社出版、一九八九年）
- ・麓保孝『帝範・臣軌』（中国古典新書、明德出版社、一九八四年）
- ・房玄齡等（撰）『晋書』（中華書局、一九七四年）
- ・星野恒（校訂）『御注孝経』（十三經注疏）漢文大系（富山房、一九七三年）
- ・目加田誠『世説新語』上・中・下（新釈漢文大系、明治書院、一九七五～一九七八年）

・山内洋一郎(編)『〈本邦類書〉玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』(汲古書店、二〇一二年)

・山田孝雄(解説)『世俗諺文』(古典保存会、一九三一年)

・幼学の会(編)『口遊注解』(勉誠社、一九九七年)

・吉川忠夫(訓注)『後漢書』一〇一一(岩波書店、二〇〇一〜二〇〇七年)

・吉田賢抗『史記』一〇一二(新釈漢文大系、明治書店、一九八四〜二〇〇七年)

・呂效祖(点校)『群書治要』(鷺江出版社、二〇〇四年)

有識故実および史料

・井上光貞(他校注)『律・令』(日本思想大系、岩波書店、一九七六年)

・岡麓(校訂)『入木道三部集』(岩波文庫、岩波書店、一九三一年)

・岡見正雄・赤松俊秀(校注)『愚管抄』(日本古典文学大系、岩波書店、一九六七年)

・大曾根章介(校注)「九条右丞相遺誠」『山岸徳平(外・校注)『古代政治社会思想』(日

本思想大系、岩波書店、一九七九年)』

・川本重雄・小泉和子(編)『類聚雜要抄指図卷』(中央公論美術出版、一九九八年)

・京都大学文学部国語学国文学研究室(編)『諸本集成 和名類聚抄(索引篇)』(臨川書店、

増訂版、一九六八年)

・宮内庁書陵部(編)『花園天皇宸翰集―誠太子書・学道之御記・御处分状』(一九七七年)

・倉本一宏(訳)『御堂関白記』上・中・下(講談社学術文庫、講談社、二〇〇九年)

・『権記』上・中・下(講談社学術文庫、講談社、二〇一〇〜二〇一二年)

・国史大系編修会(編)『日本三代実録』(吉川弘文館、一九六六年)

・『公卿補任』(吉川弘文館、一九六四年)

・『日本紀略』(吉川弘文館、一九六五年)

・『日本後紀』(吉川弘文館、一九六六年)

・『扶桑略記・帝王編年記』(吉川弘文館、一九六五年)

・『律・令義解』(吉川弘文館、一九六六年)

・『令集解』前・後(吉川弘文館、一九六六年)

・国文学研究資料館(編)『聖徳太子伝暦』(真福寺善本叢刊、臨川書店、二〇〇六年)

・古辞書叢刊刊行会『拾芥抄』(雄松堂書店、一九七六年)

・古辞書叢刊刊行会『簾中抄』(雄松堂書店、一九七八年)

・故実叢書編集部『故実拾要』(改訂増補 故実叢書、第一〇巻、明治図書出版、一九九三年)

・『禁秘抄考註』(改訂増補 故実叢書、第二二巻、明治図書出版、一九九三年)

・近藤瓶城編『改定史籍集覧 新加纂録類』第二三冊第二〇巻(近藤活版所、一九〇一年)

- ・新編荷田春満全集委員会（編）『新編荷田春満全集 職原抄』（おうふう、二〇〇八年）
- ・続群書類従完成会『権記』（史料纂集、一九七八～一九九六年）
- ・増補「史料大成」刊行会（編）『権記』一・二（臨川書店、一九六五年）
- ・増補「史料大成」刊行会（編）『中右記』一～七（臨川書店、一九六五年）
- ・東京大学史料編纂所（編纂）『小右記』一～一一（大日本古記録、岩波書店、一九五九～一九八六年）

- （編纂）『御堂関白記』上・中・下（大日本古記録、岩波書店、一九七七年）

- ・塙保己一（編）『職原鈔』（群書類従第七一巻、続群書類聚完成会、一九三三年）
- 『龍鳴抄』（群書類従第三四二巻、続群書類聚完成会、一九三三年）
- 『懷竹抄』（群書類従第三四三巻、続群書類聚完成会、一九三三年）
- 『夜鶴庭訓抄』（群書類従第四九四巻、続群書類聚完成会、一九三三年）
- 『麒麟抄』（群書類従第九一三巻、続群書類聚完成会、一九二二年）
- ・土田直鎮、所功（校注）『神道大系 朝儀祭祀編二 西宮記』（神道大系編纂会、一九九三年）
- ・眞壁俊信（校注）『神道大系 神社編一一 北野』（神道大系編纂会、一九七八年）
- ・山中裕（編）『御堂関白記全註釈 寛仁二年下』（高科書店、一九九一年）

仏教資料

- ・伊藤瑞叡（校訂）『華嚴經』国訳一切経・印度撰述部（大東出版社、一九二九～一九三一年）
- ・周叔迦・蘇晋仁（校注）『法苑珠林』一～六（中国仏教典籍選刊、中華書局、二〇〇三年）
- ・修験聖典編纂会（編）『修験聖典』（三宝山内・修験聖典編纂会、一九二七年）
- 『法華經』大正新脩大藏經・第九巻・法華部全（大蔵出版、一九二七年）
- 『華嚴經』大正新脩大藏經・第一〇巻・華嚴部下（大蔵出版、一九二五年）
- 『法苑珠林』大正新脩大藏經・第五三巻・事彙部上（大蔵出版、一九二八年）
- ・大正大学総合仏教研究所 注維摩詰経研究会『対訳 注維摩詰経』（大正大学総合仏教研究所叢書、第五巻、山喜房佛書林、二〇〇〇年）
- ・坂本幸男・岩本裕（訳注）『法華経』上・中・下（岩波書店、一九六二～一九六七年）
- ・関口真大（校注）『摩訶止観—禅の思想原理』上・下（岩波書店、一九六六年）
- ・仏書刊行会（編）『寺誌叢書』（大日本仏教全書、第一一七～一二〇冊、名著普及会、一九八〇年）

辞書類

- ・国史大辞典編集委員会（編）『国史大辞典』（吉川弘文館、一九九六～一九九七年）
- ・中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二～一九九九年）
- ・日本国語大辞典第二版編集委員会（編）『日本国語大辞典』（小学館、二〇〇〇～二〇〇二年）
- ・室町時代語辞典編修委員会（編）『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂、一九八五～二〇〇一年）

図版資料

- ・出光美術館、是澤恭三（編）『見ぬ世の友 国宝手鑑』（平凡社、一九七三年）
- （編）『古筆手鑑—国宝『見努世友』と『藻塩草』（二〇一二年）
- ・京都国立博物館（編）『国宝 手鑑藻塩草』（一九六九年）
- 『国宝 手鑑藻塩草』（二〇〇六年）
- ・小松茂美（監修）『国宝 元永本 古今和歌集』上・下（講談社、一九八〇年）
- ・田口栄一（監修）『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』（学習研究社、一九八八年）

【二次資料】

研究文献

- ・秋山虔『源氏物語の世界—その方法と達成—』（東京大学出版会、一九六四年）
- 『源氏物語』（岩波新書、岩波書店、一九六八年）
- 『源氏物語の女性たち』（小学館、一九九一年）
- （編）『新・源氏物語必携』（別冊国文学・改裝版、學燈社、一九九七年）
- ・秋山光和『王朝絵画の誕生』（中公新書、中央公論社、一九六八年）
- 『日本絵巻物の研究』上・下（中央公論美術出版、二〇〇〇年）
- ・浅田徹（外編）『和歌が書かれるとき』（和歌をひらく 第二卷、岩波書店、二〇〇五年）
- ・阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会、一九五九年）
- ・阿部好臣『源氏物語 物語文学組成論Ⅰ』（笠間書院、二〇一一年）
- 『創生と変容 物語文学組成論Ⅱ』（笠間書院、二〇一一年）
- ・伊井春樹『源氏物語の伝説』（昭和出版、一九七六年）
- 『源氏物語論考』（風間書房、一九八一年）
- ・家永三郎『上代倭絵全史』（名著刊行会、改訂重版、一九九八年）（初版）（高桐書院、一九四六年）
- ・池澤優『「孝」思想の宗教学的研究—古代中国における祖先崇拜の思想的発展』（東京大学出版会、二〇〇二年）
- ・池田忍（編）『源氏物語と美術の世界』（講座源氏物語研究・第二〇卷、おうふう、二〇〇

○八年

・池田節子・久富木原玲・小嶋菜温子（編）『源氏物語の歌と人物』（翰林書房、二〇〇九年）

・石田穰二『源氏物語論集』（桜楓社、一九七一年）

・石橋義秀『仏教説話論考』（文栄堂書店、二〇〇九年）

・磯水絵（編）『大江匡房―碩学の文人官僚』（勉誠出版、二〇一〇年）

・糸井通浩・神尾暢子（編）『王朝物語のしぐさとことば』（清文堂、二〇〇八年）

・伊藤鉄也（編）『源氏物語の本文』（講座源氏物語研究、第七卷、おうふう、二〇〇八年）

・伊藤博『源氏物語の原点』（明治書院、一九八〇年）

——『源氏物語の基底と創造』（武蔵野書院、一九九四年）

・伊藤博之・今成元昭・山田昭全（編）『仏教文学講座』第一卷「仏教文学の原典」（勉誠

社、一九九四年）

・稲賀敬二（編）『源氏物語の内と外』（風間書房、一九八七年）

・稲田浩二（外編）『日本昔話事典』（弘文堂、一九七七年）

・稲田利徳『人が走るとき―古典のなかの日本人と言葉』（笠間書院、二〇一〇年）

・井上真弓『狭衣物語の語りと引用』（笠間書院、二〇〇五年）

・井上光貞『日本浄土教成立史の研究』（井上光貞著作集第七卷、岩波書店、一九八五年）

・伊原昭『平安朝文学の色相―特に散文作品について―』（笠間書院、一九六七年）

・今井卓爾（監修）石原昭平・津本信博・西沢正史（集）『女流日記文学講座』第一巻（第

六巻）（勉誠社、一九九〇～一九九一年）

・今井上『源氏物語 表現の理路』（笠間書院、二〇〇八年）

・今井久代『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』（風間書房、二〇〇一年）

・今西祐一郎『源氏物語覚書』（岩波書店、一九九八年）

——『蜻蛉日記覚書』（岩波書店、二〇〇七年）

・岩瀬法雲『源氏物語と仏教思想』（笠間書院、一九七二年）

・植田恭代『源氏物語の宮廷文化―後宮・雅楽・物語世界』（笠間書院、二〇〇九年）

・上原作和『光源氏物語の思想史の変貌―〈琴〉のゆくへ』（有精堂、一九九四年）

——『光源氏物語 學藝史』（翰林書房、二〇〇六年）

・宇津保物語研究会（編）『宇津保物語新論』（古典文庫、一九五八年）

——（編）『宇津保物語新攷』（古典文庫、一九六六年）

・梅野きみ子『王朝の美的語彙―えんとその周辺 続』（新典社、一九九五年）

・大井田晴彦『うつほ物語の世界』（風間書房、二〇〇二年）

・大倉比呂志『物語文学集攷』（新典社、二〇一三年）

・太田敦子『源氏物語姫君の世界』（新典社、二〇一三年）

・小木喬『散逸物語の研究―平安・鎌倉時代編』（笠間書院、一九七三年）

・奥山錦洞『日本書道教育史』（復刻版、日本文化史叢書、藤森書店、一九八二年）〈初版〉

(清教社、一九五三年)

- ・河地修(編)『常夏・篝火・野分』(源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、二〇〇二年)
- ・小町谷照彦・倉田実(編)『王朝文学文化歴史大事典』(笠間書院、二〇一一年)
- ・小原仁『文人貴族の系譜』(吉川弘文館、一九八七年)
- ・笠原一男『女人往生思想の系譜』(吉川弘文館、一九七五年)
- ・片野達郎『日本文芸と絵画の相関性の研究』(笠間書院、一九七五年)
- ・加藤昌嘉『揺れ動く『源氏物語』』(勉誠出版、二〇一一年)
- ・勝浦令子『古代・中世の女性と仏教』(日本史リブレット(山川出版社、二〇〇三年))
- ・勝亦志織『物語の〈皇女〉——もうひとつの王朝物語史』(笠間書院、二〇一〇年)
- ・鎌田茂雄『法華経を読む』(講談社学術文庫、講談社、一九九四年)
- ・辛島正雄『中世王朝物語史論』上・下(笠間書院、二〇〇一年)
- ・河添房江『源氏物語の喩と王権』(有精堂、一九九二年)
- 『性と文化の源氏物語——書く女の誕生』(筑摩書房、一九九八年)
- 『源氏物語時空論』(東京大学出版会、二〇〇五年)
- ・神田龍身『物語文学、その解体——『源氏物語』「宇治十帖」以降』(有精堂、一九九二年)
- ・木村朗子『恋する物語のホモセクシュアリティ——宮廷社会と権力』(青土社、二〇〇八年)
- 『乳房はだれのものか——日本中世物語にみる性と権力』(新曜社、二〇〇九年)
- ・久下裕利『物語の廻廊——『源氏物語』からの挑発』(新典社、二〇〇〇年)
- (編)『物語絵・歌仙絵を考える——変容の軌跡』(武蔵野書院、二〇一一年)
- ・久保朝孝・外山敦子(編)『端役で光る源氏物語』(世界思想社、二〇〇九年)
- ・倉田実『王朝撰関期の養女たち』(翰林書房、二〇〇四年)
- 『蜻蛉日記の養女迎え』(新典社、二〇〇六年)
- ・倉本一宏『一条天皇』(人物叢書、吉川弘文館、二〇〇三年)
- 『平安貴族の夢分析』(吉川弘文館、二〇〇八年)
- ・黒住真『近世日本社会と儒教』(ぺりかん社、二〇〇三年)
- ・久曾神昇『平安時代仮名書状の研究』(風間書店、一九七六年)
- ・国文学研究資料館(編)『古典籍研究ガイド——王朝文学をよむために』(笠間書院、二〇一二年)
- 『アメリカに渡った物語絵——絵巻・屏風・絵本』(ぺりかん社、二〇一三年)
- ・小島明子『中世宮廷物語文学の研究——歴史との往還——』(和泉書院、二〇一〇年)
- ・小嶋菜温子・渡部泰明『源氏物語と和歌』(青簡舎、二〇〇八年)
- ・小町谷照彦『源氏物語の歌ことば表現』(東京大学出版会、一九八四年)
- ・小松茂美『手紙の歴史』(岩波新書、岩波書店、一九七六年)
- 『古筆学断章』(講談社、一九八六年)
- 『元永本 古今和歌集の研究』(講談社、一九八〇年)

- ・――『展望 日本書道史』（中央公論社、一九八六年）
- ・小峯和明『中世説話の世界を読む』（岩波書店、一九九八年）
- ・後藤祥子『源氏物語の史的空間』（東京大学出版会、一九八六年）
- ・斉藤暁子『源氏物語の仏教と人間』（桜楓社、一九八九年）
- ・境田四郎・和田克司・平林治徳（編）『日本説話文学索引』（清文堂出版、一九七四年）
- ・笹川博司『高光集と多武峯少将物語』（風間書房、二〇〇六年）
- ・坂本昇『源氏物語構想論』（明治書院、一九八一年）
- ・佐伯雅子『源氏物語における「漢字」―紫式部の学問的基盤―』（新典社、二〇一〇年）
- ・関みさを『源氏物語の精神史的研究』（白水社、一九四一年）〔復刻版〕（日向一雅（監修）
- ・解題、クレス出版、一九九七年）
- ・繁田信一『御曹司たちの王朝時代』（角川選書、角川書店、二〇〇九年）
- ・篠原昭二『源氏物語の論理』（東京大学出版会、一九九二年）
- ・島内景二『御伽草子の精神史』（ぺりかん社、一九八八年）
- ・――『源氏物語の影響史』（笠間書院、二〇〇〇年）
- ・清水好子『源氏物語論』（塙書房、一九六六年）
- ・清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（和泉書院、増補版、二〇〇八年）
- ・――『源氏物語の真相』（角川学芸出版、二〇一〇年）
- ・新聞一美『平安朝文学と漢詩文』（和泉書院、二〇〇三年）
- ・――『源氏物語と白居易の文学』（和泉書院、二〇〇三年）
- ・――『源氏物語の構想と漢詩文』（和泉書院、二〇〇九年）
- ・陣野英則『源氏物語の話しと表現世界』（勉誠出版、二〇〇四年）
- ・鈴木日出男『源氏物語歳時記』（筑摩書房、一九八九年）
- ・――『源氏物語虚構論』（東京大学出版会、二〇〇三年）
- ・――・天野紀代子（編）『益田勝実の仕事』（二）（筑摩書房、二〇〇六年）
- ・鈴木宏子『古今和歌集表現論』（笠間書院、二〇〇〇年）
- ・鈴木宏昌『源氏物語と平安朝の信仰』（新典社、二〇〇八年）
- ・鈴木裕子『『源氏物語』を「母と子」から読み解く』（角川叢書、角川書店、二〇〇五年）
- ・鈴木泰恵『狭衣物語／批評』（翰林書房、二〇〇七年）
- ・高木和子『源氏物語の思考』（風間書房、二〇〇二年）
- ・高木宗監『源氏物語における仏教故事の研究』（桜楓社、一九八〇年）
- ・――『源氏物語と仏教』（桜楓社、一九九一年）
- ・高橋亨『源氏物語の対位法』（東京大学出版会、一九八二年）
- ・――『物語と絵の遠近法』（ぺりかん社、一九九一年）
- ・――『源氏物語の詩学―かな物語の生成と心的遠近法』（名古屋大学出版会、二〇〇七年）
- ・武原弘『源氏物語の認識と求道』（おうふう、一九九九年）

- ・田坂憲二『源氏物語の人物と構想』（和泉書院、一九九三年）
- ・田中隆昭『源氏物語 歴史と虚構』（勉誠社、一九九三年）
- ・田中徳定『孝思想の受容と古代中世文学』（新典社、二〇〇七年）
- ・田中久夫『年中行事と民間信仰』（弘文堂、一九八五年）
- 『祖先祭祀の研究』（弘文堂、一九七八年）
- ・中田勇次郎『心花室集 日本書道史論考（下）』（中田勇次郎著作集、第六卷、二玄社、一九八五年）
- ・田村芳朗『法華経』（中央新書、中央公論新社、一九六九年）
- ・中世文学会（編）『中世文学研究は日本文化を解明できるか』（笠間書院、二〇〇六年）
- ・塚原明弘『源氏物語ことばの連環』（おうふう、二〇〇四年）
- ・達日出典『長谷寺史の研究』（古代山岳寺院の研究（一） 巖南堂書店、一九七九年）
- ・常磐井和子『源氏物語古系図の研究』（笠間書院、一九七三年）
- ・友常勉『始原と反復 本居宣長における言葉という問題』（三元社、二〇〇七年）
- ・豊島秀範『物語史研究』（おうふう、一九九四年）
- ・豊田国夫『言霊信仰―その源流と史的展開―』（八幡書店、一九八五年）
- ・永井和子『源氏物語と老い』（笠間書院、一九九五年）
- ・永井義憲『日本仏教文学研究』（豊島書房、一九六六年）
- ・中村義雄『王朝の風俗と文学』（塙選書、一九六二年）
- ・仁平道明『和漢比較文学論考』（武蔵野書院、二〇〇〇年）
- ・日本文学研究資料刊行会『平安朝日記（一）』（日本文学研究資料叢書、有精堂、一九七一年）
- ・沼尻利通『平安文学の発想と生成』（國學院大學大学院、二〇〇七年）
- ・野村精一『源氏物語の創造』（桜楓社、一九六九年）
- ・野村忠夫『律令政治と官人制』（吉川弘文館、一九九三年）
- ・袴田光康『源氏物語の史的回路―皇統回帰の物語と宇多天皇の時代―』（おうふう、二〇〇九年）
- 九年
- ・橋本不美男『王朝和歌史の研究』（笠間書院、一九七二年）
- ・長谷川政春『〈境界〉からの発想―旅の文学・恋の文学』（新典社、一九八九年）
- 『物語史の風景』（若草書房、一九九七年）
- ・林田孝和・植田恭代・竹内正彦・原岡文子・針本正行・吉井美弥子（編）『源氏物語事典』（大和書房、二〇〇二年）
- ・速水侑『平安貴族社会と仏教』（吉川弘文館、一九七五年）
- 『観音信仰』（雄山閣出版、一九八二年）
- （編）『観音信仰事典』（神仏信仰シリーズ四、戎光祥出版、二〇〇〇年）
- ・原岡文子『源氏物語 両義の糸』（有精堂、一九九一年）
- 『源氏物語』に仕掛けられた謎―「若紫」からのメッセージ』（角川学芸出版、

二〇〇八年

- ・林秀一『孝経学論集』（明治書院、一九七六年）
- ・針本正行『平安女流文学の研究』（桜楓社、一九九二年）
- ・春名好重『藤原佐理』（人物叢書、吉川弘文館、一九六一年）
- 『平安時代書道史』（思文閣書店、一九九三年）
- ・日向一雅『源氏物語の主題——「家」の遺志と宿世の物語の構造』（桜楓社、一九八三年）
- 『源氏物語の王権と流離』（新典社、一九八九年）
- 『源氏物語の準拠と話型』（至文堂、一九九九年）
- 『源氏物語の世界』（岩波新書、岩波書店、二〇〇四年）
- （編）『王朝文学と官職・位階』（平安文学と隣接諸学四、竹林舎、二〇〇八年）
- ・檜谷昭彦・小林保治・高橋貢（編）『説話文学必携』（『日本の説話』別巻、東京美術、一九七六年）

- ・平田俊春『平安時代の研究』（山一書房、一九四三年）
- ・兵藤裕己『王権と物語』（青弓社、一九八九年）
- ・福長進『歴史物語の創造』（笠間書院、二〇一一年）
- ・服藤早苗『家成立史の研究——祖先祭祀・女・子ども』（校倉書房、一九九一年）
- 『平安朝の母と子——貴族と庶民の家族生活史』（中公新書、中央公論社、一九九一年）

- 『平安朝の父と子——貴族と庶民の家と養育』（中公新書、中央公論社、二〇一〇年）

- ・小嶋菜温子（編）『生育儀礼の歴史と文化』（森話社、二〇〇三年）
- （編）『女と子どもの王朝史——後宮・儀礼・縁』（森話社、二〇〇七年）
- ・福家俊幸・久下裕利（編）『王朝女流日記を考える——追憶の風景』（武蔵野書店、二〇一一年）

- ・藤井貞和（編）『王朝物語必携』（學燈社、一九八七年）
- 『源氏物語の始原と現在』（砂子屋書房、一九九〇年）
- 『古典講読シリーズ 源氏物語』（岩波セミナーブックス、岩波書店、一九九三年）

- 『源氏物語入門』（講談社、一九九六年）
- 『タブーと結婚』（笠間書院、二〇〇七年）
- ・藤岡作太郎『国文学全史』平安朝篇2（東洋文庫、平凡社、一九七四年）
- ・藤河家利昭『源氏物語の源泉受容の方法』（勉誠社、一九九五年）
- ・藤村潔『古代物語研究序説』（笠間書院、一九七七年）
- ・藤本勝義『源氏物語の「物の怪」——文学と記録の狭間』（笠間書院、一九九四年）
- 『源氏物語の人 ことば 文化』（新典社、一九九九年）
- ・藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、二〇〇一年）

- ・淵江文也『源氏物語の思想的美質』（国語国文学研究叢書、第二五巻、桜楓社、一九七八年）
- ・星山健『王朝物語史論―引用の『源氏物語』』（笠間書院、二〇〇八年）
- ・増田繁夫『平安貴族の結婚・愛情・性愛―多妻制社会の男と女―』（青簡舎、二〇〇九年）
- ――『源氏物語の人々の思想・倫理』（大阪市立大学人文選書）（和泉書院、二〇一〇年）
- ・松井健児『源氏物語の生活世界』（翰林書房、二〇〇〇年）
- ・松田武夫『古今集の構造に関する研究』（風間書房、一九六五年）
- ・丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』（東京女子大学学会、一九六四年）
- ――『源氏物語の仏教』（創文社、一九八五年）
- ・三角洋一『とはがたり』（古典講読シリーズ、岩波書店、一九九二年）
- ――『物語の変貌』（若草書房、一九九六年）
- ――『源氏物語と天台浄土教』（若草書房、一九九六年）
- ――『王朝物語の展開』（若草書房、二〇〇〇年）
- ――松尾葦江・島内裕子『日本の散文―古典編』（放送大学教育振興会、二〇〇三年）
- ――（編）『早蕨』（源氏物語の鑑賞と基礎知識、到文堂、二〇〇五年）
- ――（編）『鎌倉・室町時代の源氏物語』（講座源氏物語研究・第四巻、おうふう、二〇〇七年）
- ――『宇治十帖と仏教』（若草書房、二〇一一年）
- ・三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』（続群書類従完成会、二〇〇〇年）
- ・三村友希『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上』（翰林書房、二〇〇八年）
- ・源豊宗『大和絵の研究』（角川書店、一九七六年）
- ・桃裕行『上代学制の研究』（修訂版）（思文閣出版、一九九四年）（初版は、目黒書店、一九四七年）
- ・森一郎『源氏物語の方法』（桜楓社、一九六九年）
- ――『源氏物語作中人物論』（笠間書院、一九七九年）
- ――（編）『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、一九九三年）
- ・森本茂『源氏物語の風土』（白川書院、一九六五年）
- ・内山精也『蘇軾詩研究―宋代士大夫詩人の構造』（研文出版、二〇一〇年）
- ・山内洋一郎『金澤文庫本 佛教説話集の研究』（及古書院、一九九七年）
- ・山折哲雄『仏教民俗学』（講談社学術文庫、講談社、一九九三年）
- ・山中裕『平安朝文学の史的研究』（吉川弘文館、一九七四年）
- ――『平安人物志』（東京大学出版会、一九七四年）
- ・尤海燕『古今和歌集と礼楽思想―勅撰和歌集の編纂原理』（勉誠出版、二〇一三年）
- ・吉井美弥子『読む源氏物語 読まれる源氏物語』（森話社、二〇〇八年）

- ・吉海直人『平安朝の乳母達』（世界思想社、一九九五年）
- ・——『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』（世界思想社、二〇〇八年）
- ・——『源氏物語の視角』（翰林書房、一九九二年）
- ・——『源氏物語〈桐壺巻〉を読む』（翰林書房、二〇〇九年）
- ・吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波文庫、岩波書店、二〇〇六年）
- ・吉野瑞恵『王朝文学の生成』（笠間書院、二〇一一年）
- ・古澤義則『日本書道随攷』（白水社、一九四三年）
- ・吉原浩人（編）『東洋における死の思想』（春秋社、二〇〇六年）
- ・李宇玲『古代宮廷文学論―中日文化交流史の視点から―』（勉誠出版、二〇一一年）
- ・渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）

単行本・雑誌等所収論文

- ・相澤佐与「若菜巻の賀宴の準拠―源氏四十賀と朱雀院五十賀」『実践国文学』（実践国文学会、一九九三年三月）
- ・青木慎一「子どもの和歌」〔池田節子・久富木原玲・小嶋菜温子（編）『源氏物語の歌と人物』（翰林書房、二〇〇九年）〕
- ・明石一紀「鎌倉武士の「家」―父系集団から単独的イエへ」『古代・中世のイエと女性―家族の理論』（校倉書房、二〇〇六年）
- ・秋澤互「明石一族の和歌」〔池田節子・久富木原玲・小嶋菜温子（編）『源氏物語の歌と人物』（翰林書房、二〇〇九年）〕
- ・——『「源氏物語」明石の君の育ちと素養』『国学院大学大学院 平安文学研究』第一号（国学院大学大学平安文学研究会、二〇〇九年九月）
- ・秋山虔「柏木の生と死」〔秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第七集（有斐閣、一九八二年）〕
- ・——「「蛭」巻の物語論」『日本文学』第三五巻第二号（日本文学協会、一九八六年二月）
- ・——「物語文学の成立」〔今井卓爾（外編）『源氏物語とは何か』（源氏物語講座、第一巻、勉誠社、一九九一年）〕
- ・秋山虔・後藤祥子・三田村雅子・河添房江「共同討議…玉鬘十帖を読む」『国文学 解釈と教材の研究』（學燈社、一九八七年十一月）
- ・阿久澤忠「源氏物語の物名歌の表現」〔紫式部学会（編）『源氏物語の言語表現 研究と資料』（古代文学叢書第一八輯、武蔵野書院、二〇〇九年十一月）〕
- ・浅尾広良「光源氏の算賀―四十賀の典礼と準拠―」『源氏研究』第七号（翰林書房、二〇〇二年）
- ・——「冷泉帝の大原野行幸―「見られる天皇」への変貌―」『源氏物語の準拠と系譜』（翰林書房、二〇〇四年）

- ・甘利忠彦「方法としての絵―「絵合」の位相と物語の論理」『中古文学』第四七号（中古文学会、一九九一年五月）
- ・阿部秋生「螢の巻の物語論」『人文科学科紀要 国文学・漢文学』第二四輯第七号（東京大学教養学部人文科学科、一九六〇年）
- ・阿部俊子「「なまめかし」考」『紫式部学会（編）『むらさき』第一七号（武蔵野書院、一九八〇年七月）』
- ――「女性の出家入道」『源氏物語研究会（編）『源氏物語の探究』（第八輯、風間書房、一九八三年）』
- ――「仏教と源氏物語」『今井卓爾（外編）『源氏物語とは何か』（源氏物語講座、第一巻、勉誠社、一九九一年）』
- ・阿部好臣「へかたり」の深層とへうた―源氏物語・柏木の位相をめぐる―『日本文学』第三二巻第六号（日本文学協会、一九八二年六月）
- ――「夕霧の恋―システム破壊の視座―」『国文学 解釈と教材の研究』第三二巻第一三三号（學燈社、一九八七年一月）
- ――『堤中納言物語』の研究・ノート―『花桜折る少将』の〈読み〉をめぐる―『研究紀要』第三八号（日本大学人文科学研究所、一九八九年九月）
- ――「継子いじめ譚の構造」『国文学 解釈と鑑賞』第五六巻一〇号（至文堂、一九九一年一〇月）
- ――「平中（平中物語）―『伊勢物語』との位相」『国文学 解釈と教材の研究』第三八巻第一一〇号（學燈社、一九九三年一〇月）
- ――「作品享受の構図と物語の位相―『源氏物語』の少女巻の論理に関連して―」『日本文学』第五二巻第一号（日本文学協会、二〇〇三年一月）
- ・安随直子「初音巻の基底―六条院の内と外―」『国語国文』第五八巻第九号（京都大学文学部国語学国文学研究室、一九九二年七月）
- ――「夕霧像の再検討―六条院の内と外 その二―」『国語国文』第六一巻第七号（京都大学文学部国語学国文学研究室、一九九二年七月）
- ・伊井春樹「須磨の絵日記から絵合の絵日記へ」『中古文学』第三九号（中古文学会、一九八七年五月）
- ――「耕雲本源氏物語薄雲巻の性格」『稻賀敬二（編）『源氏物語の内と外』（風間書房、一九八七年）』
- ――「物語文学の成立」『鈴木一雄（編）『日本文学新史〈古代Ⅱ〉』（至文堂、一九九〇年）』
- ――「絵日記の系譜―『蜻蛉日記』から『狭衣物語』へ―」『王朝物語研究会編『論集 源氏物語とその前後』第一巻（新典社、一九九〇年五月）』
- ――「絵物語の読者たち」『国文学攷』第二二六号（広島文理科大学国語国文学会、一九九〇年六月）

- ・――「物語絵考―源氏物語における絵合の意義―」『国語と国文学』第六七卷第七号（東京大学国語国文学会、一九九〇年七月）
- ・――「玉鬘十帖の主題」『増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第一卷（風間書房、一九九八年）』
- ・――「源氏物語の引歌―兼輔詠歌の投影―」『紫式部学会（編）『むらさき』第一七輯（武蔵野書院、一九八〇年七月）』
- ・――「夕霧物語の位相―光源氏の晩年を継承する夕霧像―」『伊井春樹（編）『夕霧』源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、二〇〇二年』
- ・――「王朝人の生活の中の絵画」『久下裕利（編）『源氏物語絵巻とその周辺』（新典社、二〇〇一年）』
- ・――新藤協三「物語文学の成立」『鈴木一雄（編）『日本文学新史（古代）』（至文堂、一九九〇年）』
- ・飯沼清子「藤原道長の書籍蒐集」『風俗』第二七卷第二号（日本風俗史学会、一九八八年六月）
- ・――「夜居僧都小論―密奏を起点として―」『王朝文学史研究会（編）『王朝文学史稿』第九号（一九八一年一〇月）
- ・家井美千子「右衛門督―『源氏物語』における―」『中古文学』第三六号（中古文学会、一九八六年三月）
- ・池田和臣「竹河巻と橋姫物語試論―竹河の構造的意義と表現方法―」『紫式部学会（編）『源氏物語及び以後の物語』（古代文学論叢第七輯、武蔵野書院、一九七九年）』
- ・――『源氏物語』における継子譚の形態分析―玉鬘物語解体のために―『源氏物語表現構造と水脈』（武蔵野書院、二〇〇一年）〈初出〉『中央大学文学部紀要・文学科』第七九号（中央大学文学部、一九九七年三月）』
- ・池田節子「女三の宮」『今井卓爾（外編）『物語を織りなす人々』（源氏物語講座、第二巻（勉誠社、一九九一年）』
- ・――「大君―結婚拒否の意味するもの―」『森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、一九九三年）』
- ・――「似ている」人々」『河添房江（編）『家と血のイリュージョン』（叢書 想像する平安文学、勉誠出版、二〇〇一年）』
- ・池田忍「絵画言説の位相（序説）―『源氏物語』を中心に―」『史論』第五四号（東京女子大学学会史学研究室、二〇〇〇年）
- ・池田勉「須磨の巻についての覚え書」『国語と国文学』第四九卷第三号（東京大学国語国文学会、一九七二年三月）
- ・池見澄隆「臨終行儀」『中世の精神世界―死と救済―』（人文書院、一九八五年）
- ・石井公成「『紫式部日記』と『源氏物語』における『維摩経』利用」『駒澤大学仏教文学研究』第八号（駒澤大学仏教文学研究所、二〇〇五年三月）

- ・石川信夫「源氏物語の継親と継子―三代、四代にわたる継母娘関係をめぐって」『平安文学の風貌』（武蔵野書院、二〇〇三年）
- ・石原昭平「絵日記と日記絵―日記文学における執筆・享受の一問題」『国文学研究』第三八集（早稲田大学国文学会、一九六八年九月）
- ――「平安文学と絵画―月次絵と絵日記をめぐって―」『文学・語学』第六〇号（全
国大学国語国文学会、一九七一年六月）
- ・伊藤博「『濔標』以後―光源氏の変貌―」『日向一雅（編）『濔標』源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、一九九二年』〈初出〉『日本文学』第一四卷六号（日本文学協会、一九六五年六月）
- ――「『野分』の後―源氏物語第二部への胎動―」『文学』第三五卷八号（岩波書店、一九六七年八月）
- ――「狭衣物語飛鳥井女君の絵日記」『リポート笠間』第一五号（笠間書院、一九七七年）
- ――「冷泉帝から今上帝へ」「秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第六集（有斐閣、一九八一年）」
- ・伊藤学人「物語と物語絵―『異本能宣集』所載の住吉物語絵をめぐって―」『稲賀敬二（編）『源氏物語の内と外』（風間書房、一九八七年）』
- ・伊東祐子「『藤の衣物語』と鎌倉時代物語をめぐって」『伊東祐子（外編）『平安文学研究 生成』（笠間書院、二〇〇五年）』
- ・稲賀敬二「源氏物語の源泉とそのうけとめ方―研究史初期における若干の問題―」『国文学 解釈と鑑賞』第三四卷第六号（至文堂、一九六九年六月）
- ・稲本万里子「『源氏物語絵巻』の景観―絵合・松風段の復原的考察」『源氏研究』第八号（翰林書房、二〇〇三年四月）
- ・今井源衛「女子教訓書および艶書文学と『源氏物語』」『田坂憲二（編）『今井源衛著作集 第四卷 源氏物語文献考』（笠間書院、二〇〇三年）』
- ・今井上「踏み惑う薫と夢浮橋―宇治十帖の終末についての試論―」『中古文学』第六八号（中古文学会、二〇〇一年十一月）
- ・今井俊哉「光源氏の鏡」『学芸国語国文学』第三二号（東京学芸大学国語国文学会、二〇〇〇年三月）
- ・今井久代「父の姉娘の物語―大君―」『人物造型からみた『源氏物語』（国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九八年五月）』
- ――「大君物語が示すもの」『室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一九卷「大君・中の君」（勉誠社、二〇〇六年）』
- ・今成元昭「『法華経』と平安朝の文化・文学」『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂、一九九六年十二月）
- ・今西祐一郎「寡産の思想―源氏物語試論―」『文学』第四一巻第八号（岩波書店、一九七

三年八月)

- ・――「女三宮と「山桜」『国語国文』第六五卷第三号(京都大学文学部国語国文学研究室、一九九六年三月)
- ・――「衛門督のさしつぎよ」考―『源氏物語』紅梅卷の一文―『語文研究』第九一号(九州大学国語国文学会、二〇〇一年六月)
- ・今浜通隆「〔仁和元年二月二十五日〕基経邸読書始について(上)―平安朝文学と『世説』其三―」『武蔵野日本文学』第二号(武蔵野女子大学文学会、一九九三年)
- ・――「〔仁和元年二月二十五日〕基経邸読書始について(下)―平安朝文学と『世説』其三―」『講座平安文学論究』第九輯(風間書房、一九九三年)
- ・岩田真由子「宇多・醍醐朝における天皇家親子意識の変質」〔笠井昌昭(編)『文化史学の挑戦』(思文閣出版、二〇〇五年)〕
- ・上野勝之「夢の諸相―平安時代を中心として―」『日本文化環境論講座紀要』第三号(京都大学大学院人間・環境学研究所、二〇〇一年)
- ・上野辰義「宇治の大君の道心をめぐって」〔森一郎(編)『源氏物語の展望』第四輯(三弥井書店、二〇〇八年)〕
- ・植田恭代「薫・八宮の交流をめぐって―「法の友」の基底―」『日本文学』第三五号(日本文学協会、一九八六年)
- ・遠藤邦基「表記の戯れ」〔浅田徹(外編)『和歌が書かれるとき』(和歌をひらく 第二巻、岩波書店、二〇〇五年)〕
- ・遠藤昌弘「藤原行成における入墨道相承―夢中における書法伝授の意味」『日本文化研究』第七号(駒沢女子大学日本文化研究所、二〇〇七年)
- ・大朝雄二「薫と大君の物語―橋姫巻から椎本巻への展開―」『文学』第五〇巻第八号(岩波書店、一九八二年八月)
- ・大井田晴彦「賀宴」〔増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹(編)『源氏物語研究集成』第一巻「源氏物語の行事と風俗」(風間書房、二〇〇二年)〕
- ・――「夕霧と雲居雁の恋―「少女」から「藤裏葉」まで―」〔河添房江(編)『梅枝・藤裏葉』(源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、二〇〇三年)〕
- ・――「父と娘の絆―俊蔭女と末摘花をめぐって―」〔室伏信助(監修)上原作和(編)『人物で読む源氏物語』第九巻「末摘花」(勉誠出版、二〇〇五年)〕
- ・大曾根章介「「放鳥試」考―官韻について―」『国語と国文学』第五六巻第一二号(東京大学国語国文学会、一九七九年二月)
- ・太田敦子「形見の宇治の中君―母の遺言をめぐって―」『物語文学論究』第一二巻(国学院大学物語文学研究会、二〇〇七年三月)
- ・大場朗「源氏の祈り―葵巻「法界三昧普賢大士」の思想と信仰を手がかりにして―」『中古文学』第八四巻(中古文学会、二〇〇九年一二月)
- ・大淵貴之「唐創業期の「類書」概念―『芸文類聚』と『群書治要』を手がかりとして―」『中

- ・国文学論集』第三五号（九州大学中国文学会、二〇〇六年）
- ・尾形裕康「就学始の史的研究」『日本学士院紀要』第八卷第一号（日本学士院、一九五〇年三月）
- ・岡部明日香「光源氏と周公旦」『和漢比較文学』第一八号（和漢比較文学会、一九九七年二月）
- ・岡山美樹「堤中納言兼輔の「人のおやの心は闇にあらねども・・・」の詠歌背景について―『大和物語』第四五段、『後撰集』一一〇二番、『兼輔集』を通して―」『二松大学院紀要』第二号（二松学舎大学大学院文学研究科、一九八八年三月）
- ・尾崎左永子「梅枝」の薫香」『三田村雅子・河添房江（編）『薫りの源氏物語』（翰林書房、二〇〇八年）
- ・奥村恒哉「桐壺の巻「高麗人」の解釈―付、準拠の問題」『文学』第四六号（岩波書店、一九七八年四月）
- ・尾崎康「群書治要とその現存本」『斯道文庫論集』第二五卷（慶応義塾大学付属研究所斯道文庫、一九九一年三月）
- ・鬼束隆昭「異説・別伝・紀伝体―竹河巻をめぐって―」『日本文学』第二四号（日本文学協会、一九七五年十一月）
- ・小野晃子『とりかへばや物語』吉野の宮造型詩論』『国文目白』第四一号（日本女子大学国語国文学会、二〇〇二年二月）
- ・小山敦子「命名法則の適用（二）―続編諸巻」『源氏物語の研究―創作過程の探究―』（武蔵野書院、一九七五年）
- ・片野達郎「文芸と絵画の相関性」『文学・語学』第六〇号（全国大学国語国文学会、一九七一年六月）
- ・――『源氏物語』の絵画性』『日本文芸と絵画の相関性の研究』（笠間書院、一九七五年）
- ・勝浦令子『靈異記』にみえる盗み・遺失物をめぐる諸問題』『平野邦雄（編）『日本靈異記の原像』（角川書店、一九九一年）
- ・加藤昌嘉『『うつほ』の仲澄―作り物語の手法と指向―』『詞林』第三二号（大阪大学古代中世文学研究会、二〇〇二年一〇月）
- ・加藤洋介「冷泉―光源氏体制と「後見」―」『文学』第五七卷八号（岩波書店、一九八九年八月）
- ・河北騰「源氏物語に見える教育観」独協大学学術研究会（編）『独協大学教養諸学研究』第三号（一九六九年三月）
- ・河添房江「宇治の暁―闇と光の喩の時空―」『源氏物語研究会（編）『源氏物語の探究』第三輯（風間書房、一九八八年）
- ・――『蛭巻の物語論と性差』『源氏研究』第一号（翰林書房、一九九六年）
- ・――『源氏物語』と絵画―最近の研究動向から』『鈴木日出男（編）『ことばが拓く

- ・ 古代文学史」(笠間書院、一九九九年)」
- ・ 「梅枝巻の文化的権威と対外関係―嵯峨朝・仁明朝と『源氏物語』―」「仁平道明(編)『源氏物語と東アジア』(新典社、二〇一〇年)」
- ・ 「アジアの中の源氏物語」『国文学 解釈と鑑賞』第七六卷第八号(ぎょうせい、二〇一一年八月)
- ・ 川名淳子「若菜巻 光源氏四十賀について(二)―紫の上の主催の賀を中心に―」『立教大学日本文学』(立教大学日本文学会、一九八四年七月)
- ・ 「若菜巻 光源氏の四十賀について(二)―玉鬘主催の賀を中心に―」『立教大学日本文学』(立教大学日本文学会、一九八五年七月)
- ・ 「玉鬘十帖について―玉鬘の装着」『小嶋菜温子(編)『王朝文学と通過儀礼』(平安文学と隣接諸学、第三巻、竹林舎、二〇〇七年)」
- ・ 「王朝文化と子ども―遊び―が語る子供の領域―」『秋澤互・川村裕子(編)『王朝文化を学ぶ人のために』(世界思想社、二〇一〇年)」
- ・ 河辺式絵『乳母の草紙』における女性の教養をめぐる諸問題について『金城日本語日本文学』第八四号(金城学院大学日本語日本文学会、二〇〇八年三月)
- ・ 神田龍身「句宮三帖の再評価―王朝時代への挽歌―」『高橋亨・久保朝孝(編)『新講 源氏物語を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九五年)」
- ・ 「漢文日記／口伝書／説話集―『江談抄』『中外抄』『富家語』の位相―」『国語と国文学』第七四巻第一号(東京大学国語国文学会、一九九七年十一月)
- ・ 「社会の欲望媒介装置〈浮舟〉」『紫式部学会』第三七号(武蔵野書院、二〇〇二年十二月)
- ・ 神野藤昭夫「異装する薫―『源氏物語』橋姫巻の一節―」『日本文学』第三七巻第一〇号(日本文学協会、一九八八年一〇月)
- ・ 「蛭巻物語論場面の論理構造」『国文学研究』第六七集(早稲田大学国文学会、一九七九年三月)
- ・ 「玉鬘」『国文学―解釈と教材の研究』(源氏物語作中人物事典)(學燈社、一九九一年五月)
- ・ 「宇治八の宮論―原点としての過去を探る」『室伏信助(監修) 上原作和(編)『人物で読む源氏物語』第一八巻「句宮・八宮」(勉誠出版、二〇〇六年)」
- ・ 菊地真「『源氏物語』「少女巻」における夕霧の初任叙位」『国文学研究』第一二〇号(早稲田大学国文学会、一九九六年一〇月)
- ・ 「学生貴族の恋物語―学生時代の夕霧の恋愛譚について―」『王朝物語研究会(編)『歴史との往還』「論叢源氏物語」(新典社、二〇〇〇年)」
- ・ 菊地仁「浜松中納言物語の在唐巻―源氏物語からの照射」『国学院雑誌』(国学院大学、一九七八年三月)
- ・ 木船重昭「宇治八宮の創造と造型―源氏物語の表現と方法―」『国語と国文学』第五三巻

第一〇号（東京大学国語国文学会、一九七六年一〇月）

キム・チョンドク

・金鍾徳「継子譚の伝承と表現——『源氏物語』の継母子関係を中心に——」『日本文学』第

五五卷第五号（日本文学協会、二〇〇六年五月）

・京楽真帆子「平安貴族の居住形態」『坂田聡（編）『家族と住居・地域』日本家族史論集

一二（吉川弘文館、二〇〇三年）

・葛綿正一「鏡をめぐって」『源氏物語のテーマイズム——語りと主題』（笠間書院、一九九八年）

・工藤重矩「蛭巻の物語論議——「そら」とを「まこと」と言いなす論理の構造——」〔森一郎（外編）『源氏物語の展望』第五輯（三弥井書店、二〇〇九年）〕

・工藤進思郎「宇治の中君再論」〔森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（笠間書院、一九七九年）〕

・倉田実「明石の中宮の両義性」〔森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、一九九三年）〕

・——「敦康親王と彰子——『後漢書』の馬皇后の故事から——」『王朝撰関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇四年）

・倉本一宏『『栄花物語』における「後見」について』〔山中裕（編）『栄花物語研究』第二集（高科書店、一九八七年）〕

・呉羽長「宇治大君の造型の方法をめぐって」〔森一郎（編）『源氏物語の展望』第三輯（三弥井書店、二〇〇八年）〕

・河野貴美子「渤海使と平安時代の宫廷文学」〔仁平道明（編）『王朝文学と東アジアの宫廷文学』（平安文学と隣接諸学、第五卷、竹林舎、二〇〇八年）〕

・高野浩「秘密露顕者の新規造型——王命婦・小侍従から夜居僧都・弁へ——」『平安朝文学研究』第一〇号（平安朝文学研究会、二〇一一年十二月）

・河内祥輔「学芸と天皇」〔永原慶二（編集代表）『統治的諸機能と天皇観』（講座・前近代の天皇 第四卷、青木書店、一九九五年）〕

・神野志隆光「玉鬘」〔「真木柱」『国文学——解釈と教材の研究』第一九卷一〇号（學燈社、一九七四年九月）〕

・光島民子「御堂関白記の一考察——文人道長を中心として——」『女子大国文』第四六号（京都女子大学国文学会、一九六七年七月）

・小嶋菜温子「ぬりごめの落葉宮——夕霧巻とタブー——」〔森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（笠間書院、一九七九年）〕

・——「継子譚の〈家〉〈父〉と〈観音〉——『貝合』『住吉物語』から『男衾三郎絵詞』へ——」『源氏物語の性と生誕——王朝文化史論』（立教大学出版会、二〇〇四年）

・後藤昭雄「宫廷詩人と律令官人と——嵯峨朝文壇の基盤——」『国語と国文学』第五六卷第六号（東京大学国語国文学会、一九七九年六月）、後に『平安朝漢文学論考』〔補訂

- 番」(勉誠出版、二〇〇五年) 所収。
- 「学生の字について」『平安朝漢文学論考』[補訂番](勉誠出版、二〇〇五年)
 - ・後藤祥子「手習いの歌」『秋山虔・木村正中・清水好子(編)』講座 源氏物語の世界』第九集(有斐閣、一九八四年)」
 - 「夕霧」[鈴木日出男(編)]『人物造型からみた『源氏物語』』(国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九八年五月)」
 - ・小西甚一「いづれの御時にか」『国語と国文学』第三二卷第三号(東京大学国語国文学会、一九五五年三月)
 - ・小林正明『源氏物語』王権樹解体論―樹下美人からリズムへ―[物語研究会(編)]『源氏物語を〈読む〉』(新物語研究第四卷、若草書房、一九九六年)」
 - 「須磨絵と旅する男―絵合の理路」[鈴木日出男(編)]『ことばが拓く 古代文学史』(笠間書院、一九九九年)」
 - ・小町谷照彦「光源氏と玉鬘(一)」『秋山虔・木村正中・清水好子(編)』講座 源氏物語の世界』第五集(有斐閣、一九八一年)」
 - 「玉鬘求婚譚」『国文学 解釈と教材の研究』第三二卷第一三三号(學燈社、一九八七年一月)
 - 「風景の解説―「総角」巻の表現構造―」『文学』第五〇卷第八号(岩波書店、一九八二年八月)
 - 「算賀」[山中裕・鈴木一雄(編)]『平安時代の儀礼と歳事』(至文堂、一九九一年一二月)」
 - 「方法としての作中歌―夕霧と雲居雁との結婚譚に即して―」『和歌と物語』(和歌文学論集、第三卷、風間書房、一九九三年)
 - 「玉鬘大君求婚譚と和歌―竹河卷前半をめぐって―」[鈴木日出男(編)]『文学史上の『源氏物語』』(源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、一九九八年六月)」
 - ・小松茂人『源氏物語』の芸道論覚書―書道論について』『聖和』第一一号(聖和学園短期大学、一九七三年一二月)
 - ・五味文彦「天皇と学問・芸能」[網野善彦(外編)]『表徴と芸能』(岩波講座 天皇と王権を考える・第六卷、岩波書店、二〇〇三年)」
 - ・斎藤暁子「玉鬘の結婚をめぐって」[源氏物語研究会(編)]『源氏物語の探究』第八輯(風間書房、一九八三年六月)」
 - ・斎藤正昭「八の宮論」[室伏信助(監修) 上原作和(編)]『人物で読む源氏物語』第一八卷「勾宮・八宮」(勉誠出版、二〇〇六年)」
 - ・齋藤真麻理「竜王の訓え―『乳母の草紙』巧―」『国語国文』第八〇卷第六号(京都大学文学部国語学国文学研究室、二〇一一年六月)
 - ・三枝秀彰「薫試論―その主題的に内実とするもの―」『中古文学』第三五号(中古文学会、一九八五年五月)

- ・——「かひなきあはれ」―竹取による柏木の造型―「鈴木日出男（編）『源氏物語の時空』（笠間書院、一九九七年）」
- ・坂本共展「紫式部と『蜻蛉日記』」〔紫式部学会（編）『源氏物語と日記文学 研究と資料』（古代文学論叢、第二輯、武蔵野書院、一九九二年）〕
- ・——「浮舟物語の主題」〔増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第二卷（風間書房、一九九九年）〕
- ・——「匂宮巻の匂宮と薫」〔森一郎・岩佐美代子・坂本共展（編）『源氏物語の展望』第一卷（三弥井書店、二〇〇七年三月）〕
- ・坂本太郎「天皇の学問」『日本歴史の特性』（講談社学術文庫、講談社、一九八六年）
- ・笹川博司「高光と『源氏物語』」『国語と国文学』第八八巻第一号（東京大学国語国文学会、二〇一一年一月）
- ・笹生美貴子「源氏物語「明石一族」の意志―『古今和歌集』一〇〇三番歌引用を起点として―」『中古文学』第八二号（中古文学会、二〇〇八年十二月）
- ・佐藤厚子「家の神の子の物語―俊蔭漂流譚の思想―」『日本文学』第三三三号（日本文学協会、一九八四年三月）
- ・佐藤幸子「第二部の薫について―その表現を手がかりとして―」『平安朝文学研究』第五卷（平安朝文学研究会、一九九六年十二月）
- ・佐藤信一『うつほ物語』藤原季英の描かれ方について―漢文引用、とりわけ『菅家文草』引用から見た藤英像―『国文白百合』第三二号（白百合女子大学、二〇〇一年三月）
- ・佐藤勢紀子「王朝文学と経典―天台五時判撰取の諸相―」〔藤本勝義（編）『王朝文学と仏教 神道 陰陽道』（平安文学と隣接諸学、第二巻、竹林舎、二〇〇七年五月）〕
- ・沢田正子「源氏物語の母」〔源氏物語探究会（編）『源氏物語の探究』第六輯（風間書房、一九八一年）〕
- ・——「源氏物語の父」〔紫式部学会（編）『源氏物語と和歌』（古代文学論叢、第八輯、武蔵野書院、一九八二年）〕
- ・——「源氏物語の楽の音」『枕草子の美意識』（笠間書院、一九八五年）
- ・——「源氏物語の分離志向（四）―八宮と薫―」『紀要』第四号（静岡英和学院大学、二〇〇六年二月）
- ・三条西公正「源氏物語の書道論」『源氏物語講座』第五卷（有精堂、一九七一年）
- ・島内景二「源氏物語の普遍性と、その影響力―『平家物語』との関連を中心として―」〔紫式部学会（編）『むらさき』第三八輯（武蔵野書院、二〇〇一年十二月）〕
- ・島田とよ子『源氏物語』に於ける「后がね」教育―『大谷女子大國文』第一号（大谷女子大学国文学会、一九八一年三月）
- ・——「明石中宮―光源氏崩後―」『大谷女子大國文』第一五巻（大谷女子大学国文学会、一九八五年三月）

- ・――「明石中宮と藤の花―「木高き木より咲きかゝりて」―」『源氏物語研究会(編)『源氏物語の探究』第一〇輯(風間書房、一九八五年一〇月)』
- ・――「八宮―世にかずまへられたまはぬ古宮」『山清文・袴田光端(編)『源氏物語の新研究―宇治十帖を考える』(新典社、二〇〇九年)』
- ・清水好子「薫創造」『文学』第二五卷第二号(岩波書店、一九五七年二月)
- ・――「源氏物語の俗物性について」『国語国文』第二五卷第七号(京都大学文学部国語学国文学研究室、一九五六年七月)
- ・――「若菜上・下巻の主題と方法」『源氏物語の文体と方法』(東京大学出版会、一九八〇年)
- ・――『源氏物語』の作風―藤壺と紫の上について―「王朝物語研究会(編)『論集 源氏物語とその前後』(新典社、一九九〇年)」
- ・清水婦久子「古今集と物語の形成」『増田繁夫・小町谷照彦・鈴木日出男・藤原克己(編)『古今和歌集研究集成』第三卷(風間書房、二〇〇四年)』
- ・新聞一美「源氏物語帯木巻の「なでしこ」について―漢詩表現との関わりを中心に―」『横井孝・久下裕利(編)『源氏物語の新研究―本文と表現を考える』(新典社、二〇〇八年)』
- ・陣野英則「「聞こしめす」朱雀院の聴力」「室伏信助(監修) 上原作和(編)『人物で読む源氏物語』第一巻「朱雀院・弘徽殿太后・右大臣」(勉強出版、二〇〇六年)」
- ・――「「物語」の切っ先としての薫」『源氏物語』「橋姫」「椎本」巻の言葉から――「『国語と国文学』第八五卷第六号(東京大学国語国文学会、二〇〇八年六月)」「スエナガ・エウニセ「狭衣の母」『狭衣物語』における堀川上の役割」『言語情報科学』第六号(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、二〇〇八年)
- ・菅原郁子「歌語「花鳥の色をも音をも」考―『源氏物語』の表現描写を中心として―」『平安文学研究』第一号(国学院大学大学院、二〇〇九年九月)
- ・助川幸逸郎「宇治大君と〈女一宮〉―〈妹恋〉の論理を手がかりとして―」『中古文学』第六一号(中古文学会、一九九八年十一月)
- ・鈴木一雄「『源氏物語』における「ゆかり」について」「紫式部学会(編)『むらさき』第四輯(武蔵野書院、一九六五年十一月)」
- ・――『源氏物語』に描かれた大学寮「平安貴族の環境」(国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九一年)
- ・鈴木日出男「光源氏前史」『日本文学』第二二卷第一〇号(日本文学協会、一九七三年一〇月)
- ・――「光源氏の死と再生」『文学』第五五卷第一〇号(岩波書店、一九八七年一〇月)
- ・――「菅原道真における詩と思想」『古代和歌史論』(東京大学出版会、一九九〇年)

- ・鈴木瑞枝「平安貴族の教育観―源氏物語を中心に―」『研究紀要』第一〇号（安田学園、一九六八年七月）
- ・鈴木裕子「大君の〈恋〉の物語―父を持ち続けた娘―」『室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一九卷「大君・中の君」（勉誠社、二〇〇六年）』
- ・鈴木宏子「若紫巻と古今集」「小嶋菜温子・渡辺泰明（編）『源氏物語と和歌』（青簡舎、二〇〇八年）』
- ・――「紫の上の和歌―育まれ、そして開かれていく歌」「池田節子・久富木原玲・小嶋菜温子（編）『源氏物語の歌と人物』（翰林書房、二〇〇九年）』
- ・鈴木淑子「薫の卓抜性と光君の困い込み―「鏡の影」・「似げなからず」を視点として―」『表現と創造』第一卷（名古屋大学大学院、人間情報学研究科、二〇〇〇年三月）
- ・高木和子「第一部から第二部へ―柏木の造型の視座から―」「鈴木日出男（編）『人物造型からみた『源氏物語』』（国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九八年五月）』
- ・高田祐彦「源氏物語と古歌―人の心をのぶる古言」「小嶋菜温子・渡辺泰明（編）『源氏物語と和歌』（青簡舎、二〇〇八年）』
- ・高嶋和子『源氏物語』動物考（その一六）―鶯―『並木の里』第四四号（並木の里の会、一九九六年六月）
- ・高橋和夫「少女―その構造的把握―」「山岸徳平・岡一男（監修）『源氏物語講座』第三卷「各巻と人物（二）」（有精堂、一九七一年）』
- ・――「柏木遺愛の笛」「秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第七集（有斐閣、一九八二年）』
- ・高橋亨「紫式部 源氏物語の〈女三の宮〉―幼女性性の罪―」『国文学 解釈と教材の研究』第二七巻第三号（學燈社、一九八二年九月）
- ・――「〈反悲劇〉としての薫の物語」「源氏物語の詩学」（名古屋大学出版会、二〇〇七年）〈初出〉「久保朝孝（編）『悲恋の古典文学』（世界思想社、一九九七年）』
- ・高橋秀樹「平安貴族社会における養子について」『風俗』第二八巻第四号（日本風俗史学会、一九八九年一〇月）
- ・高橋文二「道心」という幻想空間―「薫」小見―「鈴木日出男（編）『人物造型からみた『源氏物語』』（国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九八年五月）』
- ・――「追憶と鎮魂―光源氏晩年の日々―」「紫式部学会（編）『源氏物語の言語表現研究と資料』（古代文学叢書、第一八輯、武蔵野書院、二〇〇九年十一月）』
- ・高野裕子「大君試論」「源氏物語探究会（編）『源氏物語の探究』第八輯（風間書房、一九八三年）』
- ・竹内正彦「池のほとりの光源氏―「少女」巻の〈放島の試み〉を起点として―」『源氏研究』第四号（翰林書房、一九九九年四月）
- ・――「近江君の賽の目―「若菜下」巻の住吉参詣における明石尼君をめぐる―」『中古文学』臨時増刊号（中古文学会、一九九七年三月）

- ・――「研究史―明石の君論の現在―」「室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一二巻「明石の君」（勉誠出版、二〇〇六年）」
- ・武内義雄「群書治要と清原教隆」『武内義雄全集』第四巻・儒教篇三（角川書店、一九七九年）
- ・武原弘「夕霧の幼な恋」「秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第五集（有斐閣、一九八一年）」
- ・――「夕霧と雲居雁の結婚」「秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第六集（有斐閣、一九八一年）」
- ・――「蛭巻の物語論について―その機構および位相―」『日本文学研究』第二〇号（梅光女学院大学日本文学会、一九八四年一月）
- ・――「玉鬘論―玉鬘十帖論予備考説―」「稻賀敬二（編）『源氏物語の内と外』（風間書房、一九八七年）」
- ・田坂憲二「夕霧の子供たち」「伊井春樹（編）『夕霧』（源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、二〇〇二年）」
- ・立石和弘「冷泉帝の顔―供儀と玉鬘の視線から」『中古文学』第五七号（中古文学会、一九九六年五月）
- ・――「鏡のなかの光源氏―光源氏の自己像と鏡像としての夕霧―」『源氏研究』第二二号（翰林書房、一九九七年）
- ・――「恋死と一体化願望―『伊勢物語』と仲澄・柏木―」『物語文学論究』第一二号（国学院大学物語文学研究会、二〇〇七年三月）
- ・田中圭子「紫上の薫物と伝承」「三田村雅子・河添房江（編）『薫りの源氏物語』（翰林書房、二〇〇八年）」
- ・田中仁「薫と消息―「反故」について―」「室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一七巻「薫」（勉誠出版、二〇〇六年）」
- ・中田勇次郎「麒麟抄考」『心花室集 日本書道史論考（下）』（中田勇次郎著作集、第六巻、二玄社、一九八五年）
- ・玉上琢彌「桐壺の巻と長恨歌と伊勢の御」『国語国文』第二四巻第四号（京都大学国文学会、一九五五年四月）
- ・田村悦子「蜻蛉日記絵の詞書断簡について」『美術研究』第二四一号（東京国立文化財研究所美術部美術研究所、一九六五年七月）
- ・田村隆「与謝野晶子訳『紫式部日記』について」『文献探究』第四一号（文献探究の会、二〇〇三年三月）
- ・――「省筆論―源氏物語の叙法」『文学』第四巻第六号（岩波書店、二〇〇三年十一月）
- ・――「いとやむことなきはにはあらぬが」『語文研究』第一〇四号（九州大学国語国文学会、二〇〇七年十二月）
- ・――「硯瓶の水」『語文研究』第一〇九号（九州大学国語国文学会、二〇〇九年六月）

- ・——「御返りなし」考」「紫式部学会（編）『むらさき』第四九輯（武蔵野書院、二〇一二年十二月）」
- ・塚原明弘「光源氏の摂政辞退と夕霧の大学入学——「霽標」巻と「少女」巻の政治的背景——」〔針本正行（編）『少女』（源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、二〇〇三年）〕
- ・津島知明「〈敦康親王〉の文学史」『日本文学』第五七号（日本文学協会、二〇〇八年五月）
- ・辻和良「桐壺帝の企て——源氏物語の主題論的考察——」『国語と国文学』第七二巻第二号（東京大学国語国文学会、一九九五年二月）
- ・達日出典「勸進活動と縁起の再構成」『日本の宗教文化』下（宗教文化全書、三、高文堂出版社、二〇〇二年）
- ・津田果奈「飛鳥井女君の絵日記考」『緑岡詞林』第二八号（青山学院大学日文院生の会、二〇〇四年三月）
- ・寺田澄江「世界とその分身——源氏物語の霧——」〔寺田澄江・高田祐彦・藤原克己（編）『源氏物語の透明さと不透明さ——場所・和歌・語り・時間の分析を通して』（二〇〇八年パリ・シンポジウム、青簡社、二〇〇九年九月）〕
- ・土居奈生子「六条院における女三宮の出家——朱雀院の視座から——」〔川添房江・小林正明・神田龍身・深沢徹・小嶋菜温子・吉井美弥子（編）『家と血のイリュージョン』（叢書 想像する平安文学、第六巻、勉誠出版、二〇〇二年）〕
- ・——「第三部における女三の宮——〈大宮〉たる明石中宮と女二の宮の降嫁——」〔室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一五巻「女三の宮」（勉誠出版、二〇〇六年）〕
- ・富永直美『源氏物語』夕顔巻冒頭について——頭中将誤認説再考——〔平野由紀子（編）『平安文学新論——国際化時代の視点から——』（風間書房、二〇一〇年）〕
- ・豊島秀範『松陰中納言物語』の特質——須磨・明石の巻との比較を中心に——〔平安文学研究会（編）『講座 平安文学論究』（風間書院、二〇〇二年）〕
- ・外山敦子「〈母〉たちの浮舟物語——競り合う二人の召人——」『物語研究』第五号（物語研究会、二〇〇五年）
- ・内藤英子「柏木哀悼における「柳のめ」——元白詩語の利用と夕霧物語の始発——」『中古文学』第八六号（中古文学会、二〇一〇年十二月）
- ・中井賢一「夕霧〈不在〉の論理——夕霧の機能と物語の〈二層〉構造——」『国語国文』第七四巻第一〇号（京都大学文学部国語学国文学研究室、二〇〇五年一〇月）
- ・——「光源氏と絵合——源氏物語の逆説的人物造型——」『王朝文学研究誌』第一八号（大阪教育大学古典文学研究室、二〇〇七年五月）
- ・——「夕霧〈太政大臣予言〉の論理——〈夕霧権力体制〉の誤算と物語の〈二層〉構造——」『国語国文』第七六巻第六号（京都大学文学部国語学国文学研究室、二〇〇七年六月）

- ・永井和子「講演」『源氏物語』の年齢意識―光源氏四十賀の現実性」〔紫式部学会（編）『むらさき』第四一号（武蔵野書院、二〇〇四年十二月）〕
- ・永井崇大「夕霧造型論―『平中物語』からの水脈―」『語文』第二二〇輯（日本大学国文学会、二〇〇四年十二月）
- ――『源氏物語』衛門督攷―柏木論への視角」〔古代中世文学論考刊行会『古代中世文学論考』第一八集（新典社、二〇〇六年）〕
- ・永井義憲「源氏物語と仏教―作者の日記の眼から―」〔山岸徳平、岡一男（監修）『思想と背景』「源氏物語講座」第五卷（有精堂、一九七一年）〕
- ・長井麗子「明石の君像」形成過程の考察」『大谷女子大國文』第二二号（大谷女子大学国文学会、一九八二年三月）
- ・中川照将「宇治十帖における薫の主題」〔増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第二卷（風間書房、一九九九年）〕
- ・中川正美「宇治大君―対話する女君の創造―」〔王朝物語研究会（編）『論集 源氏物語とその前後』第四卷（新典社、一九九三年）〕
- ・中嶋尚「六条院世界の映像―常夏・篝火・野分三卷案内―」〔河地修（編）『常夏・篝火・野分』（源氏物語の鑑賞と基礎知識、至文堂、二〇〇二年）〕
- ・中西紀子「雲居雁の人物造型―夕霧巻における夫婦像―」『王朝文学研究志』第四号（大阪教育大学大学院、一九九四年三月）
- ――「冷泉帝の「御学問」―罪ある父への「孝」のかたち―」『王朝文学研究誌』第七号（大阪教育大学大学院王朝文学研究会、一九九六年三月）
- ――『源氏物語』における密着父娘愛―朱雀院と女三の宮の紐帯をととして』『王朝文学研究誌』第二二号（二〇〇一年三月）
- ・中野幸一「『源氏物語』に見える「昔物語」―前期物語の性格―」『物語文学論攷』（教育出版センター、一九七一年）
- ・中野貴文「娘へのテキスト―楽書にまつわる一風景」『文学』第四卷第四号（岩波書店、二〇〇三年七月）
- ――『「乳母のふみ」考―文学史的位置付けをめぐる―』『国語と国文学』第八〇巻第一〇号（東京大学国語国文学会、二〇〇三年一〇月）
- ・中野方子「しじまの姫と維摩の問答」〔紫式部学会（編）『むらさき』第四六輯（武蔵野書院、二〇〇九年十二月）〕
- ・中村忠行「宇津保物語の背景」〔宇津保物語研究会（編）『宇津保物語新論』（古典文庫、一九五八年）〕
- ・中哲裕「源氏物語と二十五三昧会―大君物語の前提として―」〔源氏物語探究会（編）『源氏物語の探究』第一輯（風間書房、一九八六年）〕
- ――「藤壺の宮夜居の僧都と観修」『富山県立大学紀要』第六号（一九九六年三月）
- ・長野まり子「ひとつふたつのふしごと―柏木の悲劇―」『中古文学』第三一号（中古文学

学会、一九八三年)

・西本寮子『『今とりかへばや』における音の効果』『論集 源氏物語とその前後』第三卷(新典社、一九九二年五月)

・仁平道明「いとねぢけたる色好み―薫像とその背景―」「紫式部学会(編)『源氏物語とその前後 研究と資料』(古代文学論叢、第一四輯、武蔵野書院、一九九七年)」

・沼尻利通「八宮の遺言の動態―「一言」「いさめ」「いましめ」から―」「小山清文・袴田光端(編)『源氏物語の新研究―宇治十帖を考える』(新典社、二〇〇九年)」

・野口元大「物語の続編」「上村悦子(編)『論叢王朝文学』(笠間書院、一九七八年)」

・野田有紀子「平安貴族社会の祭列をめぐる社会的関係について」「東京大学資料編纂所 研究紀要』第一七号(東京大学資料編纂所、二〇〇七年三月)

・野中和孝「源氏物語「絵合」論―旧注と源氏の「読み」『活水日文』第二二号(活水女子短期大学日本文学会、一九九一年三月)

・野村精一「試楽の夜」「秋山虔・木村正中・清水好子(編)『講座 源氏物語の世界』第六集(有斐閣、一九八一年)」

・野村倫子「飛鳥井女君の絵日記―飛鳥井女君から一品宮へ」「福田晃(編)『日本文学の原風景』(三弥井書店、一九九二年)」

・袴田光康「桐壺帝と玄宗と宇多天皇―「桐壺」巻における寛平準拠の視角―」「坂本共展、久下裕利(編)『内なる歴史性を考える』(源氏物語の新研究、新典社、二〇〇五年)」後に、『源氏物語の史的回路―皇統回帰の物語と宇多天皇の時代―』(おうふう、二〇〇九年)所収。

・――「源氏一品経」「日向一雅(編)『源氏物語と仏教―仏典・故事・儀礼』(青簡舎、二〇〇九年)」

・萩野敦子『源氏物語』における親の〈心の闇〉と〈道〉『駒沢大学苦小牧短期大学紀要』第三〇号(駒沢大学苦小牧短期大学、一九九八年四月)

・長谷川政春「女源氏の恋―源氏物語〈女三の宮〉の方法―」「日本文学』第二三卷第七号(日本文学協会、一九七四年一〇月)

・――「歌枕―方法としての玉鬘十帖―」「増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹(編)『源氏物語研究集成』第一〇巻(風間書房、二〇〇二年)」

・畑恵里子「明石の姫君と変奏された継子いじめ」「古代中世文学論考』第一七集(新典社、二〇〇七年)、後に『王朝継子物語と力―落窪物語からの視座―』(新典社、二〇一〇年)所収。

・林雅彦「古典文学に描かれた庶民信仰―清水寺・石山寺・長谷寺の靈驗譚―」「国文学解釈と鑑賞』第六五巻一〇号(二〇〇〇年一〇月、至文堂)」

・林田孝和「源氏物語における死後の描写―ともし火をかかげつくして―」「源氏物語の発想』(桜楓社、一九八〇年)〈初出〉『野州国文学』第二三号(一九七九年二月)」

・――「源氏物語の民間習俗・信仰―光源氏の誕生をめぐる―」「増田繁夫・鈴木

- ・ 日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第六卷（風間書房、二〇〇一年）
- ・ 原岡文子『源氏物語』の子ども・性・文化―紫のうえと明石の姫君―『源氏研究』第一号（翰林書房、一九九六年）
- ・ ――「雲居雁の身体をめぐって―「常夏」を始発に―」『源氏研究』第八号（翰林書房、二〇〇三年）
- ・ ――「前代物語とのかかわり―『蜻蛉日記』『枕草子』を中心に」「増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第七卷（風間書房、二〇〇一年）」
- ・ 原山絵美子『源氏物語』竹河巻の研究―源氏と軒端萩・夕顔と玉鬘の物語と「露のかごと」―『平野由紀子（編）『平安文学新論―国際化時代の視点から―』（風間書房、二〇一〇年）
- ・ 播磨光寿「靈驗・利益」「伊藤博之・今成元昭・山田昭全（編）『仏教文学講座』第六卷「僧伝・寺社縁起・絵巻・絵伝」（勉誠社、一九九五年八月）」
- ・ 針本正行「紫の上の手習歌」「中田武司（編）『若菜下（後半）』国文学解釈と鑑賞別冊〈源氏物語の鑑賞と基礎知識〉（至文堂、二〇〇〇年）」
- ・ 東原伸明『源氏物語』引用の文学史―中世王朝物語への回路―『古代散文引用文学史論』（勉誠出版、二〇〇九年）
- ・ 土方洋一「姉妹連帯婚」的発想―源氏物語から―『日本文学』第三八卷（日本文学協会、一九八九年五月）
- ・ ――「空虚なる主体・冷泉院」「森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、一九九三年）」
- ・ 日向一雅「按察使大納言の遺言―明石一門の物語の始発―」「日向一雅・仁平道明（編）『源氏物語の始発―桐壺巻論集』（竹林舎、二〇〇六年）」
- ・ 平野由紀子「御堂関白集―紫式部の不在―」「紫式部学会（編）『むらさき』第四八号（武蔵野書院、二〇一一年十二月）」
- ・ 平林盛得「花山法皇と性空上人―平安朝における一持経者の周辺―」「聖と説話の史的研究」（吉川弘文館、一九八一年）
- ・ 兵藤裕己「和歌と天皇―『日本』的共同性の論理」「王権と物語」（青弓社、一九八九年）
- ・ 深澤三千男「夕霧二題」「森一郎（編）『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、一九九三年）」
- ・ 福家俊幸『紫式部日記』に記された縁談―『源氏物語』への回路―「福家俊幸・久下裕利（編）『王朝女流日記を考える―追憶の風景』（武蔵野書店、二〇一一年）」
- ・ 福嶋昭治「碓（からうす）の音―「夕顔」の巻の表現をめぐって―」「源氏物語探究会（編）『源氏物語の探究』第一〇巻（風間書店、一九八五年）」
- ・ 福田智子「東三条院詮子四十賀屏風歌と藤原公任―屏風歌詠作史瞥見」「語文研究」第七五号（九州大学国語国文学会、一九九三年六月）
- ・ 服藤早苗「撰関期における「氏」・「家」―「小右記」にみられる実資を中心として―」「青木和夫先生還暦祈念会（編）『日本古代の政治と文化』（吉川弘文館、一九八七年）」

- ・――「山陵祭祀より見た家の成立過程―天皇家の成立をめぐって」『日本史研究』第三〇二号（日本史研究会、一九八七年一〇月）
- ・――「墓地祭祀と女性」「大隅和雄・西口順子（編）『シリーズ女性と仏教 信心と供養』（平凡社、一九八九年）」
- ・――「平安朝の父子対面儀と子どもの認知―王権内における父子秩序の成立と変容―」『父親と家族―父性を問う―』（シリーズ比較家族Ⅱ期、早稲田大学出版部、一九九八年）
- ・――『落窪物語』にみる婚姻儀礼―平安中期貴族層の結婚式―」『埼玉学園大学紀要 人間学部編』第六号（埼玉学園大学、二〇〇六年十二月）
- ・福長進『『栄花物語』の原資料取用態度―『紫式部日記』と巻第八、初花との比較を通して―』『歴史物語の創造』（笠間書院、二〇一一年）
- ・藤井貞和「雨夜の品定めから」『蜚』巻の物語論へ」『共立女子大学紀要』第一八号（一九七四年十二月）
- ・――「高麗の相人の予言」『古典講読シリーズ 源氏物語』（岩波セミナーブックス、一九九三年）
- ・藤田菖畔「紫式部の書道観―源氏物語の紙の色について」『語学・文学研究』第九号（金沢大学教育学部国語国文学会、一九七九年一月）
- ・――「紫式部書道観―「源氏物語」におけるかな文字」『語学・文学研究』第一五号（金沢大学教育学部国語国文学会、一九八六年一月）
- ・藤本勝義「袴着・元服・裳着」「山中裕・鈴木一雄（編）『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年十二月）」
- ・――「源氏物語「竹河」巻論―光源氏的世界の終焉―」『青山学院女子短期大学紀要』第四六号（青山学院女子短期大学、一九九二年十二月）
- ・――「「ゆかり」超越の女君―玉鬘―」『鈴木日出男（編）『人物造型からみた『源氏物語』』（国文学 解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九九八年五月）」
- ・――「源氏物語の準拠と紫式部時代の史実―光源氏の元服と薫の出家志向をめぐって」『日向一雅（編）『源氏物語重層する歴史の諸相』（竹林舎、二〇〇六年四月）」
- ・藤本宗利「源氏物語の「食ふ」―横笛巻を中心に―」『源氏研究』第二号（翰林書房、一九九七年四月）
- ・藤村潔「継子物語としての玉鬘物語」『古代物語研究序説』（笠間書院、一九七七年）
- ・――「源氏物語薫論の迷走」『藤女子大学国文学雑誌』第四三号（藤女子大学国語国文学会、一九八九年九月）
- ・藤原克己「靈驗譚」「増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第八卷（風間書房、二〇〇一年）」
- ・――「平安朝の知識人―文章道と菅原道真―」『講座 日本思想』第二卷（東京大学出版会、一九八三年）

- ・――「紫式部と漢文学―宇治の大君と〈婦人苦〉―」「松井健児・植田恭代（編）『源氏物語』二（日本文学研究論文集成、七、若草書房、一九九九年）」「〈初出〉『国文論叢』第一七卷（神戸大学文学部国語国文学会、一九九〇年三月）」
- ・――「幼な恋と学問―少女巻―」「光る君の物語」（源氏物語講座、第三巻、勉誠社、一九九二年）
- ・――「大君―李夫人とかぐや姫の面影」『国文学 解釈と教材の研究』第三八巻第一号（學燈社、一九九三年一〇月）
- ・――「古今集の享受と評価の歴史」「増田繁夫・小町谷照彦・鈴木日出男・藤原克己（編）『古今和歌集研究集成』第三巻（風間書房、二〇〇四年）」
- ・――「薫と浮舟の物語―イロニーとロマネスク―」「寺田澄江・高田祐彦・藤原克己（編）『源氏物語の透明さと不透明さ―場所・和歌・語り・時間の分析を通して』（二〇〇八年パリ・シンポジウム、青簡社、二〇〇九年九月）」
- ・淵江文也「蜚蜚物語談義註試論―宣長「物のあはれ」説への一修正―」『商大論集』（神戸商科大学研究会、一九五六年）
- ・古瀬雅義「雲居雁が聞いた音―風の音・竹のそよめき・雁の声―」『古代中世国文学』第二三号（広島平安文学研究会、二〇〇七年三月）
- ・古田泰子「宇治十帖」大君の世界―そのいわゆる結婚拒否について―『平安文学研究』第七一卷（平安文学研究会、一九八四年六月）
- ・堀淳一「鏡に見ゆる影―光源氏と紫上の人物造型と「百鍊鏡」『文藝研究』（日本文藝研究会、一九九二年一月）
- ・益田勝実「源氏物語の端役たち」『文学』第二二巻二号（岩波書店、一九五四年二月）
- ・増田繁夫「古今集の勅撰性―和歌と政治・社会・倫理―」「日本文学研究資料刊行会（編）『古今和歌集』（有精堂、一九七六年）」
- ・松井健児「心浅き人のためにぞ、寺の験もあらはれる」『国文学 解釈と教材の研究』第四五巻九号（學燈社、二〇〇〇年七月）
- ・――「鏡を見る玉鬘―『源氏物語』と自己観照」「川添房江・小林正明・神田龍身・深沢徹・小嶋菜温子・吉井美弥子（編）『家と血のイリュージョン』（叢書 想像する平安文学、第六巻、勉誠出版、二〇〇二年）」
- ・松尾聡「頭中将」『源氏物語講座』第三巻「各巻と人物」」（有精堂、一九七一年）
- ・松岡心平「源氏能の身体と感覚」『源氏研究』第二号（翰林書房、一九九七年）
- ・――「花の時代の演出家たち」松岡心平（編）『Z E A M I 中世の芸術と文化』第四号（森話社、二〇〇五年）
- ・松岡智之「冷泉朝の光源氏―秋好立后と夕霧大学寮入学―」「紫式部学会（編）『むらさき』第三四輯（武蔵野書院、一九九七年）」
- ・松田豊子「源語東国の表現映像―玉鬘の西国と浮舟の常陸―」「源氏物語探究会（編）『源氏物語の探究』第一三輯（風間書房、一九八八年）」

- ・松本真輔「悪役守屋の形成過程―聖徳太子伝における物部守屋像の変遷」『古代中世文学論考』第一集（新典社、二〇〇四年）
- ・松本隆信「住吉物語以後―継子苛め譚の類型に関する一考察―」『芸文研究』（慶応義塾大学芸文研究会、一九五四年一月）
- ・松本三枝子「光源氏と聖徳太子」『へいあんぶんがく』（東京大学平安文学研究会、一九六七年七月）
- ・松原一義「高光日記絵巻」（扇流）―「高光日記」が望み得る資料は、『重之子僧集』か―「福家俊幸・久下裕利（編）『王朝女流日記を考える―追憶の風景』（武蔵野書店、二〇一一年）」
- ・三上満「忠こそ物語の意義について―忠こそその巻を中心に―」『日本文学』第三四号（日本文学協会、一九八五年九月）
- ・三角洋一「光源氏と後見」『国語と国文学』第七六巻四号（東京大学国語国文学会、一九九九年四月）
- ――「源氏物語の仏教語」〔増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第四巻（風間書房、一九九九年九月）〕
- ――「鈴虫巻小論」〔菊田茂男（編）『源氏物語の世界』（風間書房、二〇〇一年）〕
- ・三谷邦明「平安朝文学史の方法―『源氏物語』絵合巻に於ける〈文学史〉の方法―」『平安朝文学の諸問題』（笠間書院、一九七七年）
- ――「玉鬘十帖の方法―玉鬘の流離あるいは叙述と人物造型の構造―」〔中古文学研究会（編）『源氏物語の表現と構造』（論集中古文学、第一巻、笠間書院、一九七九年）〕
- ・三田村雅子「大君物語―姉妹の物語として―」〔増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第二巻（風間書房、一九九九年）〕
- ――「〈記憶〉の中の源氏物語―（八）安元御賀の「花の宴」―」〔『新潮』第一〇二巻二号（新潮社、二〇〇五年二月）〕
- ・光川康雄『聖徳太子伝暦』本文をめぐる諸問題〔笠井昌昭（編）『文化史学の挑戦』（思文閣出版、二〇〇五年）〕
- ・三橋正「仏像の在処―八宮の仏像をめぐる（二）―」〔室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一九巻「大君・中の君」（勉強出版、二〇〇六年）〕
- ・峰岸純夫「中世の「家」と祭祀―上野国新田荘における「氏」・「家」と寺・墓・塔―」〔石井利夫・藤井正雄・森岡清美（編）『生者と死者―祖先祭祀―』（シリーズ家族史、第一巻、三省堂、一九八八年）〕
- ・三宅高司「宮廷書道史の縮図と『夜鶴庭訓抄』解題」『東洋』第三五巻第四号（東洋大学通信教育部、一九九八年四月）
- ――「書道人の立場で読む『夜鶴庭訓抄』本文の研究①―揮毫に関する条文の検討―」『東洋』第三五巻第五号（東洋大学通信教育部、一九九九年五月）

- ・宮崎肇「中世書流の成立―世尊寺家と世尊寺流」『鎌倉遺文研究会（編）『鎌倉期社会と史料論』（東京堂出版、二〇〇二年）』
- ・宮田尚「平安朝の観音靈驗譚」『国文学 解釈と鑑賞』第六一卷一二号（至文堂、一九九六年十二月）
- ・武者小路辰子「若菜卷の賀宴」『日本文学』第一四卷第六号（日本文学協会、一九六五年六月）
- 「女三の宮像―幼さへの設問―」『日本文学』第二三卷第七号（日本文学協会、一九七四年一〇月）
- ・宗雪修三「世づかぬ」薫―蜻蛉卷の独詠歌と主題―「室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一七卷「薫」（勉誠出版、二〇〇六年）」〈初出〉『物語研究』第一号（物語研究会、新時代社、一九八六年）
- ・村田裕子『源氏物語』に於ける親子関係『山口女子大國文』第三号（山口女子大学国語国文学会、一九八一年一月）
- ・村井利彦「藤壺の夢」『源氏物語探究会（編）『源氏物語の探求』第一〇輯（風間書房、一九八五年）』
- ・室伏信助「栄華への道―絵合・松風」『国文学 解釈と教材の研究』第三二卷第一三三号（學燈社、一九八七年一月）
- ・室城秀之「うつほ物語の方法―仲澄の死をめぐって―」『物語研究』第一号（物語研究会、一九七九年四月）
- ・室田知香「女三宮の裳着と「後見」光源氏」『国語と国文学』第八八卷第二号（東京大学国語国文学会、二〇一一年二月）
- ・本宮洋幸「朱雀院の苦惱―「若菜・上下」卷の方法から宇治十帖へ―」『室伏信助（監修）上原作和（編）『人物で読む源氏物語』第一一卷「朱雀院・弘徽殿太后・右大臣」（勉誠社、二〇〇六年）』
- ・森一郎「竹河卷の世界と玉鬘その後」『国語と国文学』第五二卷第二号（東京大学国語国文学会、一九七五年二月）
- 「薫の道心と恋」『源氏物語探究会（編）『源氏物語の探究』第二輯（風間書房、一九七六年）』
- ・森内智子「大君の「うき水鳥のちぎり」―「橋姫」卷の唱和歌考察―」『物語文学論究』第二二二号（国学院大学物語文学研究会、二〇〇七年三月）
- ・森下純昭「入水譚の系譜―狭衣物語を中心に―」『中古文学』第一〇号（中古文学会、一九七二年十一月）
- ・森田兼吉「光源氏はなぜ絵日記を書いたか―須磨・明石から絵合へ―」『佐藤泰正（編）『源氏物語』を読む』（笠間書院、一九八九年）』
- ・森田直美「紅の涙と墨染の衣―『源氏物語』総角卷の描写をめぐって―」『文学・語学』第一八四号（全国大学国語国文学会、二〇〇六年三月）

- ・森野正弘「六条院文化の形態変化―常夏巻の玉鬘と和琴」「川添房江・小林正明・神田龍身・深沢徹・小嶋菜温子・吉井美弥子（編）『平安文学』のエクリチュール」（叢書 想像する平安文学、第二巻、勉誠出版、二〇〇一年）
- ――「組織化される夕霧の浮遊性」「針本正行（編）『少女』（源氏物語の鑑賞と基礎知識二七、至文堂、二〇〇三年）」
- ・森藤侃子「女の宿世―雲居雁と落葉の宮―」「秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第七集（有斐閣、一九八二年）」
- ・森本茂「初瀬詣」「秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第五集（有斐閣、一九八一年）」
- ・諸岡重明『源氏物語』（風邪）という病の論理―（絆）（俗聖）・八の宮試論として―『立教大学日本文学』（立教大学、二〇〇二年二月）
- ――「薫の宇治の御堂造宮―連鎖する愛のもつれと罪」『物語研究』第六号（物語研究会、二〇〇六年三月）
- ・矢田勉『夜鶴庭訓抄』の「イロハガキ」について―「書記史資料としての書道伝書」試論―『白百合女子大学研究紀要』第三八号（白百合女子大学、二〇〇二年二月）
- ・柳井滋「源氏物語と靈験譚の交渉」「紫式部学会（編）『源氏物語 研究と資料』（古代文学論叢、第一輯、武蔵野書院、一九六九年）」
- ――「源氏物語と輪廻転生譚」「紫式部学会（編）『むらさき』第九輯（武蔵野書院、一九七一年六月）」
- ――「源氏物語と靈験―浮舟物語の考察―」「阿部秋生（編）『源氏物語の研究』（東京大学出版会、一九七四年）」
- ――「源氏物語の仏教思想」「増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第六巻（風間書房、二〇〇一年）」
- ・柳沢良一「『本朝麗藻』を読む―寛弘二年（一〇〇五）、敦康親王の読書始の儀について―」「『国語国文』第五九巻第六号（京都大学文学部国語学国文学研究室、一九九〇年六月）」
- ・矢作武「漢籍と「軍語り」―軍記ものの形成のプロセス―」「国文学 解釈と鑑賞』第五三巻第一三三号（至文堂、一九八八年二月）」
- ・柳町時敏「「論者」としての光源氏―光源氏論のための断章―」「紫式部学会（編）『むらさき』第一七輯（武蔵野書院、一九八〇年七月）」
- ・山上義実『源氏物語』薫の行方―宇治十帖結末に関する―解釈・再論」「菊田茂男（編）『源氏物語の世界』（風間書房、二〇〇一年）」
- ・山内洋一郎「明文抄復元の全体像」「小林芳規博士喜寿記念会（編）『国文学論集』（及古書院、二〇〇六年）」
- ・山田利博「登場人物と和歌の効用」「増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第九巻（風間書房、二〇〇〇年）」

- ・山中裕「栄花物語における源氏物語の影響」『歴史物語成立序説』（東京大学出版会、一九六二年）
- 「源氏物語の準拠と史実―玉鬘十帖を中心として―」『阿部秋生（編）『源氏物語の研究』（東京大学出版会、一九七四年）』
- ・山本和義「蘇軾詩論稿」『中国文学報』第三六冊（京都大学文学部中国語学中国文学研究室、一九六〇年一〇月）
- ・山本利達「賀宴と花宴」「秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第二集（有斐閣、一九八〇年）』
- ・湯浅幸代「光源氏の観相と漢籍に見る観相説話―継嗣に関わる観相を中心に―」『中古文文学』第七〇号（中古文学会、二〇〇二年一月）
- 「王朝物語に見る算賀描写―屏風歌の記述を中心に―」『王朝物語研究会（編）『古代文学研究所紀要』第一号（明治大学古代学研究所、二〇〇六年二月）』
- ・「落葉の宮をめぐる人々―一条御息所・小野の律師・少少将―」『久保朝孝・外山敦子（編）『端役で光る源氏物語』（世界思想社、二〇〇九年）』
- ・尹勝玟「多面体としての薫」『日語日文学研究』第八三輯第二卷（韓国日語日文学会、二〇一二年一月）
- ・横井孝「物語文学における〈後家の力〉」『王朝物語研究会（編）『論集 源氏物語とその前後』第四卷（新典社、一九九三年）』
- ・横田隆志（外編）「中世長谷寺キード小辞典」『国文論叢』第三六号（神戸大学文学部国語国文学会、二〇〇六年七月）
- ・与謝野晶子『栄華物語詳解』『明星』（一九〇六年五月）
- ・吉井美弥子「浮舟物語の一方法―装置としての夕顔―」『中古文文学』第三八号（中古文学会、一九八六年一月）
- 「夢浮橋巻の沈黙」『中古文文学』第四四号（中古文学会、一九九〇年一月）
- 「宇治を離れる中君―早蕨・宿木巻―」『京と宇治の物語 物語作家の世界』（源氏物語講座、第四卷、勉誠社、一九九二年）
- ・吉岡曠「玉鬘物語論」『紫式部学会（編）『源氏物語とその周辺』（古代文学論叢、第二輯、武蔵野書院、一九七一年）』
- 「柏木の密通と発覚」『秋山虔・木村正中・清水好子（編）『講座 源氏物語の世界』第六集（有斐閣、一九八一年）』
- ・吉海直人「橋姫物語の史的考察―源氏物語背景論―」『国学院大学大学院紀要』第一三〇号（一九八二年三月）
- 「橋姫物語（校異・拾遺・覚書）」『国書逸文研究』第九号（国書逸文研究会、一九八二年八月）
- 「垣間見る薫」関根賢司（編）『源氏物語 宇治十帖の企て』（おうふう、二〇〇五年）

- ・吉野誠「歴史をよぶ絵合巻―冷泉「聖代」の現出」『学芸国語国文学』第三五号（東京学芸大学国語国文学会、二〇〇三年三月）
- ・吉野瑞恵「浮舟と手習―存在とことば―」『紫式部学会（編）『むらさき』第二四輯（武蔵野書院、一九八七年七月）
- ・――「絵合巻の絵の授受をめぐる―冷泉帝直系化の仕組み―」『国語と国文学』第七五巻第一二号（東京大学国語国文学会、一九九八年十一月）
- ・余田充『長恨歌伝』の受容覚書―「雲海沈沈」の周辺―「稲賀敬二（編）『源氏物語の内と外』（風間書房、一九八七年）」
- ・米田真木子『源氏物語』における「さるべき人」の行方―「親子」「後見」「結婚」のはざま―『物語研究』第五号（物語研究会、二〇〇五年）
- ・李宇玲「夕霧の学問―字の儀式から放島試へ―」『国語と国文学』第八三巻第一二号（東京大学国語国文学会、二〇〇六年十二月）
- ・鷺見寿久『源氏物語』にあらわれた女子教育『国文学研究』第四三三号（早稲田大学国文学会、一九七一年一月）
- ・渡部真紀『源氏物語』蜻蛉巻の構造（一）―「浮舟物語」の手法『東洋大学大学院紀要（文学研究科）』第四二集（東洋大学大学院、二〇〇六年三月）
- ・――『源氏物語』蜻蛉巻の構造（二）―薫の恋の終焉『東洋大学大学院紀要（文学研究科）』第四三集（東洋大学大学院、二〇〇七年三月）
- ・――『源氏物語』の薫の造型―「二人の父」の系譜『東洋大学大学院紀要（文学研究科）』第三七集（東洋大学大学院、二〇〇一年二月）

電子媒体

CD-ROM

- ・伊井春樹（編）『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』（角川書店、一九九九年）
- ・新編国歌大観編集委員会『CD-ROM 新編国歌大観』（角川書店、二〇〇三年）
- ・迪志文化出版『CD-ROM 文淵閣四庫全書』（上海人民出版社、一九九九年）

データベース（いずれも二〇一四年現在のアクセスであり、引用の際には本文に日付を表記する。）

- ・朝日新聞社 開蔵Ⅱビジュアル
(http://www.asahi.com/information/db/2for1.html?iref=com_rnavi)
- ・国学院大学図書館デジタルライブラリー
(<http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib.html>)
- ・国際日本文化研究センター「撰関期古記録データベース」
(<http://www.nichibun.ac.jp/ja/>)
- ・国文学研究資料館「国文学論文目録データベース」

(<http://www.nijl.ac.jp>)

・ ジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」(小学館)

(<http://www.japanknowledge.com>)

・ ———「東洋文庫」(平凡社)

(<http://www.japanknowledge.com>)

・ 東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」

(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>)

「補論」の一次資料

- ・京城府立図書館『図書館講演録』（一九三一年十二月）
- ・高麗大学校亜細亞問題研究所（編）『六堂崔南善全集』第一巻く第一五巻（ソウル、玄岩社、一九七四く一九七五年）
- ・崔南善『六堂崔南善全集』第一巻く第一四巻（ソウル、図書出版亦楽、二〇〇三年）
- ・萩野由之「韓国旅行談（国史学会講演）」『国学院雑誌』第一六巻第四号（国学院大学、一九一〇年四月）

「補論」の二次資料

- ・揚原敏子「評伝萩野由之」『学苑』第三二五号（昭和女子大学光葉会、一九六六年三月）
- ・大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会『中之島百年―大阪府立図書館のあゆみ』（二〇〇四年）
- ・荻生茂博「崔南善の日本体験と『少年』の出版―東アジアの〈近代陽明学〉」（Ⅲ）―1『近代代・アジア・陽明学』（ペリカン社、二〇〇八年）
- ・金鍾徳キム・チョンドク「韓国における源氏物語研究」『今井卓爾（外編）『近代の享受と海外との交流』（源氏物語講座、第九巻、勉誠社、一九九二年）』
- 「韓国における近年の源氏物語研究」『国文学 解釈と鑑賞』第六五巻第一二号（至文堂、二〇〇〇年十二月）
- 「古代日本における「韓国」のイメージ」『早稲田大学古代文学比較文学研究所（編）『交錯する古代』（勉誠出版、二〇〇四年）』
- ・金栄心キム・ヨシム「植民地主義／民族主義の呪縛を超えて―韓国から」『立石和弘、安藤徹（編）『源氏文化の時空』（森話社、二〇〇五年）』
- 「植民地の文教政策と源氏物語・朝鮮篇」『国文学 解釈と鑑賞』第七三巻第五号（至文堂、二〇〇八年五月）
- ・九州帝国大学図書館（編）『萩野文庫目録』（一九三二年）
- ・京都大学付属図書館『京都大学付属図書館六十年史』（一九六一年）
- ・京都府教育委員会（編）『京都府立図書館建物記録調査報告書』（一九九七年）
- ・京都府立図書館（編）『京都府の公共図書館』（一九八三年）
- ・小泉和子『「類聚雑要抄」にみる宮中および摂関家の宴会における飲食・供膳具』〔川本重雄・小泉和子（編）『類聚雑要抄指図巻』（中央公論美術出版、一九九八年）〕
- ・東京大学付属図書館所蔵『萩野由之旧蔵書目』（和漢書目録掛作成、一九九九年二月）
- ・齋藤希史『漢文脈の近代―清末Ⅱ明治の文化圏』（名古屋大学出版会、二〇〇五年）
- ・ソウル特別市南山図書館（編）『南山図書館六十年史』（ソウル、一九八二年）
- ・全成坤ソ・ジョンソン『近代「朝鮮」のアイデンティティと崔南善』（ソウル、J&C、二〇〇八年）

- ・ 武井一 『皇室特派留学生―大韓帝国からの五〇人―』（白帝社、二〇〇五年）
- ・ 南山図書館八十年史編集委員会（編）『南山図書館八十年史―一九二二〜二〇〇二
（남산도서관 80년사―1922〜2002）』（ソウル、二〇〇二年）
- ・ 日比谷高校百年史編集委員会（編）『日比谷高校百年史』上・中・下巻（一九七九年）
ホ・イルシク
- ・ 洪一植 『六堂研究、六堂文選』（ソウル、日新社、一九五九年）
リムウ・シビョン
- ・ 柳時賢 『崔南善評伝』（ソウル、ハンギョレ出版社、二〇一一年）

初出一覧

序章	先行研究の検討および本論文の目的・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
第一章	桐壺帝の光源氏への教育・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
第二章	源氏の夕霧教育―「少女」巻を中心に ・・・・・・・・・・『超域文化科学紀要』第一八号（二〇一三年一月）
第三章	冷泉帝における学問・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
第四章	光源氏の明石の姫君への物語教育 ・・・・・・・・・・『日語日文学研究』第八五輯第二卷（韓国日語日文学会、二〇一三年五月）
第五章	須磨・明石の絵日記の考察・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
第六章	源氏の明石の姫君への書道教育・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
第七章	女三宮における朱雀院 ・・・・・・・・・・『比較文学・文化論集』第二八号（二〇一一年三月）
第八章	玉鬘における二人の父 ・・・・・・・・・・『日語日文学研究』第八三輯第二卷（韓国日語日文学会、二〇一二年一月）
第九章	薫の実父柏木への思い・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
第十章	『源氏物語』を読んだ比較文学者 ――六堂崔南善の京城府立図書館講演・・・・・・・・書き下ろし
終章	『源氏物語』の提示する教育・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし

